ISSN2435-838X

独立行政法人日本スポーツ振興センター

ハイパフォーマンススポーツセンター年報 2025

Annual Report of Japan High Performance Sport Center



HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER

はじめに



独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター長
国立スポーツ科学センター所長
久木留　毅

2025年度に開催されたミラノ・コルティナ2026冬季大会においても、日本代表選手団は全力を尽くして世界の舞台に挑みました。オリンピックでは、冬季大会史上最多の5個の金メダルを含む24個のメダルを獲得し、素晴らしい成果を収めました。パラリンピックでは、選手一人ひとりが懸命な奮闘を見せ、4個のメダル獲得、24の入賞を達成しました。ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、今大会においても、統括団体であるJOC・JPCとの連携の下、選手村内・村外サポート拠点・競技会場を包括的に捉えた「トライアングルサポート」を展開し、様々な形で支援に邁進してまいりました。

スポーツ医・科学支援事業では、「総合型サポート」により冬季競技を支援し、多くの成果を得るとともに、更なる発展に向けた課題を明確にすることができました。また、6つの「研究の柱」についても、更に研究内容の具体化を進め、ハイパフォーマンススポーツ研究の明確化と深化を進めています。HPSCが提唱する「アスリートにおけるトータルコンディショニング」の概念と推進方針を、ポジションペーパーとして策定・公表し、競技現場の共通概念として定着させるべく取組を進めました。加えて、東京科学大学や国立成育医療研究センターをはじめとした新たな連携を通じ、質の高い研究を推進するための基盤強化にも着手しました。

さらに、eスポーツ・バーチャルスポーツ分野では、HPSCにおけるeスポーツラボの設置準備を進めるとともに、ワールドローイングとの連携を更に強化し、過去2回のフォーラムを発展させた「バーチャルスポーツフォーラムプラス」をスイス・ローザンヌにあるオリンピック・ミュージアムにて開催しました。ここでは、「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ」の概念を国際スポーツ界で浸透させる、重要な足掛かりを築きました。

これらの活動をはじめ、本年報にて各取組を詳述しております。これまでの活動には多くの成果がある一方、解決すべき課題も残されています。総合型サポートを更に進化させ、HPSC全体で課題解決に当たる分野を横断した「融合型支援」への転換を図ることで、支援の質を抜本的に向上させていく必要があります。また、宇宙開発分野との議論を端緒とした、スポーツ内外の卓越した知見を相互に共有・循環させる「ハイパフォーマンスからハイパフォーマンスへ」という視点も新たに展開していくことの重要性を確認しました。これらを戦略的に進めてくためにも、HPSCにおけるクラウド化・DX化を加速させる必要があります。また、アスリート・ウェルビーイングを巡る国際的な動向にも目を向け、HPSCスタッフ一同、アスリートによる「Win Well（勝ち方を追求し、勝ち続けることにこだわる）」を支えるマインドセットを共有し、支援・研究の高度化を進めて参ります。

今後もオリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、持続可能な国際競技力向上に努めてまいる所存です。引き続きご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

2026年7月



ハイパフォーマンススポーツセンター 年報 2025

目　次

はじめに
Ⅰ　独立行政法人日本スポーツ振興センター組織図……6
Ⅱ　ハイパフォーマンススポーツセンター実施体制……7
Ⅲ　事業収支報告……8
Ⅳ　ハイパフォーマンススポーツセンター施設の概要……9
1　国立スポーツ科学センター……9
(1) スポーツ科学研究部門関連施設……9
(2) スポーツ医学研究部門関連施設……10
(3) サービス施設……11
(4) 競技別専用練習場……11
2　味の素ナショナルトレーニングセンター……12
(1) 屋内トレーニングセンター・ウエスト……12
(2) 屋内トレーニングセンター・イースト……14
(3) アスリートヴィレッジ……16
(4) 陸上トレーニング場……16
(5) 屋内テニスコート……17
3　その他施設……18
(1) 味の素フィールド西が丘……18
(2) フットサルコート……18
(3) 屋外テニスコート……19
(4) 戸田艇庫……19
Ⅴ　事業報告……20
1　ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025 の開催……20
2　中央競技団体の中長期強化戦略実効化支援……22
3　アスリート育成パスウェイの構築支援……23
4　地域・大学等との連携・協働……25
(1) HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開事業……25
(2) 大学等との連携……27
(3) Total Conditioning Research Project NEXT……30
(4) 共同研究……32
5　国際情報戦略事業……33
(1) 情報調査……33
(2) 国際ネットワークのマネジメント……34
(3) 能力開発……36
6　スポーツ医・科学支援事業……37
(1) フィットネスチェック……38
(2) トレーニングサポート……39
(3) 心理サポート……40
(4) 栄養サポート……41
(5) 映像 / 情報技術サポート……42

(6) 総合型サポート……44
(7) ハイパフォーマンス・サポート事業　スポーツ庁委託事業……46
7　スポーツ医・科学研究事業……47
(1) 国際競技力向上に資する研究の推進……47
① 研究の柱……48
1. パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立……48
2. デジタル技術・用具の強化活動への実装……49
3. 競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装……50
4. スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化……51
5. 社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進……52
6. 総合型サポートに直結する研究……53
② 特別プロジェクト研究……56
世界陸上 2025 における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術……56
③ 萌芽研究……57
④ 科学研究費助成事業……58
⑤ 民間団体研究助成金等……61
(2) 先端技術を活用した HPSC 基盤強化事業　スポーツ庁委託事業……62
8　スポーツ診療事業……65
(1) メディカルチェック……65
(2) 外来診療……65
(3) コンディショニング……67
(4) 内部会議・委員会……68
(5) 連携事業……68
9　女性アスリート研究・支援プロジェクト……70
10　外部評価……72
(1) ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー……72
(2) ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会……73
(3) 国立スポーツ科学センター倫理審査委員会……74
11　ハイパフォーマンススポーツセンター利用状況……75
12　その他事業……82
(1) 普及啓発活動等……82
(2) パラリンピック競技関連の活動……84
(3)「スポーツの日」中央記念行事 / スポーツ祭り 2025……85
(4) 第 13 回アジアスポーツ科学会議……86
Ⅵ　論文掲載・学会発表……87

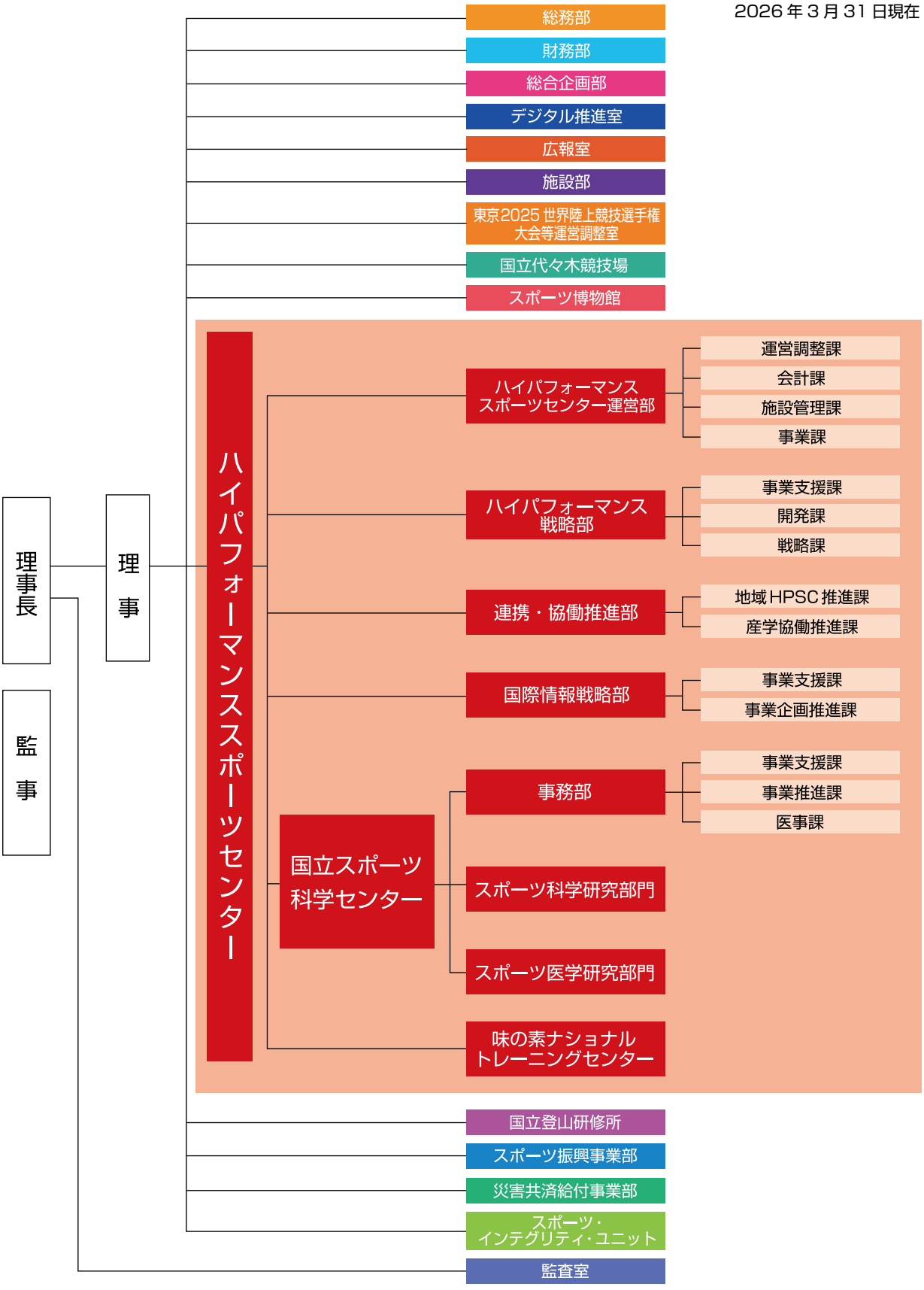




ハイパフォーマンススポーツセンター全景

I 独立行政法人日本スポーツ振興センター組織図

2026年3月31日現在



Ⅱ ハイパフォーマンススポーツセンター実施体制

2026年3月31日現在

ハイパフォーマンススポーツセンター
センター長　久木留　毅
職員数 348名

ハイパフォーマンススポーツセンター運営部
部長　畠野　裕史
職員数 45名

内訳	定員職員	非常勤職員
職員	24	21

ハイパフォーマンス戦略部
部長　久木留　毅
職員数 47名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	3	2
職員	18	24

連携・協働推進部
部長　白井　克佳
職員数 61名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	2	6
職員	14	39

国際情報戦略部
部長　久木留　毅
職員数 18名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	1	
職員	10	7

国立スポーツ科学センター
所長　久木留　毅
副所長　石毛　勇介
副所長　中嶋　耕平
副所長　星川　雅子
副所長　和久　貴洋
職員数　179名

事務部
部長　伊藤　貴之
職員数 58名

内訳	定員職員	非常勤職員
職員	20	30
受託事業		8

スポーツ科学研究部門
部門長　星川　雅子
職員数 53名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	19	24
職員		5
受託事業		5

スポーツ医学研究部門
部門長　中嶋　耕平
職員数 66名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員(医師)	6	5
研究員	3	7
職員	12	31
受託事業		2

その他（非常勤医師、非常勤専門職員等）

ナショナルトレーニングセンター
施設長　久木留　毅

HPSC所属の研究員等については、ウェブサイト
（https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/）にて公開。
※職員数には部長含む。
※ハイパフォーマンススポーツセンター総職員数は併任を除く。

（文責　HPSC運営部運営調整課）

Ⅲ 事業収支報告

2025 年度　収入　（自己収入）

（単位：千円）

科　　目	決　算　額
国立スポーツ科学センター運営収入	342,533
ナショナルトレーニングセンター運営収入	995,639
スポーツ及び健康教育普及事業収入	23,831
合　　計	1,362,003

※自己収入と支出との差額分については、運営費交付金等が充当されている。

2025 年度　支出

（単位：千円）

科　　目	決　算　額
国立スポーツ科学センター運営費	2,209,324
ナショナルトレーニングセンター運営費	2,152,769
競技力向上事業費（戦略的強化）	1,170,908
スポーツ及び健康教育普及事業費	160,379
合　　計	5,693,380

※支出の中には定員職員の人件費は含まれていない。

（文責　HPSC 運営部会計課）

Ⅳ ハイパフォーマンススポーツセンター施設の概要

ハイパフォーマンススポーツセンター（以下「HPSC」という。）は、国立スポーツ科学センター、味の素ナショナルトレーニングセンター、味の素フィールド西が丘、フットサルコート、テニス場、戸田艇庫の管理運営を行っている。オリンピック競技とパラリンピック競技を一体的に捉え、スポーツ医・科学、情報等による研究、支援及び高度な科学的トレーニング環境を提供し、国内外のハイパフォーマンススポーツの強化に貢献している。

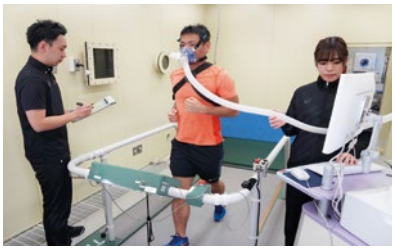
1　国立スポーツ科学センター

2001 年 10 月に開所した国立スポーツ科学センター（以下「JISS」という。）では、スポーツ医・科学支援事業やスポーツ医・科学研究事業、スポーツ診療事業等の各種事業を迅速かつ効果的に実施するため、最先端の研究設備や医療機器が設置されている。また、トップレベル競技者のためのトレーニング施設等、研究と実践の場を有機的に結合した機能も有している。



（1）スポーツ科学研究部門関連施設

施　設　名	主な設備・機能等
生理学実験室	呼吸循環系機能評価、筋活動記録・評価等
温湿度実験室	温度 0 ～ 40℃、湿度 10 ～ 95%
気圧実験室	大気圧～ 533hPa
生化学実験室	筋肉、血液、唾液、尿を対象とした生化学的分析等
映像編集室	映像編集・エンコード等
体力科学実験室	有酸素性・無酸素性運動能力評価、筋力・筋パワー測定、大型トレッドミル（3m × 4m）
形態計測室	身体組成計測、三次元形態計測
陸上競技実験場	屋内 100m 走路、走幅跳・三段跳用ピット、投てきサークル、埋込型床反力計
バイオメカニクス実験室	自動追尾型三次元動作解析システム、等速性筋力測定装置
風洞実験棟	吹出口サイズ 2.5m × 3.0m、測定部長さ 8m、気流速度 5 ～ 35m/ 秒



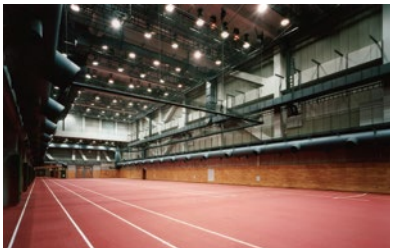
生理学実験室



生化学実験室



体力科学実験室



陸上競技実験場



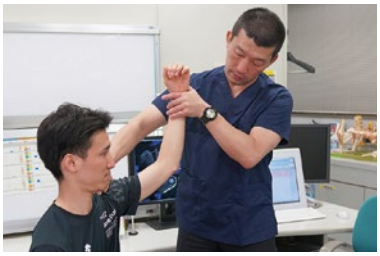
バイオメカニクス実験室



風洞実験棟

（2）スポーツ医学研究部門関連施設

施　設　名	主な設備・機能等
診察室	内科、整形外科、歯科、皮膚科、婦人科、心療内科、脳神経外科
臨床検査室	血液検査、尿検査、呼吸機能、心電図、運動負荷試験等各種臨床検査
薬剤室	調剤、服薬指導、薬剤チェック、ドーピング防止に関する相談
栄養相談室	食事内容の栄養評価、栄養相談・指導
カウンセリング室	心理カウンセリング
画像検査室	単純レントゲン、MRI、CT、骨密度測定
アスリートリハビリテーション室	運動療法、物理療法、水治療法等
コンディショニングスペース	セミナーエリア、相談室、畳エリア
心理学実験室・カウンセリングルーム	脳波、心拍、筋電等の測定、メンタルトレーニングの技法等の指導
トレーニングジムCORE	マシン、フリーウェイト
ハイパフォーマンス・ジム	トレーニング動作計測システム（映像・フォースプレート・各種センサ）、上肢プライオメトリクスマシン、クライミングウォール、トランポリン、酸素濃度制御システム（範囲 18.6～11.2%）


診察室


薬剤室


栄養相談室


カウンセリング室


画像検査室


アスリートリハビリテーション室


コンディショニングスペース


トレーニングジムCORE


ハイパフォーマンス・ジム

（3）サービス施設

施　設　名	主な設備・機能等
栄養指導食堂　レストラン「R^3」	116 席
宿泊室	客室 73 室（洋室シングル 70 室、洋室ツイン 1 室、和室 2 室）、バリアフリー対応浴室 2 室 ※客室 73 室のうち、低酸素対応室 67 室（酸素濃度制御範囲 16.8 ～ 14.4%）、バリアフリー対応室 15 室
特別会議室	29 席
スポーツ情報サービス室	パソコン（ビデオ編集・インターネット閲覧等）、プリンタ、CD/DVD デュプリケーター、スポーツ関連雑誌
研修室 A・B	57 名収容×1室（A）、42 名収容× 1 室（B）
喫茶室「New Spirit」	33 席（飲み物、軽食、売店）
J-Lounge	ミーティングエリア


栄養指導食堂　レストラン「R^3」


宿泊室


研修室 A・B

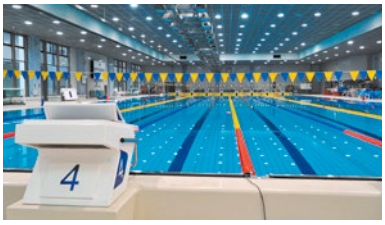

スポーツ情報サービス室


喫茶室「New Spirit」


J-Lounge

（4）競技別専用練習場

施　設　名	主な設備・機能等
競泳プール	50 m× 8 コース、水深は可動床により 0 ～ 2 mまで調整可能、水球競技にも対応
アーティスティックスイミングプール	30 m× 25 m、水深 3 m、水中及び水上の音響設備
新体操・トランポリン	新体操：床面 2 面、トランポリン：8 台


競泳プール


アーティスティックスイミングプール


新体操・トランポリン

2 味の素ナショナルトレーニングセンター

味の素ナショナルトレーニングセンター（以下「味の素 NTC」という。）は、2008 年の開所当時は、競技別の専用練習場である「屋内トレーニングセンター・ウエスト（以下「ウエスト」という。）」「陸上トレーニング場」「屋内テニスコート」及び宿泊施設の「アスリートヴィレッジ」から構成されていたが、オリンピック競技とパラリンピック競技の更なる共同利用化を図るために、2019 年 6 月末に「屋内トレーニングセンター・イースト（以下「イースト」という。）」が拡充・整備された。



（1）屋内トレーニングセンター・ウエスト

2008 年 1 月 21 日に開所。2026 年 3 月現在は 9 競技の専用練習場があり、各練習場とも壁面等にはハイビジョンカメラ等が設置され、併設のテクニカルルーム内の機器を用いて、映像分析を行うことが可能である。

階　層	施　設　名	主な設備・機能等
3 階	体操	男子 6 種目、女子 4 種目全ての体操種目の練習が可能
	バレーボール	コート 2 面、コートの素材には、長尺シートを使用
	バドミントン	コート 10 面、空調設備は、バドミントンのシャトルの軌道に影響がないように配慮
2 階	ハンドボール	コート 2 面、コートの素材には、長尺シートを使用
	バスケットボール	コート 2 面、壁面ゴール 4 台設置
	共用コート 2	オリンピック競技（ハンドボール、バスケットボール、バレーボール、バドミントン）や、一部のパラリンピック競技の練習が可能、コートの素材には長尺シートを使用
1 階	柔道場	6 面分、833 畳、肋木及びクライミングロープを設置
	研修室	大小合わせて合計 7 室、プロジェクター、音響設備 ※同時通訳機器（有料）を利用可能（最大 4ch、受信機 350 機）
	共用コート 1	競技を問わず多目的な使用が可能
地下 1 階	ボクシング	常設リング 1 台（仮設リングの増設も可能）、パンチングボール、サンドバッグ等を設置
	ウエイトリフティング	競技プラットフォームが 1 面、練習用のプラットフォームが 13 面設置、フォースプレート（床反力計）を 4 枚設置
	レスリング	レスリングマット 6 面設置、壁面及び天井のハイビジョンカメラ等と、併設のテクニカルルーム内の機器により、映像分析が可能、肋木、クライミングロープ、鉄棒を設置
	トレーニングジム WEST	各種トレーニングマシンを設置、専門スタッフが常駐
	25 m プール	4 コース、水深 1.3 m、ジャグジーと人工炭酸泉浴槽を併設（リラックス、リハビリテーションを目的）
各階	アスリートラウンジ	リラックススペース、異種競技間での交流・情報交換が可能、製氷機、自動販売機等設置

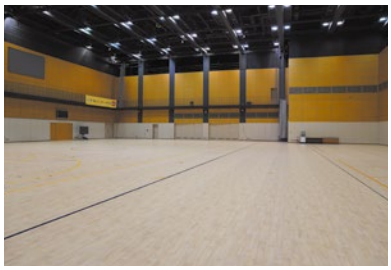

体操


バレーボール


バドミントン


ハンドボール


バスケットボール


共用コート 2

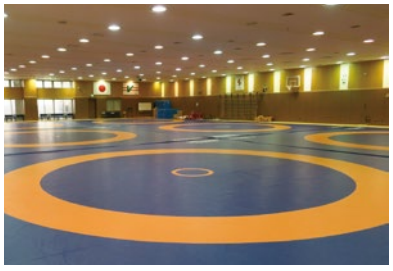

柔道場

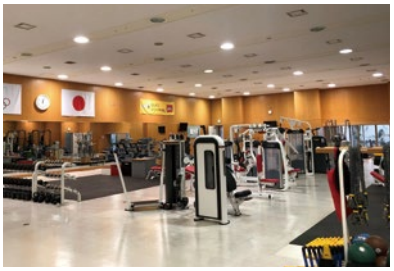

小研修室

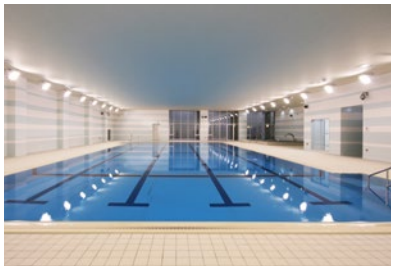

大研修室


ボクシング


ウエイトリフティング


レスリング


トレーニングジム WEST


25m プール


アスリートラウンジ

（2）屋内トレーニングセンター・イースト

2019 年 6 月末に竣工。オリンピック競技とパラリンピック競技の共同利用を踏まえたユニバーサルデザインに考慮した設計となっている。

アスリートは 5 つの専用練習場や共用コートでのトレーニングに加え、食事、宿泊及びリカバリーを同一の建物内で行うことができる。



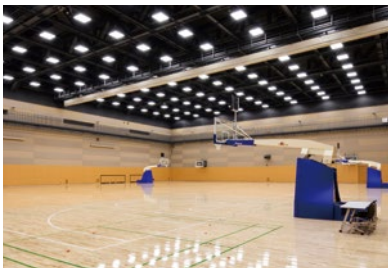
階　層	施　設　名	主な設備・機能等
6,4,2 階	見学コース	高さ体感展示、スポーツ医・科学に関する展示等
5 階	アーチェリー	屋内・屋外射場両方から 70 mの射長を確保し、標的 12･最大 36 人が並んで練習可能、夜間照明設備を有し、屋内射場のガラス戸を開放することで、夜間や降雨時にも練習可能、また、屋外射場には横風を発生させる設備を設置
	トレーニングジム EAST	パラアスリートの利用にも対応した各種マシンをはじめ、クライミングウォール、フリーウェイトエリア、6 階ランニングコースとそれに続く巨大なスロープを設置
	卓球	最大 28 面程度設置可能、電動間仕切にて全体を 3 つのエリアに分割可能、壁面の 200 インチプロジェクタースクリーンにハイビジョンカメラで撮影した競技映像を映し出すことが可能
4 階	診察室・トレーナールーム	トレーナーによる施術が可能
	スポーツクリニック EAST	眼科、リハビリテーション科、心療内科、心理カウンセリング、特別外来
	ドーピングコントロール室	個室 1 部屋
3 階	フェンシング	30 ピスト設置、電動間仕切にて 3 エリアに分割可能、ピスト、リール等を床埋込式とし、フラットな床面を実現
	リカバリーエリア	交代浴、クライオセラピーを設置、チーム（複数人）での利用も可能
2 階	会議室	3 室（定員各 30 席規模）※3 室を一体として利用可能
	ミーティングルーム	6 室（定員各 12 ～ 16 席規模）※2 室を一体として利用可能
1 階	水泳	50 m × 10 レーン、水深 3 m、流水プール（埋込）、人工炭酸泉設備を併設、地下ピットの観察窓と水泳場内のカメラから水中動作の映像を収録可能
	共用コート（A,B,C,D）	パラリンピック競技（車いすバスケットボール、シッティングバレーボール、ボッチャ、ゴールボール、パワーリフティング、車いすラグビー等）や、一部のオリンピック競技の練習が可能、A、B は約 42m × 23m、C、D は電動間仕切りを収納し約 44m × 48m の大空間として利用可能
	レストラン	車いす利用にも対応したテーブルを設置、レストラン R³ や SAKURA Dining 同様、競技者栄養評価システム（mellon Ⅱ）が利用可能、全 96 席

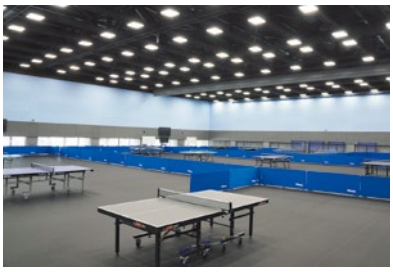
階　層	施　設　名	主な設備・機能等
地下 1 階	射撃	25m/50m 射場は 15 射座、10m 射場には 25 射座を備え、最新の電子標的システムを使用
2 ～ 5 階	アスリートラウンジ	リラックススペース、異種競技間での交流・情報交換が可能、自動販売機等設置
2 ～ 4 階	宿泊室	シングル・ツイン・コネクト・和室、143 名の宿泊が可能
2 階	託児室	未就学児対象、受入人数 3 名まで


フェンシング


トレーニングジム EAST


アーチェリー

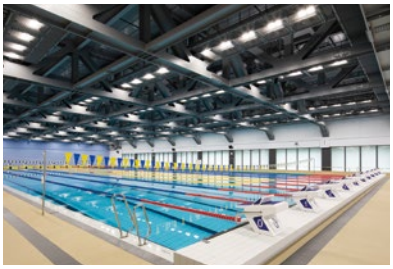

共用コート


卓球


交代浴



射撃

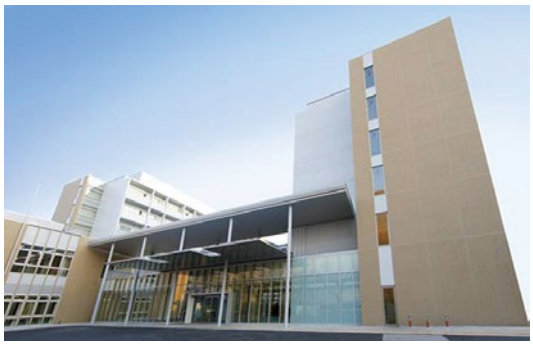

水泳


レストラン

（3）アスリートヴィレッジ

ナショナルチームの様々な合宿形態に合わせ、シングルルーム、ツインルーム、和室のほか、チーム単位での宿泊も可能なマンションタイプ（リビングを中心に、シングルルーム、トリプルルーム、シャワールーム等で構成）などの宿泊室を有しており、448 名の人員が宿泊可能。

宿泊室のほか、大浴場（勝湯）や食堂（SAKURA Dining）、託児室も併設されている。





宿泊室　洋室



食堂　SAKURA Dining



大浴場　勝湯

（4）陸上トレーニング場

屋根付きの全天候型 400m トラック（6 コース）。トラックには照明設備付の屋根があり、夜間、雨天時の練習にも対応している。トラックの内側には、天然芝で、跳躍、投てき各種目の練習施設のほか、砂場走路、さらに外周にはインラインスケート・スキー走路等が整備され、様々な競技のトレーニングに対応可能である。



屋根付きトラック



全体

（5）屋内テニスコート

全米オープンテニス会場と同様のハードコート 2 面、全仏オープンテニス会場（ローランギャロス）と同様のレッドクレイコート 2 面の計 4 面を備えている。高所からの指導や映像分析のためのキャットウォークも設置され、天井のハイビジョンカメラ等と、併設のテクニカルルーム内の機器を用い、映像分析を行うことができる。また、環境への配慮から、外壁面緑化も施されている。



ハードコート



レッドクレイコート

3 その他施設

（1）味の素フィールド西が丘

1972 年、国立西が丘競技場は、サッカー専用競技場として建設された。国際試合、天皇杯予選、全日本大学選手権、関東大学リーグ、全日本女子選手権、全国高校選手権などに幅広く利用されている。2012 年に、ネーミングライツを導入し、施設名が「味の素フィールド西が丘」となっている。



建築面積	1,186.65m²(スタンド面積 3,460m²)
延べ面積	997.17m²
芝生面積	10,614m²(サッカーコート 105m × 68m) 夏芝：ティフトン、冬芝：ペレニアルライグラスで通年緑化を実施。
収容人員	個席 =5,073 立見席 =2,180 障害者席 =5 合計収容人員 =7,258 人 夜間照明：約 1,500 ルクス
その他	大会主催者の控え室として利用される大会本部室、選手更衣室 4 室、飲食売店（A ゲート）を設置。

（2）フットサルコート

会員登録を行った団体が利用可能。会員登録は年度更新である。



芝生面積	1,080m²（フットサルコート 15 m×25 m）
コート数	全天候型人工芝 2 面（A,B）
更衣室	ロッカー男女各 24 台、シャワー 2 室。
その他	夜間照明：約 330 ルクス

（3）屋外テニスコート

年度ごとに年間利用者の募集を行い、年間利用の申込をされた一般利用者が利用可能である。

コート数	砂入り人工芝 8 面
ロッカールーム	ロッカー男女各 54 台、シャワー 1F 男女各 6 室、2F 男女各 2 室



屋外テニスコート



クラブハウス

（4）戸田艇庫

戸田ボートコース（埼玉県戸田市）付近において艇庫及び合宿施設を運営し、トップアスリート、大学・高校生、その他のボート競技者に利用されている。

建築面積等	2,099㎡（延べ 3,954㎡） 鉄骨造　二階建
艇格納数	200 艇程度
合宿室	19 室
宿泊定員	240 人



艇庫前



艇庫内



合宿施設 食堂

（文責　HPSC 運営部施設管理課）

Ⅴ 事業報告

1　ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025 の開催

1. 開催概要

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスは、HPSC として日本のハイパフォーマンススポーツにおける競技力向上及びそれに寄与する取組を推進することを目的に、2017 年度から実施している。

第 9 回目となる 2025 年度は、会場開催で行い、2 日目のシンポジウムはオンデマンド配信を実施した。

会場開催
日　時：2025 年 12 月 10 日（水）・11 日（木）
会　場：味の素 NTC・ウエスト 1 階大研修室、研修室 1 ～ 4、JISS 陸上競技実験場
テーマ：ハイパフォーマンススポーツ研究に基づく支援のメソッド化に向けて
オンデマンド配信
日　時：2025 年 12 月 24 日（水）から
2026 年 1 月 30 日（金）まで



写真 1　会場の様子



写真 2　オンデマンド配信（視聴画面）

2. 実施内容

(1) オープニングセッション
『強化戦略プラン×スポーツ医・科学』
各中央競技団体（以下「NF」という。）と HPSC 医・科学サポートの連携による競技力強化の在り方について、NF のハイパフォーマンスディレクターも参加する中、議論が行われた。HPSC には、競技現場のニーズを的確に把握し、限られたリソースを有効に活用する支援体制の構築が求められ、HPSC が提唱する「トータルコンディショニング」の考え方が今後の支援と研究の鍵となる展望が示された。

(2) セッション A
『ハイパフォーマンスディレクターと考えるアスリート育成パスウェイの構築・活用』
日本版 FTEM（Foundation・Talent・Elite・Mastery）モデルに基づく「アスリート育成パスウェイ」の構築と活用について、2 つの競技団体による実践事例を紹介した。
発掘から育成、強化、そして世界で勝ち続けるための長期的な視点が共有され、競技特性に応じた柔軟なアプローチの重要性が語られた。

(3) セッション B
『ハイパフォーマンスディレクターと考える競技団体による「女性アスリート支援」』
「女性アスリート支援の現状と課題」をテーマに、HPSC 及び競技団体の各視点から多角的な発表が行われた。
多様な立場からの声が交わされる中で、支援の質を高めるための連携と継続的な対話の重要性が改めて確認された。

(4) セッション C
『ハイパフォーマンスディレクターのための HPSC リカバリー機能見学ツアー』
主に NF のハイパフォーマンスディレクターを対象に、HPSC のリカバリー関連施設の見学ツアーを開催した。
疲労回復に関わるリカバリーの概念や競技現場での主な課題、科学的根拠に基づくリカバリー戦略について解説し、トータルコンディショニング支援の一環としてリカバリーを位置づける重要性が示された。

(5) セッション D
『国際競技力向上に資する研究開発
～先端的スポーツ医・科学研究推進事業における大学の取組～』
スポーツ庁「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」を受託している順天堂大学・立命館大学・筑波大学（受託 3 大学）の取組について、各大学からの発表を行った。

また、カンファレンス前日には、受託３大学の学生や若手研究者を対象とした、ワークショップとプレセミナーを開催した。

⑹ シンポジウム①

『トータルコンディショニングのための知見共有「ハイパフォーマンススポーツ×宇宙」』

有人宇宙活動とハイパフォーマンススポーツにおける多職種連携やトータルコンディショニングに関係する研究成果、実践例等を共有し、今後の連携可能性や相互補完できる知見について、探索・検討された。

また、パネルディスカッションでは、「スポーツ×宇宙」という分野横断の協働がもたらす未来像や可能性について活発な議論が行われた。

⑺ シンポジウム②

『トータルコンディショニングのための知見共有「ハイパフォーマンススポーツ×ハイパフォーマンススポーツ」』

HPSC が提唱する「トータルコンディショニング」を共通概念とし、ラグビー・自転車・パラ陸上における競技特性に応じたトータルコンディショニングの取組について共有された。

各競技における取組の紹介とパネルディスカッションを通じて、短期・中期・長期の計画の基、システム化された支援による戦略的なコンディショニングの重要性が示された。

3. 運営等

会場開催2日間で365名(延べ人数､招待者を含む｡)が参加し、一部のセッションにおいては同時通訳を行った。

サブ会場では、協賛社・HPSC 事業紹介ブースやミニセミナーをはじめ、HPSC 支援・研究アワード受賞者や HPSCの研究員、HPSCと連携している大学の教員及び学生らによる多様なポスター発表（40 演題）を実施した。



写真３　サブ会場の様子

また、今回のカンファレンス初の取組として、書籍販売スペースを設け、HPSC/JISS が発刊する５種類の書籍（①フィットネスチェックハンドブック、②スポーツ栄養学、③アスリートのためのトータルコンディショニングガイドライン、④アスリート支援ハンドブック、⑤メディカルチェックハンドブック）をカンファレンス会場内で販売した。

会場開催後は、HPSC ウェブサイトで２日目のシンポジウムのオンデマンド配信を行い、計 1,509 回視聴された。

4. 広報・協賛・後援等

広報については、2025 年７月の特設ウェブサイトの公開からオンデマンド配信終了まで、HPSC の X による情報発信を計 16 回実施。会場開催時には独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下「JSC」という。）JSC 各部署（スポーツ振興事業部､スポーツ・インテグリティ・ユニット）と連携し、各種刊行物の配布を行った。また、会場及びオンデマンド配信ではスポーツくじの CM 動画やスポーツ・インテグリティに関する PR 動画を放映・配信した。

企業協賛については､計５社獲得することができた。主な協賛特典として、本カンファレンスのウェブサイトへの企業名表記やリンクバナーの設置、オンデマンド配信時の企業ロゴマークの表示等を行った。

後援については､2024 年度同様４団体(スポーツ庁、公益財団法人日本オリンピック委員会（以下「JOC」という。)、公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会（以下「JPC」という。）及び公益財団法人日本スポーツ協会(以下｢JSPO｣という。))から受けた。

5. まとめ

会場開催参加者を対象とした事後アンケートでは、「興味深い最新研究や知見が多かった」などの声があり、回答者の 98% がカンファレンスの内容に「満足」･「やや満足」と回答。参加者にとって有用な情報を幅広く共有する機会となったと考えられる。

また、サブ会場では、登壇者や HPSC スタッフと参加者による意見交換が活発に行われ、相互交流の場となった。

今後も、HPSC ならではの情報発信を継続し、日本の国際競技力向上に寄与するカンファレンスとなるよう努めていく。

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

2　中央競技団体の中長期強化戦略実効化支援

1. 事業概要

本事業は、JSC、JOC 及び JPC で構成され HPSC に設置される「協働チーム」が、オリンピック・パラリンピック競技の NF の策定する直近及び 2 大会先のオリンピック・パラリンピック競技大会に向けた中長期の強化戦略プランの実効化を支援することにより、持続可能な国際競技力の向上に資することを目的とする。

協働チームは組織間の連携を図りながら、NF における強化戦略プランの PDCA サイクルの各段階で、NF の取組状況に応じて競技横断的に知見を共有し、多面的な支援を行っている。

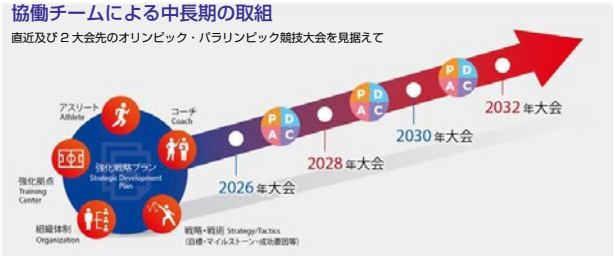


図　協働チームによる NF の中長期強化戦略を支援する枠組み

2. 実施内容

(1) 強化戦略プランの策定支援と NF との対話

NF において策定する強化戦略プランについて、夏季 NF はロサンゼルス 2028 大会やブリスベン 2032 大会、冬季 NF はミラノ・コルティナ 2026 大会やフランスアルプス 2030 大会に向けたプランの策定（更新）を支援した。

また、NF のハイパフォーマンスディレクター（HPD）をはじめとする強化責任者を中心とした関係者との対話を通じて、強化戦略プランに基づく強化活動の進捗状況の確認等を行った。

HPSC や NF の強化現場を中心に、年間を通じて NF との対話機会を創出し、本活動を通じて得られた情報を後述する協働チームによるコンサルテーション等に活用した。

(2) 協働チームによるコンサルテーションの実施

夏季及び冬季 NF と協働チームの間で、NF における強化戦略プランの実行状況に関する確認や意見交換等を行うための会議（協働コンサルテーション）を 101 競技・種別に対して実施した。

本会議では、各 NF がオリンピックやパラリンピック競技大会に向けて設定する中長期の目標達成に向けたマイルストーンの達成状況や、戦略の進捗状況等を確認している。また、NF の強化責任者等との日常的な対話を通じて得られた情報や近年における各競技種目の国際競技力に係る情報等も活用し、強化戦略プランに記載された目標を達成するための課題の明確化や、課題解決につながる情報提供を行っている。

2025 年度は、夏季 NF について、ロサンゼルス 2028 大会以降を見据えた戦略の進捗状況等を確認するとともに、冬季 NF について、ミラノ・コルティナ 2026 大会の直前期における戦略の進捗状況等の確認を行った。

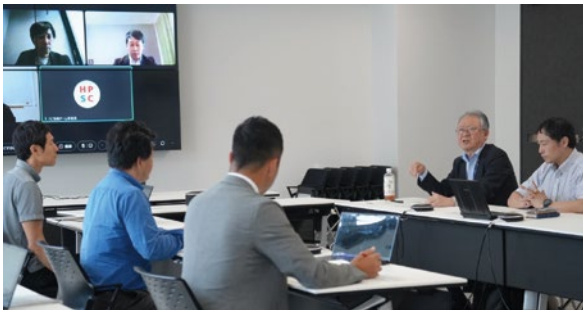


写真　協働チームによるコンサルテーション

(3) 協働チームの取組の振り返りや支援活動の改善

2024 年度に、パリ 2024 大会の結果等を踏まえ、リオ 2016 大会以降実施してきた協働チームの取組の振り返りを行い、NF における強化戦略プランの計画性及び実効性の向上が図られていることを確認した。加えて、この取組の更なる充実を図るため、NF の活動内容や課題等をより把握しやすいよう強化戦略プランのフォーマットを改訂し、2025 年度の夏季 NF から新フォーマットに移行した。

2025 年度は、夏季 NF に対し、新フォーマットとあわせて導入したモニタリングシートを活用した強化活動のモニタリングの支援を行うとともに、冬季 NF については、フランスアルプス 2030 大会及びユタ 2034 大会に向けた新たな強化戦略プランの策定を支援した。

(4) NF における強化戦略プランの PDCA サイクルの確立に向けて

2025 年度より、NF における強化戦略プランの PDCA サイクルの確立をより一層促進するため、強化戦略プランの項目ごとの評価結果及び協働コンサルテーションにおける協働チームの所感等を明示し、HPD をはじめとした NF の強化責任者等に伝える取組を実施した。

今後も引き続き、協働コンサルテーションの実施等を通じて、NF の中長期での強化戦略プランにおける目標達成のための課題の明確化や、課題解決のための情報提供等の支援を行うことにより、戦略的な選手の発掘・育成・強化の取組を推進し、持続可能な国際競技力向上への貢献を目指す。

（文責　ハイパフォーマンス戦略部戦略課）

3　アスリート育成パスウェイの構築支援

1. 概要

本事業は、NF 等が行うアスリートの発掘・育成・強化の取組が持続可能なシステムとなり、世界で活躍するアスリートが継続的に輩出されるよう、JOC、JPC、JSPO 等と連携し、競技別パスウェイモデルの策定支援及び各競技団体の現状把握や課題解決に資するプログラムの提供等の支援を行っている。

2. 実施内容

(1) エビデンスに基づく競技別パスウェイモデル構築の支援

①競技別パスウェイモデルの策定支援

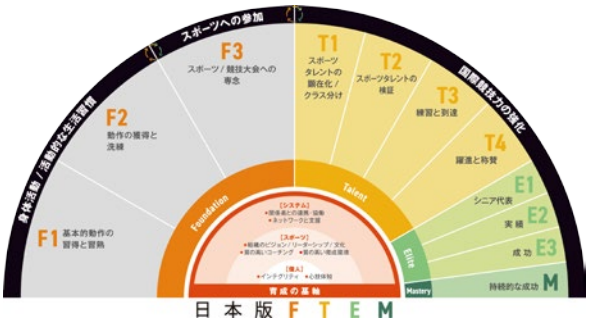


図　スポーツとアスリート育成の枠組み「日本版 FTEM」

第 3 期スポーツ基本計画に則り、スポーツとアスリート育成の包括的な枠組み「日本版 FTEM」(図) を活用した各 NF が発掘から育成・強化までを一貫して行うアスリート育成パスウェイの構築支援を行った。特に 2025 年度は「アスリート育成パスウェイの構築・活用のためのワークショップ」を年 7 回開催し、22 競技・種別（オリンピック競技 16 競技・種別、パラリンピック競技 6 競技・種別）延べ 238 名が参加した。各 NF は NF におけるパスウェイの現状を把握するためのツール「パスウェイヘルスチェック」を実施し、各競技・種別の課題を明確にした上でワークショップに臨んだ。また、ワークショップに参加した 6 競技・種別（オリンピック競技 5 競技・種別、パラリンピック競技 1 競技・種別）により、「パスウェイマップ（コーチ・関係者向け）」が構築された。今後もより多くの NF への概念の普及と競技別パスウェイモデルの構築を目指す。

②パスウェイ教育プログラムの推進

パスウェイ教育プログラムは、スポーツタレントに対し、「アスリートライフスタイル」について考え、学ぶ機会を提供するものである。2025 年度は、8 地域及び 1 NF で 562 名に対してプログラムを提供した。また、アスリートライフスタイルプログラムを HPSC が有する知見をパッケージ化した「HPSC パッケージ」として再構成するため、外部有識者（4 名）より、内容や提供方法について意見を聴取し、プログラムの整理・調整を行った。

(2) 地域タレント発掘・育成事業との連携

JSC は、地方公共団体等が実施する地域タレント発掘・育成 (TID) 事業や競技団体等との連携・協働のプラットフォームとしてワールドクラス・パスウェイ・ネットワーク (WPN)を設置し、2026 年 3 月時点で 49 地域 52 事業が加入している。

WPN 加入地域に対しては、HPSC で実施している事業や他地域の活動等に関する情報共有の一環として WPN ニュースをメール配信（15 投稿）しているほか、オンラインも活用して 5 月に新任者向け事業説明会（30 地域・52 名参加）、6 月に連絡会議（35 地域・87 名参加）、12 月に連携会議（40 地域・88 名参加）を開催した。12 月 4、5 日に開催した連携会議では、1 日目は「地域と NF との連携から考えるアスリート育成パスウェイ」をテーマに福岡県、岐阜県、NF（ホッケー）のキーパーソンによるトークセッションを通じて、双方の立場における発掘・育成の好事例や発掘・育成が一貫した取組となっている事例を共有するとともに、ワークにより、今後の連携の在り方を探った。2 日目は「女性アスリート育成パスウェイにおけるトータルコンディショニングを考える」をテーマに研究報告や地域間での情報交換を行った。また、随時、個別の相談等（16 件）にも対応した。



写真 1　WPN 連携会議の様子

(3) データを活用した発掘システムの構築

アスリートの体力測定や競技成績に関するデータを、アスリート育成パスウェイの軌跡として集約・活用するためのプラットフォームとして構築した「アスリートパスウェイシステム（APS)」が、NF によるアスリートの発掘に活用された。また、WPN 加入地域向けに所属スポーツタレントへの説明会を実施し、APS の認知度向上に努めた。APS 登録アカウント数は、地域 TID 事業 26 団体 59 人、NF27 団体 44 競技・種別 78 名、アスリート 4,208 人（オリンピック競技 4,137 人、パラリンピック競技 71 人）（2026 年 3 月 31 日時点）となった。

(4) ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト（J-STAR プロジェクト）

本プロジェクトは全国規模のタレント発掘・検証を実施するプロジェクトで、2017 年度から 2020 年度まで JSPO に委託し、スポーツ庁、JOC、公益財団法人日本パラスポーツ協会（以下「JPSA」という。）、JPC、NF 及び地方公共団体等と連携して実施してきた。2021 年度から、オリンピック競技は JSC が、パラリンピック競技は JSC から JPSA に委託をして実施している。

2025 年度は、オリンピック競技については委託した 8 競技・種別が APS を活用し、スポーツタレント候補が居住する地域指導者と連携しながら発掘プログラムを実施した。APS 登録アスリートのうち、J-STAR プロジェクトスカウト対象期間に NF からのスカウトを希望した者から NF によるデータ選考を経て延べ 100 名が発掘プログラムに参加した。最終的には 8 競技・種別 46 名が今後 NF による育成プログラムによって育成されていくこととなった。

パラリンピック競技（9 期）については夏冬パラリンピック実施 27 競技を対象に、全国 8 会場で基礎測定会を実施した。エントリー総数は 219 名だった。基礎測定会で選出されたスポーツタレント候補のうち延べ 81 名が専門測定を含む検証プログラムに参加しており、最終的には 14 競技・種別で延べ 27 名が今後 NF による育成プログラムによって育成されていくこととなった。

ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックには、J-STAR プロジェクトで発掘されたアスリート 8 名（クロスカントリースキー、アイスホッケー）が出場した。



写真 2　発掘プログラム（自転車）の様子

(5) 課題解決型プログラムによるアスリート育成パスウェイ構築への支援

持続可能な競技力の向上には、アスリートの発掘・育成・強化の取組のシステム化・プログラム化に向けたアスリート育成パスウェイの構築が欠かせない。このため、2023 年度から「課題解決型アスリート育成パスウェイ構築支援プログラム」を実施し、これまで各段階で個別に実施してきた戦略的強化を一体的なプログラム構造で取り組んだ。

2025 年度も引き続き、メダルポテンシャルスポーツ育成のための持続可能なシステム構築支援（システム構築）に 3 競技・種別、地方公共団体と連携した育成環境の整備（環境整備）に 1 競技・種別を対象に事業を委託した（表 1）。

表 1　課題解決型プログラム対象競技一覧【冬季競技】

システム構築 (3)
【オリンピック競技（3)】 スキークロス、スケルトン、スノーボード・ハーフパイプ
環境整備 (1)
【オリンピック競技（1)】 エアリアル

スノーボード・ハーフパイプにおいて、本事業の対象選手がミラノ・コルティナ 2026 オリンピックに出場し、男子で銅メダルを獲得、女子では 4 位及び 5 位に入賞した。スキークロスでは、国内常設拠点と専門コーチ・スタッフの体制が確立され、スケルトンでは、タレントからエリートへの移行システム概要書が作成された。今後も育成のための持続可能なシステムとして活用されることが期待される。

また、2025 年度から新たに ELITE PATH（エリート・パス）～育成から強化に繋ぐプロジェクト～に 7 競技・種別、TALENT PATH（タレント・パス）～発掘後から育成に繋ぐプロジェクト～に 3 競技・種目を対象に事業を委託した（表 2）。

表 2　課題解決型プログラム対象競技一覧【夏季競技】

ELITE PATH（エリート・パス）(3)
【オリンピック競技（4)】 スポーツクライミング、テニス、水泳（競泳)、陸上競技 【パラリンピック競技 (3)】 パラトライアスロン、パラ水泳（身体)、車いすバスケットボール
TALENT PATH（タレント・パス）(7)
【オリンピック競技（1)】 トライアスロン 【パラリンピック競技 (2)】 パラ陸上競技（身体・知的)、ボッチャ

エリート・パスでは、強化戦略プランの 8 年プランのターゲットアスリート（TA）相当の有望アスリートを 4 年プランの TA へ引き上げることを目指し、スポーツ医・科学、情報等の活用や海外派遣等を通じて集中的な育成・強化を実施できるプログラムの開発を進めた。タレント・パスでは、地域における将来有望なアスリートを 8 年プランの TA へ引き上げることを目指し、地域資源を活用し地域に適した育成プログラムの開発を進めた。

(6) 地方公共団体が行うパラアスリートの発掘事業の立ち上げ等の支援

地域におけるパラアスリートの発掘を支援するため、福岡県に委託してパラアスリート発掘・育成の取組推進事業を実施し、地方公共団体による新たなパラアスリート発掘の仕組みづくりに取り組んだ。

（文責　ハイパフォーマンス戦略部開発課）

4　地域・大学等との連携・協働

(1) HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開事業

1. 事業概要

2018 ～ 2022 年度の 5 年間で実施してきた「ハイパフォーマンススポーツセンターネットワークの構築」事業においては、競技力向上事業の一環として、NF 等が実施するアスリートの発掘・育成・強化活動を、競技団体が必要とする場所・タイミングで包括的に支援するため、国内にある地域のスポーツ医・科学センター、大学、NTC 競技別強化拠点等のネットワーク化とこれを推進する人材の育成を進めた。

2023 ～ 2027 年度の 5 年間の実施予定として新たに開始した「ハイパフォーマンススポーツセンターネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開」事業では、2022 年度までに構築してきた HPSC ネットワークを基盤として、HPSC が行ってきたスポーツ医・科学、情報サポートの事例や知見をパッケージ化した「HPSC パッケージ」を全国に展開し、地域におけるトップアスリートのサポート環境の整備とサポート・スペシャリストの養成を促進することで、質の高いサポートが全国各地でシームレスに実施されるような環境の構築を目的としている。

2. 実施内容

(1) 連携機関指定等による地域でのサポート環境の整備

HPSC では、全国各地の大学、スポーツ医・科学センター等を対象に、一定の要件を満たす機関について、「連携機関（アスリート支援）」として指定を進めている。

連携機関（アスリート支援：体力測定）には、①形態、②身体組成、③筋力、④有酸素性能力、の 4 つの測定項目を設けており、測定項目ごとに、HPSC とのデータ共有が可能な測定機器を定めている。連携機関（アスリート支援：体力測定）として指定を受けるためには、測定機器の保有とともに、アスリートを対象とした測定実績や、測定マニュアルの整備など、HPSC が定める一定の要件を満たす必要がある。

また、連携機関（アスリート支援：FAAB）は、スポーツ外傷・障害予防のための姿勢チェック（FAAB）を実施できる機関のことで、指定を受けるためには、測定機器の保有など、HPSC が定める一定の要件を満たす必要がある。

2025 年度は、新たに 3 機関を連携機関（アスリート支援）として指定した。加えて、既に連携機関（アスリート支援：体力測定）として指定済みであった 1 機関に対し、連携機関（アスリート支援：FAAB）の追加指定を行った。また、連携機関（アスリート支援）の指定に関心を持つ大学、スポーツ医・科学センター等の機関に対し、新規指定に向けた情報提供・意見交換等の連携活動を進めた。

スポーツ庁委託事業「地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業」において設立された 5 地域のスポーツ医・科学コンソーシアムとの関係においては、引き続き定期的な情報交換、HPSC 施設の視察対応、構成団体への往訪といった連携活動を進めた。

表 1 は、2026 年 3 月時点での HPSC ネットワーク連携機関（アスリート支援）の一覧で、連携機関（アスリート支援：体力測定）は合計 20 機関、連携機関（アスリート支援：FAAB）は 13 機関となっている。

表 1　連携機関（アスリート支援）一覧（2026 年 3 月時点）

No.	連携機関（アスリート支援）機関名	体力測定	FAAB
1	北海道立総合体育センター北海きたえーる	○	○※
2	北翔大学	○	○
3	青森県スポーツ科学センター	○	
4	とちぎスポーツ医科学センター	○	
5	千葉県総合スポーツセンター	○	○
6	国際武道大学	○	
7	帝京大学スポーツ医科学センター	○	
8	横浜市スポーツ医科学センター	○	
9	山梨学院大学スポーツ科学部	○	
10	新潟医療福祉大学		○
11	新潟リハビリテーション病院		○
12	新潟県健康づくり・スポーツ医科学センター	○	○
13	富山県総合体育センター	○	○
14	びわこ成蹊スポーツ大学	○	○
15	立命館大学スポーツ健康科学部	○	○
16	京都トレーニングセンター	○	○
17	大阪体育大学	○	
18	公立大学法人和歌山県立医科大学 みらい医療推進センターげんき開発研究所	○	○
19	高知県スポーツ科学センター	○	
20	福岡県立スポーツ科学情報センター	○※	
21	西九州大学スポーツ健康科学センター	○※	○※
22	宮崎大学医学部 スポーツメディカルセンター	○※	○※

※ 2025 年度に指定を行った機関

(2) HPSC パッケージの開発・研修プログラムの実施

2025年度も引き続き、HPSC パッケージの開発を進め、新たにストレングス & コンディショニング（S&C）分野の HPSC パッケージが追加されるに至った。また、既存の HPSC パッケージにおいては、継続的に情報の更新を行った。HPSC パッケージは、HPSC が実施する研修プログラムを修了した外部のサポート・スペシャリストにより、各地の競技現場で活動する NF、PF、各地域の TID 事業参加者等に対して、講習会等の支援・サポートに活用された。

表 2 は、2026 年 3 月時点での HPSC パッケージの一覧で、2025 年度には 3 件の HPSC パッケージを新たに開発し、合計 6 分野 17 件となった。

表 2　HPSC パッケージ一覧（2026 年 3 月時点）

No.	分野	HPSC パッケージ名
1	体力測定	JISS フィットネスチェック
2	栄養	アスリートのための食事の基本
3		アスリートのための水分摂取・脱水対策
4		アスリートのための貧血予防
5		アスリートのための食事の基本ジュニア版
6		アスリートのためのウエイトコントロール
7		アスリートのための遠征時の食事
8		アスリートのための試合期の食事
9	心理	チームビルディング
10		アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編（メンタルトレーニング技法の獲得）
11		アスリートのためのメンタルトレーニング応用編（メンタルトレーニング技法の活用法）
12	映像・情報技術	映像サポートの基礎 ※
13		JISS Air
14		JISS strobo
15	姿勢評価	姿勢チェック（FAAB）
16	S&C	トレーニングの基礎 ※
17		ストレングス＆コンディショニングに必要な情報の整理と活用 ※

※ 2025年度に開発した HPSC パッケージ

また、表 3 は、各 HPSC パッケージの研修プログラム修了者（サポート・スペシャリスト）数の一覧である。

表 3　HPSC 外部のサポート・スペシャリスト数一覧（2026 年 3 月時点）

No.	HPSC パッケージ名	人数
1	JISS フィットネスチェック	42 名
2	アスリートのための食事の基本	99 名
3	アスリートのための水分摂取・脱水対策	96 名
4	アスリートのための貧血予防	96 名
5	アスリートのための食事の基本ジュニア版	97 名
6	アスリートのためのウエイトコントロール	95 名
7	アスリートのための遠征時の食事	94 名
8	アスリートのための試合期の食事	90 名
9	チームビルディング	49 名
10	アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編（メンタルトレーニング技法の獲得）	41 名
11	アスリートのためのメンタルトレーニング応用編（メンタルトレーニング技法の活用法）	30 名
12	映像サポートの基礎	46 名
13	JISS Air	137 名
14	JISS strobo	66 名
15	姿勢チェック（FAAB）	60 名
16	トレーニングの基礎	13 名
17	ストレングス＆コンディショニングに必要な情報の整理と活用	13 名



写真 1　オンラインでの栄養分野研修プログラムの様子



写真 2　連携機関・とちぎスポーツ医科学センターでの S&C 分野研修プログラムの様子

(3) 研究分野の外部連携

連携・協働推進部にリサーチアドミニストレーターを配置し、研究戦略支援（HPSC の研究に係る調査や分析、整理等）、研究推進支援（外部機関に向けた窓口、共同研究に係る調整・実績管理や研究に有用な情報収集等）、研修企画支援（HPSC における研修やセミナーに係る調整）、研究広報等（研究成果の発信に係る調整等）を担当し、HPSC における研究活動の効率化や外部機関との連携促進を図った。

また、2022 年度から 5 年間の予定でスポーツ庁が実施している「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」において採択された 3 大学との、研究情報の交換や、人事交流をはじめとした若手研究者育成プログラムに関する HPSC との連携を促進するため、リサーチアドミニストレーターが各大学との調整を実施した。

ほかに、研究機関や民間企業等からの技術提案や製品紹介について、リサーチアドミニストレーターが窓口となり、企業連携の観点やフローを整理した上で、HPSC の研究者等との連携・調整を進めた。

リサーチアドミニストレーター自身の活動としては、一般社団法人リサーチ・アドミニストレーション協議会年次大会や各種研修等に参加し、大学リサーチアドミニストレーター（URA）の業務に関する情報や知識を習得して、1 名が認定 URA の資格を取得した。また、他機関の URA とコミュニケーションを図り、大学等研究機関の URA の取組事例について情報収集を行うとともに、産学連携や研究支援に関する情報を共有する仕組み（ポータルサイト）を整備して、HPSC 内の還元に努めた。

（文責　HPSC ネットワーク事業・企画 WG）

(2) 大学等との連携

1. はじめに

国際競技力の向上のための取組として、JSC 第5期中期計画に掲げられる「HPSC の場を活用した実践機会の提供」、「スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成」等を推進するため、連携協定を締結している大学・大学院をはじめとした外部機関と連携し、人材育成・人事交流に係る活動等を実施した。

2. 大学・大学院等との人材育成・人事交流

(1) 包括連携協定の締結

2025 年 7 月 17 日に、国立大学法人東京科学大学と包括連携協定を締結した。締結後は、合同で会議体を発足し、研究・医療における連携や人材交流等について、具体的な検討を進めているところである。



写真 1　左から 東京科学大 大竹理事長、JSC 理事長 芦立

また、2026 年 3 月 4 日には、国立研究開発法人国立成育医療研究センター（NCCHD）と包括連携協定を締結した。両機関が連携し、学校等における事故防止、成育医療･女性の健康、スポーツ医･科学に関する研究の発展、それらの成果に基づく普及啓発及び人材育成等を行うこととしている。



写真 2　左から JSC 理事長 芦立、NCCHD 五十嵐理事長

(2) 人事交流等

HPSC の研究員が大学・大学院の客員教員・連携教員等として研究指導等に協力した（表 1）。そのうち、順天堂大学から、1 名の連携大学院生を新たに受け入れた。

表 1　客員教員等の委嘱を受けた HPSC 研究員

大学名	客員教員等の委嘱を受けた HPSC 研究員	役職名
筑波大学	和久貴洋（JISS 副所長 / 総合企画部長）	教授（連携大学院）
	清水和弘（JISS スポーツ科学研究部門）	准教授（連携大学院）
	山下修平（ハイパフォーマンス戦略部 /JISS スポーツ科学研究部門）	非常勤講師
順天堂大学	中嶋耕平（JISS 副所長）、半谷美夏（JISS スポーツ医学研究部門）	客員教授
鹿屋体育大学	星川雅子（JISS 副所長）	客員教授
	横澤俊治､山下大地（JISS スポーツ科学研究部門）	客員准教授
立命館大学	窪康之、景行崇文、後藤晴彦、玉井伸典、山岸卓樹（JISS スポーツ科学研究部門）、髙橋由衣、冨永哲志、廣松千愛、妙圓園香苗（JISS スポーツ医学研究部門）、稲川祥史（デジタル推進室）	客員研究員

(3) 大学・大学院等と連携した講義等の実施

大学・大学院等と連携し、HPSC の研究員等の講師派遣及び講義への協力を計 16 件実施した（表 2）。以下、主な事例を紹介する。

①早稲田大学大学院スポーツ科学研究科において、2025 年 9 月 2 日から 5 日に久木留 JISS 所長ほか JISS 副所長含め各分野の研究員・専門職員計 17 名による「ハイパフォーマンススポーツ概論」と題した夏季集中講義を実施した。スポーツ医・科学、情報等による多面的で高度な支援及びその基盤となる研究の実践事例を紹介するとともに、その背景にあるハイパフォーマンススポーツに関するスポーツ医・科学、情報等に関する基礎的な知識を解説した。

②立命館大学の「スポーツ健康科学特殊講義Ⅱ」において、2025 年 10 月 3 日から 12 月 19 日に「ハイパフォーマンススポーツの科学」をテーマに 11 コマの講義を行った。前半 6 回は JISS が行っている医･科学支援について解説を行い、後半 5 回の講義は、バイオメカニクス、トレーニング、心理、栄養、映像・情報の各分野の研究員・専門職員による講義を実施した。

③日本体育大学大学院の「体育･スポーツ科学特論 B」及び「競技力向上サポート特論」において、2025 年 7 月 14 日に、HPSC の場を活用した講義を実施した。研究･支援に関する情報提供やグループワーク等に HPSC 研究員が参加し、HPSC と日本体育大学との連携に関する意見交換を行った。

表２　大学・大学院等と連携して実施した講義等

連携先	講義・コマ名	実施日・期間	担当研究員等（部署名は所属当時）
筑波大学	スポーツウエルネス医科学	2025 年 5 月 10 日	久木留毅（HPS センター長 /JISS 所長）、和久貴洋（JISS 副所長）
順天堂大学	スポーツ心理学	2025 年 5 月 14 日、6 月 25 日	永尾雄一（JISS スポーツ科学研究部門 / デジタル推進室）
順天堂大学	スポーツ情報科学	2025 年 5 月 22 日	相原伸平（JISS スポーツ科学研究部門 / スポーツ情報処理技術研究室室長）
立命館大学	スポーツ栄養教育学	2025 年 6 月 19 日	亀井明子（JISS スポーツ医学研究部門）
日本体育大学	体育・スポーツ科学特論 B、競技力向上サポート特論	2025 年 7 月 14 日	山下大地（JISS スポーツ科学研究部門）
早稲田大学	ハイパフォーマンススポーツ概論	2025 年 9 月 2 日～ 5 日	久木留毅（HPS センター長 /JISS 所長）、中嶋耕平、（JISS 副所長）、立谷泰久、福嶋一剛、冨永哲志、能瀬さやか、妙圓園香苗（JISS スポーツ医学研究部門）、横澤俊治、清水和弘、元永恵子、山下大地、稲葉優希、袴田智子（JISS スポーツ科学研究部門）、山下修平、萩原正大（ハイパフォーマンス戦略部）、三浦智和（デジタル推進室）、白井克佳（連携・協働推進部）
立命館大学	ハイパフォーマンススポーツの科学	2025 年 10 月 3 日～12月19日	窪康之、景行崇文、後藤晴彦、玉井伸典、山岸卓樹（JISS スポーツ科学研究部門）、髙橋由衣、冨永哲志、廣松千愛、妙圓園香苗（JISS スポーツ医学研究部門）稲川祥史（デジタル推進室）
筑波大学	スポーツパフォーマンス向上のための先端的体・医・工融合研究	2025 年 10 月 8 日	吉田拓矢（連携・協働推進部 /JISS スポーツ科学研究部門）
早稲田大学	ハイパフォーマンス科学	2025 年 10月24 日、11月28 日	髙井恵理、三浦佳祐（スポーツ医学研究部門）
順天堂大学	スポーツ教育学演習	2025 年 11 月 3 日、10 日	吉田拓矢、神庭睦実（連携・協働推進部 /JISS スポーツ科学研究部門）
大阪体育大学	スポーツ科学セミナー	2025 年 11 月 3 日、12月15 日、2026 年 1 月 19 日	中村宏美（連携・協働推進部 /JISS スポーツ科学研究部門）、ヘンダーソンフレデリック（JISS スポーツ科学研究部門）、髙井恵理（JISS スポーツ医学研究部門）
順天堂大学	ハイパフォーマンス科学	2025 年 11 月 6 日	中嶋耕平（JISS 副所長）
鹿屋体育大学	特別講義	2025 年 11月13日	中村真理子（JISS スポーツ科学研究部門）
立命館大学	エグゼクティブレクチャー	2025 年 2月25 日、2026 年 1 月 8 日	安藤良介（JISS スポーツ科学研究部門）
順天堂大学	スポーツと AI	2026 年 1 月 19 日	相原伸平（JISS スポーツ科学研究部門 / スポーツ情報処理技術研究室室長）
立命館大学	ラウンドトーク企画「陸上競技の現場に生きるスポーツ科学とは ―研究と実践の対話から見えるもの―」	2026 年 1 月 21 日	後藤晴彦（JISS スポーツ科学研究部門）

(4) インターンシップの受入

学生にトップアスリートに対するスポーツ医・科学、情報等による研究・支援についての理解を深めてもらうことで、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材の育成を推進することを目的に、大学院生等のインターンシップ等を 6 機関から、計 15 名受け入れた。受入にあたっては、学生の所属研究室の専攻内容を踏まえつつ、幅広い分野での就業体験を提供するため、HPSC 各部署と連携した研修プログラムを実施した。



写真３　日本体育大学大学院と連携した講義の様子

(5) 先端的スポーツ医・科学研究推進事業の受託大学と連携した取組

スポーツ庁委託事業「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」を受託している大学の若手研究者・学生を対象として、人材育成等に資する取組を実施した。

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025 を結節点とした取組として、2025 年 12 月 9 日には、HPSC/JISS の支援と研究に関するワークショップ（講師：小出所大樹研究員 / JISS スポーツ科学研究部門）を開催し、受託大学の学生がグループワークを通じて HPSC/JISS に対する理解を深めた。また、同日にはプレセミナー（ファシリテーター・研究発表：安藤良介研究員 /JISS スポーツ科学研究部門）を開催し、受託大学・HPSC/JISS の双方が、研究に関する発表・意見交換を行った。また、12 月 11 日には受託大学等におけるハイパフォーマンススポーツ研究について、ポスター発表の場を設けた。

(6) 地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業の受託大学と連携した取組

スポーツ庁委託事業「地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業」を受託している宮崎大学からの依頼を受け、同大学が中心となり組織する宮崎県内の医療職能団体とのコンソーシアムより医師 3 名、看護師 2 名、トレーナー 2 名、管理栄養士 2 名を 12 月 17 日～ 19 日

の３日間、研修者として受け入れた。HPSC の場を活用した医師をはじめとするスポーツ医・科学分野の人材育成・確保等に資するための取組としてスポーツ医学研究部門をはじめ各部署･部門と連携し、スポーツ診療事業やアスリートリハビリテーション等に関する各種研修プログラムを提供した。

3. その他外部機関との連携

埼玉県、石川県等から長期間の研修生を受け入れた。また、日本アスレティックトレーニング学会との意見交換や、自衛隊体育学校の研修に対する協力など、外部機関と連携した取組を実施した。

4. まとめ

以上のとおり、大学･大学院等と連携しつつ、HPSC 各部署が協働しながら、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成に取り組んできた。

スポーツ基本計画の施策目標や JSC 第５期中期目標の達成に向けて、HPSC の機能強化と同時に、HPSC の場や知見等の更なる活用・還元が求められている。

今後も大学・大学院等の関係機関との連携を推進し、HPSC の場を活用した実践機会の提供等を行うことにより、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成や HPSC の知見の更なる還元を図り、もって持続可能な国際競技力向上につなげていきたい。

＜参考：連携協定を締結している大学等一覧＞
国立大学法人 鹿屋体育大学
学校法人朴沢学園 仙台大学
学校法人 早稲田大学
国立大学法人 筑波大学
学校法人 日本体育大学
国立大学法人 大阪大学
国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学
学校法人浪商学園 大阪体育大学
国立大学法人 東京大学
学校法人 朝日大学
学校法人立命館 立命館大学大学院
スポーツ健康科学研究科
学校法人順天堂 順天堂大学
国立大学法人北海道国立大学機構北見工業大学
北海道公立大学法人 札幌医科大学
国立大学法人　東京科学大学
国立研究開発法人　国立成育医療研究センター
※締結日順（2026 年 3 月 31 日現在）

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

(3) Total Conditioning Research Project NEXT

1. はじめに

国際競技力の向上を図るためにコンディショニングを中心とした研究プロジェクトを実施し、そこで得られた知見をアスリートのセルフコンディショニングに関するガイドラインとして策定することを目的に、JSC と大塚製薬株式会社（大塚製薬）は、2016 年 12 月より、共同プロジェクト「JSC ハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project(TCRP)」を実施した。その成果を踏まえ、コンディショニングに関する更なる研究とトータルコンディショニングに関する普及・啓発を図ることを目的に、2023 年より、後継プロジェクトとして「JSC ハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project NEXT(TCRP NEXT)」を実施している。



出典：独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター(2023)．「アスリートのためのトータルコンディショニングガイドライン」.69 頁

図 1　アスリートにおける「トータルコンディショニング」

2. TCRP NEXT

TCRP NEXT の運営は、HPSC と大塚製薬が担当している。開催が決定しているロサンゼルス 2028 大会、ブリスベン 2032 大会に向けて、持続可能な国際競技力向上のためのコンディショニングに関する研究を継続して実施するとともに、それらの成果を国際競技力向上（ハイパフォーマンス）のみならず国民のライフパフォーマンス向上へ活用･応用するための普及･啓発活動に取り組んだ。主な取組は以下のとおり。

(1) 持続可能な国際競技力向上のためのコンディショニングに関する研究 (3 課題)

以下①②課題について 2024 年度に引き続き研究計画に基づく研究を進めた。(「7-(1)- ① -3 特競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装」に詳述) また、以下③の課題について研究計画を策定し、研究を開始した。

①湿熱刺激を活用したリカバリー及び暑熱順化プロトコルの開発

②アスリートの海外遠征におけるコンディショニングに関する研究開発

③「プラークコントロール」と「フォースコントロール」によるアスリートの口腔内コンディショニングの研究

(2) 研究成果を活用・応用した普及・啓発活動

①「TCRP 情報発信サイト」の開設

TCRP 及び TCRP NEXT の研究成果やトータルコンディショニングに関する講習会の開催情報、「アスリートのためのトータルコンディショニングガイドライン（ガイドライン）」等の各種コンテンツを発信する「TCRP 情報発信サイト(情報発信サイト)」(https://hpsc-totalconditioning.jpnsport.go.jp/) を開設し、2025 年 8 月 1 日に公開した。



図 2　TCRP 情報発信サイト

②「アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー」の策定

HPSC/JISS による国際競技力向上のための支援・研究に関する取組及び TCRP NEXT の成果等を踏まえ、HPSC が提唱する「アスリートにおけるトータルコンディショニング」の概念とその推進方針を示す「アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー」を策定し、2026 年 1 月 16 日に HPSC ウェブサイト及び情報発信サイトで公開した。これにより、トータルコンディショニングに関する HPSC の立場を明確化するとともに、この立場に沿った支援・研究の一体的な推進を一層図っていくこととした。

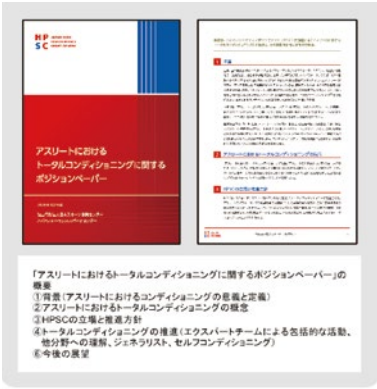


図 3　「アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー」の概要

③「アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック」のデジタルブック化

既存コンテンツのアクセシビリティや利便性向上の一環として、2024 年度に作成した「アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック」を PC、スマートフォン、タブレットなどのデバイスで閲覧しやすいようデジタルブック化し、2026 年 3 月 30 日に情報発信サイトで公開した。

④ HPSC 主催研修会の実施

スポーツ指導者向けに「トータルコンディショニング」の普及・啓発を図るため、「ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス：特別セミナースポーツ指導者のための『トータルコンディショニング』研修会 2025」を開催し、スポーツ指導者 48 名が参加した。本研修会は JSPO 公認スポーツ指導者の資格更新研修となっているが、2025 年度は JSPO 公認アスレティックトレーナーの資格更新研修としても位置付けられたことにより、JSPO 公認スポーツ指導者資格との連動性を更に強化することができた。



写真 1　HPSC 主催研修会の様子

⑤大塚製薬との連携

大塚製薬と連携し、2026 年に第 80 回国民スポーツ大会及び第 25 回全国障害者スポーツ大会を開催する青森県において、2025 年 12 月 6 日に「トータルコンディショニングの考え方とアスリートが備えるべきセルフコンディショニングの力について」と題した情報提供を行い、青森県のスポーツ医・科学関係者のトータルコンディショニングに関する理解促進を図った。

⑥その他団体との連携

主催団体と HPSC/JISS の連携・協働により、公認スポーツファーマシスト認定カリキュラムへの「トータルコンディショニング概論」の導入や、公認スポーツ栄養士資格更新研修会にトータルコンディショニングに関する講習を組み入れるなど、外部団体との連携によるトータルコンディショニングの普及・啓発に係る取組を実施した。

⑦その他の普及・啓発活動

上記の取組に加え、ガイドラインの販売や学会大会、HPSC 事業の研修会等のハイパフォーマンス領域における各種機会を活用し、主に次の活動を実施した。

【主な普及・啓発活動】

- 第 50 回日本運動療法学会学術集会（ブース出展・ランチョンセミナー）（7/13）
- 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会（ブース出展）（8/27-29）
- 第 14 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会（ブース出展・ランチョンセミナー）（9/6-7）
- 第 79 回日本体力医学会大会（ランチョンセミナー・書籍販売）（9/17-19）
- 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会（ブース出展）（11/2-11/3）
- ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025（シンポジウム・ブース展示・書籍販売）（12/10-11）



写真 2　第 79 回日本体力医学会大会の様子

3. まとめ

情報発信サイトの開設、「アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー」の策定・公開、研修会の開催等を通じて、各種情報発信の強化を図った。

今後も、持続可能な国際競技力向上に向けたコンディショニングに関する研究を進め、HPSC によるトータルコンディショニングに基づくハイパフォーマンス発揮のための支援の充実を図っていく。また、それらの取組と連動し各種コンテンツの充実・発信を行うことにより、トータルコンディショニングが競技現場の共通概念として定着し、広く活用されるよう推進していく必要がある。

さらに、大塚製薬等との連携を通じ、「トータルコンディショニング」の知見を国民のライフパフォーマンス領域に還元することにより、「ハイパフォーマンスとライフパフォーマンスの循環」の推進を目指していきたい。

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

(4) 共同研究

1. 背景・目的

HPSC/JISS では、単独で実施するよりも時間的・経済的に有利であり、国際競技力向上のために優れた成果が得られると期待できる場合、外部団体と共同研究契約を締結し、共同で研究を実施している。

2025 年度は、以下の 13 件の共同研究を実施した。

2. 実施概要

No.	研 究 課 題 名	共 同 研 究 相 手
1	地域タレント発掘・育成事業の課題解決型アクションリサーチ	一般財団法人札幌市スポーツ協会
2	ウエイトリフティング競技選手の心臓リモデリング調査	公益社団法人日本ウエイトリフティング協会
3	スポーツクライミングの運動計測に関する研究	国立大学法人九州大学
4	アスリートの特性からみた外傷・障害のリスク要因の探索	学校法人慶應義塾
5	食事写真からの高精度な食品リストおよび栄養素量推定モデルの開発	国立大学法人東京大学
6	陸上競技選手の動作解析によるアスリート毎の課題抽出	公益財団法人日本陸上競技連盟
7	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	公益財団法人日本スポーツ協会
8	氷上を進むカーリングストーンの振動計測に関する研究 2	国立研究開発法人産業技術総合研究所
9	地域タレント発掘・育成事業参加者の体力特性に関する検討	公益財団法人山口県スポーツ協会
10	トップアスリートの生体データ自動収集、蓄積ツールを用いたコンディション評価手法の確立と可視化技術による多角的な分析・予測手法の構築	公益財団法人日本サッカー協会
11	テニス及びバドミントンを対象とした画像解析技術に関する研究	株式会社アシックス
12	大規模データを用いたエリートアスリートの心電図評価 - 心臓突然死を防ぐために -	学校法人聖マリアンナ医科大学
13	Investigation of Sport-Specific Athlete Development Pathways in Singapore through the Foundation, Development, Excellence and Sustainability (FDES) Framework	National Youth Sports Institute (Singapore)

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

5　国際情報戦略事業

(1) 情報調査

1. 国際スポーツ情報活用推進会議 ～パリ2024大会で確立した情報連携の更なる強化に向けた取組

第5期中期計画では「ハイパフォーマンススポーツ等に関する情報の収集・分析・蓄積・展開の充実を図るため、国内外の関係機関との連携体制を整備するとともに、国際スポーツに関する相談対応の仕組みを構築し、情報の蓄積・展開に関わる効果的・効率的な手段を講じる」としている。これを受けて国際情報戦略部では、国内関係機関と連携して国際競技力向上に資する国際スポーツ情報の一元化を推進するため、2024年度に「国際スポーツ情報活用推進会議（推進会議）」を設置し、パリ2024大会において国際情報をオールジャパン体制で共有する仕組みを確立した。

2025年度は、その成果を踏まえ、ミラノ・コルティナ2026大会に向けて、新たに同大会の選手団団長及び副団長を推進会議委員に迎え、情報連携体制の強化を図った。また、オリンピック・パラリンピック間での知見共有を夏季大会から冬季大会へと発展させることで、情報連携体制の更なる整備を進めた。

(1) 推進会議構成メンバー：
・委　員：JSC、JOC、JPC
（JOC･JPCは、パリ2024大会及びミラノ・コルティナ2026大会選手団団長又は副団長）
・オブザーバー：スポーツ庁、JSPO
(2) 開催回数：計3回
（2025年6月、11月、2026年3月）

第2回推進会議では、河合スポーツ庁長官の出席の下、国際競技力向上に資する情報連携をオールジャパン体制で推進・強化することの重要性を再確認した。また、更なる連携推進に向けて、JOC、JPC、JSCの三者による「国際競技力向上における情報収集・共有等の協力に関する包括連携協定」を締結した。さらに、ミラノ・コルティナ2026大会における具体的な情報連携について協議し、パリ2024大会で実施したエグゼクティブレポートを継続することを確認した。



写真　第2回推進会議の様子

2. ミラノ・コルティナ2026大会におけるオールジャパン体制での情報連携 ～エグゼクティブレポート

第2回推進会議の合意事項を踏まえ、大会期間中に得られた各種国際スポーツ情報等を「ミラノ・コルティナ2026エグゼクティブレポート（エグゼクティブレポート）」として取りまとめ、推進会議構成メンバーなどに共有した。作成にあたっては、定量データに加え、JOC・JPCの協力を得て、大会期間中の選手団団長会議で議論・検討された重要課題や、メディカルブリーフィングや各種ウェビナーなどで共有された情報や資料、選手村視察などから得られた情報を随時反映した。その結果、パリ2024大会時よりも多角的かつタイムリーな情報に基づくエグゼクティブレポートの作成が可能となった。

エグゼクティブレポートの概要：
(1) 配信先：スポーツ庁長官、推進会議委員及びオブザーバーなど
(2) 配信回数：計8回（オリンピック：5回、パラリンピック：3回）
(3) 主なトピック：各種ミーティング、選手村内外の動向、大会結果分析など

ミラノ・コルティナ2026大会後に開催された第3回推進会議では、オリンピック日本代表選手団による中間報告・統括会見や、諸外国との情報交換を通じて国際的な知見が共有され、新たな情報収集につながった点が評価された。さらに、オリンピック大会期間中の現地情報や課題を把握できたことで、直前準備を進めるJPCにとって、パラリンピック大会時の状況を具体的に見通す上で有益であったとの認識が示された。これらを踏まえ、本取組の有用性と重要性が改めて確認された。今後は、各組織の専門性等を踏まえて役割分担を整理し、より効率的かつ効果的な連携体制の整備を図るとともに、戦略的な国際スポーツ情報の活用を一層推進しながら、推進会議の運営を継続していく。



図　提供資料例（エグゼクティブレポート）

（文責　稲福　貴史、バイネルト　トビアス）

(2) 国際ネットワークのマネジメント

1. 世界陸上でのネットワークハブを結節点とした活動

国際情報戦略部は、東京 2025 世界陸上競技選手権大会（世界陸上）を国際連携強化の重要な結節点と捉え、①情報収集・調査、②国際ネットワークマネジメント、③国際的な情報発信の三本柱を軸に活動を展開した。大会期間中は、国際スポーツ関係者が集う特性を最大限に活かし、国際競技力向上に向けた情報交流基盤を戦略的に整備した。まず、ワールドアスレティックスの総会（完全非公開）及びワールドアスレティックスコーチ会議にオブザーバーとして参加し、国際競技力向上に資する最新の国際的動向や潮流について、先駆的な情報収集と関係者へのヒアリングを実施した。

また、東京体育館及び国立競技場内の施設を活用して JSC 独自の国際ネットワークハブを設置し、MOU を締結している UK スポーツ、スポーツシンガポール、オウン・ザ・ポディウム（OTP）[1]、カナダ・スポーツ・インスティチュート（CSI）[2] など主要な海外ハイパフォーマンススポーツ機関が一堂に会する環境を構築した。ここでは、HPSC に蓄積された知見をポスター展示等の形式で効果的に発信するとともに、意見交換や個別会談の場として活用し、海外ネットワーク関係者による情報交換会・個別面談を円滑に実施した。これにより、各組織とのネットワーク構築や情報連携が強化され、各国の先進的な取組や最新動向の把握、国際競技力向上に関する知見の獲得につながった。

さらに、カナダ(OTP, CSI)と連携して実施したワークショップでは、カナダのパラリンピック競技力向上の仕組みや育成パスウェイ、オリンピック・パラリンピック支援の一体化に関する先進事例等を国内関係者と共有し、日本の競技力強化に向けた議論と学びの場を創出した。参加者の 84.5%が「役立った」と回答しており、本取組の有効性が確認された。加えて、新規ネットワーク形成の取組として、サウジアラビア・オリンピック・トレーニングセンターとの協力方針とプロセスを確認した。また、サウジアラビアスポーツ副大臣による HPSC 視察（本大会で 3 回目）では、同国が進めるナショナルトレーニングセンター整備に向けた具体的知見を提供し、日本のスポーツ医・科学支援の強みを示す機会となった。

これら一連の取組により、国際情報戦略部は世界陸上を「国際ネットワークの結節点」として最大限に活用し、国内の協力体制の強化と先進知見の循環を着実に推進させた。

（文責　坂田　博史、丸山　ちさと、バイネルト　トビアス）



写真 1　カナダ関係者によるワークショップ



写真 2　カナダ関係者によるワークショップ



写真 3　海外ネットワーク関係者との意見交換



写真 4　サウジアラビアスポーツ副大臣 HPSC 視察

2. バーチャルスポーツフォーラムプラス開催

JSC は 2026 年 3 月、ローザンヌ（スイス）のオリンピックミュージアムにてワールドローイングと「バーチャルスポーツフォーラムプラス」を

[1] カナダの国際競技力向上のため競技別に強化予算を戦略配分する組織　[2] 国内 7 地域でトレーニング環境と医・科学支援を提供する機関

共催した。本フォーラムには国際スポーツ統括団体、国際競技連盟、ハイパフォーマンス分野のリーダー、政府機関、産業界、学術界、テクノロジー関連分野など45を超える国内外の団体から140名以上が参加し、バーチャルスポーツ分野の国際的議論の中核を成す場となった。

JSCは、2023年11月に締結したHPSCとワールドローイングとの「バーチャルスポーツに関する国際共同研究プロジェクトを目的とした連携協定覚書」を基盤に、2023年度からのフォーラム開催を通じて国際的な潮流形成を主導してきた。これまで東京都内で開催してきたフォーラムは、2025年度に初めて海外で実施することとなった。

会場では、HPSCが掲げる「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ」のコンセプトが広く共有されることに加え、日本のオールジャパン体制による推進モデルが先進事例として紹介された。

また、バーチャルスポーツが若年層を含む多様な層のスポーツ参加機会を拡大し、デジタルリテラシー向上や地域コミュニティの活性化に寄与するなど、社会的インパクトを生み出し得る分野であることが強調された。競技の枠を超え、より包摂的で持続可能なスポーツ環境を構築する可能性が示された点は、国際参加者から特に高い評価を得た。

JSCとワールドローイングは「ローザンヌ宣言」を共同発表し、バーチャルスポーツの持続的かつ国際調和的な発展に向けた行動指針を提示した。さらに、JSC/HPSCはポスター展示や東京2020大会レガシー紹介を行い、新たな国際ネットワークの構築や強化にも貢献した。



写真5　登壇者、参加者、運営者の集合写真

（文責　坂田　博史、山口　伊都子）

3. パリ2024インパクト＆レガシー戦略評価監督委員会の委員としての活動とレガシー調査

パリ2024大会は、招致段階からレガシーとサステナビリティをその計画の中心に据え、地元住民のための開発や生活の質向上に資する大会を実現し、人々に運動を促し、スポーツをインクルージョン・連帯・平等促進へ活用し、環境に配慮した変革を加速させる機会としてパリ2024大会の社会的・環境的レガシーを構築しようと取り組んできた。これらの戦略がフランスやパリにもたらした成果を、現地調査から探った。

座りっぱなしのライフスタイルはフランスにおいて大きな課題であり、肥満や各種疾患の治療費も公的財政に重くのしかかっている。そこでパリ2024レガシー＆サステナビリティ戦略ではアクティブ・デザインを採用し、公共スペース・建物のデザインを工夫して日常生活の空間に遊びと動きを取り入れ、人々がよりアクティブになれるような環境を提供してきた。遊歩道上に設置された運動器具は、年齢・障がいの有無等に関わらず誰でも自由に無料で利用でき、有料で会員資格を得る必要や時間帯による利用制限のある従来のスポーツ施設とは異なる。



写真6　カレーの遊歩道上に設けられた運動器具

リヨンのメトロの駅では乗客にエスカレーターではなく階段の利用を促すために階段にポジティブなメッセージが散りばめられたり、サン＝ディジエの公園では床をカラフルな色でペインティングしてその空間に注目を向けさせジャンプやランニングを促す仕掛けとなっている。都市計画やソフトモビリティ、社会的包摂とスポーツという分野横断型の政策としてアクティブ・デザインが機能している事例である。

パリ2024大会組織委員会は2022年にフランス国内外の9名の専門家から構成され独立した立場からレガシー評価を監督する「パリ2024インパクト＆レガシー戦略評価監督委員会」を立ち上げ、山田はその委員として任命され活動してきた。大会1年後の2025年7月に公表されたパリ大会の社会的レガシーに関する「パリ2024大会後分析報告書」のレビューを担い、例えば上述のアクティブ・デザインの取組における運営面や成果の評価は妥当なのか、パイロット地域における評価で欠けている視点を指摘・提案したり、関連データの分析や解釈に関するアドバイスを提供して、パリ2024大会の経済的・環境的・社会的レガシーの構築に寄与した。

（文責　山田　悦子）

（3） 能力開発

1. HPSC 国際人材プール

国際情報戦略部は 2024 年度に HPSC 職員に国際的な活動機会を優先的に提供する仕組み「HPSC 国際人材プール」を設置した。2025 年度の登録者数は、35 名であった。2025 年度は、2024 年度から継続して、海外機関の HPSC 訪問時に研修機会を提供した（全 3 回）。それに加えて、「国際活動に求められるコンピテンシー育成」のためのワークショップを新たに企画・実施した。ワークショップは、参加者が「共に学ぶ」ことを基本とし、国際活動において重要な情報収集力、伝達力、ドキュメンテーション力の向上を目指し、約 2 時間のワークショップを、全 3 回（12 月、1 月、3 月）実施した。登録者のうち、延べ 18 名が参加し、平均満足度は 91.2％であった。また、HPSC 国際人材プール登録者への最終アンケートでは、回答者の 95.2％（登録者全体の 57.1％）が 2026 年度の継続登録を希望しており、一定の成果が確認された。

2. ワールドクラス人材育成プログラム

スポーツ庁が 2025 年 3 月に改定した「持続可能な国際競技力向上プラン」では、「HPSC において～アスリート等への心理サポートの専門性を有するワールドクラスの人材の育成及び NF への配置支援を行う」ことが明示された。これを受け、国際情報戦略部では、モデル事業として、国際情報と国際ネットワークを活用した「ワールドクラス人材育成プログラム」を開発し、2025 年度 5 月から、心理分野で世界基準の支援を提供するプラクティショナーの育成プログラムを開始した。本プログラムは、一定の要件を満たした 4 名を対象に 2 年間実施する。

（文責　丸山　ちさと）

3. 国際エキスパートグループ（心理）の設立

上述の「ワールドクラス育成プログラム」の開発にあたり、修了者が将来的に活躍する国際フィールドを整備することを目的に、JSC はベルギーオリンピック委員会と共同で、「International Expert Group on Psychology & Welfare in Olympic and Paralympic Sport」を設立した。当該グループの初会合は、HPSC で 3 日間開催し、各国のハイパフォーマンススポーツにおける心理及びウェルフェアの支援における共通課題を鑑み合計 8 つのトピックについて情報共有及び議論を行った。本会合の参加者は、新たに設立された International Expert Group の有益性について言及し、今後も継続的に参集し、アスリートやコーチ、チームに対してよりよい支援を提供するための相互協力を推進していくことで合意した。



写真 1　国際エキスパートグループの様子

4. 西が丘フォーラム開催による NF 等への情報発信

国際情報戦略部は、国際エキスパートグループの初会合で来日した各国の専門家が HPSC に一堂に会する機会を活用し、国内競技団体のハイパフォーマンスディレクターやコーチをはじめ、統括団体、大学、JISS 等の関係者を対象に、世界の先進的なメンタルヘルス支援の取組を体系的に収集・発信する場として「西が丘フォーラム：ハイパフォーマンス×メンタルヘルス支援の最前線」を開催した。パリ 2024 大会オリンピック金メダルランキング 10 位以内に入った 5 か国（アメリカ、英国、オーストラリア、中国、日本）を含む 7 か国の代表者が登壇し、メンタルヘルス支援の最新動向、制度設計、現場での実践について多角的な視点から知見を共有した。参加者は、競技団体、統括スポーツ団体、大学、民間企業、地域自治体、スポーツ庁など 60 団体から 140 名以上にのぼった。各国を牽引するリーダーによって、国内のハイパフォーマンススポーツにおけるメンタルヘルスの支援体制構築において多様なステークホルダーの連携が不可欠であることが強調された。



写真 2　西が丘フォーラムの様子

（文責　野口　順子）

6 スポーツ医・科学支援事業

1. 目的

スポーツ医・科学支援事業は、国際競技力向上に向けて各 NF が抱える課題に対し、スポーツ医・科学、情報の各側面から組織的、総合的、継続的な支援を行い、競技力の向上に資する医・科学的情報を提供し、NF の国際競技力を高めることを目的として実施されるものである。

2. 事業の実施内容

スポーツ医・科学支援事業では、(1)フィットネスチェック(FC)、(2)分野別サポート、(3)総合型サポートを配置した。サポートの対象は 102 種別であった。

(1) FC では、トレーニングの効果を検証し、課題を明らかにすることを目的とした各種測定を実施した。測定コーディネータが測定の日時を、種目担当者が測定とフィードバックの内容を NF 担当者と協議して調整した。

(2) 分野別サポートでは、心理、栄養、トレーニング、映像、情報技術の各分野において、個人又はチームを対象とした競技力向上に関する相談、実技指導、講習会などを実施した。実施に当たっては、NF からの申請に基づき、各分野リーダーがサポート内容と分野内のサポート担当者を調整した。

(3) 総合型サポートでは、対象競技を選定し、競技力向上のための組織的、総合的、継続的なサポートを JISS の人的、物的資源を集中して実施した。対象競技の選定は支援事業部会が行い、選定のプロセスにおいては複数名の外部有識者からなる HPSC アドバイザーによる助言を得た。

3. 事業の実施体制

スポーツ医・科学支援事業では、支援事業部会を設置し、統括する責任者（事業部会長）を置いた。

事業部会長の統括で競技種目系（記録系、格闘技系、ラケット系、採点系、標的系、球技系、水辺系、雪上系、氷上系、パラスポーツ系、エリートアカデミー系）を設定し、系内種目のサポートの進捗を管理する責任者（系リーダー）を各系に置いた。また、サポート分野ごと（トレーニング指導、心理、栄養、映像・情報技術）にサポートの質の向上を図る責任者（分野リーダー）を置いた。

系リーダーと分野リーダーからなる支援企画 WG を支援事業部会の中に設置し、FC、分野別サポート、総合型サポートの進捗状況を共有し、課題解決に関して議論した。

サポートの実施に当たっては、NF との間でサポート内容を調整する JISS 内担当者（種目担当者）を置き、種目担当者の指揮の下、各分野から必要な人員を配置してチームを形成してサポートに当たった。サポート活動には、必要に応じて外部協力者を配置した。

4. 事業の進め方

スポーツ庁からの受託事業であるハイパフォーマンス・サポート事業と本事業との共通の窓口において NF の課題を集約し、専門性や必要とされる人員の多寡により役割分担を調整した。

総合型サポートについては、JISS 種目担当者が詳細な年間サポート計画を立て、この内容について支援事業部会において精査した後に NF と JISS との間で覚書を交わした。総合型サポートの個別の活動についても、支援企画 WG において内容を管理した。

（文責　窪　康之）

（1） フィットネスチェック

1. 背景・目的

どの競技種目においても、競技力の向上を図る際には、まず身体能力等の現状を把握し、課題がどこにあるのかを明確にすることが必要である。JISS から NF へ提供するフィットネス測定の支援としてフィットネスチェック（FC）があり、予め準備された測定項目から幾つかを選択して実施する。フィットネス測定によって得られたデータは、各 NF の選手強化のための資料として活用され、フィットネス課題の抽出、トレーニング計画の立案及びその効果検証などに役立てられる。以下には、FC におけるフィットネス測定について報告する。

2. 実施概要

右表は競技種目別の FC 実施実績である。2025 年度の測定実施日数は延べ 129 日、実施対象者は延べ 651 名（男子 348 名、女子 303 名）であった。

2024 年度のフィットネス測定実績（107 日、529 名）と比較すると、日数、対象者数ともに増加した。2025 年度はミラノ・コルティナ 2026 大会が開催され、同大会を目指したトレーニングサイクルの中でフィットネス測定が活用されたことが実績数の増加につながったと考えられる。また、夏季競技にとっても 2028 年度のロサンゼルス 2028 大会へ向けた活動が始められており、同大会で実施されることとなったソフトボールやスカッシュにおいても FC が活用された。

冬季競技・夏季競技ともに、次なる大会へ向けた強化サイクルの中でこれまでの取組を振り返ることは重要である。継続的に収集されたフィットネスデータは、この際の貴重な資料となる。新たな目標設定においても、フィットネス測定が活用され、蓄積データとの比較のなかで評価される。データの活用には、データを適切に解釈するための科学的基盤が不可欠である。JISS は、蓄積された種目横断データとこれを活用した研究によって、この基盤を更に強化していくことが求められる。FC において得られた各種フィットネスデータが選手強化に役立てられるよう、データの検討を深め、測定の活用を促進していきたい。

（文責　松林　武生）

表　競技種目別の FC 実施対象者数

競技種目	実施日数	延べ対象者数		
		男子	女子	計
夏季オリンピック				
陸上競技	9	40	14	54
ローイング	7	29	21	50
エリートアカデミー	7	8	36	44
バドミントン	4	21	21	42
セーリング	10	21	13	34
自転車	4	18	3	21
ソフトテニス	2	10	10	20
ソフトボール	2	0	20	20
ウエイトリフティング	2	10	7	17
新体操	2	0	16	16
トランポリン	2	13	0	13
スカッシュ	2	7	4	11
ゴルフ	1	5	6	11
アーチェリー	2	4	5	9
ビーチバレー	1	5	4	9
トライアスロン	1	3	1	4
小計	58	194	181	375
夏季パラリンピック				
バスケットボール	8	12	27	39
競泳	5	12	6	18
トライアスロン	4	13	5	18
ゴールボール	4	9	7	16
テニス	3	4	3	7
カヌー	1	0	1	1
小計	25	50	49	99
冬季オリンピック				
スキーアルペン	3	13	15	28
スノーボードスロープスタイルビッグエア	6	10	11	21
フィギュアスケート	1	9	10	19
スノーボードアルペン	4	9	9	18
スノーボードハーフパイプ	3	10	8	18
スキーハーフパイプ	1	10	3	13
カーリング	5	6	2	8
スキーコンバインド	2	7	0	7
スノーボードクロス	2	3	4	7
スピードスケート	4	4	2	6
ボブスレー	2	2	1	3
山岳スキー	1	2	1	3
リュージュ	1	1	0	1
小計	35	86	66	152
冬季パラリンピック				
スキーアルペン	9	14	5	19
スキークロスカントリー	2	4	2	6
小計	11	18	7	25
総計	129	348	303	651

(2) トレーニングサポート

1. 背景・目的

2025 年度はロサンゼルス 2028 大会に向けたスタートの年となる。対象となる選手の多くも変わり、選手個人や競技団体の新たな要望を分析しながらエビデンスに基づく科学的なアプローチを開始している。

2. 実施概要

2025年度は年間でオリパラ競技において、4,663件の個別サポート、26 件の講習会が行われた。SCWAT システムに蓄積されたデータを活用しながらサポートに役立てている。

(1) トランポリン競技へのトレーニングサポート

トランポリンはＤスコア、Ｅスコア、Ｈスコア、Ｔスコアの４つのスコアから構成されるトータルスコアを競う競技であり、難易度や出来栄えを要求される審美的側面や 10 回の跳躍における滞空時間もスコアになる競技である。

トレーニングサポートではトレーニング効果が直結しやすいＴスコア（滞空時間）に着目し、サポートを行った。

Ｔスコアを伸ばすことで空中での余裕が生まれ、より高い難易度の技構成や演技への貢献が見込まれると考えた。

初回で行った測定ではトレーニング効果を推し量るためのベースライン、そして選手のジャンプの傾向、成分、特徴などを捉えるため実施し、2025 年のシーズンでは年間を通してカウンタームーブメントジャンプ（CMJ）を中心に測定を実施した。年間通して国内・国際大会があり、その大会ごとに２週間前、１週間前と CMJ を測定した。大会で記録したＴスコアと CMJ の高さの測定値をグラフ化し、選手・スタッフにフィードバックを行った。

大会ごとに傾向を振り返る材料を数値化することにより、感覚的な状態や調子の評価をし主観と客観を擦り合わせ、次の大会に向けてより良い準備につなげていく。



写真 1

(2) パラ卓球競技へのトレーニングサポート

パリ 2024 パラリンピック大会後の新たな強化サイクルの初年度として、トレーニングサポートを開始した。対象は、車いすで競技を行うクラス４（先天性脳性麻痺）の選手及び立位で競技を行うクラス９（両下肢機能障がい）の選手であり、それぞれの障がい特性及び競技特性を踏まえたサポートを実施した。障がい特性の違いによりプレースタイルや身体機能の特徴が異なるため、トレーニングの方針や実施方法も個別に検討する必要がある。共通する課題である筋力及び可動性の向上に対しては、強度や量（回数・セット数・頻度）の調整に加え、負荷の種類（ダンベル、ケーブル、チューブ、徒手抵抗など）や方向、動作テンポ、補助方法などの要素を考慮しながらトレーニング指導を行った。これらの要素はセッション中の身体反応やトレーニング効果に大きく影響するため、指導員間でも細かな変数を共有しながらサポートを進めた。

また、試合期に向けたトレーニング調整についても選手及びコーチのフィードバックを踏まえながら検討を行った。2026 年度にはアジアパラ競技大会などの主要大会が予定されていることから、引き続きトレーニング内容及びコンディショニング方法の改善を図りながら検討を進めていく。



写真 2

3. まとめ

2025年度はロサンゼルス 2028 大会のスタートの年である一方、ミラノ・コルティナ 2026 大会が開催された。どちらも選手や競技団体の要望をくみ取り、課題を見極めながら我々の知見を活かして、国際競技力向上に貢献できる取組を続けていきたい。

（文責　鈴木　駿也、三浦　佳祐、田村　尚之）

(3) 心理サポート

1. 背景・目的

心理グループは、例年どおり、国際競技力向上のために、個別サポートと講習会を実施した。これらの活動について報告する。

2. 実施概要

(1) 個別サポート

表に、2018-2025 年度までの個別サポート（対面、オンライン、メール）のセッション数（延べ）と新規申込者数の年度別件数の推移を示した。2025 年度の個別サポートのセッション数（延べ）は 2024 年度より増加し、新規の申込はやや増加した。セッション数の増加の要因は、ミラノ・コルティナ 2026 大会に向けた選手のサポート件数が増えたためと思われる。また、新規申込者の競技種目でみてみると、同大会に向けた冬季種目が増加し、夏季新種目やアジア競技大会種目なども見られた。

(2) 講習会（啓発・研修）

表に、2018-2025 年度の講習会（心理サポートやメンタルトレーニングに関すること等）の数を示した。2025 年度の講習会の数は、2024 年度からやや減少した。今回は、ジュニア選手を対象にした定期的に行う講習会が最も多かった。また、冬季のチーム種目が上記大会前に、複数回講習会を行ったケースもあった。

さらに、冬季のパラリンピック競技において、同大会に向けてのチームビルディングを主なテーマとして行った講習会もあった。この講習会では、スポーツメンタルトレーニング指導士と臨床心理士が協働して遂行した。このような取組は初めてであり、チームの多様な要望に応える形で進めた。改めて、チームサポートを行う際の講習会の有効性を感じた。

また、2026 年アジア競技大会の種目からの申込もあり、幅広い種目で講習会を行った。

(3) ミラノ・コルティナ 2026 大会でのサポート

同大会では、リビーニョの村外サポート拠点でサポート活動を行った。また、そこから選手村に入ってのサポート活動も行った。その際、JSC のリハビリスタッフが選手村に滞在していたことで、スムーズなサポート活動をすることができた。これは、2023 年 8 月から実施している、心理グループスタッフのリハビリ室の滞在によって、普段からリハビリスタッフとコミュニケーションをとっており、そのことでより良いサポート活動につながったと思われる。

また、JOC のウェルフェアオフィサーとの連携も行った。ミラノ・コルティナ 2026 大会が始まる前に、JOC のウェルフェアオフィサー、JSC の村外サポート拠点のスタッフとオンライン MTG を行い、組織・体制、役割などについて確認した。さらに、それぞれの活動について情報共有も行い、連携・協働の確認を行った。これらのことにより、現地で有効なサポートを行うことができた。

(4)「HPSC 内心理部門（スポーツ心理、臨床心理、心療内科、内科）合同カンファレンス」の開催

2024 年度から、本カンファレンスを月に 1 回開催している。この会では、JISS（HPSC）内の心理部門の専門家が協力・協働し、様々な事例に対応できるように話し合っている。この会によって、様々な専門領域からの多様な見方ができるようになり、サポートの質の向上に貢献できていると思われる。今後も、様々な専門家が協力・協働していくことの重要性を感じた。

(5) 事例検討会

心理グループは、2003 年から約月 1 回のペースで事例検討会を実施している。その数は、2025 年度で 200 回を超えた。これまで様々な事例が発表され、会の発表者・参加者にとって有意義な会となり、その後のサポート活動に役立てている。2025 年度は個別サポートだけでなく、チームサポートの事例についても発表された。これらは、今後のサポート活動に有意義に作用し、また、その知見も積み上がっている。

3. まとめ

2025 年度においても、個別サポート、講習会、そして村外サポート拠点など充実したサポートを遂行することができた。今後も選手及び競技団体の要望に可能な限り応えられるよう HPSC 内の心理分野全員で力を合わせ、引き続き国際競技力に貢献していく所存である。

（文責　立谷　泰久）

表　2018 ～ 2025 年度　年度別個別サポートと講習会の数（単位：人、件）

		2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
個別サポート	セッション数（延べ）	971	738	1,152	816	602	613	650	832
	新規申込者数	45	38	30	23	28	38	31	37
講習会	啓発・研修	24(0)	29(1)	9(0)	18(0)	13(0)	29(0)	18(1)	16(2)

※講習会の（ ）の数は、全体の数のうちパラリンピック選手を対象として行ったもの

（4）栄養サポート

1. 背景・目的

2025 年度は、2026 年 2 ～ 3 月開催のミラノ・コルティナ 2026 大会に加え、2026 年度の愛知・名古屋アジア 2026 大会も見据え、トータルコンディショニングの一環として、選手個人及び競技団体の要望に応じた栄養・食事面からのサポートを以下のとおり実施した。

2. 実施概要

⑴ 個別栄養サポート

個別栄養サポートは、クリニック内栄養相談室やコンディショニングスペースでの対面式を基本とし、必要に応じてメールやオンラインでも実施している。2025 年度の個別栄養サポート件数は 620 件で、2024 年度 436 件から増加した。内訳はオリンピック競技選手 526 件（2024 年度 334 件）、パラリンピック競技選手 94 件（同 102 件）の実施であった。2025 年度はミラノ・コルティナ 2026 大会だけでなく、愛知・名古屋アジア 2026 大会出場を目指す競技の選手から、サポート依頼が増加したことが関係していると考えられる。

また、サポート種別でみると、コンディショニングチームの各分野スタッフが外傷・障害の回復に向けて連携するトータル・コンディショニングサポート（TCSP）での栄養サポートが 85 件（2024 年度 93 件）、パフォーマンス発揮を目的に複数分野で連携するコンバインド・コンディショニングサポート（CCSP）は 56 件（同 28 件）、栄養分野のみで行う食事分析、体組成管理、栄養情報提供を中心とした栄養サポートは 350 件（同 232 件）、JOC エリートアカデミー生を対象としたサポートは 51 件（同 52 件）であった。

なお、相談内容は減量、増量、身体組成の改善といった「ウエイトコントロール」が 353 件であり、2024 年同様に全体の約 6 割を占めた。

⑵ 栄養講習会

競技団体から JISS 医・科学サポート受付に依頼のあった HPSC 内で開催された栄養講習会は 23 件（延べ受講者数 789 名）で、2024 年度の 16 件（延べ受講者数 441 名）に比べ増加した。夏季競技種目ではパリ 2024 大会が終了し、NF においてロス 2028 年に向けた新たな体制や強化方針が組まれたことによる影響が考えられる。

なお､実際の栄養講習会では「HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開事業（NW 事業）」の栄養分野メンバーが中心となって作成した HPSC 講習会パッケージを活用することで、依頼の増加に対して問題なく事前準備などの対応ができた。今後も NF からの要望に沿った、選手の育成と強化活動に貢献できるような栄養講習会の実施を進める。

⑶ 栄養評価システム「mellon Ⅱ」の利用状況

HPSC 内にある 3 つのアスリート向けレストラン「R^3」、「SAKURA　Dining」、「イースト食堂」に設置されている mellon Ⅱの 2025年度の利用実績は、合計 20,189 件（オリンピック競技 18,051 件、パラリンピック競技 2,138 件）であり、2024 年度とほぼ変わらなかった。この理由として、特定の選手やチームが継続的に、強化合宿時の教育ツールとして、また、通常練習期のコンディショニングのための摂取量評価として、mellon Ⅱを活用していることが考えられる。また、個別サポートで減量を目的とした選手も、mellon Ⅱを用いてエネルギー及び栄養素摂取量の過不足をモニタリングし、食事調整に役立てている。

今後も選手のコンディショニングに向けた食事摂取量の確認及び評価に mellon Ⅱが活用されるよう、引き続き栄養評価システムの安定稼働と整備を行う。

⑷ JISS-NF 栄養スタッフ会議の開催

本会議は、各 NF の栄養スタッフとの連携を深め、栄養サポートに関するネットワークを強化することを目的としている。2025 年度は、ミラノ・コルティナ 2026 大会開催前である 11 月にオンラインにて第 11 回目の会議を開催した。JOC 及び JPC に加盟する NF の栄養スタッフや NF 関係者と、JOC 及び JPC のスタッフ、そして HPSC スタッフなど総勢約 100 名が参加した。

会議の主な議題は、①ミラノ・コルティナ 2026 大会に向けた情報共有、②強化戦略プランを軸としたスポーツ医・科学等サポートの充実、③NW 事業栄養分野が作成した HPSC 講習会パッケージ及びサポート・スペシャリスト研修プログラムのご紹介、の 3 点だった。また本会議の参加者を中心に、ミラノ・コルティナ 2026 大会に関係する情報共有として、ミラノ選手村及び村外で必要とされる食環境情報を､「ミラコル栄養ニュース」として大会前から大会終了まで随時配信した。今後は配信した情報の活用についての振り返りを行う予定である。

3. まとめ

冒頭に述べたとおり、2026 年度は愛知・名古屋アジア 2026 大会開催が予定されている。選手強化に役立つよう、引き続き栄養サポートや食環境整備に努めたい。

（文責　亀井　明子、元永　恵子）

(5)　映像 / 情報技術サポート

1. 背景・目的

JISS の映像 / 情報技術サポートでは、映像技術、情報技術を用いた競技団体への支援活動を継続して行っている。2025 年度については、ミラノ・コルティナ 2026 大会本番中に JISS からのリモート映像分析支援ブースを開設し現地へ向けた後方支援や、ロサンゼルス 2028 大会へ向けた継続的な強化活動の中での映像・情報技術の活用促進、また、これらの活動から得られた知見を競技現場へ還元するために、競技団体の人材育成のための講習会の開催も行った。

2. 実施概要

(1) 映像技術サポート

①ビデオフィードバックシステム運用支援

映像技術サポートでは、競技現場でのビデオシステム活用支援を継続して行った。競技映像即時フィードバックの目的として開発した JISS Air スマホアプリについては、ノルディック複合男女やスキージャンプ女子、スノーボードクロス男女、スノーボードスロープスタイルビッグエア男女などの冬季競技のナショナルチームが、国内外のナショナル合宿、ワールドカップ、ミラノ・コルティナ 2026 大会でも活用され、コーチングの質向上及びアスリートの動作改善をサポートした。

② JISS nx 運用支援

クラウド型スポーツビデオデータベース JISS nx について、2025 年度はオリンピック競技（37 種別）、パラリンピック競技（22 種別）から申請があり、合計 59 種別で利用された。

2025年度末の総映像登録数は 860,235 件、総有効アカウント数は 5,102 件であった。講習会は管理者向けが 9 件(計15名)、利用者向けは 2 件(90名)であった。国際・国際大会の映像共有からタレント発掘合宿前後での利用など活用方法は競技団体でさまざまだが、例えばウエイトリフティングでは、中高生エリート育成合宿の中で利用者講習会を行い、選手たち自身が競技動作について深く考えるきっかけ作りとしていた（写真 1）。



写真 1　JISS nx アプリ　2 画面比較

③ミラノ・コルティナ 2026 大会本番中のリモート映像分析支援

ミラノ・コルティナ 2026 大会開催期間中に、支援事業とハイパフォーマンス・サポート事業で連携を図りながら、JISS 3 階の情報サービス室を活用して大会公式映像を視聴しながらの映像分析支援を可能にするブースを設けた。ナショナルチームから、自国や他国アスリートの技術分析、演技内容によるジャッジ分析、ライン取りの研究、レースの戦略立案、対空時間の算出、ジャンプ台やエア台に合わせるための即時フィードバックなど、多様なニーズへ応える形での映像分析が求められた。オリンピック期間は、スノーボード（スロープスタイル・ビッグエア、ハーフパイプ）、スキージャンプ、スキークロスの 6 競技延べ 52 名の映像分析スタッフがブースを利用した（写真 2）。パラリンピック期間は 2 競技延べ 29 名の活動に留まったが、パラアルペン及びパラスノーボードのどちらもメダル獲得の好成績だった。



写真 2　JISS 映像分析ブースの様子

(2) 情報技術サポート

①ツール開発による IT 支援

情報技術サポートでは、インターネット上で公開されているリザルトなどのデータを自動収集するツールの開発を行った。ノルディック複合向けリザルト収集システムは、ワールドカップほか国際大会のリザルトデータを自動収集し、コーチや分析スタッフが加工しやすい形でダウンロードできるようにしている。また、このツールの横展開として、ブレイキン、柔道、卓球、ウエイトリフティングなどの競技で同ツールをコーチやアナリストが自らツール改善ができるよう継続的な支援を行った。

② JISS share 運用支援

ファイル共有 Web システムの JISS share はオリンピック競技(38種別)、パラリンピック競技(23種別)から申請があり、合計51種別で利用された。リモートもしくは対面で 8 件（計 12 名) の管理者向け講習会を行った。各競技の保存容量は 1TB を上限とし、必要に応じて容量の増量を行った。総アカウント数は 1,839 件で、総データ容量は 36.29TB であった。

(3) 映像・IT アカデミー（DiTS）の開催

競技現場での映像・IT 技術の活用促進や人材育成支援を目的として「ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー（DiTS）」を開催した。2025 年度も映像基礎講座「BASIC」、映像応用講座「ADVANCE」、プログラミング基礎講座「プログラミング BASIC」、プログラミング応用講座「プログラミング ADVANCE」の 4 講座を設け、受講者が選択して受講できるようにした。「BASIC」では、映像基礎、動作分析、ゲーム分析といったスポーツ場面における映像サポートの一連の流れを学べ、また、「ADVANCE」では、BASIC の内容を発展させ、より専門的かつ実践的な知識や技術を学ぶことができる（写真 3）。



写真 3　DiTS2024　映像 BASIC の様子

「プログラミング」では、最近利用者が増加している「Python」を利用して、データ処理を自動化する方法などを学ぶことができる。ツール開発による IT 支援でも触れたリザルトデータの自動収集や、利用しているクラウドからのフィジカルデータの自動収集など、担当競技におけるデータ利用の効率化を実現するための学びの機会を提供している（写真 4）。

有料講習会として開催しているが 2025 年度も計 19 名の受講があった。JOC ナショナルコーチアカデミーやオリンピック・パラリンピック競技のハイパフォーマンスディレクター研修会の場で DiTS の活動紹介を行う機会があったことがきっかけで、体操競技映像分析スタッフの学び直し、ブラインドサッカー・車いすバスケットボールなどパラリンピック競技からもスタッフも多くの参加があった。

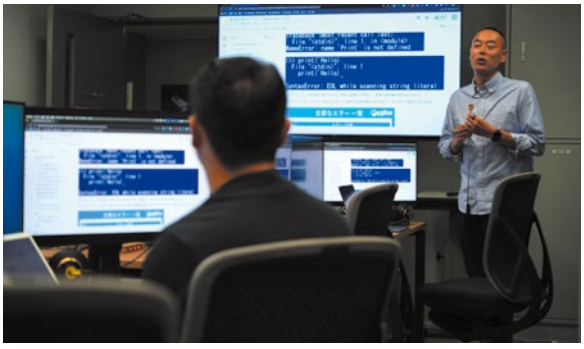


写真 4　DiTS2025　プログラミング ADVANCE の様子

また、ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025 にて、初めて DiTS 紹介ブースの出店を行った。これまで DiTS 受講のなかった競技団体関係者だけでなく、地域スポーツ関係者や専門学校の先生など、たくさんの方々がブースにお越しいただき、活発な議論が実施され、認知度の向上も図られた（写真 5）。



写真 5　HPSC カンファレンスでの DiTS ブース出店

DiTS については、2026 年度も春から定期的に開催できるよう引き続き準備を進めるとともに、学んだことを実践の場ですぐに活かせるよう、また、フォローアップについても柔軟に対応できる体制構築にしっかりと取り組みたい。

3. まとめ

冬季オリンピック・パラリンピックは前々回の平昌 2018 大会及び前回の北京 2022 大会において、日本との時差が 0 時間や 1 時間と少なかったため、あまり意識することなく日本からリモートで映像分析支援を行うことができた。しかしミラノ・コルティナ 2026 大会では時差はマイナス 8 時間となり、かつメダルマッチの多くが現地でのナイターゲームとして実施されたため、日本からの支援は時差との戦いを避けられない状況であった。

現時点では、AI が全ての競技映像分析を自動で行い、人間は何もせずに見守るという世界にはまだ到達していない。そのため、我々スタッフは夜な夜な頭をフル回転させ、手を動かし、応援もしながら日本選手団とともに大会を戦った。

こうした本番での支援に加え、事前のシミュレーションや日々のトレーニング場面も含めて、我々はスキー・スノーボードチーム、パラアルペン・パラスノーボードチームと長期間にわたる協業を重ねてきた。その延長線上で本番大会での活動もでき、各チームの躍進も共に喜ぶことができた。こうした映像・情報技術支援を、今後も継続していきたい。

（文責　三浦　智和）

（6）　総合型サポート

1. 目的

総合型サポートは、複数分野の研究員及び専門スタッフが連携し、競技現場における課題の発見から達成までを一体的に支援する取組である。

JISS が保有する測定・分析・トレーニング機器及び施設といった強みを最大限に活用し、対象競技の競技力向上を支援するとともに、その成果を JISS 特有の知見として公表することを目的として実施した。

2. 事業の進め方

（1）対象の選定

総合型サポートでは、JISS の人的・物的資源を集中して活動するに当たり、サポート対象となる種別を厳選する必要があった。そのため、2022 年度にスポーツ医・科学支援事業部会において以下の５つの観点に基づき対象競技を選定した。

①競技力：次のオリンピック・パラリンピック大会において予想される成績
②既存の業績：これまで JISS において蓄積されてきた研究と支援の成果が活用できるか。
③新規の業績：サポートを通じて得られた知見が新しい研究テーマを創出するか。また、他競技への支援に活用できるか。
④ JISS の強みが生かせるか：科学的な測定・分析に基づいたパフォーマンスの評価、トレーニング・コンディショニング方法の提案が可能か。
⑤ NF の受け入れ態勢：スポーツ医・科学に関する興味関心があり、JISS の提案や介入の受け入れが可能か。また、論文投稿や学会発表などの成果公表に理解を示していただけるか。

上記５つの観点に基づいて選定した７種別（パラ陸上、スポーツクライミング、競泳、バドミントン、トランポリン、スノーボードスロープスタイル・ビッグエア、パラアルペンスキー）を支援の対象とした。

（2）サポート体制

サポート対象ごとに主担当と副担当を配置し、各専門領域（フィットネス評価、バイオメカニクス、トレーニング研究、コンディショニング研究、栄養、心理、トレーニング指導、映像・IT）から研究及びサポート実績に基づいてメンバーを招集し、サポートチームを形成した。

（3）サポートの進め方

サポートチーム内での議論により対象競技のパフォーマンスを構成する要素の相互関係をモデル化（パフォーマンス構造モデル）し、NF と共有した。パフォーマンス構造モデルで示された要素のうち、総合型サポートが集中して向上をねらう要素を NF との議論の中で明らかにし、サポート計画を立案した。

3. サポート事例

（1）パラアルペンスキー

パラアルペンスキーでは、４名の選手を対象に以下のサポートを行った。

①体力トレーニング：夏季の陸上トレーニング期間においては、JISS 来所可能な選手には JISS にて、JISS 来所が困難な選手には遠隔でトレーニングメニューを提供した。雪上トレーニング期間中においても、現地にて実施可能なトレーニング方法を指導した（写真 1）。トレーニングは、主に雪上トレーニング期間における滑走本数の増加をねらいとして行われた。

トレーニングの効果は、３回（5、8、10 月）の体力測定で検証した。体力測定の項目は、身体組成、乳酸カーブテスト、等速性膝関節伸展 / 屈曲力、上肢プル / プッシュパワー、姿勢チェック（FAAB）であった。

筋力・パワーは向上し、過去シーズンと比較して滑走本数を増加させることができた。

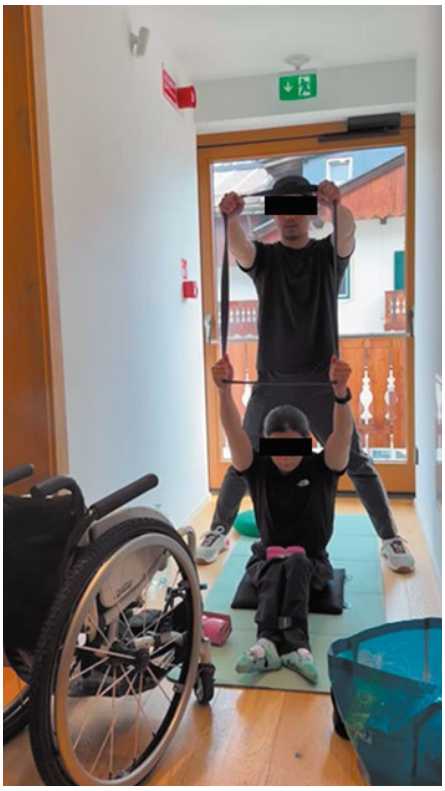


写真１　座位選手を対象としたトレーニングサポートの様子

②高地順化トレーニング：パラアルペンスキーでは、高所（標高 3,000m 以上）かつ長期間の

海外遠征（主に欧州）が多いため、日本国内において低酸素室を利用した順化トレーニングを行った。

③栄養サポート：過去シーズンにおいて、体重増加により滑走技術の低下と用具調整の難化を招いたことがあったため、シーズン中の体重を維持するための栄養サポートを行った。基準となるエネルギー摂取量を提示し、遠征先の食事内容を調整することで、シーズンを通じて体重を維持することができた。

④心理サポート：個々の選手の心理面の課題達成だけでなく、代表チーム全体の連携を強化するため、心理スタッフが遠征に帯同した。

(2) スノーボードスロープスタイル・ビッグエア（SSBA）

SSBA では､10 名の選手を対象に以下のサポートを行った。

①コンディショニングサポート：シーズンを通じて競技会中の皮膚温と深部温をモニタリングした。高いパフォーマンスを発揮できる体温の基準を明らかにし、オリンピック本番でもそれが維持できるよう衣服の量とウォーミングアップの内容を調整した。

②動作分析：シーズンを通じてトレーニング及び競技会において技の滞空時間と回転数から空中の平均角速度を算出し、個々の技を実施可能にする力学的条件を明らかにした。この情報は、オリンピック会場においても逐一測定・分析・フィードバックがなされ、高い順位をねらうための技の選択に活用された。

③心理サポート：日本人選手と他国の選手が実施する技の難易度と得手不得手をマトリクス化し、選手・コーチの意思決定に活用した。



写真２　オリンピック会場で動作分析を行う様子

4. まとめ

2025 年度は、冬季競技の最重要競技会であるミラノ・コルティナ 2026 大会が開催され、2022 年度からスタートした総合型サポートの効果を検証する年となった。

サポート対象となった冬季２種別においては、先に述べたとおり当初のサポート課題がおおよそ達成できた上、パラアルペンスキーでは銀２、銅１とパラリンピック日本代表全体のメダル獲得数（4 個）の大半を占める活躍であったこと、SSBA では金３、銀２、銅１とオリンピック日本代表全体（24 個）の中核となる活躍であったことから、本活動は一応の成功を見たといえよう。

（文責　窪　康之）

（7）ハイパフォーマンス・サポート事業

スポーツ庁委託事業

1. 事業の目的

本事業は、ミラノ・コルティナ 2026 大会、ロサンゼルス 2028 大会等の大規模な国際競技大会で日本代表選手がメダルを獲得できるよう、スポーツ医･科学、情報の各分野からサポートを提供することを目的として実施された。

支援の対象は、スポーツ庁が定めるターゲットスポーツ又は重点支援競技であり、メダル獲得の可能性に応じてサポートスタッフを配置し、サポート活動を行った。

2. アスリート支援

アスリート支援では、表に示す 7 分野についてスタッフを配置してサポート活動を行った。活動に先立ち、競技団体との合意による年間計画書を作成し、これに基づいたサポートを実施した。年間計画書は、日本代表合宿や選手の所属先などで行われるトレーニングだけでなく、各種競技会がいつ、どこで行われるか、また、それらの強化現場において、どのような分野のサポートが必要かを網羅したものである。年間計画書作成をはじめとする競技団体との連絡・調整は、本事業のマネジメントスタッフが行った。マネジメントスタッフは、随時競技団体と連絡を取って課題を抽出し、サポートスタッフの配置を決め、サポート活動の内容と進捗を管理した。

3. JSC サポート拠点における支援体制

本事業では、ミラノ・コルティナ 2026 大会、ロサンゼルス 2028 大会等の大規模な国際競技大会において、大会期間中の現地での最終的な強化・調整のためのサポートを実施するための体制づくりを進めており、過去大会で蓄積した経験に基づき、ミラノ・コルティナ 2026 大会、ロサンゼルス 2028 大会においても充実した最終強化・調整のためのサポートを実施できるよう体制を構築している。

2025 年度はミラノ・コルティナ 2026 大会がイタリア国内で分散開催され、ミラノに JSC サポート拠点を設置、また、他の複数地域にスタッフを配置し、日本選手団等をスポーツ医・科学、情報面から総合的にサポートした。

また、ロサンゼルス 2028 大会におけるサポートに向けて関係機関・各種専門分野スタッフ等との各種調整やヒアリングを行い、JSC サポート拠点の設置に向けた検討及び準備を進めた。

（文責　窪　康之）

表　サポート分野と主なサポート内容

サポート分野	主なサポート内容
コンディショニング	コンディショニング、リハビリテーションを目的としたエクササイズ、ケアの提供
トレーニング	障害予防、パフォーマンス向上を目的としたエクササイズの提供
映像	トレーニング・競技会における映像の撮影とフィードバック、映像データベースの構築
バイオメカニクス	パフォーマンス・動作分析
生理・生化学	生理学的モニタリング、体組成チェック
栄養	体組成チェック、栄養相談、栄養調査・分析
心理	メンタルマネジメント技法の提供、心理カウンセリング

7　スポーツ医・科学研究事業

（1）国際競技力向上に資する研究の推進

1．概要

スポーツ医・科学研究事業は、スポーツ医・科学、情報等の各機能が統合したJISSの特長を生かし、必要に応じてNFスタッフや国内外の研究者・研究機関と連携しながら、国際競技力向上のために有用となる知見や方策を生み出すための調査・研究・開発を行うことを目的としている。

2024年度より、重点的かつ時限的に取り組む「研究の柱」を中心として研究活動を推進する方針となり、組織として臨時で取り組む「特別プロジェクト」、将来的に研究の柱につながる小規模な「萌芽研究」を含む3つの研究の種類で構成されている。

研究の柱は、課題を明確にしてその課題に対して重点的に取り組むこと、並びに外部に対してテーマ自体やその成果を積極的に示すことの2つを目的として設置された。研究の柱のうち、「総合型サポートに直結する研究」については、総合型サポート（スポーツ医・科学支援事業の項参照）充実に向けた新たな理論や新たなトレーニングの構築のための研究と位置づけ、総合型サポートを実施する上で必要性が生じた際に実施する枠組みである。2025年度の研究の柱と特別プロジェクト研究は表に示したとおりであり、次ページから1件ずつ概要を説明する。

その他、JISSでは、外部研究資金である「学術研究助成基金助成金 / 科学研究費補助金」や「民間団体研究助成金」を積極的に獲得するように努めている。

（文責　横澤　俊治）

表　研究の柱及び特別プロジェクト研究

研究の種類	研究テーマ	研究代表者
研究の柱	パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立	安藤　良介
	デジタル技術・用具の強化活動への実装	尾崎　宏樹
	競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装	中村　真理子
	スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化	福嶋　一剛
	社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進	久保田　潤
	総合型サポートに直結する研究	
	a) 採点競技における演技の出来栄えの決定要件の究明	横澤　俊治
	b) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける外傷・障害予防のための調査とフィットネス評価	稲葉　優希
	c) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける選手の心理的特性とコーチのコーチング行動に関する実態調査	尾崎　宏樹
特別プロジェクト研究	世界陸上2025における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術	松林　武生

❶ 研究の柱

1. パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立

研究代表者　安藤良介（スポーツ科学研究部門）
メンバー　山下大地、大岩奈青、山岸卓樹、萩原正大、白木駿佑、ヘンダーソンフレデリック、本間洋樹、田中喜晃、吉田拓矢、小泉潤、景行崇文、牧野瑞輝（以上、スポーツ科学研究部門）、柄木田健太、妙圓園香苗（以上、スポーツ医学研究部門）

1. 背景・目的

近年、球技・ラケット系種目において競技の高速化が進んでいる。このような背景により、例えばサッカーでは試合中のスプリント回数をパフォーマンス指標の1つとして評価することがある。本研究では、バスケットボールやバドミントンのような方向転換が非常に多い競技特性において、加速度の累積値（累積加速度負荷：AAL）をパフォーマンス指標として捉え、これを構成する下位要素として有酸素性能力（最大酸素摂取量：$\dot{V}O_2max$）と下肢パワー（カウンタームーブメントジャンプ高）を位置付け、これらの関係を検討することを目的としている。2024年度には、バスケットボールの試合中の AAL_{high}（高強度のAAL）と $\dot{V}O_2max$ の間に有意な正の相関関係が見られた。2025年度では、それらの測定値が縦断的に変化したときの関係の検討とバドミントンにおいて試合中のAALと体力要素の関係を横断的に検討した。

2. 方法

バスケットボールでは、インカレ出場相当のチームに所属する男子選手25名を対象に $\dot{V}O_2max$ とカウンタームーブメントジャンプ高及び試合中のAALを測定した。試合の詳細は2024年度の年報に記載のとおりである。AALの測定には慣性センサー（Kinexon社製）を用い、強度に応じて AAL_{low}、AAL_{medium}、AAL_{high}、$AAL_{very\ high}$ に分類した。測定の時期はシーズン前（2月、2024年度成果）とシーズン中（11月）であった。各測定項目について、対応のあるt-検定を用いてシーズン前とシーズン中を比較し、各測定項目の変化について反復測定相関分析を実施した。

バドミントンでは、インカレ出場相当のチームに所属する男子選手25名を対象に $\dot{V}O_2max$ とカウンタームーブメントジャンプ高及び試合中のAALを測定した。なお、第1ゲームと第2ゲームの結果に関わらず、全ての試合は第3ゲームまで実施した。各強度のAALと $\dot{V}O_2max$ 及びカウンタームーブメントジャンプ高との関係をピアソンの積率相関係数を用いて検討した。

3. 結果

バスケットボール選手の $\dot{V}O_2max$ と試合中の $AAL_{very\ high}$ は、シーズン中に有意に高値を示した（表）。また、シーズン前からシーズン中への変化には、反復測定相関分析により有意な関係が見られた（図）。

表　バスケットボール選手の $\dot{V}O_2max$ とジャンプ高、AAL

		シーズン前	シーズン中
$\dot{V}O_2max$	(ml/kg/min)	47.5 ± 4.4	55.4 ± 4.0*
ジャンプ高	(cm)	40.6 ± 4.7	40.7 ± 4.0
AAL_{low}	(a.u.)	143.5 ± 10.5	135.4 ± 11.1*
AAL_{medium}	(a.u.)	137.9 ± 25.5	122.4 ± 23.5*
AAL_{high}	(a.u.)	197.8 ± 27.8	187.5 ± 30.9*
$AAL_{very\ high}$	(a.u.)	110.2 ± 57.5	147.9 ± 79.8*

*: $p < 0.05$ vs. シーズン前

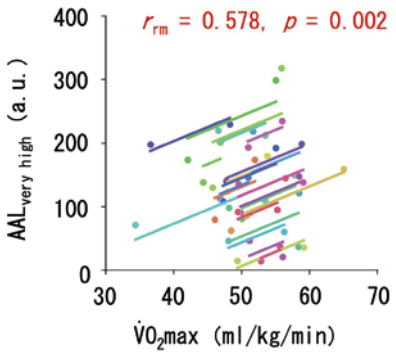


図 $\dot{V}O_2max$ と $AAL_{very\ high}$ の変化の関係

バドミントン選手の $\dot{V}O_2max$ 及びカウンタームーブメントジャンプ高は、全ての強度のAALとの間に有意な相関関係は見られなかった。

4. 考察

バスケットボール選手において、$\dot{V}O_2max$ の改善は、試合中の超高強度の活動量を増加させることが示唆された。特にプレー時間が長い選手は、試合を通して高強度の活動量を維持するために、$\dot{V}O_2max$ を改善するトレーニングやコンディショニングが重要であると考えられた。

バドミントン選手において $\dot{V}O_2max$ やカウンタームーブメントジャンプ高とAALの間に有意な相関関係が見られなかった原因は不明である。ラリー時間・打数が異なるエリート選手や女子選手において検討を継続していく予定である。

（文責　安藤　良介）

2. デジタル技術・用具の強化活動への実装

研究代表者　尾崎宏樹（スポーツ科学研究部門）
メンバー　星川雅子、石毛勇介、山邉芳、相原伸平、稲葉優希、袴田智子、中島大貴、加藤聡志、來海郁（以上、科学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　木村新（法政大学）、鈴木功士（日本大学）、吉岡伸輔（東京大学）、桝井文人（北見工業大学）

1. 背景・目的

ハイパフォーマンススポーツにおいて、企業や研究者などから、強化現場に対して新しい技術や用具、デバイス等（ツール）の導入を提案されることが多い。それらの中には、強化活動の実態に合わず、ツールの活用が継続されない例も散見される。ツールが強化現場の実態に合わなければ、無駄なコストを費やすだけでなく、導入前の状態に戻すことが困難になるリスクもある。新たなツールを強化活動に導入するには、事前にメリットとリスクを十分に検討した上で、適切なプロセスに則って進める必要がある。そこで本研究では、用具、AI、アプリケーションの開発と、その強化活動への実装を目的とした５つの異なる研究を実施したのち、①異なるツール開発･実装プロセスにおいて、共通して必要とされる要件、②用具開発、AI 開発、アプリケーション開発の場合にそれぞれ求められる実装のための要件を明らかにすることを目的とした。

2. 実装の定義

各開発ツールが、以下のような状態で強化活動に活用されている状況が確認できたことをもって目標を達成したこととする。

(1) 用具の実装
開発した用具がオリンピック・パラリンピックに向けたトレーニングにおいて継続的に使用され、かつ、オリンピック・パラリンピックにおいて選手がいつでも使用可能な状態

(2) AI の実装
開発した AI が NF コーチやアナリストの分析フローに組み込まれている状態

(3) アプリの実装
開発したアプリケーションが NF コーチやアナリストの分析・評価フローに組み込まれている状態

3. 各中項目の研究テーマ

本研究では、以下の５つの研究テーマを中項目と位置付けて実施している。各研究テーマの詳細は別途報告する。

(1) 冬季ウエアの空気力学的機能向上のための研究
(2) パラアルペンスキー競技力向上のための用具開発研究
(3) 競技特化及び簡易計測を実現するトラッキング技術の研究
(4) AI を用いた戦術分析や戦術トレーニング支援に関する研究
(5) 映像及び生体情報を活用したリモート支援システムの構築

4. 強化現場への実装のための要件案

各中項目の研究によって開発したツールに共通して求められる、強化現場への実装の要件とその観点案を表に示す。各中項目のプロジェクトメンバーが行った、日々の研究活動や実装場面における活動を、プロジェクト実施期間中全て記録した。その後、各活動において抽出された開発・実装のための観点や要件に関連するイベントやユーザーの反応などを中項目ごとに取りまとめた。各中項目のプロジェクトリーダー及びスーパーバイザーによって定期的に開催された検討会においてツールに共通する、実装のための要件案を整理した。

表　ツール実装のための観点と要件（案）

観点	要件（案）
ツールの機能性	NF のニーズに合った設計
	競技パフォーマンスの最適化
ツールの実用性	専門家以外も使える UX
	実環境での正常な動作
ツールの評価	ツールによる効果や影響の観察
	理論と実践のギャップの分析
	改善点の特定と改良
実装環境	競技規則等への適合
	十分な啓発機会の確保
強化現場の受け入れ態勢	ユーザーのリテラシー
	NF の課題の明確化
実装への働きかけ	課題に対応した運用体制の構築
	スモールスタート
	実装前のトライアル
	ツールの効果の実感
運用	現実的な運用コスト
	強化の一環としての運用

なお、ツール別に求められる同要件については、各中項目の研究活動が全て終了した時点で検討することとしている。

5. 今後の課題

今後は、ツールごとの要件を整理し、ユーザーからのヒヤリングも参考に、ハイパフォーマンススポーツにおける適切なツール開発と実装のための要件をまとめる。

（文責　尾崎　宏樹）

3. 競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装

研究代表者　中村真理子（スポーツ科学研究部門）
メンバー　岩田理沙、大岩奈青、衣笠泰介、小出所大樹、清水和弘、清水潤、田中喜晃、谷村祐子、玉井伸典、元永恵子、花岡裕吉、星川雅子、門馬怜子（以上、スポーツ科学研究部門）、笹代純平、高橋佐江子、庄子理絵（以上、スポーツ医学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　清水怜有（トヨタ記念病院）、内藤貴司（北海学園大学）、竹林由武（福島県立医科大学）、山仲勇二郎（北海道大学）、中尾光之（東北大学）

1. 背景・目的

暑熱、寒冷、高地（低酸素）環境下で開催される国際競技大会に向けては、これらの特殊環境に曝されることによるパフォーマンス低下を最小限に抑えるため、各環境への順化、身体の冷却、保温、リカバリーといった対策が重要である。国外への遠征時には、時差調整や長時間の移動による疲労、さらには感染症対策も重要な要素となる。ロサンゼルス2028大会では、東京2020大会ほどの高温多湿な環境ではないものの、熱波や日内気温変動の影響を受け、断続的な暑熱環境下での開催が予想される。また、ミラノ・コルティナ2026大会では、寒冷及び準高地環境で開催された。これらの特殊環境に適応するためには、戦略的な環境対策を実施し、競技パフォーマンスを最適化することが求められる。

本研究では、国際競技大会開催国の特殊環境に対応した実践的な対策方法を確立することを目的とし、(1)夏季大会に向けた暑熱対策プロトコルの開発、(2)海外遠征時に有効なコンディショニングツールの開発、(3)国際大会開催地に応じたコンディショニング手法の実証、について検討した。

2. 各中項目の研究テーマ

(1) 夏季大会に向けた暑熱対策プロトコルの開発

2025年度は、温熱刺激を活用した適応・回復プロトコルの開発を目指し、2つの課題を設け検討した。①高濃度人工炭酸泉（炭酸泉）を用いた5日間の暑熱順化浴の効果を検証した。②健常男性8名を対象に、20分間の下肢疲労負荷後の回復効果をランダム化クロスオーバー比較で検証した。介入は42℃炭酸泉浴（12分）、42℃炭酸泉（3分）及び19℃冷浴（1分）の交代浴3セット、座位安静の3条件とした。介入実施48時間後まで唾液や筋弾性等の多角的指標を測定し、最適なリカバリープロトコルを検討した。

(2) 海外遠征時のコンディショニングに有用なツールの開発

2025年度は、海外遠征時におけるアスリートのコンディショニング支援ツールの開発に向け、2024年度までに収集・整理した関連知見及び仕様検討の結果を踏まえ、調達及び実装に向けた具体的準備を進めた。2025年末に特許の許諾申請に係る手続が整ったことを受け、アプリの調達仕様書及び要件定義書を作成、必要機能や実装条件等の整理を行った。

あわせて、海外遠征時のコンディショニング支援に関するナラティブレビューの作成を進めるとともに、支援ツールの試作・検討を実施した。アルゴリズムについては、先行研究に基づき再構成を進めており、実装に向けた内容の精査を継続している。なお、2025年度末時点では必要書類の整備及び関係部署との調整を進め、今後の調達及び開発に向けた基盤を整備した。今後は、アルゴリズムの精査を踏まえた開発内容の具体化を進める予定である。

(3) 国際大会開催地の特殊環境に応じたコンディショニング手法の実証

①冬季競技におけるコンディショニング手法の実証

指輪型デバイスや心拍計を用いた、睡眠の質及びトレーニング負荷の継続的モニタリング体制を構築し、ミラノ・コルティナ2026オリンピック期間中も運用した。大会期間中は、心拍数、深部体温、筋温、環境温等の生体・環境データを測定し、村外サポート拠点等において選手へのフィードバックを実施した。

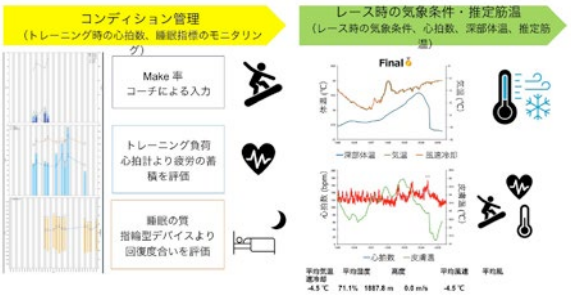


図　コンディショニング支援の概要

② ピリオダイゼーションを考慮したコンディションのモニタリング手法の検討

コンディション指標の一元管理ツールにより蓄積された日々のデータを活用し、統計モデル等を用いた変動パターンの類型化を試みた。あわせて、得られたコンディション変動の評価手法の妥当性についても多角的に検証した。

3. 今後の課題

2026年度以降は、各中項目から得られた知見や先行研究をまとめ、特殊環境に応じた包括的（分野横断的）かつ実践的な対策方法を確立し、支援における活用を目指す。

(1) (2) の研究テーマは、大塚製薬株式会社との共同プロジェクト「JSCハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project NEXT」の一環として実施した。

（文責　中村　真理子）

4. スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化

研究代表者　福嶋一剛（スポーツ医学研究部門）
メンバー　中嶋耕平、半谷美夏、西田雄亮、重本理花、後藤和海、蒲原一之、友利杏奈、能瀬さやか、三ツ山晃弘、笹代純平（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　中田由夫（筑波大学）、中山晴雄（東邦大学医療センター大橋病院）、大伴茉奈（桐蔭横浜大学）、清原康介（大妻女子大学）、笹井浩行（東京都健康長寿医療センター研究所）、小島佑基（つくばセントラル病院）

1. 背景・目的

アスリートに対し、エビデンスに基づいた予防戦略を実施するためには、スポーツ外傷・障害及び疾病の実態を明らかにする基礎データは必要不可欠であり、スポーツ疫学の重要性は国際的にも提唱されている。本邦において、特定の外傷・障害調査は行われているが、対象や期間等の限定的な内容となっており、競技種目の枠組みを超えた継続的な調査は行われていない。

JISS スポーツクリニック（クリニック）は開所以来、メディカルチェック（MC）及び外来診療を実施しており、膨大な診療データが蓄積されている。また、JOC や JPSA と医療業務委託を結び、各国際総合競技大会の選手団本部医務を担っている。さらに、組織内に災害共済給付事業部を有し国内学校管理下の外傷・障害・疾病データを管理している。

これらのデータを属性・カテゴリーごとに分析することで、アスリートの健康状態に関する多角的なデータベース構築につなげ、将来の分析的調査の基盤とすることを目的としている。2025 年度は、研究の柱の初年度と比較して基盤整備が進むとともに、論文採択、国際総合競技大会での本番運用、既存診療録のデータ化着手など、研究成果の創出と実装の両面で進展がみられた。

2. 各中項目の研究テーマ

柱 4 の中項目は 3 項目で構成される。

(1) ハイパフォーマンススポーツにおけるメディカルプロブレムの標準化と特徴の抽出

クリニックに蓄積された診療データを用い、複数診療領域にまたがるメディカルプロブレムを標準化して把握することを目的とした。2025 年度は、JISS クリニック開所以来の紙媒体を含む診療録について、データ解析に利用可能な形へ変換する作業に着手した。対象は内科・整形外科に加え、婦人科や歯科を含み、一部はすでにデータ化が進んでいる。2026 年度は引き続きデータ化を進め、解析へ展開する予定である。

(2) ハイパフォーマンススポーツにおけるメディカルサーベイランスシステムの構築

国際総合競技大会期間中の外傷・障害、疾病、メンタルヘルス障害に関する情報を一元的に収集・共有する体制の構築を目的とした。

2025 年度は、ミラノ・コルティナ 2026 大会において本番運用としてサーベイランスを実施し、収集体制の整備、実際のデータ収集、選手団本部報告への活用を行った。これにより、今後の国際総合競技大会に向けた継続的運用の基盤が強化された。

(3) スポーツ活動における脳振盪サーベイランスシステムの構築への取組

本テーマは継続課題として、災害共済給付データやクリニックの MC データ等を活用し、スポーツ関連脳振盪（SRC）の疫学的特徴の把握と予防戦略につながる知見の創出を目的としている。2025 年度は、本テーマに関連する研究成果として 2 編の論文が採択された。1 編は日本の中学・高校生における SRC の疫学、もう 1 編は中学・高校生サッカーにおける脳振盪の受傷機転を扱ったものであり、競技現場での予防策検討に資する知見を示した。

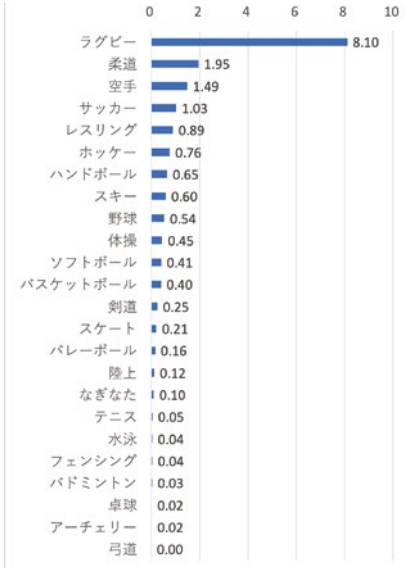


図　24 競技における部員 1,000 人あたりのスポーツ関連脳振盪発生割合（災害共済給付データ）

3. 今後の課題

2025 年度は、研究基盤の整備に加え、論文採択や国際総合競技大会におけるサーベイランス本番運用など、具体的成果を創出することができた。今後は、2025 年度に構築・強化したデータ基盤とサーベイランス体制を活用し、予防戦略の提案や実装につながる研究へ展開していく。2026 年度は、診療録のデータ化と解析を更に進め、研究を加速度的に推進したい。

（文責　福嶋　一剛）

5. 社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進

研究代表者　久保田潤（スポーツ科学研究部門）
メンバー　山下修平、白井克佳、衣笠泰介、中村有紀、中村真理子、萩原正大、藤原昌、桶谷敏之、阿部篤志、中村宏美、岩田理沙、門馬怜子、小野寺俊一、山口真未（以上、スポーツ科学研究部門）友利杏奈、西田雄亮、近藤みどり（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　相澤勝治（専修大学）、中村大輔（日本サッカー協会）、鈴木なつ未（拓殖大学）、松田知華（名古屋大学）、原村未来（明治学院大学）、吉田智彦（笹川スポーツ財団）、堀田裕二（アスカ法律事務所）、松畑尚子（龍谷大学）、平塚拓也（奈良女子大学）、竹澤美郁、勝田隆（以上、東海大学）

1. アスリート育成パスウェイの充実に関する研究

本研究は、スポーツを始めてからトップアスリートに至るまでの過程である「アスリート育成パスウェイ」の最適化と知見の蓄積を目的に、相互に関連する３つの課題を設定している。課題①では、地域タレント発掘・育成事業からシニア日本代表レベルのエリートアスリートに至るまでの体格・体力データ面の変遷を縦断的に検証し、成功要因を特定することを目的としている。課題②では、第二次性徴等の女性特有の課題を組み込んだ育成モデルを構築し、競技力とウェルビーイングの両立を図ることを目的としている。課題③では、NF による競技別パスウェイモデルの策定・運用に関する実践知を蓄積し、その構築プロセスを最適化することを目的としている。これらにより、アスリートの特性、NF の戦略、地域タレント発掘・育成事業を有機的に接続する包括的支援システムの構築を目指している。

これまでの分析により、以下の知見が得られた。課題①では、地域タレント発掘･育成事業参加者（運動能力の高い集団）の中でみると、必ずしも突出した体格・体力を有していなくてもエリートアスリートに到達していた。むしろ「女子」であることや、成長過程での「競技転向」といった構造的な要因がエリートアスリートに到達する上での予測因子として示された。つまり、ジュニア年代早期の体格･体力データだけでは将来有望なアスリートのポテンシャルを見出すことが困難であり、多角的な視点に基づく選抜指標の選定やこの年代での競技最適化の重要性が示唆された。課題②では、女子アスリートはタレント期に規範の内面化が進む一方、断片的な理解や誤概念の定着が課題となることが明らかとなった。誤概念の修正は困難なため、ジュニア年代早期からのリテラシー教育が不可欠といえる。また、エリート期にはアスリート自身の自己調整学習能力が高まるものの、その能力を最大限に引き出し、パフォーマンスへつなげるためには、多分野の専門家と適切に協働できるサポート体制の構築が極めて重要である。課題③では、中長期的なアスリート育成の指針として活用される「競技別パスウェイモデル」の構築において、組織内での共通理解の形成や、属人化された経験の言語化に多くの困難を伴うことが確認された。しかし、対話を重ねる可視化プロセス自体が、組織全体の目標共有や一体感の醸成に大きく寄与することも明らかになった。

今後は、これまでの研究も踏まえて、タレント発掘・育成における体力・体格面以外の関連要因の検討や国内外の事例から、タレント発掘・育成事業運営の品質・リスク管理に関する情報収集及び分析を進めていき、アスリート育成パスウェイの最適化に寄与する知見の獲得を目指す。

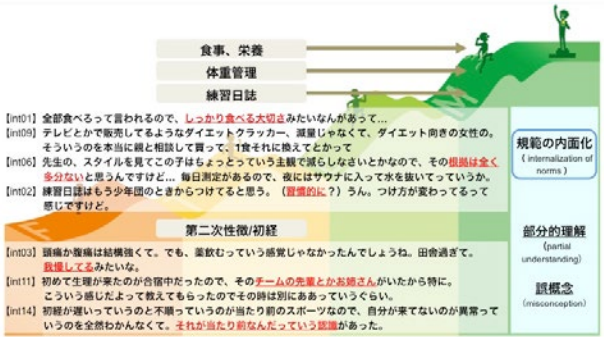


図　F 期から T 期の女性アスリートのコンディショニングの実態と課題（日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会発表資料（中村ら , 2025）より抜粋）

（文責　山下　修平）

2. スポーツ団体ガバナンス強化に関する施策の評価

我が国では 2019 年策定の「スポーツ団体ガバナンスコード」に基づき、NF に対して、毎年の自己説明の公表と４年に１度の適合性審査による外部評価が導入された。このうち適合性審査は、その結果が助成金等と結び付くため実質的な強制力を有する。他方、自己説明は、公表義務にとどまり、その内容は原則として第三者によるチェックを受けない。そのため、ガバナンスの実質的改善に寄与しているかは不明である。さらに、この点を体系的に検証した研究は、管見の限り存在しない。

本研究は、公開資料の定量分析と事例調査を通じ、自己説明・公表の実効性を明らかにすることを目的とし、自己説明・公表がガバナンスコード遵守状況の改善に与える効果の定量的検証（課題①）、NF ホームページにおける自己説明の掲載・関連資料等の情報公開の質の評価（課題②）、特徴的な NF への半構造化インタビューを通した制度効果の質的検証（課題③）の３つの課題に取り組むものである。

なお、2026 年度は課題①に関連して、諸外国との比較を通した我が国の政策課題とその検証方法の提案に関する学会報告を行った。

（文責　桶谷　敏之）

6. 総合型サポートに直結する研究

a) 採点競技における演技の出来栄えの決定要件の究明

研究代表者　横澤俊治（スポーツ科学研究部門）
メンバー　　窪康之、尾崎宏樹、山下大地、鍔木悠里奈（以上、スポーツ科学研究部門）
外部協力者　河野由（大東文化大学）

1. 背景・目的

採点競技は「どのように見えたか」という演技の出来栄えを採点の対象としているため、科学的サポートを効果的に行うためには、演技の出来栄えの採点につながる動きや事象を示す必要があると考えられる。このためには、実際に採点を行う審判員が演技の出来栄えをどのように評価しているかを把握することが有益であると考えられる。そこで本研究では、審判員が演技の出来栄えをどのように評価しているかを把握することで、審判員の着眼点に基づいた演技の出来栄えの構成要素を明示することを目的とした。

2. 実施概要

対象競技には、減点型の典型としてトランポリンを、定性相対評価型の典型としてスノーボード・ビッグエアを対象とした。初めに有資格者数名を対象に、競技規則に基づいてどのように採点を行っているのかに関して半構造化面接を用いて調査し、採点の着眼点をリスト化した。次に実際の運動を対象に動作分析用と採点用の撮影を同時に行った。そして、撮影用映像を基に有資格者が採点するとともに、その根拠となる着眼点をリストより選択した。一方、3 次元動作分析によって主要な着眼点に関連する物理量を算出した。最後にそれらの物理量と着眼点ごとの評価との関係を回帰分析によって検討した。

トランポリンについては「タック姿勢がコンパクトではない」、「パイク姿勢がコンパクトではない」、「90°（3 時方向）まで姿勢が維持できていない」、「90°（3 時方向）までにひねり終わっていない」という 4 つの減点理由が減点の 70% 以上を占めた。表には「パイク姿勢がコンパクトではない」という減点理由について、減点（正の値）を目的変数、物理量を説明変数とした重回帰分析の結果を示した。説明変数として採用された項目のうち下位 2 項目は「コンパクトではない」という減点理由とは直接関係が無い項目であり、このような間接的な物理量が減点に関与していたことは興味深い。

図は、スノーボード・ビッグエアについて、主要な審判員の着眼点の一つである「ジャンプが高い」について、そう判断した審判員の人数と最高到達点との関係を示したものである。両者に有意な相関関係は認められなかった。これは審判員が「高い」と判断するか否かが実際の選手の高さとは単純に一致しないことを示していると考えられる。

両競技の共通点としては、審判員の着眼点は直接関係がありそうな物理量に容易には置き換えることができない点が挙げられる。このことは、採点競技を対象に科学的サポートを実施する際、審判員の着眼点を単純な物理量に置き換えて機械的にフィードバックすることの危険性を示唆するものである。

（文責　横澤　俊治）

表　トランポリンの減点理由「パイク姿勢がコンパクトではない」の重回帰分析結果

物理量	標準化偏回帰係数	P 値
肩 - 膝の距離の最小値	0.71	<0.01
足関節底屈角度の平均値	0.27	<0.05
滞空時間	-0.26	<0.05

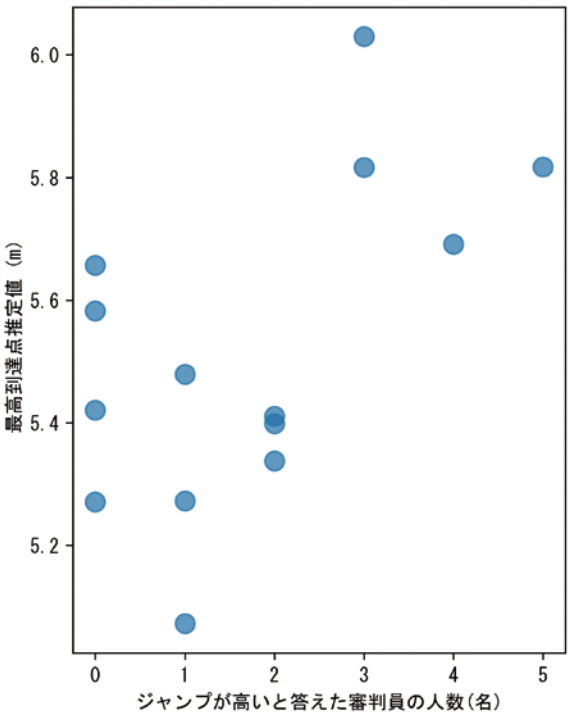


図　スノーボード・ビッグエアにおいて「ジャンプが高い」と判断した審判員の人数と最高到達点との関係

6. 総合型サポートに直結する研究

b) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける外傷・障害予防のための調査とフィットネス評価

研究代表者　稲葉優希（スポーツ科学研究部門）
メンバー　尾崎宏樹、石毛勇介、岩田理沙、ヘンダーソンフレデリック（以上、スポーツ科学研究部門）、
西田雄亮、高橋佐江子、髙橋由衣（以上、スポーツ医学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　大伴茉奈（桐蔭横浜大学）、覚張美咲（早稲田大学大学院）

1. 背景・目的

スノーボードスロープスタイル（SS）及びビッグエア（BA）は、ジャンプ台や障害物における技の完成度、難易度、新規性などを総合的に評価するスコアに基づいて順位が決定される競技である。これらの種目では、選手はより高く跳躍し、空中でより多くの回転やトリックを行うことで高得点を狙う必要があり、その過程で転倒リスクの高い高度な技に挑戦することが求められる。そのため、競技中の受傷によりシーズン中の大会欠場を余儀なくされる選手も少なくない。国際スキー・スノーボード連盟（FIS）の傷害調査（FIS Injury Surveillance System 2006–2019）においても、スノーボード SSBA 競技では滑走 1,000 回あたり約 10 件の傷害が発生していることが報告されている。このような状況において、主要大会で最大限のパフォーマンスを発揮するだけでなく、シーズンを通じた継続的な競技参加及びトレーニングの実施、さらには日常生活の質を維持する観点からも、傷害予防は極めて重要な課題である。しかしながら、スノーボード SSBA 競技に特化し、傷害の発生実態及びその要因を詳細に検討した研究は限られている。傷害の実態と発生要因を明らかにしなければ、有効な予防策の立案は困難である。そこで本研究では、スノーボード SSBA 競技における競技中の傷害について、その発生実態及び要因を明らかにし、得られた知見に基づいて傷害予防策を検討することを目的とした。

2. 研究の概要

傷害予防策の立案には、van Mechelen ら（1987）が提唱した Sequence of Prevention に基づく段階的アプローチが重要とされている。すなわち、①傷害発生の実態把握、②発生要因の特定、③予防策の導入、④その効果検証、というサイクルを継続的に実施する必要がある。本研究では、この枠組みに基づき、2025 年度は主に①及び②に該当する傷害実態及び発生要因の分析・整理を行い、予防策の提案及び情報発信を目的とした資料作成を実施した。

傷害実態の調査は、既存データに加えて追加調査を行い、以下の 2 群を対象として整理した。
①エリート群：全日本スキー連盟スノーボード SSBA ナショナルチーム（強化指定 S/A/B）選手
②サブエリート群：強化指定 D 選手を中心に、国内・地区大会で上位成績を有し、コーチが同等の競技レベルと判断した選手

エリート群における傷害は、2022–2023 から 2024–2025 シーズンを対象に、代表活動中にチームスタッフが記録した内容に基づいて分析した。一方、サブエリート群については Web ベースのアンケート調査によりデータを収集した。

その結果、1 シーズン当たりの受傷者率は、エリート群において 65 ± 16%（5 シーズン平均 ± 標準偏差）、サブエリート群において 45% であり、特にエリート群において高い受傷頻度が確認された。受傷部位の傾向として、エリート群では頭部（多くは脳震盪）が最も多く、次いで肩・鎖骨の受傷が多かった。また、女子選手では、これらに加えて下肢の受傷も多く認められた。一方、サブエリート群では頭部及び肩・鎖骨の受傷も一定数認められるが、膝及び足関節の受傷頻度が高く、エリート群とは異なる傾向が示された。

発生要因については、ビデオ分析及び受傷状況の記録を統合して検討した結果、主に以下の 2 つのパターンが確認された。第一に、助走速度の不足によりジャンプの飛距離が不足し、着地位置が手前となることで受傷に至るケースである。第二に、想定以上に飛距離が伸び、着地時に回転を合わせることができず転倒するケースである。前者は特に女子選手やジュニア選手に多く認められ、天候、雪質、用具、コース設定などの外的要因に加え、体格や筋力に起因する助走速度の不足が影響していると考えられた。このような場合、本来想定される斜面ではなく平坦に近い位置に着地することで衝撃が増大し、下肢の受傷につながる傾向が示唆された。一方、後者は男子選手に加え、より大規模なコースに挑戦する女子選手やジュニア選手にも認められ、過剰な飛距離により動作の制御が困難となり、転倒を介して上肢や頭部の受傷につながる傾向が確認された。

これらの結果を踏まえ、トレーナー、コーチ、JISS 研究員が連携して予防策の整理を行った。これらの知見は総合型サポートにおけるコンディショニング、心理、栄養サポートとも統合し、包括的な傷害予防対策として位置付けた。また、その内容は啓発コンテンツとして冊子化しており、今後はウェブサイトや大会等での配布を通じて、スノーボード SSBA 選手の傷害軽減に寄与することが期待される。

（文責　稲葉　優希）

6. 総合型サポートに直結する研究

c) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける選手の心理的特性とコーチのコーチング行動に関する実態調査

研究代表者　尾崎宏樹（スポーツ科学研究部門）
メンバー　　髙橋由衣、柄木田健太、本郷由貴（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　岩崎晋（Fort Lewis College）

1. 背景・目的

コーチが選手に対して適切なコーチングをするためのコーチング行動や心理的アプローチ方法の在り方については不明な点が多い。そこで本研究では、スノーボードスロープスタイル・ビッグエア（SSBA）のナショナルチームを対象に、1）SSBAトップ選手の心理的特性の解明、2）SSBA コーチのコーチング傾向の調査、3）選手の心理的特性を考慮したコーチングプロセスの一般化を行うことを目的とした。2025 年度までの研究で、SSBA 選手は、脅威に対する行動傾向は低く、よいパフォーマンスをすることで高評価を得たいというモチベーションが高い選手が多いことが分かった。ここではSSBA ナショナルチームコーチのコーチング行動について調査した結果を報告する。

2. 方法

（1）調査対象者・調査内容

本研究では、コーチのコーチング行動を明らかにするため、約 90 分の半構造化インタビューを実施した。調査対象者は、SSBA ナショナルチームのコーチ 9 名であった。調査対象者には、普段の自身のコーチング行動について振り返ってもらい、コーチングをする際の考え方や行動、自己調整の仕方などについて尋ねた。具体的な質問事項を含むインタビューガイドは、モデル・コア・カリキュラム（日本体育協会，2016）を参考に、以下 7 つを設定した。「①自身のコーチングではどのような指導を心掛けていますか？」、「②自身のコーチングで大事にしている考え方について詳しく教えてください。」、「③自身の心理面や行動面にかかわる自己管理方法について教えてください。」、「④自身のコーチとしての目標は何ですか？」、「⑤自身のコーチングではどのようなコミュニケーションを心掛けていますか？」、「⑥自身のコーチングでは選手を取り巻く関係者とどのような連携をとっていますか？」、「⑦選手のキャリアをどのように考えていますか？」

（2）分析方法

インタビューで得られたテキストデータは、テキストマイニングソフト（KH Coder Ver.3）による共起ネットワーク分析を行い、各コーチのコーチング行動を探索的に把握した。なお、テキストの分析は、分析者のバイアスを最小にするため、スポーツ心理学者 3 名で実施した。

3. 結果・考察

本報告では、SSBA ナショナルチームコーチ（A コーチ）のコーチング行動の分析結果の一例を示す。共起ネットワーク分析の結果、A コーチのコーチング行動には、「弱さの認識と受容」、「技と滑走の観察」、「技の成功と評価」、「他のコーチとの対話的コミュニケーション」、「ジャッジ評価の理解と困難」、「得点化される技と選手の状態」、「得点化による自信の揺らぎ」、「技の挑戦と困難」、「雪上練習における思考と対話」といった 9 つの特徴があった。特に、「弱さの認識と受容」では、単に、選手に弱点を克服させるのではなく、コーチが選手自身の不安や限界を認識し、弱さを受容するプロセスを重視していることがわかる。また、「得点化による自信の揺らぎ」においては、得点化された技の評価に伴う不安や自身の揺らぎがみられる。これはコーチが選手の結果を客観的に評価するだけでなく、自らの責任として受け止め、内面的な葛藤を抱えていることがうかがえる。この高い責任感と共感性は A コーチの特徴を示しており、していると考えられる。研究対象者それぞれに対して同様の分析を行った。

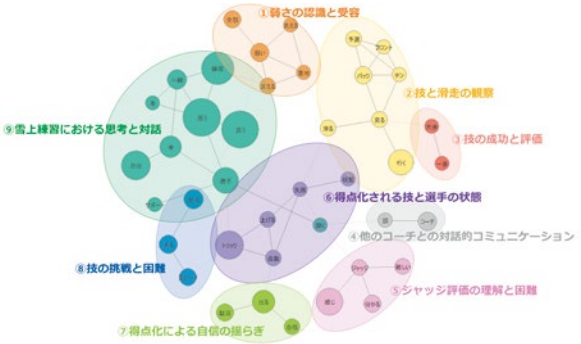


図　共起ネットワーク分析結果の一例

4. 今後の課題

今後は、SSBAナショナルチームコーチに共通する特徴を明らかにする。また、既に明らかにしたSSBA 選手の心理的特性と、今回分析したコーチの特徴を踏まえたコーチング行動について観察し、そのコーチング行動が選手の競技パフォーマンスに及ぼす影響について検討する。

（文責　尾崎　宏樹）

❷ 特別プロジェクト研究

世界陸上 2025 における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術

研究代表者　松林武生（スポーツ科学研究部門）
メンバー　景行崇文、牧野瑞輝、後藤晴彦、小泉潤（以上、スポーツ科学研究部門）、杉田正明、高松潤二、森丘保典、三浦康二、丹治史弥、髙橋恭平、山中亮、貴嶋孝太、小山宏之、苅山靖、瀧川寛子（以上、日本陸上競技連盟科学委員会）、大沼勇人（神戸女子大学）、笠井信一（愛知淑徳大学）、岩崎領（阪南大学）、柴田篤志（新潟医療福祉大学）、杉浦澄美（筑波大学）

1. 背景・目的

2025 年 9 月、東京において世界陸上競技選手権大会（世界陸上 2025）が開催された。日本における開催は 1991 年の東京、2007 年の大阪に続いてこれが 3 回目であった。走跳投という人の基本的運動の能力を争う陸上競技は、これらの運動に関わる動作原理や技術がパフォーマンスに直に表出し、ハイパフォーマンススポーツを研究する上での貴重な知見を与える。過去 2 回の大会においては、日本陸上競技連盟の科学委員会が中心となってバイオメカニクス研究が実施された。世界陸上 2025 では JISS もこの活動に加わり、2024 年度から 2025 年度までの 2 年間にわたる特別プロジェクトとして研究を推進した。世界陸上 2025 に出場する世界一流陸上競技選手のパフォーマンスと技術を分析するとともに、陸上競技及び他競技にも応用できる研究知見を創出することを目的とした。科学委員会では全ての種目を対象として研究が計画されたが、本研究は特に短距離・リレー、棒高跳、やり投に着目した。

2. 方法

世界陸上 2025 における研究活動の実施に際して、同大会を主催する World Athletics（WA）からの承認取得が課題となった。日本陸上競技連盟が WA との交渉にあたったが、様々な要因が影響し、研究対象とすることができる種目が限られることとなった。その中で JISS が関わる研究の対象とすることができたのは、男女 4 × 100m リレーのみであった。同種目は大会期間終盤に実施され、男女ともに予選が 9 月 20 日、決勝が大会最終日である 9 月 21 日のトラック最終種目として行われた。

4 × 100m リレーのパフォーマンス分析には、2024 年度に本研究で開発をした短距離種目向けの動作分析手法を用いた。これは、広範囲での 3 次元動作分析を可能とするものであり、走者の400mトラック上での位置を計測することが可能である。4 × 100m リレー出場チームの各走者の位置を時々刻々と捉え、個人走ゾーン及びテイクオーバーゾーンにおける走速度の推移や走者間距離を分析した。本計測で収集したデータは、現在 WA の確認及び公開承認の検討を受けている段階であり、これが完了した後には、JISS、日本陸上競技連盟、WA の 3 者による共同研究の成果として公開する予定である。

3. まとめ

4 × 100m リレーに限れば、本研究は世界一流チームを対象としてパフォーマンスを分析し、その優れた技術の分析を実施することができた。日本陸上競技連盟及び WA からの多大な協力が、これを達成することには不可欠であった。共同研究を進める中で得られた組織間の繋がりは、本研究の重要な成果物のひとつであり、同様の研究を今後も進める際に重要な鍵となるだろう。

短距離、棒高跳、やり投及びその他のスタジアム種目に関しては、世界陸上 2025 ではデータ収集が叶わなかった。しかしながら、2024 年度より各種目の計測方法の検討を慎重に進めてきた中で、新開発された測定技術及び日本選手権大会などの国内主要競技会にて試験的に収集した日本一流陸上競技選手データは、重要な成果物となった。特に、短距離種目向けに開発した広範囲での動作分析を実現させる測定技術は、特許第 7628739 号として認定され、陸上競技のみでなく様々な競技における動作分析、パフォーマンス分析への活用が期待される。

また、本研究の主内容と並行して、世界陸上 2025 の東京開催が実現させた副次的な研究もあった。その一例には、世界一流陸上競技選手のフィットネス計測が挙げられる。少例ではあるものの、大会参加のために来日した世界一流の選手を対象として、形態計測、身体組成、ジャンプ力などのフィットネス計測を実施した。日本人選手と比較して明確な身体資源（筋量）及び身体能力の差異が認められ、国際競技力向上への示唆に富む貴重な資料となった。国外の研究者やチームとの情報交換、連携が重要であることを改めて理解する契機となった。

本研究で得られたデータは分析を進め、2026 年度以降に公表を進める予定である。大規模な世界大会が国内で開催される希少な機会を活用し、貴重な成果を多く得ることができたことは、特別プロジェクトとして実施した本研究の大きな意義であった。本研究で得た経験と学びを、今後の機会に活かしていきたい。

（文責　松林　武生）

❸ 萌芽研究

1. 背景・目的

JISS では、JISS が重点的かつ時限的に取り組む研究テーマとして「研究の柱」を掲げている。そして、将来的に「研究の柱」につながる小規模な萌芽的研究として「萌芽研究」を設けた。原則として、研究期間は 1 年であり、JISS の施設・設備・機器・装置等を活用して実施できる研究である。

2025 年度は、以下の 6 件の研究を実施した。

2. 実施概要

研 究 課 題 名	研 究 代 表 者
Vision Transformer をもちいた大腿骨格筋断面積測定 AI モデルの改善	笠原　順（医学研究部門）
膝関節を対象としたエコーガイド下徒手的外反ストレステストの精度検証	後藤　和海（医学研究部門）
アスリートのウェルビーイング調査質問紙の有効性解明に関する予備的調査研究	山口　達也（医学研究部門）
垂直ジャンプ能力に寄与するフィットネス構成要素の検討	松林　武生（科学研究部門）
車いすテニスアスリートの実力発揮プロセスの解明	冨永　哲志（医学研究部門）
国内トップレベルの高校野球選手における夏季練習時の脱水状態と水分補給に関する実態調査	廣松　千愛（医学研究部門）

（文責　事務部事業推進課）

❹ 科学研究費助成事業

1. 背景・目的

JISS では、内部の研究費以外に科学研究費助成事業による学術研究助成基金助成金及び科学研究費補助金を積極的に獲得するよう努めている。

2025 年度は、以下の 51 件（内、新規 19 件、継続 9 件、延長・再延長 5 件、分担 18 件）の研究を実施した。

2. 実施概要

区　分	研　究　課　題　名	研 究 員 名
基盤研究 (B)	唾液中の時計遺伝子由来のタンパクを用いた疲労および概日リズムの新評価法の開発	清水　和弘（科学研究部門） 花岡　裕吉（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	日本人メダリストの競技パフォーマンスに関わるレアバリアントの探索	大岩　奈青（科学研究部門）
基盤研究 (C)	車いすアスリートの有酸素性能力を適切に評価するためのテストプロトコルの開発	尾崎　宏樹（科学研究部門） 袴田　智子（科学研究部門）※ 亀田　麻依（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	一流長距離走者のランニングエコノミーに下肢筋群の活動パターンと酸素化動態から迫る	安藤　良介（科学研究部門）
基盤研究 (C)	トップアスリートの下肢のカー速度特性とその評価を基にしたトレーニング効果の検証	山下　大地（科学研究部門）
基盤研究 (C)	プライオメトリクスの効果を引き出すための視覚情報による即時フィードバック法の開発	吉田　拓矢（科学研究部門）
基盤研究 (C)	トップアスリートの睡眠のスクリーニングに関する研究および疫学調査	星川　雅子（科学研究部門）
基盤研究 (C)	アスリートの腸内細菌叢と主観的ストレス・リカバリー評価によるコンディションの関係	谷村　祐子（科学研究部門）
基盤研究 (C)	アスリートに対する集団コンパッショネイト・マインド・トレーニングプログラムの開発	本郷　由貴（医学研究部門）
若手研究	汎用性に優れた新たな持久性能力評価法の開発	山岸　卓樹（科学研究部門）
若手研究	順動力学的貢献分析の指導現場への応用～サッカーゴールキーパー指導を例にして～	沼津　直樹（科学研究部門）
若手研究	継続的なパラスポーツ実施による身体機能の変化：脊髄損傷シットスキー選手の事例研究	中島　大貴（科学研究部門）
若手研究	女性ランナーにおける月経周期がコンディション評価指標に及ぼす影響の検討	門馬　怜子（科学研究部門）
若手研究	トップアスリートの誇りの感情経験が長期目標達成行動に与える影響の解明	近藤　みどり（医学研究部門）
若手研究	高強度インターバルトレーニングにおける新強度指標の開発	白木　駿佑（科学研究部門）
若手研究	アイススラリー摂取によるプレクーリングがその後の体温上昇速度に与える要因	岩田　理沙（科学研究部門）
若手研究	アスリートの身体疲労コンディショニングにおける効果的な入浴方法の確立	玉井　伸典（科学研究部門）

区 分	研 究 課 題 名	研 究 員 名
若手研究	車いすアスリートの上肢筋力・筋パワーの新たな評価方法の確立	亀田 麻依（科学研究部門）
若手研究	解剖学的構造を考慮したインソール着用における筋活動変化	秋山 圭（科学研究部門）
若手研究	Changes in neuromuscular function and muscle architecture with isoinertial flywheel training at different inertia and associated changes in sprint, jump, and change of direction performance.	ヘンダーソン フレデリック（科学研究部門）
若手研究	日本人アスリートの血中ビタミン D 濃度に最も強く影響する因子は何か？	妙圓園 香苗（医学研究部門）
若手研究	運動が口腔粘膜の時計遺伝子発現“リズム”に及ぼす影響の解明	田中 喜晃（科学研究部門）
若手研究	ストレッチングと入浴が筋粘弾性に与える影響：コンディショニング指標の確立に向けて	小出所 大樹（科学研究部門）
若手研究	採点競技における芸術性の定量化 ー三次元動作解析と印象評価による検証ー	鍔木 悠里奈（科学研究部門）
若手研究	上半身の爆発的な力・パワー発揮を誘発するメディシンボール投げトレーニング法の開発	景行 崇文（科学研究部門）
若手研究	腰椎分離症の早期発見と骨癒合率向上のための運動器検診システムの構築と評価	青柳 壮志 （科学研究部門）
若手研究	アスリートにおける運動に伴う消化吸収機能の重要性：疲労との関連の探索	小島 千尋（科学研究部門）
若手研究	妊娠から産後にかけたエネルギー代謝調整の解明：生殖機能と免疫機能との関連性の検討	内沢 彰子（科学研究部門）
研究活動スタート支援	せん断波イメージングを用いた骨格筋における粘性要素の定量的な画像評価法の確立	小出所 大樹（科学研究部門）
研究活動スタート支援	口腔粘膜の時計遺伝子は運動の影響を受けるか？：スポーツ現場への実装を目指して	田中 喜晃（科学研究部門）
研究活動スタート支援	ヒトの遠投能力を規定する下肢運動力学の解明	牧野 瑞輝（科学研究部門）
特別研究員奨励費	アスリートの妊娠・出産に伴う免疫機能の代償的反応とエネルギー代謝適応の解明	内沢 彰子（科学研究部門）
特別研究員奨励費	呼吸ポンプ作用の変容に伴う認知症発症および予防メカニズムの解明	星 大輔（科学研究部門）
基盤研究（B）（分担者）	暑熱環境下での運動能力低下の要因と身体冷却の中枢性作用機序の解明	中村 真理子（科学研究部門）※
基盤研究（B）（分担者）	若年期ライフステージのエネルギー代謝適応と生殖機能、免疫機能との関連性の解明	清水 和弘（科学研究部門）※
基盤研究（B）（分担者）	アスリートの鉄欠乏予防のための栄養戦略：科学と実践の融合	亀井 明子（医学研究部門）※
基盤研究（B）（分担者）	アスリートの鉄欠乏予防のための栄養戦略：科学と実践の融合	小島 千尋（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	非侵襲計測機器データを活用した教授スキル改善のための評価基準策定	松林 武生（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	日焼けは運動パフォーマンスを低下させるか？	清水 和弘（科学研究部門）※

区　分	研　究　課　題　名	研 究 員 名
基盤研究 (C) （分担者）	卓球サービスにおける打球後のフェイント動作による回転偽装	稲葉　優希（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	審判員のコミュニケーションスキル向上プログラムの開発と効果検証	立谷　泰久（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	長距離走者のパフォーマンスに及ぼすスプリントトレーニングの効果の解明	安藤　良介（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	自転車競技短距離選手のギア比選択のための客観的指標の開発と応用	横澤　俊治（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	中嶋　耕平（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	蒲原　一之（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	ヒトの移動運動における体幹腰背部の役割の解明	安藤　良介（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	ジャンパー膝の予防と早期治療介入の検証：超音波所見の経時的変化と跳躍負荷との関係	西田　雄亮（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	若年女性の体型、姿勢、身体組成が美的印象に与える影響	袴田　智子（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	大規模データを用いたエリートアスリートの心電図評価ー心臓突然死を防ぐためにー	福嶋　一剛（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	アバターを用いた簡易的な身体形状推定に基づく身体部分慣性特性の推定	横澤　俊治（科学研究部門）※
挑戦的研究（萌芽） （分担者）	筋・腱弾性を指標としたタレント発掘基準の策定：新規ミオトノメーターの有用性の確立	大岩　奈青（科学研究部門）※

※研究分担者

（文責　事務部事業推進課）

❺ 民間団体研究助成金等

1. 背景・目的

JISS では、内部の研究費や科学研究費助成事業による学術研究助成基金助成金及び科学研究費補助金以外に、民間団体の研究助成金等外部研究資金を積極的に獲得するよう努めている。

2025 年度は、以下のとおり JISS として 1 件、個人として 7 件の研究を実施した。

2. 実施概要

〈JISS〉

研 究 テ ー マ	助 成 団 体 名	担 当 研 究 員 名
アスリート育成パスウェイの充実に関する研究 ※研究の柱の一部として実施	公益財団法人ミズノスポーツ振興財団	山下　修平（科学研究部門）

〈個人〉

研 究 テ ー マ	助 成 団 体 名	担 当 研 究 員 名
女性サッカー選手の脳振盪調査	公益社団法人日本スポーツ医学財団	福嶋　一剛（医学研究部門）
スピードスケートの高い滑走速度を生み出す関節パワー発揮特性の解明	公益財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団	木村　裕也（科学研究部門）
アスリートにおける脳疲労回復メカニズムの解明：脳老廃物排出に着目して	公益財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団	星　大輔（科学研究部門）
妊娠から産後にかけたエネルギー代謝調整の解明：生殖機能と免疫機能との関連性の検討	公益社団法人日本栄養・食糧学会	内沢　彰子（科学研究部門）
陸上競技 400m 競技者のスピード持久力を評価するテストの開発	日本コーチング学会	白木　駿佑（科学研究部門）
自転車運動のエネルギー消費量はシティサイクルと電動アシスト自転車でどの程度異なるのか - 実走速度および傾斜の変化とエネルギーコストの関係に着目して -	公益財団法人明治安田厚生事業団	神庭　睦実（科学研究部門）
ランニング前後のアキレス腱および下腿三頭筋の弾性の変化	ランニング学会	後藤　晴彦（科学研究部門）

（文責　事務部事業推進課）

(2) 先端技術を活用したHPSC基盤強化事業

スポーツ庁委託事業

1. 背景・目的

2016年10月、スポーツ庁において、「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）－2020年以降を見通した強力で持続可能な支援体制の構築－」が策定された。これに基づき、HPSCでは、2017年度より「ハイパフォーマンスセンターの基盤整備」事業を受託し、HPSCの機能強化・充実を図ってきた。2021年度からは「スポーツ支援強靭化のための基盤整備事業」を受託し、ポストコロナを見据えつつ、更なる機能強化や環境整備を実施してきた。これらの取組は、平昌2018大会、東京2020大会及び北京2022大会における日本代表選手団の好成績へ寄与する一因となった。

また、2021年12月には「持続可能な国際競技力向上プラン」がスポーツ庁において策定され、東京2020大会での好成績を一過性のものとしないため、デジタル技術の積極的な活用等を通じてスポーツ医・科学、情報等の知見に基づく質の高いトレーニング環境の整備等を行うなど、我が国の国際競技力の維持・向上のための今後の支援方策が取りまとめられた。

上記の新たなプランやミラノ・コルティナ2026大会やロサンゼルス2028大会も踏まえ、最新のスポーツ医・科学、情報支援の知見に基づく包括的なトータルコンディショニングの支援の実効化に向けて、場所や時間を問わずに行うことができる支援基盤の体系化のための調査研究、デジタル・映像技術等を活用した支援の開発と提供方法等の実証研究、また、競技用具等の研究、開発等を通じて、HPSCのスポーツ医･科学、情報支援の基盤を強化し、これらに取り組むことで持続可能な国際競技力の向上を目指すことを目的とする。

また、ハイパフォーマンス領域（トップアスリートへの支援等）で得られたスポーツ医・科学、情報等に係る知見を、最終的にはアスリートだけでなく一般の人々が日常生活で抱える課題の解決等に生かされ、社会全体のライフパフォーマンスの向上に寄与することを目指す。さらに、国際オリンピック委員会（以下「IOC」という。）がオリンピズムの理念の基、推進しているｅスポーツについて、我が国も他国に後れを取らないよう、選手に対する医・科学支援手法の開発を目指す。

本事業は、スポーツ庁と協議の上実施するものとし、既存のHPSC事業と連動させ、最新のスポーツ医・科学、情報支援を駆使した分野融合型（Inter-disciplinary）のトータルコンディショニング支援基盤を構築、実効化し、アスリート及びコーチ等に対して定常的に支援を提供することで持続可能な国際競技力向上に貢献するものである。

2. 概要

(1) 先端技術を活用したコンディショニング基盤実証研究

①分野融合型支援の実施体制の整備

2024年度に設置した有識者会議を継続して開催し、HPSCの既存の支援基盤を踏まえ、最新の医・科学、情報等の支援及び本事業の課題解決に関する知見や経験則について助言を得た。あわせて、HPSCのトータルコンディショニング支援の枠組みの実装推進に向け、国内外の類似組織、有識者、NF、アスリート等を対象とした調査研究及び比較検討を行い、新たな支援システムの開発に向けた検討を行った。さらに、HPSC既存施設の機能活用、HPSC内の部署間における専門家同士の連携、大学・企業等の外部資源の活用について検討を進めた。

また、協働チームによるコンサルテーションを通じてNFの課題の明確化を進めるとともに、分野融合型支援の実施体制の整備に取り組んだ。具体的には、支援をコーディネートする人材（支援統括（仮））の役割を明確化し､HPSC専門家リスト（仮）を作成したほか、HPSCの既存事業との連携強化及びHPSC内外の専門家間の連携推進を行った。

②コンディショニング支援手法に関する研究・開発

アセスメントを通じてアスリート個別の特性や課題の明確化を図るとともに、必要な支援手法の確立に向けて、概念を形成した4分野を含む支援分野を統合した「HPSCパフォーマンス支援モデル（仮）」の開発を推進した。具体的には、個々のアスリートの特性や課題を明確化する多面的なアセスメント手法の確立、既存の支援手法の整理及び新規支援手法の開発・検証、既存のモニタリング指標・評価基準の整理並びに新たな指標（パフォーマンスヘルス指標等）及び評価基準の開発・検証に取り組んだ。これらの知見は、将来的にアスリートが自らの端末等で自律的に活用できる「ポケットHPSC（仮）」の実装に向けた基盤となるものである。

③コンディショニング支援手法の効果検証

開発したコンディショニング支援手法の共有及び運用を含めた実証研究の検討・実施を進めた。また、実証研究を通じて、ミラノ・コルティナ2026大会及びロサンゼルス2028大会等に向けた、より実践的な支援への活用について検討を行った。

(2) デジタル・映像技術を用いた支援方法の研究

①デジタル技術・先端映像技術を用いた支援手法に関する研究

スポーツクライミングを対象に、映像解析と力解析を軸とした競技支援基盤の構築を進めた。映像解析では、タブレットのみで撮影から分析・フィードバックまで完結する iOS アプリ「Speed Analyzer」を開発し、強化指定選手・コーチの端末に導入して日常的な活用に至った。定量データに基づく振り返りにより、区間・局面ごとの課題把握が可能となり、競技団体の強化戦略にも位置付けられている。力解析では、スタート局面における手部・足部・床面の力発揮を一体的に計測する環境を構築し、可視化ツールを通じて選手・コーチに提示した。力の大きさ・向き・タイミングを試技間で比較でき、個人に適した動作の模索を支援する基盤を整えた。有用性についても高い評価を得ている。学術面では国際学会を含む発表 12 件と受賞 3 件の成果を得た。本取組の支援対象選手がワールドカップでメダルを獲得するなど、競技力向上への寄与も確認されつつある。

② AI を用いた戦術分析や戦術トレーニング支援に関する研究

カーリングはショット選択や局面判断が勝敗を左右する競技であり、データに基づく戦術支援の有効性が高い。そこで本取組では、カーリングを対象として、AI を活用した戦術分析・競技支援技術の研究を進めた。試合局面をシミュレーションできる AI 開発基盤 DigitalCurling4 を整備・公開し、4 人制に加えミックスダブルスにも対応した。データセットの拡充や強化学習等により思考性能が大きく向上した戦術 AI を実現し、局面評価や最適ショットを提案するアプリケーションの試作も進めた。さらに、映像解析 AI でストーン軌道を自動追跡するシステムを整備し、タブレット端末のみで戦術分析まで完結できる環境を構築した。ミラノ・コルティナ 2026 大会最終予選では日本代表チームがこれらの技術を使用し、実用性を示した。大阪・関西万博では一般来場者が戦術 AI と対戦できる展示を実施し、社会実装の可能性も示した。学術面では国際学会を含む発表 41 件と受賞 6 件の成果を得た。

(3) 競技用具等の研究

①冬季競技ウエアの空気力学的機能向上のための研究

本プロジェクトは、スキージャンプ及びスピードスケートを対象に、生地及び形状を最適化することによって、空気力学的に優れた競技用ウエアを開発することを目的としている。2025 年度は、スキージャンプ用のサンプル生地を入手し、表面形状等の物性試験や空力比較を行った。生地内部の X 線 CT 解析を行い内部のスポンジ気泡サイズを可視化した例を図に示す。また、新ルールに適合したパターンにてプロトタイプのスーツを製造し、フィールドテストを実施した。

スピードスケートウエア用の新規生地では、下生地と重ね生地の組み合わせについて脚模型を用いた風洞実験を行い、空力比較を実施し、最適な伸張率による組み合わせを明らかにした。

スキージャンプ及びスピードスケートでは、これらの知見を用いた製品を選手に提供し、実際のミラノ・コルティナ 2026 大会でも使用された。

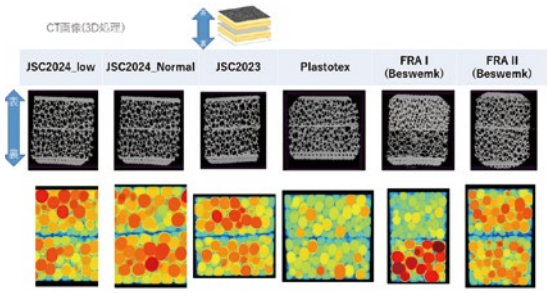


図　ジャンプスーツ生地の CT 解析結果

②パラアルペンスキーにおけるパフォーマンス向上のための用具等開発研究（シットスキーの開発）

本プロジェクトは 2022 年に開催された北京 2022 パラリンピックにおける我が国のパラアルペンスキーナショナルチームの国際競技力を踏まえ、ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックに向けて、日本人選手専用の用具を開発・研究することによって、雪上でのパフォーマンスをより高め、結果として我が国代表選手の国際競技力向上に寄与することを目的とした。具体的には、ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックにおける新たなシットスキーフレーム及びアウトリガーの実装を目指し様々な取組を実施した。

シットスキーフレームの開発・研究においては、全面的な設計の見直しを行い、東京都立産業技術研究センターにおける強度テストや JISS 風洞実験棟における空気力学的計測、雪上でのテストを通じて 2025 年度のモデルの性能評価を行った。また、2024 年度に引き続き、国際スキー・スノーボード連盟への用具登録を行った。2025 年度は例年よりも申請の締め切りが 2 か月程度前倒しとなったが、そちらに対しても適切に対応し、無事用具申請が了承された。開発品を使用した選手がミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックに出場し、全 5 競技において開発品を使用し、スラローム競技において銅メダルを獲得した。

アウトリガーの開発・研究においては、3

名の選手に対して、それぞれの選手の様々なリクエストに応じて、改良をパラリンピック直前まで続けた。また、開発企業において強度テストを実施し、想定以上の強度が出ていることを確認した。シットスキーフレームと同様に、2025 年度初めて国際スキー・スノーボード連盟への用具登録を行い、無事承認された。ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックに 3 選手それぞれにカスタマイズしたアウトリガーを持ち込み、パラリンピック期間中の雪上トレーニング、レース当日のアップ、ダウンヒル競技の公式トレーニングにおいて開発品を 3 選手とも使用した。

③パラアルペンスキーにおける VR システムの開発

ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックに向け、パラアルペンスキー競技を対象とした VR トレーニングシステムを構築し、国内外で運用した。実際の競技会場及びコースを再現し、事前のコース理解や心理的準備に活用され、現地トレーニング機会の補完に寄与した。さらに、怪我等により滑走が困難な状況においても、トレーニング手段としての有効性が示唆された。今後は効果検証、機能拡張及び他競技への応用について検討を進める。

(4) e スポーツ選手に対する医・科学支援に関する実証研究

本プロジェクトでは、急速に変化する e スポーツを取り巻く国内外の動向を適切に把握するとともに、HPSC が有するスポーツ医・科学に関する研究や支援の知見・技術を応用して e スポーツのアスリートやコーチ等に対する効果的・効率的な支援手法等を検討することを目的とした。

IOC は、2027 年まで開催延期を発表していたオリンピック e スポーツゲームズについて、一時は準備が進展している様子であったものの、開催予定地であったサウジアラビア側との協力関係を解消したことで、計画は再検討の段階に入った。また、国際競技連盟 (IF) における e スポーツへの関与姿勢は、競技団体ごとに大きく異なっており、その差異はこれまで以上に鮮明になってきていることが確認された。加えて、国際的な e スポーツの動向は、「検討段階」から「実装段階」へと移行しつつあり、各団体の方針や取組の多様化が進んでいる。今後は、国際レベルにおける議論の整理と方向性の明確化が一層求められる状況にある。

このような国際動向について、NF と共有するとともに、各団体における e スポーツの取組や課題についての意見交換を行ったが、バーチャルスポーツを含む e スポーツは、「選手の発掘」「新たなトレーニング手法」「参加人口の拡大」「研究の高度化」といった側面からリアル競技の強化に貢献し得るものであることが確認されるとともに、「多様性・包摂性の向上」「社会課題の解決」「スポーツの裾野拡大」において大きな可能性が示された。

国内外で開催された e スポーツに関する大会やイベントの機会を活用した調査を通じて、競技力の向上を下支えするコンディショニングの重要性が確認されるとともに、競技タイトルごとの特性に応じた支援を充実させることの必要性が確認された。また、日本 e スポーツ協会と連携し、第 20 回アジア競技大会に出場する可能性のある選手を対象に、実技や測定を含む講義形式の NTC 合宿を 2 回実施した。スポーツ医・科学に関するリテラシー向上と、日常生活における実践につながる行動変容を目的として実施した。合宿前から 3 か月後までの追跡調査では、講義前には関心の低かった項目についても、生活やトレーニングに取り入れる選手がみられた。HPSC が有するスポーツ医・科学支援の知見や技術が、e スポーツのアスリートに対しても有効である可能性が示された。



写真　NTC 合宿の様子

3. 実施体制

JISS スポーツ科学研究部門を主担当部署とし、各プロジェクトに責任者となる研究員及び担当者を配置し、競技団体、企業等と協力してプロジェクトを推進した。また、ハイパフォーマンス戦略部や国際情報戦略部が調査などで、連携・協働推進部がカンファレンス等の開催や広報などで事業推進に協力している。四半期に一度、JISS 所長を含めた推進会議を実施し、事業計画の意思決定及び変更の承認を行った。

（文責　スポーツ科学研究部門）

8 スポーツ診療事業

スポーツ診療事業はスポーツ医学研究部門が担当し、スポーツクリニックによるメディカルチェック（MC）と外来診療及びコンディショニングチームの分野連携によるコンディショニングサポートとコンディショニングスペースの運営、その他外部連携や研究活動を含む。2025 年度からは「パラアスリートのスポーツ医･科学支援強化事業」による JISS スポーツクリニック EAST を中心とした診療･支援体制の強化も追加して取り組んだ。

（1）メディカルチェック

アスリートのコンディションを診察や検査・測定などによって評価し、抽出された課題に対し、適切なアドバイスを提供することを目的として、MC を実施している。国際総合競技大会に派遣される選手は、大会参加前に MC を受診することが義務付けられており、特にオリンピック競技では原則として当施設で MC を実施することになっている。JOC との協議により 2022 年度以降、同一年度内に複数の国際競技大会に出場することになった場合でも、当該競技大会最終日より遡って 1 年前以内に JISS で実施された MC であれば、派遣前の MC として取り扱うこととするなど、NF 若しくは選手の自主的、計画的な MC 受診の促進を図っている。パラリンピック競技については、これまでの派遣前 MC の実施体制や選手の移動負担を考慮し、当施設以外で実施した MC も派遣前 MC として取り扱われている。

2025 年度は MC の重複実施がなくなったことに加え、ミラノ・コルティナ 2026 大会の開催もあったため、MC 全体の実施件数は 1,281 件と 2024 年度（1,172 件）とほぼ同等の数値であった。男女比では、オリンピック競技で 51.2%（2024 年度：47.5%）、パラリンピック競技で 27.5%（2024 年度 45.5%）が女子選手であった。オリ・パラ比ではパラアスリートは 5.4%（2024 年度 0.9%）と 2024 年度より大幅に増加したが、パラ競技では MC の実施が当施設に限定されていないため受診比率は低い値となっている（表 1）。

表 1　2025 年度メディカルチェック内訳

（単位：件）

	男子	女子	計
オリンピック競技	592	620	1,212
夏季競技	428	461	889
冬季競技	164	159	323
パラリンピック競技	50	19	69
夏季競技	45	17	62
冬季競技	5	2	7
合計	642	639	1,281
夏季競技	473	478	951
冬季競技	169	161	330

（2）外来診療（JISS スポーツクリニック・スポーツクリニック EAST）

内科、整形外科、歯科（5 日 / 週）、皮膚科（2 日 / 週）、婦人科（3 日 / 週）、心療内科（3 ～ 4 日 / 週）、脳神経外科（2 ～ 4 日 / 月）、眼科（2 日 / 月）、アスレティック・リハビリテーション（5 日 / 週）及び心理カウンセリング（4 日 / 週、うち 1 日は JOC エリートアカデミー枠）の診療科を置き、栄養相談は医師の指示により随時行っている。このうち、心療内科、心理カウンセリング、眼科については「パラアスリートのスポーツ医・科学支援強化事業」として、JISS スポーツクリニック EAST の診療機能の強化を図った。外来診療は予約制の自由診療であるが、料金は保険診療点数に基づいて算出し、3 割相当額を徴収している。2025 年度の延べ受診件数は 17,252 件（2024 年度は 13,385 件）と増加した。

1．診療部門別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

診療部門	受診件数	診療部門	受診件数
内科	1,767	脳神経外科	107
整形外科	3,916	心療内科	259
歯科	918	心理カウンセリング	340
婦人科	737	リハビリ	8,781
皮膚科	343	栄養相談	72
眼科	12	合計	17,252

2. 対象者別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

区分	JOC強化指定選手	NF強化指定選手	JPC強化指定選手	その他※	合計
受診者数	9,357	6,114	1,677	104	17,252
割合（%）	54.24%	35.44%	9.72%	0.60%	100.00%

※その他：コーチ・スタッフ等JISSの認めた者。

3. 月別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

種別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
オリ	1,185	1,349	1,478	1,502	1,237	1,192	1,474	1,101	1,222	1,163	1,155	1,413	15,471
夏季	963	1,098	1,211	1,286	1,058	978	1,166	955	1,020	964	965	1,109	12,773
冬季	222	251	267	216	179	214	308	146	202	199	190	304	2,698
パラ	168	150	159	170	103	149	144	117	120	135	117	145	1,677
夏季	164	138	125	126	85	126	136	105	118	116	86	137	1,462
冬季	4	12	34	44	18	23	8	12	2	19	31	8	215
その他※	1	4	2	2	0	9	18	33	21	8	3	3	104
合計	1,354	1,503	1,639	1,674	1,340	1,350	1,636	1,251	1,363	1,306	1,275	1,561	17,252

※その他：コーチ・スタッフ等JISSの認めた者。

4. 検査部門の実績

①臨床検査部門モダリティ別件数（延べ件数）

（単位：件）

検査	診療	チェック・支援	研究・その他	合計
検体検査※1	984	2,581	120	3,685
生理検査※2	228	2,684	32	2,944

※1 検体検査：血液検査、尿検査等
※2 生理検査：心電図、運動負荷心電図、呼吸機能検査、超音波検査等

②画像検査部門モダリティ別件数（延べ件数）

（単位：件）

モダリティ	診療	チェック・支援	研究・その他	合計
MRI	1,770	442	377	2,589
一般撮影	762	1,475	31	2,268
CT/ 断層	104	0	0	104
骨塩定量	213	0	239	452

③ MRI の部位別件数（診療）

（単位：件）

頭頚部	肩甲帯	上腕・肘関節	前腕・手指	胸・背・腹部	腰仙部
108	145	73	123	65	256
骨盤・股関節	大腿	膝関節	下腿	足関節	足・趾
106	206	305	87	204	92

5. 薬剤部門月別処方件数（延べ件数）

（単位：件）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
処方数	248	266	255	296	239	248	258	234	252	219	242	231	2,988

6. アスリートリハビリテーション競技・種目別利用状況（延べ件数）

（単位：件）

競技・種目	件数	競技・種目	件数	競技・種目	件数
陸上競技	792	バドミントン	159	スキー（山岳）	3
競泳	82	射撃	94	スノーボード	156
飛込	117	近代五種	46	スピードスケート	1
水球	14	ラグビー	205	ショートトラック	4
アーティスティックスイミング	108	スポーツクライミング	126	ボブスレー	4
サッカー	547	カヌー	27	カーリング	7
テニス	246	アーチェリー	3	アイスホッケー	149
ローイング	1	トライアスロン	18	パラ - トライアスロン	19
ホッケー	115	テコンドー	113	パラ - 陸上競技	88
ボクシング	135	サーフィン	13	パラ - バドミントン	104
バレーボール	68	スケートボード	27	パラ - カヌー	57
ビーチバレー	15	スピード（ローラースポーツ）	1	パラ - サッカー	134
体操競技	4	太極拳	50	パラ - ゴールボール	72
新体操	164	ゴルフ	17	パラ - 柔道_視覚	76
トランポリン	208	スカッシュ	3	パラ - パワーリフティング	2
バスケットボール	130	ダンススポーツ	20	パラ - 水泳	5
レスリング	618	カバディ	66	パラ - 車いすバスケットボール	159
セーリング	33	セパタクロー	32	パラ - 車いすフェンシング	57
ウエイトリフティング	145	アメリカンフットボール	3	パラ - 車いすラグビー	16
ハンドボール	206	フィギュアスケート	18	パラ - 車いすテニス	50
卓球	59	スキー（アルペン）	394	パラ - アルペンスキー	81
フェンシング	551	スキー（クロスカントリー）	26	パラ - クロスカントリースキー	9
柔道	801	スキー（ノルディック複合）	98	パラ - スノーボード	4
ソフトボール	3	スキー（フリースタイル）	803	合計	8,781

（3）コンディショニング

1. コンディショニングチームのサポート

コンディショニングチームでは、以下の 2 つのサポートプログラムを実施している。

・TCSP（Total Conditioning Support Program）

外傷や障害、あるいは何らかの疾病によってリハビリテーションが必要となったアスリートに対して、トレーニング環境や競技現場に復帰する過程で複数分野（リハビリテーション、ハイパフォーマンス・ジム、トレーニング体育館、栄養、心理）から総合的なスポーツ医・科学支援を実施することで、復帰までの期間短縮のみでなく、復帰後の競技力を受傷前のレベル以上に向上させることを目指す。

・CCSP（Combined Conditioning Support Program）

従来 JISS で行っていた各分野によるサポートにおいても、積極的に複合的な連携サポートとして実施していくことで一層のサポート効果を引き出すことを目的とする。

2025 年度は各コンディショニングサポートで目標達成に対する評価を行い、分野間での共有ができるよう検討した。TCSP の内訳は 23（男性 6、女性 17）名であり、対象者について毎週症例検討会を実施し、進捗と課題を共有して各分野でのサポートに活かした。CCSP の内訳は 292（男性 120、女性 172）名であった。

表 2　2025 年度コンディショニングサポート内訳

（単位：名）

サポート種類	男性	女性	合計
TCSP	6	17	23
CCSP	120	172	292

2. コンディションングスペースの運営

コンディショニングチームでは、アスリートやコーチなどの NF スタッフと HPSC におけるコンディショニングに関わる研究や支援を実践している HPSC スタッフとの情報交換や相談及びコンディショニングの実践の場を提供することを目的として、コンディショニングスペースの運営を行っており、2025 年度は 6,872 件（2024 年度：5,805 件）のコンディショニングスペースの利用があった。

また、コンディショニングの研究・支援に携わる専門家からの情報提供を目的として「コンディショニングミニセミナー」を開催し、2025 年度は計 3 回のセミナーを開催した。開催したセミナー動画はコンディショニングスペースで放映し、いつでも視聴できるようにした。なお、2025 年度は初めての試みとして専門家同士が連携したセミナーを開催したところ満足度が高かった。引き続き今後も開催を検討したい。

表 3　2025 年度コンディショニングスペース利用（延べ件数）

カテゴリー	件数
オリンピック競技	5,322
パラリンピック競技	476
その他 (JOC・JPC スタッフなど)	32
HPSC スタッフ	1,042
合計	6,872

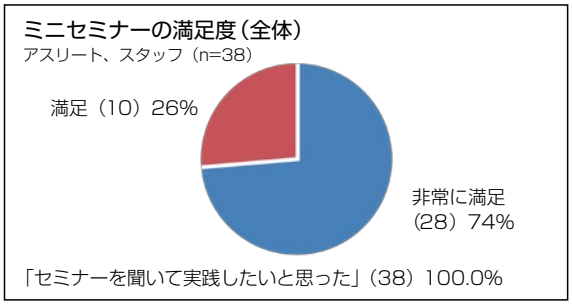


表 4　2025 年度コンディショニングミニセミナー一覧

開催月	テーマ	担当部署（講師）
7 月	アスリートのための暑熱対策	スポーツ科学研究部門コンディショニング研究グループ（岩田）
10 月	アスリートのためのメンタルヘルス	スポーツ医学研究部門臨床心理士（関口）
3 月	アスリートのためのむし歯予防と食事	スポーツ医学研究部門歯科衛生士（豊島）・公認スポーツ栄養士（濱野）

時間：15 分程度 / 回、人数：10 ～ 20 名程度 / 回

その他、コンディショニングスペースでは個別相談窓口を開設し、コンディショニングの研究・支援の専門家が対応している。2025 年度の個別対応件数は合計 14 件（睡眠相談 6 件、時差調整相談 6 件、免疫チェック 2 件）であり、冬季及び夏季競技、競技種目等関係なく幅広く選手からの相談があった。2026 年度も引き続き選手のコンディショニングに関する相談に対応できるよう環境を整えていきたい。

（4）内部会議・委員会

2025 年度は、スポーツ医学研究部門会を 12 回開催し、スポーツクリニックの各診療部門、コンディショニングチームの各部における情報共有及び共通課題の検討を行った。

スポーツクリニックにおいては、医療機関としてのコンプライアンス、ガバナンスの強化を目的として、クリニック運営会議（2 回 / 月）を実施し、その中の 6 つの委員会：①医療安全管理委員会、②院内感染防止対策委員会、③医療機器安全管理委員会、④医薬品安全管理委員会、⑤医療放射線安全管理委員会、⑥研修 / 外部連携委員会が定期的（1 回 / 月程度）に委員会を開催し、報告の共有や必須研修の実施及び管理を行った。

コンディショニングチームにおいては、毎週月曜日にミーティングを開催し、会議の前半にはトータルコンディショニングプログラムの適用となっている症例の進捗確認や課題共有、方針の検討を行い、後半は事務連絡や活動内容についての共有を行った。

（5）連携事業

連携事業は JOC や JPC などの統括団体及び NF の医事部門や競技現場と連携して、国内外での競技大会等へドクターやトレーナー等を派遣するなど、NF のメディカルスタッフとの連携を図るものである。

1. 国際総合競技大会における医療業務受託

2023 年度より外部連携として取り組んでいる国際総合競技大会における医務帯同においては、医療関連法規に遵守した安全で適正な医療の提供を目的として、新たに医療業務委託制度を導入している。本制度のメリットとしては、JISS スポーツクリニックにおける医療情報管理が大会期間中においても継続的に実施出来ること、医薬品や医療機器の管理者や責任者を明確にし、管理を徹底することで、過不足を減らし、効率的な医療資源の活用が期待できる点が挙げられる。FISU ワールドユニバーシティゲームズ 2025（ライン・ルール）、アジアユースゲームズ 2025（バーレーン）、アジアユースパラ競技大会 2025（ドバイ）、ミラノ・コルティナ 2026 オリンピック及びミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックの 5 大会で本制度による業務を受託した。

表 5　国際総合競技大会における医療業務委託

大会名	大会期間	選手団規模	メディカル体制
FISU ワールドユニバーシティゲームズ（ライン・ルール）	R7/7/16 ～ 7/27	393 名	Dr.4、Tr.2（JISS 常勤 Dr.1、Tr.1）
第 3 回アジアユースゲームズ（2025/ バーレーン）	R7/10/22 ～ 10/31	83 名	Dr.1（JISS 常勤 Dr.1）
ドバイ 2025 アジアユースパラ競技大会	R7/12/7 ～ 12/14	96 名	Dr.4、Tr.2、Nr.1（JISS 常勤 Dr.1）
第 25 回オリンピック冬季競技大会（2026/ ミラノ・コルティナ）	R8/2/6 ～ 2/22	283 名	Dr.3、Tr.1（JISS 常勤 Dr.1、Tr.1）
ミラノ・コルティナ 2026 冬季パラリンピック競技大会	R8/3/6 ～ 3/15	110 名	Dr.4、Tr.1、Nr.1、WO.1（JISS 常勤 Dr.1、Tr.1、WO.1）

※メディカル体制のうち医療業務受託の範囲は医師のみ。Dr.：医師、Tr.：トレーナー、Nr.：看護師、WO.：ウェルフェアオフィサー

2. 国際競技大会の帯同・国際連盟業務

医療業務受託以外の国内外の連携業務として下記の大会や事業に公務派遣を行った。

表 6 国際競技大会・国際競技連盟・国際会議等への派遣

イベント	内容	期間
2025 Asian Paracanoe Championships	国際連盟（クラス分け）業務	R7/6/7 ～ 6/16
1st APC Women in Sports Seminar 2025	国際会議	R7/7/31 ～ 8/3
EAOC Medical Committee Meeting and Medical Seminar	国際会議	R7/7/24 ～ 7/27
FISU ワールドユニバーシティゲームズ	トレーナー派遣	R7/7/16 ～ 7/27
2025 年シニア世界レスリング選手権大会	国際連盟（医事委員会）	R7/9/13 ～ 9/23
FIS 秋季ミーティング	国際連盟（医事委員会）	R7/9/21 ～ 9/27
U-17 日本代表 FIFA ワールドカップカタール 2025	ドクター派遣	R7/10/22 ～ 11/22
第 25 回オリンピック冬季競技大会（ミラノ・コルティナ）	トレーナー派遣	R8/1/26 ～ 2/25
パラリンピック冬季競技大会（ミラノ・コルティナ）	トレーナー派遣	R8/2/19 ～ 3/16
パラリンピック冬季競技大会（ミラノ・コルティナ）	ウエルフェアオフィサー派遣	R8/2/28 ～ 3/16
2026 Oceania Wrestling Championships	国際連盟（医事委員）	R8/3/17 ～ 3/23

3. アスリートの競技参加条件・資格への支援（Eligibility Support）

競技によってはアスリートが当該競技に参加するための条件が設定されている場合があり、医学的な評価が必要となる場合もある。競技団体からの依頼を受け、以下の 2 項目について医学的評価支援を行なった。

①パラアスリートのクラス分けに必要な MDF 作成

・視覚障害：5 件

②性別検査

・SRY 遺伝子検査（Sex-determining region Y；Y 染色体性決定領域遺伝子）：89 件（日本陸上競技連盟、日本ボクシング連盟）

4. 学会活動

・臨床スポーツ医学会（2025 年 11 月）…22 演題（シンポジウム：6、口演：8、ポスター：6、教育研修講演：1、セミナー：1）

（文責 中嶋 耕平、亀井 明子）

9　女性アスリート研究・支援プロジェクト

1. 背景

Female Athletes Research & Support Team（FARST）では、多職種が連携し「女性アスリート研究・支援プロジェクト」として8つのプログラムを推進した。2025年度は、本事業のスタッフを増員し各プログラムが円滑に進む体制を整えた。また、有識者会議を2回開催し、外部の有識者からプロジェクトの評価と助言を受け、プロジェクトの振り返りと2026年度の計画に反映した。以下、各プロクラムの2025年度の活動を下記に示す。

2. 実施概要

(1) 女性アスリート トータルサポート

MCで看護師がライフステージごとの相談や健康課題を個別に抽出し、各分野の専門家につなぎ課題を解決することを目的としたプログラムである。また、随時相談窓口を設け、情報提供や専門家の外来受診へつなぐ体制を整備している。2025年度MCを実施した女性アスリート639件中431件(67.4%)が課題を抱えており(図1)、431件中、看護師による情報提供・指導を行った選手は366名（85.1%)、JISSスポーツクリニックを受診した選手は62件（18.6%、全て婦人科62件）だった。本プログラムは2024年度から実施しているが、2回以上受診した選手183名のうち、前回と同様の課題が解決されていた選手は24.0%（44名)、解決されていなかった選手は14.8%（27名）であり、MC後の経過の把握が今後の課題である。相談窓口対応件数は、電話135件、来院での相談64件、Web8件、メール4件であり、電話相談は約半数が婦人科関連の相談であったが、その他、整形外科や心療内科、内科等多岐に渡る内容であった。本サポートの現状について、第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会で発表した。

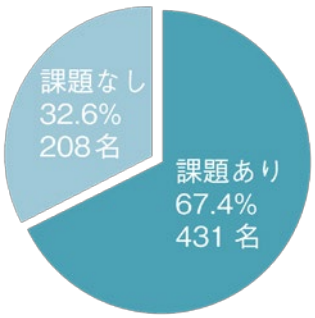


図1　MC時課題を抱えていた選手の割合（n=639）

(2) 妊娠期・産後 トータルサポート

産後競技復帰を目指すアスリートに対し、非妊娠時の身体機能やパフォーマンスの早期回復を目指し、サポートを行うプログラムである。2025年度の支援対象選手は12名（うちパラアスリート3名）で、妊娠期からサポートを開始した選手9名、産後からサポートを行った選手3名だった。サポート件数は全624件であり、内訳はトレーニング369件、リハビリテーション75件、医学69件、心理69件、栄養34件、コーディネーター8件と多職種の専門家が連携し産後12か月までサポートを実施した。JISSでは2014年から本サポートを実施しているが、サポート対象者は徐々に増加しており2025年度最も多かった（図2)。

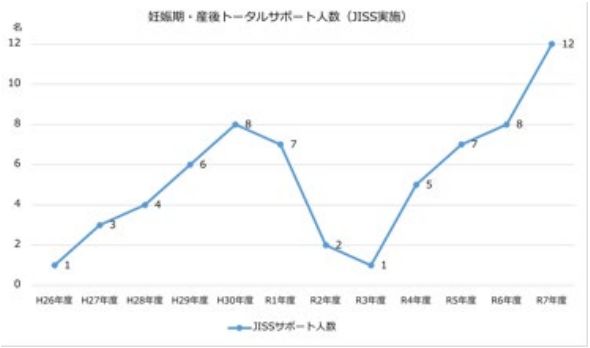


図2　サポート対象選手の推移

(3) 育児サポート

託児室や同伴宿泊についての環境整備や競技活動と育児の両立のための費用を補助するプログラムであり、2025年度から対象者を男性にも拡大しアスリートや指導者、スタッフが競技に集中できる環境整備を行った。支援対象者は24名（選手17名、スタッフ7名）で、育児サポート件数は88件、HPSC託児室の利用件数は、432件だった。また、JISS2階コンディショニングスペースと味の素NTC・イースト1階、アスリートビレッジ1階に授乳室を設置した。

(4) 女性アスリートの健康課題に関する理解促進

ライフステージごとにみられる女性アスリートの医科学的な問題に対する知識やJISSの知見を提供するプログラムである。2025年度は、アスリート / 指導者向けセミナーとして山口県スポーツ協会と2競技団体で講習会を実施し、アスリート・指導者69名が参加した。HPSカンファレンスでは、ハイパフォーマンスディレクターと考える競技団体による「女性アスリート支援」をテーマに、FARSTや他団体の取組についての情報提供を行うとともに、日本水泳連盟と日本パラ陸上競技連盟による具体的な取組について担当者から紹介していただいた。

(5) 女性アスリート支援ネットワーク

各地域の女性アスリート支援や連携体制の構築を図るプログラムであり、モデル地域3か所（北海道、新潟県、宮崎県）とのミーティングを実施し、地域とのネットワーク構築に向けた意見交換を行った。また、オーストラリア、アメリカ、英国、ニュージーランドが、世界の女性アスリートの健康とパフォーマンス向上を目的に結成したGlobal Alliance for Female Athletes（GAFA）にContributing Partnerとして参画するための手続きを行い、2026年3月にオーストラリアのブリスベンで開催されたWomen in Sport Congress（WISC2026）でGAFAメンバーと情報交換を行うとともにGAFA主催の会議に出席した。

(6) 事業推進に係る調査・研究の推進

診療や支援で得られた課題に対しそれらの解決や提言に繋げる研究を実施し、その成果の実装を通し、より高度な支援を目指すプログラムである。

Ⅰ.産後競技復帰を目指す女性アスリートのためのトレーニング・サポートプログラムの開発の研究は、25名を対象に各分野の専門家が測定を行った。2014年から2023年度に妊娠期・産後のサポートを実施した約20名の医科学データについて解析を行い、2025年6月2日～6日にボストンで開催されたFemale Athlete Conference2025で4演題発表した。また、2025年度外部研究者との勉強会・意見交換会を4回開催した。

Ⅱ.相対的エネルギー不足に伴う無月経の女性アスリートに対する糖付加がエネルギー代謝及びホルモン値に及ぼす影響とⅢ.内因性及び外因性の女性ホルモンがグリコーゲン代謝に及ぼす影響についての研究については、被検者のリクルートが難しくプロトコールや対象者についての見直しを行い、倫理審査委員会に変更手続を行った。

2008年から2024年までの期間に開催されたオリンピックに出場した女子選手のメディカルチェックを解析し、「月経対策や治療を目的としたホルモン製剤の使用率」と「月経随伴症状・月経周期異常の有病率」に関するデータを論文化した。

(7) オンラインプラットフォームの整備

女性アスリートの支援に関する情報の一元化や、女性アスリートやアスリートを取り巻くコーチやスタッフ、保護者への情報提供による知識獲得、課題解決を図るプログラムである。過去にJISSで発行した女性アスリートに関する刊行物を整理・アップデートした電子ブック版「女性アスリートFARSTガイド（ベーシック編）」（図3）を、2026年3月に「Female Sportナビ」にリリースした。また、Female SportナビやInstagramでスポーツ医学・栄養学・心理学等に関する25記事を配信した。

(8) 広報・情報発信

女性アスリート研究・支援プロジェクトの活動内容、成果について情報発信し本プロジェクトを広く周知するプログラムである。2025年度は、JAPAN SPORT NETWORK参加自治体へ本プロジェクトについて情報提供を行うとともに学会やJISS館内等チラシやステッカーを設置し事業の周知拡大を行った。



図3　女性アスリートＦＡＲＳＴガイド（ベーシック編）

3. 総括

2025年度の活動での成果の中で特筆すべきものは以下の3つであった。

・女性アスリートトータルサポートでは2024年度に引き続きMC時に女性アスリートに対して看護師によるインタビューを通し、スクリーニングを実施した結果、67%のアスリートが何からの課題を抱えていることが明らかとなった。2024年度の65%に引き続き、約2/3の女性アスリートが課題ありとしたことは、非常に重要な結果で、依然として多くの女性アスリートが婦人科関連の課題を抱えているもののこれを解決できていない可能性を示唆している。

・育児支援においては男性アスリートに対象を拡大した結果、特に男性のパラアスリートからの支援要望が多く上がってきた。これまで顕在化していなかった育児に関する課題が明らかになったことは大きな成果と言える。

・女性アスリート支援ネットワークでは国際的な女性アスリート支援の枠組みである「GAFA」への参画に至った。正式な調印は2026年度内を予定しているが、このことにより国際的な女性アスリート支援に関して海外機関との連携、情報共有が推進することが期待される。

（文責　能瀬　さやか、白井　克佳）

10　外部評価

（1）ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー

HPSC におけるスポーツ医・科学、情報に関する研究、研究の成果を活用した競技水準の向上のための支援等について、専門的見地からの意見又は助言等を得るため、外部専門家又は外部有識者に対して「ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー」を委嘱している。

2025 年度のハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザーは、次のとおりである。

ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー一覧（敬称略）

2026 年 3 月 31 日現在

氏　　名	所属等
相澤　勝治	専修大学経営学部　教授
赤間　高雄	早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学部　教授
秋本　崇之	早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学部　教授
有賀　誠司	東海大学健康学部　教授
枝川　　宏	医療法人社団慈眼白山会　えだがわ眼科クリニック　理事長
大田　　健	複十字病院　病院長
笠原　政志	国際武道大学体育学科　教授
片寄　正樹	札幌医科大学　理事・保健医療学部長
川原　　貴	一般社団法人大学スポーツ協会　副会長
久保 潤二郎	平成国際大学スポーツ健康学部　教授
河野　一郎	一般社団法人日本スポーツフェアネス推進機構　代表理事
近藤　尚知	愛知学院大学歯学部　教授
杉山　ちなみ	株式会社リボンプロジェクト　代表取締役社長
鈴木　　岳	株式会社 R-body　代表取締役
谷川　　聡	筑波大学体育系　准教授
友添　秀則	環太平洋大学体育学部　教授
中込　四郎	筑波大学　名誉教授
平松　竜司	東京大学大学院農学生命科学研究科　准教授
広瀬　統一	早稲田大学スポーツ科学学術院　教授
増田　雄一	株式会社リニアート　代表取締役
宮本　直和	早稲田大学スポーツ科学学術院　教授
森泉　貴博	クラーク記念国際高等学校男子体操部　監督 早稲田大学体操部　コーチ

（文責　HPSC 運営部運営調整課）

（2）ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会

HPSC は、国際競技力向上のための取組に関する評価について審議するため、外部有識者による「ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会」を設置している。

2025 年度事業の業績評価委員は次のとおりである。

ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員一覧（敬称略）

2026 年 3 月 31 日現在

氏　　名	所属等
上村　春樹	公益財団法人講道館　館長
佐野　慎輔	尚美学園大学　名誉教授
杉田　正明	日本体育大学　体育学部　体育学科　教授
柳下　和慶	東京科学大学病院　スポーツサイエンス部門長
結城　匡啓	信州大学　教育学部　スポーツ科学教育　教授
雪下　岳彦	順天堂大学　医学部・スポーツ健康科学部　医師・医学博士

（文責　HPSC 運営部運営調整課）

（3）国立スポーツ科学センター倫理審査委員会

JISS は、人を対象とするスポーツ医・科学研究が、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（令和 3 年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第 1 号。）に則しているかを科学的立場及び倫理的立場から審査するため、外部有識者と JISS 研究員で構成する「国立スポーツ科学センター倫理審査委員会」を設置している。

2025 年度の倫理審査委員は、次のとおりである。

国立スポーツ科学センター倫理審査委員会　委員一覧（敬称略）

2026 年 3 月 31 日現在

氏　　名	所属等
飯田　研吾	兼子・岩松法律事務所　弁護士
春日　芳美	大東文化大学　スポーツ・健康科学部　准教授
田邉　陽子	日本大学　法学部　教授
松田　丈志	株式会社 VITA　代表取締役
石毛　勇介	JISS 副所長、スポーツ科学研究部門　　主任研究員
◎蒲原　一之	JISS スポーツ医学研究部門副部門長　　主任研究員
半谷　美夏	JISS スポーツ医学研究部門主幹　　主任研究員
星川　雅子	JISS 副所長、スポーツ科学研究部門長　主任研究員
横澤　俊治	JISS スポーツ科学研究部門副部門長　　主任研究員

◎委員長

（文責　事務部事業推進課）

11　ハイパフォーマンススポーツセンター利用状況

1. 専用練習場

区分			月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
陸上競技	オリ		利用日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	31	30	28	31	364
			利用人数（人）	563	477	498	541	419	673	133	501	2,160	1,049	689	340	8,043
	パラ	身体	利用日数（日）	26	18	20	25	26	11	25	9	10	13	21	26	230
			利用人数（人）	99	67	60	66	63	21	40	22	11	19	42	69	579
		知的	利用日数（日）	10	14	8	8	3	3	6	4	6	11	14	19	106
			利用人数（人）	20	48	28	28	9	9	9	25	9	5	55	7	252
		ブラインド	利用日数（日）	4	3	3	4	3	3	3	2	4	3	2	2	36
			利用人数（人）	18	12	13	24	16	14	14	6	18	14	8	10	167
テニス	オリ		利用日数（日）	25	30	27	28	29	28	29	27	31	29	28	30	341
			利用人数（人）	195	248	312	218	270	189	190	162	518	383	443	410	3,538
	パラ		利用日数（日）	5	13	0	0	22	1	8	19	14	5	6	22	115
			利用人数（人）	12	26	0	0	50	4	16	50	28	12	12	61	271
JーSS	競泳 / 水球	オリ	利用日数（日）	1	11	14	21	0	6	2	25	26	15	21	22	164
			利用人数（人）	23	34	676	416	0	225	54	340	444	30	62	44	2,348
		パラ 身体	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
			利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
		パラ 知的	利用日数（日）	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6
			利用人数（人）	0	0	0	124	0	0	0	0	0	0	0	0	124
	アーティスティックスイミング		利用日数（日）	18	26	25	22	18	13	23	20	18	24	19	27	253
			利用人数（人）	287	440	425	326	246	432	564	299	318	428	382	423	4,570
	新体操		利用日数（日）	8	27	25	19	21	7	25	24	22	18	23	25	244
			利用人数（人）	53	446	453	284	366	146	328	344	617	361	451	457	4,306
	トランポリン		利用日数（日）	30	28	27	28	30	27	28	26	27	29	27	30	337
			利用人数（人）	354	250	228	238	247	456	351	191	250	283	508	260	3,616
味の素NTC・ウエスト	ボクシング		利用日数（日）	10	8	12	10	22	11	28	21	23	18	20	17	200
			利用人数（人）	87	31	19	39	111	16	113	21	241	56	135	112	981
	バレーボール		利用日数（日）	18	29	28	25	29	23	14	13	18	17	25	19	258
			利用人数（人）	384	730	911	692	841	458	295	130	250	318	973	367	6,349
	体操競技		利用日数（日）	11	30	24	24	28	20	26	26	27	24	27	25	292
			利用人数（人）	32	204	323	355	489	480	847	175	1,428	1,246	1,016	827	7,422
	バスケットボール		利用日数（日）	30	26	30	27	28	29	31	28	29	23	28	31	340
			利用人数（人）	734	901	1,305	637	1,149	393	981	1,209	1,022	605	1,167	966	11,069
	レスリング	オリ	利用日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	27	24	27	31	353
			利用人数（人）	356	207	156	1,075	922	604	275	186	269	465	707	669	5,891
		デフ	利用日数（日）	3	0	3	0	0	3	0	6	0	0	0	0	15
			利用人数（人）	70	0	46	0	0	59	0	123	0	0	0	0	298
	ウエイトリフティング		利用日数（日）	26	24	25	29	26	28	25	26	26	24	24	25	308
			利用人数（人）	255	324	307	344	372	418	213	263	377	196	164	283	3,516
	ハンドボール	オリ	利用日数（日）	23	26	22	29	30	26	30	30	28	28	23	30	325
			利用人数（人）	202	402	1,149	899	1,839	452	859	1,044	412	1,180	517	552	9,507
		デフ	利用日数（日）	1	3	2	0	0	3	5	4	0	0	0	0	18
			利用人数（人）	42	102	72	0	0	155	213	92	0	0	0	0	676
	柔道		利用日数（日）	6	16	7	14	13	22	25	23	20	19	20	20	205
			利用人数（人）	10	629	14	28	27	40	44	256	1,167	37	31	36	2,319
	バドミントン		利用日数（日）	29	27	25	31	27	28	26	29	28	27	22	26	325
			利用人数（人）	1,030	928	637	1,135	840	856	762	1,035	620	760	681	517	9,801
味の素NTC・イースト	競泳	オリ	利用日数（日）	29	29	30	30	26	23	26	29	30	26	25	31	334
			利用人数（人）	672	394	432	681	103	330	117	590	652	267	282	652	5,172
		パラ 身体	利用日数（日）	23	29	27	26	28	16	26	29	27	27	24	27	309
			利用人数（人）	174	289	214	203	362	112	105	180	216	259	161	205	2,480
		パラ 知的	利用日数（日）	8	10	9	8	11	9	0	0	0	9	6	13	83
			利用人数（人）	44	142	43	40	47	41	0	0	0	101	14	52	524
	卓球	オリ	利用日数（日）	30	31	30	31	30	29	30	30	30	30	28	31	360
			利用人数（人）	1,060	997	684	465	514	437	502	818	499	381	584	613	7,554
		パラ 身体	利用日数（日）	13	11	13	12	12	13	14	17	15	14	16	15	165
			利用人数（人）	146	33	40	43	42	34	63	50	51	56	57	40	655
		パラ 知的	利用日数（日）	0	0	3	0	4	0	0	0	0	1	4	0	12
			利用人数（人）	0	0	49	0	42	0	0	0	0	7	53	0	151
		デフ	利用日数（日）	1	2	1	0	0	3	2	1	0	0	0	0	10
			利用人数（人）	4	8	6	0	0	30	4	1	0	0	0	0	53
	フェンシング	オリ	利用日数（日）	26	25	25	25	24	28	27	28	25	26	23	25	307
			利用人数（人）	1,081	642	1,095	795	1,846	1,734	1,687	1,215	1,330	840	1,084	825	14,174
		パラ	利用日数（日）	21	21	22	24	23	1	25	19	24	20	18	21	239
			利用人数（人）	138	115	147	152	175	4	164	100	153	129	101	86	1,464
	射撃	オリ	利用日数（日）	30	30	29	31	27	30	30	10	27	26	27	31	328
			利用人数（人）	656	603	448	591	745	568	396	55	688	591	788	560	6,689
		パラ	利用日数（日）	5	12	7	17	15	7	4	0	8	7	10	8	100
			利用人数（人）	13	66	39	50	88	44	4	0	44	33	73	26	480
		デフ	利用日数（日）	0	0	2	12	7	12	18	5	0	0	0	0	56
			利用人数（人）	0	0	3	25	10	37	34	9	0	0	0	0	118
	アーチェリー	オリ	利用日数（日）	30	31	30	31	29	30	30	28	25	28	28	31	351
			利用人数（人）	303	369	333	367	347	317	356	299	243	597	481	369	4,381
		パラ	利用日数（日）	0	0	0	0	5	5	4	6	11	7	7	8	53
			利用人数（人）	0	0	0	0	11	7	8	9	15	13	14	18	95

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数総計（日）	440	516	495	517	501	468	517	503	518	486	493	538	5,992
利用人数合計（人）	9,117	10,164	11,165	10,881	12,608	9,795	9,741	9,800	14,050	10,721	11,735	9,858	129,635
内）オリ利用人数（人）	8,337	9,256	10,405	10,126	11,693	9,224	9,067	9,133	13,505	10,073	11,145	9,282	121,246
内）パラ利用人数（人）	664	798	633	730	905	290	423	442	545	648	590	576	7,244
内）デフ利用人数（人）	116	110	127	25	10	281	251	225	0	0	0	0	1,145

※陸上競技：陸上トレーニング場　テニス：屋内テニスコート（ハード及びレッドクレイコート）
※オリ・パラ・デフ各 NF から報告のあった日数のうち、多い方を集計。（ex.10 月にオリ利用 28 日、パラ利用 5 日の場合、その月の利用数は 28 日）
※ 2025 年度は以下の専用練習場はデフリンピック会場として利用された。（開催期間 味の素 NTC・イースト：射撃 2025.11.10 ～ 2025.11.29）
※専用練習場の利用実績にはテクニカルルームの利用を含む。

2. 共用コート

(a) 競技別

区分		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素 NTC・ウエスト	ボクシング	利用日数（日）	2	0	0	0	0	0	0	0	7	3	5	1	18
		利用人数（人）	60	0	0	0	0	0	0	0	410	180	220	40	910
	バレーボール	利用日数（日）	2	46	9	11	38	14	0	0	0	0	16	0	136
		利用人数（人）	13	1840	360	303	1040	420	0	0	0	0	326	0	4,302
	新体操	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	2	4	10	5	6	6	33
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	200	480	1000	150	360	360	2,550
	バスケットボール	利用日数（日）	0	6	16	11	3	0	0	4	4	2	8	13	67
		利用人数（人）	0	170	445	340	90	0	0	140	160	80	275	645	2,345
	バドミントン	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	4
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	180	0	0	0	0	0	180
	テコンドー	利用日数（日）	4	9	0	16	3	3	19	0	2	10	0	8	74
		利用人数（人）	240	225	0	253	33	180	405	0	56	226	0	280	1,898
	アイスホッケー	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	20
	トランポリン	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	35
	アメリカンフットボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	120	0	0	0	120
	ハンドボール	利用日数（日）	0	0	2	0	5	0	0	0	0	0	1	0	8
		利用人数（人）	0	0	40	0	89	0	0	0	0	0	25	0	154
	陸上	利用日数（日）	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	6
		利用人数（人）	70	0	0	60	0	0	0	0	0	0	40	0	170
	JOC	利用日数（日）	0	0	8	0	0	1	0	0	0	20	0	2	31
		利用人数（人）	0	0	636	0	0	50	0	0	0	800	0	35	1,521
	体操	利用日数（日）	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	4	8
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	240	0	0	0	0	0	240	480
	ウエイトリフティング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	30
	パラテコンドー	利用日数（日）	2	0	4	0	0	6	0	4	0	0	4	4	24
		利用人数（人）	26	0	53	0	0	82	0	44	0	0	56	41	302
	ろう空手	利用日数（日）	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	120	0	0	0	0	0	0	120
	デフバレーボール	利用日数（日）	0	3	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	9
		利用人数（人）	0	61	0	0	0	0	0	126	0	0	0	0	187
味の素 NTC・イースト	ウエイトリフティング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	30
	バスケットボール	利用日数（日）	1	3	15	10	0	0	0	3	0	0	2	0	34
		利用人数（人）	30	90	520	300	0	0	0	90	0	0	60	0	1,090
	卓球	利用日数（日）	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5
		利用人数（人）	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	160	260
	フェンシング	利用日数（日）	1	0	0	5	17	0	3	0	0	1	0	0	27
		利用人数（人）	25	0	0	150	1360	0	120	0	0	15	0	0	1,670
	バドミントン	利用日数（日）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3	0	5
		利用人数（人）	0	0	0	25	0	20	0	0	0	0	90	0	135
	テコンドー	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	28	0	0	0	28
	競泳	利用日数（日）	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	4
		利用人数（人）	50	0	0	0	0	180	0	0	0	0	0	50	280
	バレーボール	利用日数（日）	0	3	19	10	3	0	0	0	0	0	0	0	35
		利用人数（人）	0	60	570	170	25	0	0	0	0	0	0	0	825
	スケート	利用日数（日）	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	0	35
	ダンス	利用日数（日）	0	0	2	3	0	0	2	0	0	0	2	2	11
		利用人数（人）	0	0	40	60	0	0	40	0	0	0	40	40	220
	トライアスロン	利用日数（日）	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
	パラバドミントン	利用日数（日）	22	2	1	18	6	12	13	10	0	19	5	8	116
		利用人数（人）	241	21	7	126	48	98	111	74	0	168	63	64	1,021
	ボッチャ	利用日数（日）	0	3	3	0	0	0	3	0	0	0	3	3	15
		利用人数（人）	0	66	198	0	0	0	107	0	0	0	104	143	618
	ゴールボール男子	利用日数（日）	9	12	0	9	0	11	7	2	9	9	9	3	80
		利用人数（人）	131	160	0	117	0	162	69	41	131	221	142	61	1,235
	ゴールボール女子	利用日数（日）	9	12	0	9	9	11	4	2	9	9	9	3	86
		利用人数（人）	73	97	0	72	218	83	32	18	69	75	73	31	841
	パラバレーボール	利用日数（日）	2	3	1	2	0	5	0	2	2	3	8	3	31
		利用人数（人）	59	75	24	52	0	121	0	46	44	73	407	62	963

区分		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素NTC・イースト	車いすバスケットボール男子	利用日数(日)	0	4	0	4	4	0	2	2	0	0	5	8	29
		利用人数(人)	0	25	0	115	128	0	211	277	0	0	165	231	1,152
	車いすバスケットボール女子	利用日数(日)	0	0	13	8	1	0	10	0	3	0	3	3	41
		利用人数(人)	0	0	261	155	13	0	158	0	49	0	131	64	831
	車いすラグビー	利用日数(日)	8	6	0	0	7	4	6	2	0	6	9	6	54
		利用人数(人)	232	228	0	0	248	144	198	68	0	215	291	213	1,837
	パラスキー	利用日数(日)	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
		利用人数(人)	0	11	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
	JPC	利用日数(日)	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
		利用人数(人)	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	100
	パラ卓球	利用日数(日)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		利用人数(人)	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
	ろう空手道	利用日数(日)	0	4	2	3	2	6	0	2	0	0	0	2	21
		利用人数(人)	0	76	36	60	40	120	0	20	0	0	0	40	392
	デフバレーボール	利用日数(日)	0	0	0	1	2	3	2	2	0	0	0	0	10
		利用人数(人)	0	0	0	22	44	66	44	66	0	0	0	0	242
	デフバスケ	利用日数(日)	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
		利用人数(人)	0	0	0	0	0	102	0	0	0	0	0	0	102
利用日数総計(日)			64	124	96	124	100	94	80	45	50	88	100	84	1,049
利用人数総合計(人)			1,250	3,350	3,194	2,380	3,376	2,253	2,010	1,490	2,097	2,223	2,868	2,800	29,291
内)オリ利用人数(人)			488	2,500	2,611	1,661	2,637	1,155	980	710	1,804	1,471	1,436	1,850	19,303
内)パラ利用人数(人)			762	713	547	637	655	690	986	568	293	752	1,432	910	8,945
内)デフ利用人数(人)			0	137	36	82	84	408	44	212	0	0	0	40	1,043

(b) コート別

区分		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素NTC・ウエスト	1A	利用日数(日)	4	9	9	17	8	6	13	10	0	0	5	6	87
	1B	利用日数(日)	2	0	3	1	0	5	6	0	0	20	5	0	42
	2大	利用日数(日)	1	24	22	18	22	10	6	13	15	9	19	18	177
	2小	利用日数(日)	4	30	8	5	19	13	1	1	11	12	12	15	131
味の素NTC・イースト	A	利用日数(日)	12	16	22	19	15	14	15	2	11	10	16	7	159
	B	利用日数(日)	1	6	5	11	13	7	5	3	2	8	7	11	79
	C	利用日数(日)	23	7	16	20	12	15	13	10	0	19	8	8	151
	D	利用日数(日)	8	15	13	25	11	12	17	11	3	10	12	17	154
小計	ウエスト利用日数(日)		11	63	42	41	49	34	26	24	26	41	41	39	437
	イースト利用日数(日)		44	44	56	75	51	48	50	26	16	47	43	43	543
利用日数総計(日)			55	107	98	116	100	82	76	50	42	88	84	82	980

※ 2025 年度はデフリンピック会場として利用された。(開催期間 味の素 NTC・イースト：共用コート AB：2025.11.10 ～ 2025.11.29)
※共用コートは申請数。(一部報告あり)

3. ハイパフォーマンス・ジム、低酸素トレーニング室、トレーニングジム CORE・WEST・EAST

区分			月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ハイパフォーマンス・ジム			利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	29	28	28	31	360
			利用人数(人)	972	980	1,206	968	843	964	1,118	775	933	729	325	940	10,753
			内)オリ利用人数	904	871	1,129	846	741	834	1,015	717	856	628	767	843	10,151
			内)パラ利用人数	68	107	76	122	103	130	103	59	77	101	158	97	1,201
			内)デフ利用人数	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
		うち、低酸素トレーニング室	利用日数(日)	30	30	26	31	27	26	30	19	18	18	16	23	294
			利用人数(人)	145	156	141	154	125	85	113	42	43	65	23	68	1,160
トレーニングジム	CORE		利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	30	28	31	364
			利用人数(人)	1,153	1,257	1,676	1,653	1,184	1,111	1,239	1,191	1,218	1,023	1,183	1,261	15,149
			内)オリ利用人数	1,036	1,114	1,493	1,439	1,009	939	1,048	1,044	1,001	815	967	1,080	12,985
			内)パラ利用人数	117	141	182	213	175	172	191	147	217	208	216	181	2,160
			内)デフ利用人数	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	WEST		利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	28	27	26	31	356
			利用人数(人)	634	1,337	1,052	969	1,292	859	876	870	1,045	735	822	922	11,413
			内)オリ利用人数	630	1,329	1,046	962	1,276	842	853	832	1,025	712	795	904	11,206
			内)パラ利用人数	4	8	6	7	16	17	23	38	20	23	27	18	207
			内)デフ利用人数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	EAST		利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	29	28	31	363
			利用人数(人)	898	859	732	952	671	981	832	761	766	809	857	985	10,103
			内)オリ利用人数	530	540	411	547	302	644	555	498	466	388	510	566	5,957
			内)パラ利用人数	368	319	321	405	369	337	277	260	300	421	347	419	4,143
			内)デフ利用人数	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
		利用人数小計(人)		2,685	3,453	3,460	3,574	3,147	2,951	2,947	2,822	3,029	2,567	2,862	3,168	36,665
利用人数総合計(人)				3,657	4,433	4,666	4,542	3,990	3,915	4,065	3,597	3,962	3,296	3,187	4,108	47,418

※ 2025.4.1 ～デフ競技団体のトレーニングジム利用開始
※研究利用は除く。

4. JISS 競泳プール（一般利用：水泳教室）

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		6	11	11	14	10	8	10	7	7	8	12	12	116
一般利用人数（人）		270	745	645	485	595	350	605	525	360	380	625	705	6,290

5. その他屋外施設

(1) 味の素フィールド西が丘

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
専用利用（1日）	利用日数（日）	7	8	4	6	4	7	1	10	5	4	8	3	67
	試合数（試合）	10	10	8	7	5	7	1	13	9	7	11	2	90
	総入場者数（人）	6,885	8,409	5,080	9,930	7,604	6,635	1,813	35,362	13,484	3,693	11,739	2,810	113,444
	有料入場者数（人）	5,837	7,434	3,582	3,264	6,486	5,674	1,683	32,855	8,952	2,243	6,570	1,880	86,460
専用利用（時間）	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用時間（時間）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
団体利用（時間）	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用時間（時間）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利用人数合計（人）		6,885	8,409	5,080	9,930	7,604	6,635	1,813	35,362	13,484	3,693	11,739	2,810	113,444

(2) フットサルコート

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		24	22	24	23	23	24	26	19	19	21	21	25	271
利用時間（時間）		200	200	249	211	169	219	272	206	196	228	224	11	2,385
利用人数（人）	NF	5	3	5	7	9	8	12	8	196	7	13	15	288
	一般	97	95	138	2,289	1,920	2,888	3,080	2,277	2,284	2,743	2,554	2,861	23,226
利用人数合計（人）		102	98	143	2,296	1,929	2,896	3,092	2,285	2,480	2,750	2,567	2,876	23,514

(3) 屋外テニスコート

①年間利用

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）	28	28	27	29	29	28	26	22	20	24	22	28	311
利用人数（人）	2,265	2,299	2,239	2,211	1,970	3,180	1,517	2,063	2,427	2,250	2,544	3,267	28,232

②ビジター利用

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）	7	4	2	5	6	5	7	1	9	8	1	7	62
利用人数（人）	14	4	2	7	6	7	9	1	14	97	1	12	174

6. 戸田艇庫

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	月平均（艇）/合計（人）
艇庫（艇）	エイト	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8.0
	フォア	44	44	44	44	44	44	44	42	42	42	42	42	43.2
	スカル	90	90	90	90	90	90	90	88	88	88	88	88	89.2
	その他	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2.0
	合計（艇）	144	144	144	144	144	144	144	140	140	140	140	140	142.3
合宿室（人）	一般	55	31	229	49	46	13	12	26	46	44	67	128	746
	大学生	12	86	150	293	708	1,093	644	217	26	13	243	648	4,133
	高校生	38	0	52	130	212	0	6	35	209	215	81	296	1,274
	合宿利用人数合計（人）	105	117	431	472	966	1,106	662	278	281	272	391	1,072	6,153

7. 研修室・特別会議室等

(1) JISS

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研修室A	利用日数（日）	5	3	0	7	6	6	5	5	2	1	1	0	41
	利用人数（人）	160	75	0	293	150	132	177	200	50	30	60	0	1,327
研修室B	利用日数（日）	4	1	0	5	4	6	3	5	2	0	1	0	31
	利用人数（人）	130	30	0	283	120	132	102	160	50	0	30	0	1,037
利用人数合計（人）		290	105	0	576	270	264	279	360	100	30	90	0	2,364

※研修室A B結合しての利用人数は、研修室Aにカウント。
※本表の数字（データ）は、部外者による有料利用カウントであり、JSCの業務での利用は含まれていない。

(2) 味の素 NTC・イースト

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
会議室A	利用日数（日）	3	9	11	9	11	7	8	4	12	10	13	11	108
	利用人数（人）	32	212	242	266	224	316	288	145	338	345	259	301	2,968
会議室B	利用日数（日）	1	7	10	7	11	7	10	1	12	12	12	9	99
	利用人数（人）	38	230	270	255	368	344	389	20	310	386	307	290	3,207
会議室C	利用日数（日）	4	11	12	7	12	9	6	3	14	13	12	7	110
	利用人数（人）	88	390	355	190	382	335	265	65	288	333	340	220	3,251
ミーティングルーム1	利用日数（日）	8	12	12	5	8	8	2	1	9	5	1	6	77
	利用人数（人）	25	64	119	41	103	59	8	3	64	49	15	82	632
ミーティングルーム2	利用日数（日）	4	3	6	4	5	3	4	1	5	3	5	5	48
	利用人数（人）	33	32	103	52	98	31	52	16	40	29	28	80	594
ミーティングルーム3	利用日数（日）	2	2	4	4	5	6	3	4	6	6	5	7	54
	利用人数（人）	12	15	95	68	100	64	32	49	45	119	91	78	768
ミーティングルーム4	利用日数（日）	1	2	5	4	4	18	5	2	4	6	3	3	57
	利用人数（人）	6	25	110	63	63	952	200	32	25	159	57	40	1,732
ミーティングルーム5	利用日数（日）	2	5	11	11	10	8	7	1	10	10	5	2	82
	利用人数（人）	11	32	111	81	88	240	162	5	58	70	45	28	931
利用人数合計（人）		245	1,000	1,405	1,016	1,426	2,341	1,396	335	1,168	1,490	1,142	1,119	14,083

※本表の数字（データ）は、NFによる有料利用カウントであり、JSCの業務での利用は含まれていない。

(3) 味の素 NTC・ウエスト

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研修室1	利用日数(日)	9	12	27	18	22	16	14	19	13	14	15	15	194
	利用人数(人)	325	363	830	520	686	490	411	566	505	460	420	500	6,076
研修室2	利用日数(日)	9	10	17	15	20	12	13	17	13	12	14	11	163
	利用人数(人)	130	355	551	385	660	335	411	433	570	400	362	400	4,992
研修室3	利用日数(日)	9	14	12	22	14	10	11	15	9	16	17	13	162
	利用人数(人)	370	388	363	815	500	245	330	549	375	310	629	480	5,354
研修室4	利用日数(日)	6	12	15	13	17	18	16	17	19	14	17	17	181
	利用人数(人)	273	365	420	300	428	599	526	504	495	381	664	486	5,441
研修室6	利用日数(日)	2	3	6	6	4	3	7	11	10	9	13	9	83
	利用人数(人)	120	55	105	78	111	35	112	201	206	185	183	153	1,544
利用人数合計(人)		1,218	1,526	2,269	2,098	2,385	1,704	1,790	2,253	2,151	1,736	2,258	2,019	23,407

※本表の数字（データ）は、NFによる有料利用カウントであり、JSCの業務での利用は含まれていない。

8. 託児室

(1) アスリートヴィレッジ

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		4	5	5	9	3	11	6	17	13	13	14	20	120
利用人数（人）	保護者数	4	5	5	9	3	12	6	17	17	14	21	39	152
	託児数	4	5	5	9	3	13	6	19	18	14	21	39	156

(2) 味の素 NTC・イースト

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		5	13	15	10	14	18	20	16	17	19	20	15	182
利用人数（人）	保護者数	6	15	16	11	19	27	29	30	23	38	34	32	280
	託児数	6	15	16	11	19	27	29	30	23	38	34	32	280

9. 宿泊室

(1) JISS

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	30	29	28	31	362
利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	29	26	28	31	358
客室利用数(室)	525	1,166	1,141	868	842	630	627	756	789	654	842	769	9,609
客室利用人数(人)	525	1,166	1,141	868	842	630	627	756	684	654	842	768	9,503
内)オリ利用人数(人)	418	814	935	731	663	481	447	613	639	453	596	554	7,344
内)パラ利用人数(人)	9	263	51	4	81	42	12	20	0	131	157	7	777
内)デフ利用人数(人)	0	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	28
内)その他研究等(人)	98	89	155	133	70	107	168	123	45	70	89	207	1,354
客室稼働率(%)	24.3%	52.2%	52.8%	38.9%	37.7%	29.2%	28.1%	35.0%	36.5%	31.3%	41.8%	34.5%	36.9%
宿泊人数稼働率(%)	23.3%	50.2%	50.7%	37.3%	36.2%	28.0%	27.0%	33.6%	30.4%	30.1%	40.1%	33.0%	35.0%

※宿泊人数稼働率は、和室に最大3名宿泊できるものとして計算した。

(2) アスリートヴィレッジ

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365
利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365
客室利用数(室)	2,461	4,283	4,203	3,961	3,952	4,955	2,869	2,859	3,724	2,670	2,961	3,364	42,262
客室利用人数(人)	3,733	6,793	6,199	5,997	5,586	4,955	4,265	4,643	6,118	4,191	5,305	4,706	62,491
内)オリ利用人数(人)	3,616	6,535	6,092	5,957	5,395	4,816	4,151	4,490	6,061	4,103	5,099	4,580	60,895
内)パラ利用人数(人)	93	190	77	40	140	83	114	153	57	88	206	126	1,367
内)デフ利用人数(人)	24	68	30	0	51	56	0	0	0	0	0	0	229
内)その他研究等(人)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
客室稼働率(%)	37.0%	62.2%	63.1%	57.6%	57.4%	74.4%	41.7%	42.9%	54.1%	38.8%	47.6%	48.9%	52.2%
宿泊人数稼働率(%)	27.8%	48.9%	46.1%	43.2%	40.2%	36.9%	30.7%	34.5%	44.1%	30.2%	42.3%	33.9%	38.2%

(3) 味の素 NTC・イースト

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	29	28	31	363
利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	30	26	28	31	359
客室利用数(室)	991	1,061	888	1,082	806	872	877	716	745	747	850	905	10,540
客室利用人数(人)	1,277	1,213	1,042	1,334	962	1,104	1,333	1,173	986	947	1,104	1,089	13,564
内)オリ利用人数(人)	557	543	642	524	209	296	521	527	478	271	266	272	5,106
内)パラ利用人数(人)	720	651	387	759	709	808	726	421	508	676	838	817	8,020
内)デフ利用人数(人)	0	19	13	51	34	0	86	225	0	0	0	0	428
内)その他研究等(人)	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	10
客室稼働率(%)	40.3%	41.7%	36.1%	42.6%	31.7%	35.4%	34.5%	29.1%	29.3%	31.4%	37.0%	35.6%	35.4%
宿泊人数稼働率(%)	29.8%	27.4%	24.3%	30.1%	21.7%	25.7%	30.1%	27.3%	22.2%	22.8%	27.6%	24.6%	26.1%

10. 栄養指導食堂、レストラン　等

(1) JISS（栄養指導食堂レストラン「R³」）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食(食)	380	1,059	929	762	727	504	582	710	718	542	812	572	8,297
昼食(食)	713	1,386	1,931	1,522	1,340	799	1,030	1,356	1,507	1,318	2,296	1,419	16,617
内)アスリート食(食)	547	1,140	1,538	1,195	963	546	855	882	1,058	955	1,419	1,115	12,213
内)セットメニュー(食)	166	246	393	327	377	253	175	474	449	363	877	304	4,404
夕食(食)	300	844	895	731	727	471	532	706	724	505	283	629	7,347
内)アスリート食(食)	291	827	873	712	707	462	532	679	714	485	266	610	7,158
内)セットメニュー(食)	9	17	22	19	20	9	0	27	10	20	17	19	189
合計(食)	1,393	3,289	3,755	3,015	2,794	1,774	2,144	2,772	2,949	2,365	3,391	2,620	32,261

※セットメニューには職員の利用も含む。

(2) JISS（喫茶室「New Spirit」）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用人数（人）	618	255	1,009	1,027	821	1,004	1,162	781	975	830	752	868	10,102

(3) アスリートヴィレッジ（SAKURA Dining）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食(食)	3,626	5,811	5,662	5,519	5,267	4,663	4,141	4,377	6,026	3,939	5,190	4,665	58,886
昼食(食)	3,302	6,030	6,064	5,282	5,242	4,487	3,705	4,277	5,707	4,002	10,068	4,401	62,567
内)アスリート食(食)	3,115	5,785	5,695	5,130	4,965	4,288	3,435	4,045	5,478	3,763	4,786	4,145	54,630
内)セットメニュー(食)	187	245	369	152	277	199	270	232	229	239	5,282	256	7,937
夕食(食)	3,628	6,743	6,310	5,956	5,449	4,678	4,055	4,266	6,345	4,267	263	4,530	56,490
内)アスリート食(食)	3,610	6,711	6,233	5,919	5,416	4,652	4,038	4,211	6,316	4,214	229	4,501	56,050
内)セットメニュー(食)	18	32	77	37	33	26	17	55	29	53	34	29	440
合計(食)	10,556	18,584	18,036	16,757	15,958	13,828	11,901	12,920	18,078	12,208	15,521	13,596	177,943

(4) 味の素 NTC・イースト

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食(食)	1,141	1,089	910	1,164	920	854	857	785	890	904	1,080	1,016	11,610
昼食(食)	1,570	1,949	1,107	1,817	1,373	1,322	1,377	1,014	1,119	1,514	1,461	1,509	17,132
夕食(食)	1,263	1,408	997	1,488	1,039	997	1,004	815	902	1,059	1,068	1,176	13,216
合計(食)	3,974	4,446	3,014	4,469	3,332	3,173	3,238	2,614	2,911	3,477	3,609	3,701	41,958

11. イースト見学

＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開催回数(回)	25	63	70	52	60	44	46	19	45	36	38	36	534
参加者数(人)	183	725	680	338	650	353	510	293	540	394	322	206	5,194

12. スポーツクリニック

(1) メディカルチェック

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
オリンピック競技	実施日数(日)	15	14	15	8	8	9	13	10	7	6	14	7	126
	実施件数(件)	160	198	163	55	68	103	134	61	70	31	117	52	1,212
パラリンピック競技	実施日数(日)	1	5	5	5	2	0	1	0	0	0	0	0	19
	実施件数(件)	2	27	15	20	4	0	1	0	0	0	0	0	69
内）夏季競技種目実施件数(件)		138	221	162	60	35	23	22	28	62	31	117	52	951
内）冬季競技種目実施件数(件)		24	4	16	15	37	80	113	33	8	0	0	0	330
実施件数合計(件)		162	225	178	75	72	103	135	61	70	31	117	52	1,281

(2) 診療・リハビリテーション

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
診療日数(日)		21	20	21	22	20	20	22	18	20	19	18	21	242
内科(件)		130	134	114	119	136	167	203	180	178	116	140	150	1,767
心療内科(件)		8	11	13	16	14	10	19	15	16	19	18	13	172
整形外科(件)		336	376	371	399	308	314	354	267	284	280	292	335	3,916
歯科(件)		72	103	103	95	84	65	76	58	76	76	55	55	918
婦人科(件)		67	79	64	72	49	57	59	54	66	56	50	64	737
皮膚科(件)		27	21	34	35	35	36	19	27	34	23	26	26	343
脳神経外科(件)		7	8	6	14	8	10	17	5	10	8	7	7	107
小計(件)		647	732	705	750	634	659	747	606	664	578	588	650	7,960
	内)オリ利用件数	596	670	659	677	587	577	673	515	589	527	533	575	7,178
	内)パラ利用件数	50	58	44	71	47	73	57	58	53	43	52	72	678
	内)その他利用件数	1	4	2	2	0	9	17	33	22	8	3	3	104
栄養(件)		6	6	6	9	8	6	6	2	6	6	4	7	72
	内)オリ利用件数	5	6	6	9	8	6	6	2	6	6	4	7	71
	内)パラ利用件数	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
心理カウンセリング(件)		17	20	20	24	14	21	15	17	22	22	17	11	220
	内)オリ利用件数	16	20	15	21	13	19	15	14	18	20	13	10	194
	内)パラ利用件数	1	0	5	3	1	2	0	3	4	2	4	1	26
	内)その他利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
リハビリ(件)		679	737	867	865	641	623	823	606	647	680	647	878	8,693
	内)オリ利用件数	563	647	779	778	599	566	757	556	591	597	590	809	7,832
	内)パラ利用件数	116	90	88	87	42	57	66	50	56	83	57	69	861
合計(件)		1,349	1,495	1,598	1,648	1,297	1,309	1,591	1,231	1,339	1,286	1,256	1,546	16,945

※クリニックで1人が1日2科受診した場合は2件でカウントしている。

(3) 診療・リハビリテーション　JISS スポーツクリニック EAST

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
診療日数(日)		4	4	14	11	15	15	17	10	10	9	8	9	126
心療内科(件)		1	0	7	5	5	9	12	8	14	6	10	10	87
眼科(件)		-	-	-	-	-	1	2	1	2	1	2	3	12
小計(件)		1	0	7	5	5	10	14	9	16	7	12	13	99
	内)オリ利用件数	1	0	6	5	5	9	12	8	12	6	9	10	83
	内)パラ利用件数	0	0	1	0	0	1	2	1	4	1	3	3	16
	内)その他利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
心理カウンセリング(件)		4	8	15	13	19	11	16	8	8	9	7	2	120
	内)オリ利用件数	4	6	13	12	16	8	12	6	5	7	6	2	97
	内)パラ利用件数	0	2	2	1	3	3	4	2	3	2	1	0	23
	内)その他利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
リハビリ(件)		0	0	19	8	19	20	15	3	0	4	0	0	88
	内)オリ利用件数	0	0	0	0	9	7	0	0	0	0	0	0	16
	内)パラ利用件数	0	0	19	8	10	13	15	3	0	4	0	0	72
合計(件)		5	8	41	26	43	41	45	20	24	20	19	15	307

※クリニックで1人が1日2科受診した場合は2件でカウントしている。
※ 2025年4月～ JISS スポーツクリニック EAST 診療開始
※ 2025年9月～眼科診療開始

(4) クライオセラピー

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
クライオセラピー(件)		2	4	1	0	0	1	0	0	1	0	1	1	11
	内)オリ利用件数	2	4	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	10
	内)パラ利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

表中は全て、小数点以下第二位を四捨五入

12　その他事業

（1）普及啓発活動等

1. 背景・目的

HPSC はスポーツ医・科学研究事業及びスポーツ医・科学支援事業をはじめとする各事業の成果を広く国民に還元することによって、スポーツの振興に寄与することを目的に、様々な機会において HPSC が取り組むスポーツ医・科学、情報による研究・支援の成果を発信している。

また、HPSC/JISS スタッフがスポーツ庁の設置する委員会委員に就任するなどして、スポーツ庁の施策や事業に関し、HPSC の取組や成果に関する情報提供、助言等を行うことにより、HPSC の知見の還元を図った。

2. 実施概要

(1) 展示会での広報活動

HPSC が推進するハイパフォーマンススポーツ研究と親和性の高い展示会である「Japan Sports Week」や「SPORTEC」や大阪・関西万博でのスポーツ庁主催イベント「Sports Future Lab ～スポーツがつくる未来～」、「文部科学省情報ひろば」等にて、研究成果や JSC/HPSC が発行した書籍等を紹介・展示するブースやミニセミナーを実施した。



写真 1　Japan Sports Week 出展ブース



写真 2　SPORTEC ミニセミナーの様子



写真 3　大阪・関西万博でのスポーツ庁主催イベント「Sports Future Lab ～スポーツがつくる未来～」出展ブース

(2) SNS を活用した情報発信

ウェブサイト更新情報をはじめ、イベント開催告知や HPSC 刊行物の発行情報等の発信を HPSC の X アカウントにて 138 回行った。

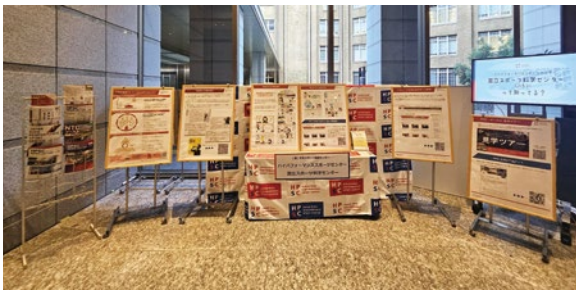


写真 4　文部科学省情報ひろば

(3) プロモーション動画の制作

HPSC の役割や魅力を広く周知するため、新たなプロモーション動画を制作し、ウェブサイト上で公開した。



写真 5　HPSC プロモーション動画

(4) アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー

Total Conditioning Research Project NEXT の取組と連携し、HPSC が策定した立場表明の一つとして、「アスリートにおけるトータルコンディショニングに関するポジションペーパー」を HPSC ウェブサイトで公開するとともに、プレスリリース、X アカウントでの情報発信を行った。

3. スポーツ庁の事業への協力

「スポーツ審議会スポーツ基本計画部会」、「スポーツ×宇宙に関する検討会」をはじめ、スポーツ庁が設置する委員会等に HPSC/JISS スタッフが委員として参画すること等により、スポーツ庁が推進する施策や事業に対し、情報提供、助言等を行い、ハイパフォーマンス領域のみならずライフパフォーマンス領域においても HPSC の知見の還元を図った。

委員会等	被委嘱者
スポーツ審議会スポーツ基本計画部会（第３期）	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）、能瀬 さやか（JISS スポーツ医学研究部門）
スポーツ×宇宙に関する検討会	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）
大学スポーツ構想会議	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）
運動・スポーツ中の安全確保対策に関する検討会	中嶋 耕平（JISS 副所長・JISS スポーツ医学研究部門長）、能瀬 さやか（JISS スポーツ医学研究部門）

（文責　連携・協働推進部）

（2）パラリンピック競技関連の活動

1. JISS スポーツクリニック EAST 運用開始に伴うパラアスリート支援の拡充

2025 年 4 月から心療内科医 1 名と臨床心理士 1 名が常勤となった。JISS スポーツクリニック及びスポーツクリニック EAST（EAST）において、心療内科外来（週 3 回のうち EAST 2 回）と心理カウンセリング（週 4 回のうち EAST 2 回）を実施し、プライバシーに配慮した個別相談に対応している。

アスリートリハビリテーションは、理学療法士 2 名（常勤 1 名、非常勤 1 名）の体制で、EAST におけるパラアスリートの対応件数を増加させた。

2025 年 7 月から月 2 回、眼科外来及び視覚 MDF（Medical Diagnostics Form；医学的診断書）作成外来を新設、クラス分けに必要な MDF 作成を開始し、視覚障がいアスリートの病状・視機能評価のため、各種検査機器が整備された（写真）。

EAST は、味の素 NTC・イーストを拠点とするパラアスリートやアントラージュが利用しやすい環境である。加えて、視覚障がいアスリートの MDF を作成できる医療機関は限られていることから、本外来開設の意義は大きい。



写真 1　診療の様子

2. パラアスリートへの各種支援

（1）総合型サポート：パラアルペンスキー

パラアルペンスキー競技では、2023 年度から総合型サポート体制を導入した。雪上競技の特性や障がいへの配慮など、検討すべき事項は多岐にわたるが、選手のコンディション管理、フィジカルトレーニング支援、映像分析、栄養サポート、心理サポートなど、各分野のサポートスタッフが相互に関わりながら連携を図り、各選手の個別課題に応じた支援を展開した。

特に座位選手のトレーニングメニューやコンディション管理は、先行研究や参考事例が少ないため、これまで JISS でのオリンピックを含む他競技の事例を参考に検討・検証を行い、支援を実施した。

2025 － 2026 年のパラリンピックシーズンには、これまでの取組を基に支援内容を精緻化・一部見直しし、競技力向上に資する体制の強化を図った。

（2）医科学支援 /「HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開」事業（NW 事業）：パラノルディックスキー

2025 年度 NW 事業では、パラノルディックスキー選手を対象としたフィットネスチェック（FC）を、連携機関である北海道立総合体育センターにて 6 月と 11 月の 2 回実施した。6 月は立位男子選手 2 名及び座位男子選手 1 名の計 3 名、11 月にはこれら 3 名に立位女子選手 1 名が加わり計 4 名が対象であった。

同施設での FC は 2023 年から継続して実施しており、選手の体力特性把握やトレーニング計画立案に重要な役割を果たしている。



写真 2　測定の様子

これまでは HPSC スタッフ中心に準備から測定、後処理まで担ってきたが、2025 年度は連携機関のスタッフ及び FC スペシャリストが主体となって業務を遂行した点が大きな特徴である。これにより、地域のスタッフがパラアスリートの FC を受け入れ、適切に運用できる体制整備が進んでいることが確認された。

本件は地域主導による医科学支援体制構築が進展している好事例であり、今後のパラアスリート支援の発展に寄与するものと期待される。

（3）ミラノ・コルティナ 2026 パラリンピックでのウェルフェアオフィサー（WO）としての活動

2021 年、IOC 及び国際パラリンピック委員会（IPC）は北京 2022 大会以降の大会において、WO のアクレディテーションを設定することとした。これを受け、JOC は北京 2022 大会から、JPC は今大会から初めて WO を派遣した。

WO は選手団全員のメンタルヘルスを守る役割を担い、選手に加えコーチやスタッフ等のアントラージュも支援対象である。大会約 1 カ月半前から広報、事前アンケート、希望者への心理サポート等の活動を実施した。選手からは不眠、食事・環境への不安、大舞台での不安や緊張等の相談が寄せられ、WO は“こころのトリアージ”機能を果たし、専門家への紹介や情報提供も行った。一方、アントラージュからは、懸念事項の相談や、大会中の円滑な連携に向けた事前情報共有があった。

大会期間中はメディカルチームの一員としてコルティナの選手村に駐在し、選手団の状況把握と迅速な対応体制を整えた。プライバシーに配慮した個室を設置、また、他 2 拠点の選手団へはオンラインで対応し、LINE でのテキスト支援も併用した。

3. パラアスリートを対象とした研究活動の実施

2025 年度も「研究の柱」をはじめ、様々な研究活動が行われ、論文採択や学会発表のみならず、シンポジウム、講演会や講習会、書籍の形で成果報告及び情報発信がなされた。

なお 2019 年度以降、何らかの成果発表により毎年受賞者がいる状況である。

（文責　半谷　美夏、山口　達也、笹代　純平、
先崎　陽子、関口　邦子、袴田　智子、
飯塚　哲司、元永　恵子）

(3)「スポーツの日」中央記念行事 / スポーツ祭り 2025

1. 概要

1964 年東京オリンピックの成果と理念を背景として、国民がスポーツに親しみ、健康な心身を培う契機として制定された「スポーツの日」において、本中央記念行事は、日常生活の中で主体的に運動・スポーツに親しむことの重要性を広く啓発することを目的として毎年開催している。

2025年度においては、2024 年度に引き続き「meet your “new”」をテーマに掲げ、自分に合ったスポーツとの出会いやトップアスリートとの交流、普段触れる機会の少ない環境での体験等を通じて、参加者のスポーツへの関心を高めるとともに、今後の実施につながるきっかけづくりを図った。

2. 実施内容

開催日：2025 年 10 月 13 日（月）

主　催：スポーツ庁、JSC、JSPO、JOC、公益財団法人日本レクリエーション協会、JPSA

本行事では、多様な参加者がスポーツに親しむ機会を提供する観点から、各種プログラムを実施した。

開会行事として紙風船エクササイズを実施したほか、オリンピック・パラリンピック競技の体験教室（射撃、卓球、フェンシング）、子どもの発達段階に応じた動きを習得する「アクティブ・チャイルド・プログラム」、多様なレクリエーション競技を体験できる「レッツ・チャレンジ！おもしろスポーツ」、登山に関する知識や安全技術を学ぶ「安全登山教室」等を実施した。

また、JSC と Sport Singapore との MOU を活用した「スクエアステップ・エクササイズ」では、オンラインにより HPSC 会場とシンガポール会場、地方会場（北海道中川町、三重県志摩市、福岡県福岡市）を接続して実施したほか、ローイングマシンを活用したバーチャルスポーツプログラムにより、新たな形態のスポーツ体験を提供した。さらに、スポーツ栄養に関する知識を学ぶ「勝ち飯教室」を実施した。

事前申込による味の素 NTC・イースト会場では、午前・午後合わせて 16 プログラムを実施し、小・中学生の親子延べ 449 組 998 名が参加した。シンガポール会場では 150 名、地方会場では合計 94 名が参加した。

施設自由見学では、味の素 NTC・ウエストにおいてトップアスリートのトレーニング環境を見学できる機会を提供し、延べ 1,416 名が参加した。また、事前申込不要のフリープログラムでは、JISS 陸上競技実験場において音響 XR 技術を活用した新たな観戦体験やパラスポーツ体験等を実施し、延べ 1,015 名が参加した。



写真　スクエアステップ・エクササイズ

3. 効果検証

本行事では、参加者の満足度に加え、スポーツに関する意識や行動の変化を把握する観点から、スポーツ行動変容ステージ（無関心期、関心期、準備期、実行期・維持期）に基づくアンケート調査を、行事前・行事直後・行事 3 か月後の 3 時点で実施した。

行事直後の調査では、回答者 221 名のうち 203 名 (91.8％) が満足と回答しており、本行事が参加者にとって一定の満足度を有するものであったことが確認された。

一方、3 時点全てに回答した 177 名を対象に行動変容ステージの変化を比較したところ、参加者全体としては有意な変化は確認されなかった。

ただし、参加形態別にみると、午前・午後の両方のプログラムに参加したグループにおいては、行事前と比較して行事 3 か月後に行動変容ステージが高まる傾向が見られた（$p = 0.041$）。

これらの結果から、本行事は参加者の満足度向上やスポーツへの関心喚起には一定の効果が認められる一方で、参加者全体の行動変容にまで結びつく効果については限定的である可能性が示唆された。また、複数のプログラムに参加するなど関与の程度が高い場合には、行動変容につながる可能性も考えられる。

今後に向けては、こうした結果も踏まえ、参加者の関与のあり方や参加後の行動との関係、さらに実施方法やプログラム構成等について、引き続き検討していくことが考えられる。

（文責　総合企画部）

（4）第 13 回アジアスポーツ科学会議

1.　目的

アジアスポーツ科学会議（ACSS）は、日本（JISS）、中国（CISS）、韓国（KISS）の 3 か国間における情報交換、協力体制の構築及び研究内容の共有を目的として、2 年に 1 度（オリンピック開催年以外）持ち回りで開催されている国際会議である 。各機関の知見を共有することで、アジアにおけるスポーツ科学の更なる発展と連携強化を目指している 。

2. 概要

日　時：2025 年 11 月 4 日 (火) ～ 11 月 6 日 (木)
場　所：韓国 済州島（Hotel WE JEJU）
参加者：石毛勇介、加藤聡志、來海郁（以上、スポーツ科学研究部門）、後藤和海（スポーツ医学研究部門）、橋本真一、三澤健太（以上、事務部）

ACSS は今回で 13 回目を迎え、KISS が担当した。COVID-19 の影響による中止を経て、6 年ぶりの開催となった。今回のテーマは「Beyond Limits: Rethinking Performance Through Sports-Tech Hybrid」であり、JISS からは 6 名、CISS からは 5 名、そのほか主催の KISS 及びドイツやスイスからの招待講演者を含む約50名が参加した。

JISS からは以下の 4 名が、冬季競技を中心とした研究・支援の成果について発表を行った 。



写真 1　JISS からの発表者

氏名	タイトル
石毛 勇介	JISS における冬季競技を対象とした支援と研究
後藤 和海	冬季競技におけるスポーツ外傷と課題
來海 郁	スキージャンプ選手の風洞トレーニングとその三次元モーションキャプチャー
加藤 聡志	カーリングにおける戦術分析のためのストーンシミュレーション

会場では、風洞実験棟の利用やカーリングシミュレーションの実践的な活用方法について、他国の研究者から活発な質問が寄せられた。また、CISS からは競歩選手の血糖とペースの関係性やウエイトリフティングの科学的支援システム等の知見が共有された。KISS からはボッチャ、フィギュアスケート、スピードスケート等の競技を対象としたバイオメカニクス、心理、AI 分析等幅広い研究・支援の成果が発表された。その他招待講演者からは、持久系トレーニングや高所トレーニングに関する世界の最新の知見が共有された。



写真 2　3 機関の代表者（右から JISS,KISS,CISS）

11 月 5 日に行われた代表者会議では、JISS の石毛副所長、CISS の Hong Yuan 副所長、KISS の Kang Young Song 所長らが出席。今後の 3 機関間の継続的なコンタクトや、次回日本開催に向けた連携について協議が行われた 。



写真 3　参加者全員による集合写真

3. まとめ

今回の ACSS は、各国の研究動向を把握するとともに、3 機関のネットワークを再構築する有意義な機会となった 。次回 2027 年度は、JISS がホストとなり日本で開催される予定である。今回の参加で得られた知見をもとに、次回の成功に向けた準備を進めていく。

（文責　事務部事業推進課）

Ⅵ 論文掲載・学会発表

1. 論文（査読有り）

1) Akazawa Nobuhiko, Nakamura Mariko, Eda Nobuhiko, Murakami Haruka, Nakagata Takashi, Nanri Hinako, Park Jonguk, Hosomi Koji, Mizuguchi Kenji, Kunisawa Jun, Miyachi Motohiko, Hoshikawa Masako. Relationship between gastrointestinal environment and physical conditions in elite athletes. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, 15(1): 19-28, 2026.
2) Akazawa Nobuhiko, Otomo Mana, Nakamura Mariko. The response of reaction time and fatigability to exhaustive exercise in young male. Journal of Human Sport and Exercise, 20(3): 829-836, 2025.
3) Ando Ryosuke, Ohnuma Hayato, Tanji Fumiya, Ikeda Tatsuaki, Yamanaka Ryo, Suzuki Yasuhiro. Inter-individual differences in the utilization of elastic energy during running affect the quadriceps femoris volume in highly trained/elite distance runners. Journal of Biomechanics, 193: 113018, 2025.
4) Aoyagi Masashi, Komatsu Takayuki, Togashi Ishin, Iriguchi Kai, Nagao Masashi, Kubota Atsushi, Izawa Hidenori, Someya Yuki, Oshio Koichi, Takazawa Yuji. Effects of intermittent pneumatic compression device on the improvement of tissue oxygen saturation and fluid clearance at the compression site. Frontiers in Physiology, 17: 1725445, 2026.
5) Chen Guanyu, Aihara Shimpei, Takegawa Yoshinari. Attention-enhanced LSTM for real-time curling stone trajectory prediction on resource-constrained devices. Applied Sciences, 16(5): 2612, 2026.
6) Chen Guanyu, Aihara Shimpei, Takegawa Yoshinari. Real-time curling trajectory prediction via attention-enhanced sequential modeling and multi-dimensional feature fusion. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 126-131, 2025.
7) Chiba Rintaro, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Input encoding and data construction strategies for accurate expected score distribution prediction in digital curling. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 132-136, 2025.
8) Fujii Eri, Yoshida Yasuyuki, Kuno-Mizumura Mayumi, Maeda Noriaki, Sasadai Junpei, Urabe Yukio. Ballet-trained individuals demonstrate reduced postural sway and less variation of spinopelvic kinematics compared with an age-matched untrained group during demi-pointe standing. Medical Problems of Performing Artists, 40(4): 145-154, 2025.
9) Fukushima Kazutaka, Kamahara Kazuyuki, Tomori Anna, Nakata Yoshio. COVID-19 infection and return-to-play outcomes of elite athletes in Japan: A retrospective descriptive study. BMJ Open Sport & Exercise Medicine, 11(4): e002731, 2025.
10) Fukushima Kazutaka, Nakayama Haruo, Nakajima Kohei, Nakata Yoshio. Injury mechanisms of concussion in soccer among Japanese middle- and high-school students: a retrospective review of insurance registry data. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, Online Published, 2026.
11) Fukushima Kazutaka, Nakayama Haruo, Tomori Anna, Hangai Mika, Nakajima Kohei, Sasadai Junpei, Otomo Mana, Kojima Yuki, Sasai Hiroyuki, Kiyohara Kosuke, Nakata Yoshio. Epidemiology of sport-related concussions among middle- and high-school students in Japan: a nationwide analysis using insurance registry data. BMJ Open Sport & Exercise Medicine, 12(1): e002943, 2026.
12) Furuhashi Yuki, Muratomi Kotaro, Hasegawa Takahiro, Yoshida Takuya, Tanigawa Satoru, Maemura Hirohiko. Effect of attentional focus on jump exercises in track and field athletes ～ countermovement jump vs. drop jump ～. The Journal of Strength and Conditioning Research, 40(2): 186-190, 2025.
13) Goto Kazumi, Honda Eisaburo, Iwaso Hiroshi, Sameshima Shin, Inagawa Miyu, Ishida Yutaro, Matsuo Koji, Kuzuhara Ryota, Sanada Takaki. Comparison of patellar tendon and hamstring grafts in ACL reconstruction: Patellar tendon shows lower re-rupture rates in high-risk groups and comparable patient-reported outcomes in lower-risk patients. Archives of Orthopaedic and Trauma Surgery, 146(51): 1-11, 2026.
14) Goto Kazumi, Honda Eisaburo, Sameshima Shin, Inagawa Miyu, Matsuo Koji, Shiota Junki, Takagi Hitoshi, Sanada Takaki. The influence of primary femoral bone tunnel position on postoperative outcomes and femoral bone tunnel creation in revision ACL reconstruction. The Journal of Knee Surgery, 39(1): 17-25, 2026.
15) Hagiwara Masahiro, Kinugasa Taisuke, Haramura Miki, Nakao Takehira, Teshima Kazuto, Yamashita Shuhei, Shirai Katsuyoshi. Structural and developmental characteristics of Japanese elite athletes: a longitudinal case study of a talent identification and development programme in Fukuoka prefecture. Frontiers in Sports and Active Living, 8: 1748585, 2026.
16) Hara Riku, Aihara Shimpei, Ito Takeshi. Monocular camera-based system for estimating sweep positions and orientation to enhance curling strategy. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 66-71, 2025.
17) Hashimoto Ritsuko, Yamaguchi Tatsuya, Suzuki Kanami, Sekiguchi Kuniko, Tanaka Miho, Eda Kaori, Tomori Anna, Kamahara Kazuyuki, Dohi Michiko, Machidori Koji, Nakajima Kohei. Characteristics of Japanese elite athletes who utilized mental health services at the Japan High Performance Sports Center during the Tokyo 2020 Olympics and the COVID-19 pandemic. Cureus Journal of Medical Science, 17(6): e86583, 2025.
18) Hikawa Kohei, Shimizu Reia, Takahashi Saeko. Features of elite athletes' high and asymmetric quadriceps angles: A cross-sectional study. Health Science Reports, 8(6): e70909, 2025.
19) Hoshi Daisuke, Fukuie Marina, Asahara Ryota, Tomoto Tsubasa, Zhu C David, Zhang Rong, Ohyama-Byun Keigo, Maeda Seiji, Sugawara Jun, Tarumi Takashi. Coupling between global brain blood oxygen level-dependent activity and cerebrospinal fluid dynamics in young endurance athletes. Experimental Physiology, Online Published, 2026.
20) Hoshi Daisuke, Fukuie Marina, Tomoto Tsubasa, Zhu C David, Zhang Rong, Ohyama-Byun Keigo, Maeda Seiji, Sugawara Jun, Tarumi Takashi. Cerebral blood and cerebrospinal fluid flow dynamics in endurance athletes: Associations with aortic recoil and heart rate. Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports, 36(3): e70261, 2026.

21) Hoshi Daisuke, Fukuie Marina, Tomoto Tsubasa, Qin Wenxing, Tarumi Takashi, Sugawara Jun, Watanabe Koichi. Respiratory regulation and lung volume during aquatic and land-based exercise in healthy young adults. Physiological Reports, 13(19): e70564, 2025.
22) Hoshikawa Masako. Effects of nightly electronic-device restriction and morning bright-light on sleep, mood, and performance among elite athletes. The Journal of Strength and Conditioning Research, 39(11): 1155-1162, 2025.
23) Ichikawa Aoi, Takayama Takahiro, Kojima Chihiro, Fujie Shumpei, Iemitsu Motoyuki, Inoue Koichi. Conversion reaction of stable-isotope oxygen labeling of carboxylic acids for accurate screening LC-MS/MS assay: Application of behavioral changes of short-chain fatty acids in sports athletes under exercise loading. Analytical Chemistry, 97(14): 7765-7771, 2025.
24) Inoue Takumi, Aoyagi Masashi, Kuratsubo Ryota, Shiota Yuki, Nagao Masashi, Kubota Atsushi, Someya Yuki, Komatsu Takayuki, Kishimoto Kohei, Saeki Yurika, Takazawa Yuji. Prevalence and associated factors of rotator cuff tears and shoulder pain in older baseball players: A cross-sectional study. Orthopaedic Journal of Sports Medicine, 13(12): 23259671251397547, 2025.
25) Ishige Yusuke, Inaba Yuki, Hakamada Noriko, Kobayashi Akio, Yoshioka Shinsuke. Comparative study on trunk range of motion in land balance tests and snow skiing: Implications for para-alpine sit-ski performance: A cross sectional study. Health Science Reports, 8(6): e70858, 2025.
26) Iwasaki Yusuke, Someya Yuki, Nagao Masashi, Aoyagi Masashi, Shiota Yuki, Takazawa Yuji. Contact load is associated with both contact and non-contact injuries in rugby union. Frontiers in Physiology, 16: 1672824, 2025.
27) Iwata Risa, Nakamura Mariko, Takahashi Saeko, Tamai Shinsuke, Fukami Kazuya, Shoji Rie, Sasadai Junpei, Shimizu Reia, Nakajima Kohei. Effects of daily post-training, high-concentration CO2-water immersion on thermoregulatory function in young male baseball players. Physiological Reports, 13(17): e70540, 2025.
28) Khatun Suraiya, Uchizawa Akiko, Kondo Emi, Silva M Analiza, Shimamura Yuki, Yamasaki Shogo, Ahagon Yuki, Hoshi Daisuke, Tanaka Yoshiaki, Mukai Naoki, Watanabe Koichi, Omi Naomi, Tanaka Kiyoji, Sagayama Hiroyuki. Exploring the association between bioelectrical impedance parameters and body composition in women with and without dysmenorrhea and postmenopause. Physiological Reports, 13(14): e70473, 2025.
29) Khatun Suraiya, Uchizawa Akiko, Kondo Emi, Yajima Katsuhiko, Silva M Analiza, Hoshi Daisuke, Tanaka Yoshiaki, Mukai Naoki, Watanabe Koichi, Omi Naomi, Tanaka Kiyoji, Sagayama Hiroyuki. Characterizing link among phase angle, muscle strength, body composition variables, and urine metabolites in Japanese females with or without dysmenorrhea: A pilot study. Physiology & Behavior, 300: 115039, 2025.
30) Kimura Keita, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Automatic climbing move detection from fixed-camera bouldering videos using pose and image features. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 72-77, 2025.
31) Kojima Chihiro, Morishima Takuma, Ito Reita, Yasunaga Sosuke, Shimogaki Takumi, Hashimoto Takeshi, Isaka Tadao, Iemitsu Motoyuki. Blood and salivary lactate responses to active rest following circuit exercise. Frontiers in Physiology, 16: 1534668, 2025.
32) Kojima Chihiro, Namma-Motonaga Keiko, Kamei Akiko, Takahashi Yumiko, Ishibashi Aya, Takahashi Hideyuki. Dynamics of muscle glycogen increase in brachial and thigh muscles with carbohydrate loading. European Journal of Applied Physiology, 125(8): 2257-2265, 2025.
33) Kozuma Ayumu, Bulgay Celal, Zempo Hirofumi, Saito Mika, Deguchi Minoru, Homma Hiroki, Matsumoto Shingo, Matsumoto Ryutaro, Kasakolu Anıl, Kazan H Hasan, Bıyıklı Türker, Koncagül Seyrani, Bayda Giyasettin, Ergun A Mehmet, Szabo Attila, Semenova A Ekaterina, Larin K Andrey, Kulemin A Nikolay, Generozov Edward V, Okamoto Takanobu, Nakazato Koichi, Ahmetov I Ildus, Kikuchi Naoki. Genetic factors of elite wrestling status: A multi-ethnic comparative study. Genes, 16(8): 906, 2025.
34) Kozuma Ayumu, Miyamoto-Mikami Eri, Saito Mika, Homma Hiroki, Deguchi Minoru, Matsumoto Shingo, Matsumoto Ryutaro, Okamoto Takanobu, Nakazato Koichi, Fuku Noriyuki, Kikuchi Naoki. Association of the GALNTL6 rs558129 polymorphism with muscle strength in Japanese athletes. Biology of Sport, 42(3): 161-167, 2025.
35) Kukuchi Shuhei, Togashi Ishin, Aoyagi Masashi, Shiota Yuki, Komatsu Takayuki, Takazawa Yuji, Miyamoto Naokazu. Changes in passive muscle stiffness following biceps femoris strain injury in track-and-field athletes: Cross-sectional and longitudinal analyses. Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports, 36(3): e70254, 2026.
36) Kumar Sampath, Gondesi Reddy, Masui Fumito, Aihara Shimpei, Ptaszynski Michal. Rotational dynamics and trajectory prediction of curling stones using machine learning techniques. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 120-125, 2025.
37) Kurata Itsuki, Kanaeda Tomomichi, Aihara Shimpei, Ito Takeshi. Development of a digital curling AI using deep reinforcement learning and SHOT search. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 114-119, 2025.
38) Makino Mizuki, Takigawa Hiroko, Matsubayashi Takeo. Movement characteristics influencing intra-individual performance differences in competitions of men's javelin throw. International Journal of Performance Analysis in Sport, 25(6): 1071-1084, 2025.
39) Matsubayashi Takeo, Ohnuma Hayato. Calculation of mark coordinates in 400 m oval athletics tracks: for enhancing performance analysis. Journal of High Performance Sport, 14: 1-22, 2025.
40) Miura Keisuke, Miyamoto Naokazu. Effects of reduced training volume of Nordic hamstring exercise on eccentric knee flexor strength, and fascicle length and stiffness of biceps femoris long head. Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports, 35(8): e70115, 2025.
41) Miura Keisuke, Miyamoto Naokazu. Reply to the letter to the editor: "minimal dose, maximal scrutiny: a critical appraisal of the feasibility and functional implications of a reduced-volume Nordic hamstring exercise protocol". Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports, 35(12): e70172, 2025.
42) Mujika Iñigo, Nakamura Mariko, Dorfman Xavier, Yamashita Daichi. From underperformance to Olympic finals in a world-class male single sculler: A case study. International Journal of Sports Physiology and Performance, 21(2): 317-321, 2025.
43) Murase Naoki, Suzuki Yuki, Nakashima Hirotaka, Sakurai Shinji. Men strike motion in kendo eighth dan practitioners:

a time series analysis of joint and shinai angle commonalities and variability. Archives of Budo, 21: 285-296, 2026.
44) Nagao Hideyuki, Kobatake Naoyuki, Takemata Toshiro, Yamashita Daichi, Kubo Yasuyuki. Kinematic comparison of successful split jerk and unsuccessful frontward barbell drop among Japanese national-level male weightlifters. International Journal of Sports Physiology and Performance, 21(3): 392-399, 2026.
45) Nagata Shinichi, Yamaguchi Tatsuya, Sassa Takeshi, Orita Yasushi, Inoue Seishiro, Saito Mayumi, Kono Shintaro. Sport for recovery from psychiatric disorders: Psychosocial outcomes and factors contributing subjective well-being. Journal of Psychosocial Rehabilitation and Mental Health, 12: 529-536, 2025.
46) Nakao Gakuto, Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Adachi Risa, Ishiyama Koki, Kozawa Kazuyoshi, Watanabe Kota, Ohsaki Yuki, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Region-specific assessment of the mechanical properties of each hamstring muscle in human cadavers using shear wave elastography. Clinical Biomechanics, 127: 106586, 2025.
47) Nakao Gakuto, Shiwaku Kousuke, Adachi Risa, Kodesho Taiki, Taniguchi Keigo, Otsubo Hidenori. Effects of hydrorelease on the mechanical properties of muscle and fascia: A study using ultrasonic shear wave elastography. Clinical Physiology and Functional Imaging, 46(2): e70052, 2026.
48) Nakashima Hirotaka, Ando Ryosuke, Kameda Mai, Tamai Shinsuke, Iizuka Taro, Hoshikawa Yoshihiro, Nakamura Mariko. Is knee extension strength a key factor in badminton-specific agility among elite players? Frontiers in Sports and Active Living, 7: 1733134, 2026.
49) Nakayama Koichi, Makino Mizuki, Ando Yuka, Enoki Shota, Shoji Kazuma, Manabe Yoshiaki. Effects of tailwind conditions on step length and step frequency in sprinting: An experimental approach. Journal of Physical Education and Sport,25(9): 1960-1965, 2025.
50) Nishi Ryosuke, Ogawa Takahisa, Obokata Yuki, Kubota Atushi, Aoyagi Masashi, Furushima Kozo, Kamatani Kunio. Structural abnormalities of the elbow joint in high school baseball players exposed to the COVID-19 pandemic during their elementary and junior high school years: A sonographic analysis of 354 players at high school entry. JSES International, 10(2): 101605, 2026.
51) Nishiumi Daichi, Yamashita Daichi, Kurokawa Takanori, Hirase Naoki, Wakamiya Kazuki, Mujika Iñigo, Hirose Norikazu. Effects of a 7-day step taper, training cessation, and retraining on lower body physical and morphological aspects in elite female ice hockey players. Frontiers in Sports and Active Living, 7: 1541765, 2025.
52) Nose-Ogura Sayaka, Kawabe Rika, Kashiwagi Yumiko, Senzaki Yoko, Nakamura Yuki, Nakamura Mariko, Tomori Anna, Shirai Katsuyoshi, Nakajima Kohei. Trends in the use of oral contraceptives and progestins in Japanese female Olympic athletes. The Physician and Sportsmedicine, 54(2): 1-9, 2025.
53) Nose-Ogura Sayaka, Yoshino Osamu, Kinoshita Sakiko, Nakamura-Kamoto Hiroe, Tabei Katsuyuki, Komatsu Takayuki, Hamai Ayano, Iida Kengo, Koshimizu Takako, Nakayama Haruo, Fujiya Hiroto, Manabe Tomohiro, Yamasawa Fumihiro, João Gabriel Segato Kruse, Kaneko Miki, Harada Miyuki, Hiraike Osamu, Musha Haruki, Kiyono Ken, Osuga Yutaka, Nakajima Kohei. Development and validation of a pre-screening tool for early detection of low bone mineral density in female athletes (PreST-LBMD). The Physician and Sportsmedicine, 54(1): 63-74, 2026.
54) Ochiai Yuta, Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Iwata Hiroyasu. Research on selective auditory processing in blind football players - effects of noise on sound localization -. 2025 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), 1452-1457, 2025.
55) Ochiai Yuta, Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Iwata Hiroyasu. Virtual reality assessment of auditory spatial perception and navigation in blind football players. 2025 IEEE International Workshop on Sport, Technology and Research (STAR), 215-220, 2025.
56) Ogata Hiroki, Henderson Frederick, Yamashita Daichi. Position-specific benchmarks for jump and reach metrics in the National Basketball Association draft combine. International Journal of Strength and Conditioning, 6(1): 2026.
57) Ogata Hiroki, Yamashita Daichi, Nishikawa Naoto, Yokozawa Toshiharu, Hoshikawa Masako. Lower-limb strength and power characteristics in relation to 180° change of direction ability in elite female basketball players. Frontiers in Sports and Active Living, 7: 1732018, 2026.
58) Ogata Hiroki, Yamashita Daichi, Nishikawa Naoto, Yokozawa Toshiharu, Hoshikawa Masako. Relationship between ground reaction force and sacrum acceleration during 180° change of direction maneuvers in elite female basketball players. Frontiers in Sports and Active Living, 8: 1665797, 2026.
59) Ogata Hiroki, Yamazaki Kazuya, Usui Tomohiro, Shinchi Kotaro, Ikeda Katsuya, Henderson J Frederick, Yamashita Daichi. Lower-limb neuromuscular profiles from force plate testing during elite women's basketball national team camps: A retrospective comparison by final roster status. Sports, 14(2): 84, 2026.
60) Okamoto Shogo, Shimada Yui, Inoue Natsuka, Henderson J Frederick, Yamashita Daichi. Asymmetry of the trunk and lower extremity joint frontal plane kinematics during single-leg standing and squat in Paralympic athletes with upper limb deficiency compared with intact athletes. JOSPT Open, 3(2): 1-8, 2025.
61) Ono Kyoya, Nozu Shojiro, Yoshida Takuya, Okudaira Masamichi, Ota Kazuki, Tanigawa Satoru. Kinetic factors related to the side hop test time in healthy individuals. Translational Sports Medicine, Online Published, 2025.
62) Orimoto Koki, Nakamura Emi, Someya Yuki, Shiota Yuki, Kishimoto Kohei, Aoyagi Masashi, Inoue Takumi, Takazawa Yuji. Influence of medial epicondyle morphology on the contribution of flexor–pronator muscle contractions to dynamic elbow stability. JSES Reviews, Reports, and Techniques, 6(2): 100680, 2026.
63) Qin Wenxing, Fukuie Marina, Hoshi Daisuke, Mori Shoya, Tomoto Tsubasa, Ogoh Shigehiko, Sugawara Jun, Tarumi Takashi. Cardiac baroreflex sensitivity during repeated handgrip exercise: Comparisons with sit-stand maneuvers and spontaneous rest. Physiological Reports, 13(9): e70352, 2025.
64) Shimizu Yutaka, Fukushima Reika, Nishimura Saburo, Matsushita Shoichi, Otsu Takuya, Numazu Naoki. Relationships between single-leg jumping ability and isotonic strength of the trunk and lower limb. Journal of Physical Education and Sport, 25(4): 835-841, 2025.
65) Shiraki Shunsuke, Yamagishi Takaki, Yamashita Daichi. The development of a conversion table and equations for power estimation in Wattbike AtomX cycle ergometer. Sports Engineering, 28(18): 1-8, 2025.
66) Tamura Yoshifumi, Ogawa Wataru, Ishii Kojiro, Ishigaki Yasushi, Nagai Narumi, Hirota Yushi, Morino Katsutaro, Inokuchi Mikako, Suzuki Tomohiro, Tanaka Sakae, Terauchi Masakazu, Nose-Ogura Sayaka. Female underweight/undernutrition syndrome (FUS): An emerging health concept in premenopausal women- secondary publication (English translation of the Japanese statement). The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research, 52(2): e70201, 2026.

67) Tan Kenny, Wan Goh, Boey Desmond, Aziz Luqman, Ozaki Hiroki, Nakashima Hirotaka, Sim Derrick, Lee Marcus. Impact of a new synthetic shuttlecock on badminton performance and player perception. Proceedings of the Institution of Mechanical Engineers, Part P: Journal of Sports Engineering and Technology, Online Published, 2025.
68) Tsubaki Yurina, Kuno-Mizumura Mayumi. Perspectives and evaluation of aesthetic and body parts in pirouette en-dehors and en-dedans: an open-ended questionnaire survey of dancers and teachers. Journal of Dance Medicine & Science, Online Published, 2026.
69) Wakiyama Takuya, Tsubaki Yurina, Kuno-Mizumura Mayumi, Sakaguchi Yutaka. Temporal relationship between dancer's body movements and music beats in classical ballet. Scientific Reports, 15(1): 29976, 2025.
70) Yamagishi Takaki, Yamashita Daichi. Concurrent validity and reliability of a single short all-out cycle test for the determination of maximal power output in physically active male and female adults. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, Online Published, 2025.
71) Yamaguchi Tatsuya, Takagi Shunsuke, Hori Hikaru, Nishida Masaki, Koeda Tomoki, Matsumoto Takuma, Kawata Yujiro, Ota Tsuneyoshi, Takazawa Yuji. Psychometric properties, validation, and reliability of the Japanese version of the sport anxiety scale-2 for university student athletes. Frontiers in Psychology, 16: 1713901, 2025.
72) Yamamoto Tomoki, Kashiwagi Yu, Kageyuki Takafumi, Kobayashi Fumiaki, Funato Kazuo. Effect of stored elastic energy in the bending pole on performance of elite Japanese pole vaulters: An estimation based on box reaction force vector. Biomechanics, 6(1): 1-14, 2026.
73) Yamashita Daichi, Inaba Yuki, Asakura Masaki, Ito Yoshihiko. Center of mass direction and speed during a 45-degree change of direction task performed with maximal effort. Frontiers in Sports and Active Living, 7: 1576614, 2025.
74) Yamashita Daichi, Henderson J Frederick, Ishida Yuko. Assessing the contribution of arm swing to countermovement jump height using three different measurement methods in physically active men. Biomechanics, 5(3): 45, 2025.
75) Yamashita Daichi, Matsumoto Minoru, Matsubayashi Takeo. A proposed method for deep learning-based automatic tracking with minimal training data for sports biomechanics research. Biomechanics, 5(2): 25, 2025.
76) Yamashita Daichi, Yamazaki Kazuya, Yamagishi Takaki, Tsubokura Hana, Jad A Washif, Mujika Iñigo. Training practices of Japanese elite team and combat sport athletes during the COVID-19 pandemic: an interview study with support staff. Frontiers in Sports and Active Living, 71557774, 2025.
77) Yoshida Takuya, Furuhashi Yuki, Shinkai Ryosuke, Zushi Amane, Maemura Hirohiko, Ono Seiji, Tanigawa Satoru. Characteristics of visual search behavior for improving performance in the drop jump intervention instructional movie. International Journal of Sports Science & Coaching, Online Published, 2025.
78) Yoshida Takuya, Tai Kaede, Takahashi Hikari, Yoshioka Hiyori, Komine Tadayuki, Hirashima Yusuke, Zushi Amane, Tanigawa Satoru. Effect of rebound jump improvements on reactive agility performance: Insights into joint mechanics during the takeoff phase. International Journal of Sports Science & Coaching, Online Published, 2026.
79) Yoshida Takuya, Zushi Amane, Kawahara Fusako, Tai Kaede, Ono Kyoya, Takayanagi Kohei, Hirashima Yusuke, Tanigawa Satoru. Relationship between agility performance and rebound jump performance or mechanics during takeoff. International Journal of Sports Science & Coaching, 21(1): 463-471, 2025.
80) Yoshida Takuya, Zushi Amane, Maemura Hirohiko, Ono Seiji, Tanigawa Satoru. Acute effects of visual information blocking during the pre-set on drop jump performance and lower limb kinematics and kinetics: an experimental study. Journal of Human Kinetics, Online Published, 2025.
81) Yoshioka Shinsuke, Ishige Yusuke, Harada Masahiro. Limited effect of load reduction by changing the ski characteristics on the anterior cruciate ligament in the slip-catch injury mechanism in alpine skiing. Computer Methods in Biomechanics and Biomedical Engineering, 5: 1-16, 2025.

1) 明星 光 , 牧野 瑞輝 , 田内 健二 . 女子走幅跳における異なる助走歩数による踏切動作の特徴 . 陸上競技研究 , 138(2): 23-28, 2025.
2) 大岩 奈青 , 鈴木 秀典 , 清水 和弘 , 中嶋 耕平 . アスリートバイオロジカルパスポートの判定解釈に関連する候補遺伝子バリアント . 日本臨床スポーツ医学会誌 , 34(1): 159-169, 2026.
3) 大江 淳悟 . バドミントンにおけるゲームパフォーマンス分析のコーチングへの活用 . コーチング学研究 , 39(1): 65-70, 2025.
4) 小野寺 峻一 , 會田 宏 , 河合 季信 . スポーツ競技団体におけるアスリート育成に関する課題：スピードスケート競技の事例 . スポーツパフォーマンス研究 , 17: 357-371, 2025.
5) 小野寺 峻一 , 河合 季信 . スピードスケート競技における日本と競合国の育成プログラムの比較 . スポーツマネジメント研究 , 17(1): 25-42, 2025.
6) 河合 季信 , 岡部 文武 , 小野寺 峻一 . ショートトラックスピードスケート競技における失格行為の発生状況―2023/24 シーズンにおける ISU ワールドカップシリーズの分析から―. 氷上スポーツ研究 , 6(1): 2-8, 2025.
7) 清水 潤 , 清水 和弘 . AthletesPort のデータから見た第 1 回緊急事態宣言中とその前後のトップアスリートのコンディション . Journal of High Performance Sport, 14: 84-94, 2025.
8) 白木 駿佑 , 尾縣 貢 , 山元 康平 , 木越 清信 . 異なる種類のサブスプリントインターバルトレーニングにおけるエネルギー代謝特性 . 体育学研究 , 早期公開 , 2026.
9) 白木 駿佑 , 下山 好充 , 窪 康之 . パリ五輪に向けた競泳競技者における自転車トレーニング : クロストレーニングとしての実践事例 . 体育学研究 , 70: 819-832, 2025.
10) 鈴木 敦 , 米丸 健太 , 奥野 真由 , 福井 邦宗 , 立谷 泰久 . アスリートのバウムテストの描画特徴―競技レベル差、性差、発達差からの検討―. Journal of High Performance Sport, 14: 61-73, 2025.
11) 高澤 祐治 , 深尾 宏祐 , 塩田 有規 , 小松 孝行 , 染谷 由希 , 井澤 秀典 , 室伏 由佳 , 窪田 敦之 , 野津 将時郎 , 内野 小百合 , 塩澤 淳 , 山口 達也 , 青柳 壮志 , 長尾 雅史 . 日本におけるスポーツ医学教育の現状と課題 スポーツ医学と多職種連携 . 日本臨床スポーツ医学会誌 , 33(2): 240-242, 2025.
12) 高橋 佐江子 , 樋川 幸平 , 笹代 純平 , 庄子 理絵 , 土屋 篤生 , 鈴木 章 , 高嶋 直美 , 堀田 泰史 , 久々知 修平 , 深見 和矢 , 清水 怜有 , 田中 彩乃 , 坂光 徹彦 , 中嶋 耕平 . スタンドアップパドルボード上でのエクササイズ実施前後の身体バランス・メンタル面の変化 . Journal of High Performance Sport, 14: 50-60, 2025.
13) 高柳 尚司 , 新地 弘太郎 , 山下 大地 . フォースプレートを用いたジャンプパフォーマンスの即時フィードバックとキューイングがもたらす即時的・縦断的効果―エリート女子テニス選手の一例―. Strength and Conditioning Journal Japan, 32(9): 11-15, 2025.
14) 髙山 祐美 , 湯面 百希奈 , 木村（萱場）桃子 , 能瀬 さやか , 緒形 ひとみ , 永井 成美 . 18 ～ 49 歳の日本人女性における低体

重者の特徴と低体重に関連する要因 . 栄養学雑誌 , 84(1): 30-40, 2026.
15） 田村 佑樹 , 金田 和輝 , 田城 翼 , 有馬 知志 , 長尾 拓海 , 吉荒 瑠莉奈 , 笹代 純平 , 前田 慶明 . 北京 2022 冬季パラリンピック競技大会パラアルペンスキー競技での転倒調査 : 映像解析による種目別・カテゴリー別の調査 . 日本パラスポーツトレーナー学会誌 , 4(1): 11-16, 2025.
16） 永尾 雄一 , 福井 邦宗 , 三浦 智和 . 国立スポーツ科学センターが提供する映像システムの継続利用を規定する要因の探索的研究 . スポーツ産業学研究 , 35(3): 219-242, 2025.
17） 中西 康己 , 吹田 真士 , 中山 雅雄 , 來海 郁 , 黒﨑 瑛璃奈 , 尾崎 宏樹 , 洪 性賛 , 劉 日翀 , 浅井 武 . 大学女子エリートバレーボール選手におけるジャンプサーブのボール回転数と迎角の特徴 . コーチング学研究 , 40(1): 3-11, 2026.
18） 西野 太陽 , 沼津 直樹 , 伊藤 雅充 . 卓越したある野球投手コーチのアプローチについて：選手の技術レベルに応じた方法 . コーチング学研究 , 39(1): 17-25, 2025.
19） 妙圓園 香苗 , 飯塚 太郎 , 朴 柱奉 , 亀井 明子 , 中村 真理子 . バドミントン日本代表選手における国際大会期間中の連戦に伴う脱水状態の評価 . Journal of High Performance Sport, 14: 74-83, 2025.
20） 山下 修平 , 後藤 晃伸 , 岩崎 賢太郎 , 岡井 理香 , 粟木 一博 . アスリート育成パスウェイにおける競技大会の位置づけについての一考察 . 体育学研究 , 70: 467-481, 2025.
21） 山下 修平 , 萩原 正大 . 中央競技団体のアスリート育成パスウェイモデルを構築支援する試み：ワークショップによる介入の効果と課題 . Journal of High Performance Sport, 14: 36-49, 2025.
22） 山手 勇一 , 水野 洋子 , 沼津 直樹 , 内山 治樹 , 阿江 通良 . パラ陸上（低身長症）男子やり投選手の投てき動作の改善に関する事例的研究 . コーチング学研究 , 39(2): 137-146, 2026.
23） 山中 亮 , 髙橋 恭平 , 小林 海 , 大沼 勇人 , 岩崎 領 , 笠井 信一 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 貴嶋 孝太 , 松林 武生 . 日本エリート 400m 走者の前半 110m 区間における詳細な走速度の検証 . トレーニング科学 , 37(4): 201-209, 2025.
24） 吉野 昌恵 , 元永 恵子 , 近藤 衣美 , 石橋 彩 , 亀井 明子 . 膝関節術後のトップアスリートにおけるリハビリテーション期間中の除脂肪量および血中ビタミン D 濃度の変化 . 日本スポーツ栄養研究誌 , 19: 94-100, 2026.
25） 和久 貴洋 , 久保田 潤 , 木間 奈津子 . 地方スポーツ政策における政策革新に関する研究 : 自治体間の参照関係のネットワーク構造と特性からみた政策革新に関する研究課題と実践アプローチ . スポーツ産業学研究 , 36(1): 45-58, 2026.

2. 依頼原稿

1） Mujika Iñigo, Yamashita Daichi, Guro S Solli. Writing high-quality case studies in sport science. International Journal of Sports Physiology and Performance, 20(12): 1768-1771, 2025.
2） Uchizawa Akiko, Miles-Chan L Jennifer. Practical applications and challenges of bioelectrical impedance when strict standardization of measurement conditions is not feasible. European Journal of Clinical Nutrition, 79(12): 1233-1234, 2025.
1） 合阪 幸三 , 髙橋 優 , 尾市 友里 , 山村 菜実 , 土屋 富士子 , 板橋 香奈 , 森嶋 かほる , 長谷川 亜希子 , 能瀬 さやか , 成田 吉央 , 加藤 匠 , 平池 春子 , 長阪 一憲 . 子宮腺筋症に対する GnRH antagonist とジエノゲストの臨床効果の比較 . 日本エンドメトリオーシス学会会誌 , 46(1): 101-104, 2025.
2） 石毛 勇介 . 国立スポーツ科学センターにおけるパラアスリートを対象とした支援と研究（連載 パラリンピックとスポーツ医学 第 11 回）. 臨床スポーツ医学 , 42(11): 1262-1266, 2025.
3） 内沢 彰子 . Recent Advances & Controversies in the Measurement of Energy Metabolicm（RACMEM）2025 における研究発表を通して . 日本栄養・食糧学会誌 , 79(1): 106, 2026.
4） 大西 壮流 . スポーツ心理学における理論の深化と古典研究の現代的再解釈―理論と実践の新たな統合に向けて―（傍聴記）. 体育心理学専門領域会報 , 37: 4, 2025.
5） 大沼 勇人 , 小林 海 , 松林 武生 , 髙橋 恭平 , 山中 亮 . 2024 年度主要競技会における男子 100m のレース分析 . 陸上競技研究紀要 , 21: 82-86, 2026.
6） 大沼 勇人 , 小林 海 , 松林 武生 , 髙橋 恭平 , 山中 亮 , 岩崎 領 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 . 2025 年度主要競技会における男女 100m のレース分析 . 陸上競技研究紀要 , 21: 87-94, 2026.
7） 小川 渉 , 田村 好史 , 石井 好二郎 , 石垣 泰 , 永井 成美 , 廣田 勇士 , 森野 勝太郎 , 井ノ口 美香子 , 鈴木 公啓 , 田中 栄 , 寺内 公一 , 能瀬 さやか , 日本肥満学会 , 女性の低体重 / 低栄養症候群ワーキンググループ . 閉経前までの成人女性における低体重や低栄養による健康課題 新たな症候群の確立について . 肥満研究 , 31(2): 55-61, 2025.
8） 尾崎 宏樹 , 岩田 理沙 , 髙橋 由衣 , 山本 悠介 , 稲葉 優希 . ハイパフォーマンススポーツアスリートへの科学的トレーニングと研究 ～スノーボードスロープスタイル・ビッグエアの事例～ . トレーニング科学 , 37(1): 23-29, 2025.
9） 蒲原 一之 . 小児科医がもっておくべきアンチ・ドーピングの知識 . 小児科診療 , 89(3): 339-344, 2026.
10） 衣笠 泰介 . トップアスリートにおけるハイパフォーマンス発揮のためのリカバリーに関する最新知見 (特集 ハイパフォーマンス発揮に向けたリカバリーの科学と実践). 臨床スポーツ医学 , 42(6): 582-586, 2025.
11） 小出所 大樹 , 田中 喜晃 , 玉井 伸典 , 衣笠 泰介 , 清水 和弘 , Greg Roach. トップアスリートの海外遠征時における時差・感染症対策（特集 ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス特別セミナー特集）. Journal of High Performance Sport, 13: 54-61, 2025.
12） 坂田 博史 , 久木留 毅 , 山口 伊都子 . e スポーツの国際動向 . 体育の科学 , 75(7): 11-17, 2025.
13） 清水 和弘 . アスリートにおける免疫機能のモニタリング（特集 スポーツ医科学におけるマスデータ・デジタル技術の活用）. 臨床スポーツ医学 , 43(1): 23-27, 2026.
14） 白井克佳 . ハイパフォーマンススポーツにおける支援強靭化を目指して（特集 ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス特別セミナー特集）. Journal of High Performance Sport, 13: 1-2, 2026.
15） 関口 邦子 , 山口 達也 , 水野 寛太 , 中嶋 耕平 . メディカルチェック受診アスリートにおける K10 を用いた精神健康度調査 . スポーツ精神医学 , 22: A23, 2025.
16） 高井 恵理 . 女性アスリートと栄養 . 産婦人科の実際 , 74(8): 787-791, 2025.
17） 高井 恵理 . エネルギー代謝への影響と対策（特集 REDs とは何か？）. 臨床スポーツ医学 , 42(10): 1102-1104, 2025.
18） 谷村 祐子 . 運動習慣のある人は腸内細菌叢の多様性が高い . ヘルシスト , 291(49): 14-17, 2025.
19） 玉井 伸典 . ストレングス＆コンディショニングにおける鍼通電療法の有効性 . 日本東洋医学系物理療法学会誌 , 50(2): 41-48, 2025.
20） 壷倉 花 , 山下 大地 , Adrian J Washif, Laursen Paul, Rønnestad Bent, Halson Shona, Pyne David, Guro Solli, 山岸 卓樹 , Mujika Iñigo. レジリエントなアスリートサポートシステムの構築による個別パフォーマンスの最適化（特集 ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス特別セミナー特集）. Journal of High Performance Sport, 13: 21-36, 2026.
21） 中村 宏美 . 子どものフィジカルリテラシーに関する家庭環境調査（特集 子どものフィジカルリテラシーを考える）. 子ども

と発達発育 , 23(2): 100-105, 2025.
22）中村 真理子 . LEA による身体への影響と対策―心血管系機能への影響と対策―（特集 REDs とは何か？）. 臨床スポーツ医学 , 42(10): 1126-1129, 2025.
23）中村 有紀 . 睡眠への影響と対策（特集 REDs とは何か？）. 臨床スポーツ医学 , 42(10): 1122-1125, 2025.
24）能瀬 さやか . 女性の低体重 / 低栄養症候群と骨密度 . 医学のあゆみ , 296(12): 1058-1061, 2026.
25）能瀬 さやか . 女性アスリートを支援する組織とその役割 . 産婦人科の実際 , 74(8): 743-748, 2025.
26）能瀬 さやか . 女性アスリートの無月経、月経随伴症状への対策 . 小児科診療 , 89(3): 287-294, 2026.
27）能瀬 さやか . 成長期のスポーツの問題点 : 月経異常 . 小児内科 , 58(1): 76-80, 2026.
28）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング 性ホルモンとスポーツ外傷・障害の関連に着目して . 日本臨床スポーツ医学会誌 , 33(2): 207-209, 2025.
29）能瀬 さやか . 若年女性診療に必要な基礎知識 : 女性アスリートの健康 . 臨床婦人科産科 , 80(1): 130-134, 2026.
30）能瀬 さやか . 第 18 回女性アスリートの月経サポートについて . 日本スポーツ協会 Sport Japan, 84: 62-63, 2026.
31）能瀬 さやか . パラ女性アスリート（連載 パラリンピックとスポーツ医学 第 10 回）. 臨床スポーツ医学 , 42(10): 1146-1150, 2025.
32）能瀬 さやか . REDs とは（特集 REDs とは何か？）. 臨床スポーツ医学 , 42(10): 1068-1072, 2025.
33）能瀬 さやか . 女性の低体重 / 低栄養と骨粗鬆症 . 臨床栄養 , 147(3): 306-310, 2025.
34）半谷 美夏 . 謎になりやすい腰痛と低侵襲手術療法など Bertolotti 症候群（特集 謎の腰痛）. 臨床スポーツ医学 , 42(11): 1242-1245, 2025.
35）半谷 美夏 , 三上 幸夫 , 草野 修輔 . パラスポーツの医学的支援 メディカルチェックとアンチ・ドーピング活動（連載 パラリンピックとスポーツ医学 第 8 回）. 臨床スポーツ医学 , 42(8): 924-928, 2025.
36）Henderson Frederick, 壷倉 花 , 山下 大地 , 関口 泰樹 , 玉川 康平 , Buchheit Martin, McCall Alan, Impellizzeri Franco, 山岸 卓樹 , Mujika Iñigo. パフォーマンス最適化のためのトレーニング負荷管理（特集 ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス特別セミナー特集）. Journal of High Performance Sport, 13: 37-53, 2026.
37）星川 雅子 , 三ツ山 晃弘 . スポーツにおける睡眠 - アスリートの睡眠を知る―国立スポーツ科学センターにおける睡眠研究と歯科におけるナイトガード作製数 . 睡眠口腔医学 , 12(総会特別号): 46, 2025.
38）牧野 瑞輝 . 陸上競技走幅跳競技者におけるトレーニング手段としての短助走跳躍の意義を探る . コーチング学研究 , 38(2): 223-225, 2025.
39）松林 武生 , 景行 崇文 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 牧野 瑞輝 , 庄司 一眞 , 志賀 充 . 2025 年シーズンにおける七種競技選手のパフォーマンス分析 . 陸上競技研究紀要 , 21: 212-216, 2026.
40）松林 武生 , 景行 崇文 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 牧野 瑞輝 , 庄司 一眞 , 志賀 充 . 2025 年シーズンにおける十種競技選手のパフォーマンス分析 . 陸上競技研究紀要 , 21: 204-211, 2026.
41）松林 武生 , 山岸 卓樹 , 景行 崇文 , 後藤 晴彦 , 門馬 怜子 , 谷村 祐子 , 大石 益代 , 袴田 智子 . パラアスリートに対する低酸素トレーニングの実践と課題：個人特性および競技特性に応じたサポートの可能性（特集 ハイパフォーマンスとライフパフォーマンス向上のための高地・低酸素トレーニング）. トレーニング科学 , 38(1): 25-32, 2026.
42）村田 宗紀 , 山下 大地 , 稲葉 優希 , 中本 浩揮 , 渡邉 諒 . 動作解析（モーションキャプチャ）を用いた動きの指導法 . 体育の科学 , 76(2): 84-90, 2026.
43）山口 達也 , 山本 宏明 , 北原 亜加利 , 丸尾 享司 , 矢野 郁明 , 髙木 俊輔 , 高畑 圭輔 , 永井 宏 , 新井 清美 , 栗林 千聡 , 武田 大輔 , 柄木田 健太 , 江田 香織 , 室伏 由佳 , 坂 房和 , 友利 杏奈 , 田中ウルヴェ 京 , 髙澤 祐治 . アスリートのメンタルとは？（特集 スポーツと心）. 臨床スポーツ医学 , 42(12): 1282-1289, 2025.
44）山口 達也 . トップアスリートのオーバートレーニング症候群と周辺病理 . スポーツ精神医学 , 22: 31-36, 2025.
45）山口 達也 . ADHD アスリートへの薬剤選択と治療戦略 . 臨床精神薬理 , 28(8): 873-878, 2025.
46）山口 達也 . パリオリンピック 2024 におけるメンタルヘルス総合支援活動 ウェルフェアオフィサー、スポーツ精神科医として . スポーツ精神医学 , 22(1): A18, 2025.
47）山崎 和也 , 壷倉 花 , 山下 大地 , Spiering Barry, Tous-Fajardo Julio, Burke Louise, Balague Gloria, Buchheit Martin, Sandbakk Øyvind, 山岸 卓樹 , Mujika Iñigo. コロナ禍で得た教訓 : ハイパフォーマンススポーツアスリートのディトレーニングとリトレーニング（特集 ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス特別セミナー特集）. Journal of High Performance Sport, 13: 3-20, 2026.
48）山下 大地 . 筋力・筋パワー・筋持久力向上のプログラミング（特集 骨格筋を極める ; 骨格筋のコンディショニングを極める）. 臨床スポーツ医学 , 42(8): 884-888, 2025.
49）山中 亮 , 髙橋 恭平 , 小林 海 , 大沼 勇人 , 岩崎 領 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 松林 武生 . 2025 年度競技会における男女 400m 走のレース分析 . 陸上競技研究紀要 , 21: 95-101, 2026.
50）和久貴洋 , 花岡裕吉 , 久保田潤 . 社会課題解決時代における地方スポーツ政策の再定位―戦略性・論理性・参照性・国際性・連携性からの検討―. 体育・スポーツ政策研究 , 35(1): 19-29, 2026.

3. 書籍等出版物

1） 青柳 壮志 . 頭頚部・脊椎の外傷・障害予防とリハビリテーション . 髙澤 祐治 , 小松 孝行（編）, スポーツ運動医学 , 文光堂 , 110-120, 2025. 12.
2） 桶谷 敏之 . 第 11 章スポーツ・インテグリティ . スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～ , 笹川スポーツ財団 , 263-266, 273-275, 2026. 3.
3） 亀井 明子 . 第 1 章スポーツと身体 4 アスリートの身体（求められる体型）. 川野 因 , 田中 茂穂 , 目加田 優子 , 柳沢 香絵（編）, スポーツ栄養の食事計画 : 理論と競技特性にあわせた実践 , 建帛社 , 21-26, 2025. 9.
4） 衣笠 泰介 . 第 10 章ハイパフォーマンススポーツ . スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～ , 笹川スポーツ財団 , 240-243, 2026. 3.
5） 久木留 毅 . 第 10 章ハイパフォーマンススポーツ . スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～ , 笹川スポーツ財団 , 256-258, 2026. 3.
6） 久保田 潤 . 第 10 章ハイパフォーマンススポーツ . スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～ , 笹川スポーツ財団 , 251-253, 2026. 3.
7） 清水 和弘 . トータルコンディショニング概論 . 公認スポーツファーマシスト認定講習テキスト , 日本スポーツフェアネス推進機構 , 80-82, 2025. 7.
8） 中村 有紀 . 第 10 章ハイパフォーマンススポーツ . スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～ , 笹川スポーツ財団 , 249-251, 2026. 3.

9） 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター（編），アスリート支援ハンドブック，大修館書店，2025. 4.
10） 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター（編），国立スポーツ科学センターメディカルチェックハンドブック，文光堂，2025. 10.
11） 野口 順子．第 10 章ハイパフォーマンススポーツ．スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～，笹川スポーツ財団，254-256, 2026. 3.
12） 能瀬 さやか．第Ⅳ症ランニングと健康 女性ランナーにおける相対的エネルギー不足．ランニング学会（編），ランニング学事典，朝倉書店，310-311, 2025. 10.
13） 能瀬 さやか．月経随伴症状．学校保健の動向，丸善出版，261, 2025. 11.
14） 能瀬 さやか．女性とスポーツ医学．髙澤 祐治，小松 孝行（編），スポーツ運動医学，文光堂，254-260, 2025. 12.
15） 能瀬 さやか．コラム：女性アスリート外来．沢井 史穂，須永 美歌子（編），女性のライフステージと運動・スポーツ，朝倉書店，102, 2026. 3.
16） 能瀬 さやか．第 1 章水泳コーチ基礎理論 1-7 女性アスリートの医・科学．水泳連盟（編），公認水泳コーチ用 水泳コーチ教本第 4 版，大修館書店，74-85, 2026. 3.
17） 萩原 正大．第 10 章ハイパフォーマンススポーツ．スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～，笹川スポーツ財団，246-249, 2026. 3.
18） Female Athletes Research Support Team (FARST). 白井 克佳，能瀬 さやか，柏木 由美子，川邊 莉香，田中 祐，中村 有紀，和田 朝子（監），女性アスリート FARST ガイド［ベーシック編］女性アスリートのコンディショニングのための基礎知識，日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター，2025. 12.
19） 半谷 美夏．第 1 章水泳コーチ基礎理論 1-6 水泳の医学．日本水泳連盟（編），公認水泳コーチ用 水泳コーチ教本 第 4 版，大修館書店，50-54, 63-65, 2026. 3.
20） 藤原昌．第 10 章ハイパフォーマンススポーツ．スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～，笹川スポーツ財団，243-244, 2026. 3.
21） 藤原昌，夏見円．第 10 章ハイパフォーマンススポーツ．スポーツ白書 2026 ～スポーツの新たな価値創造への挑戦～，笹川スポーツ財団，245-246, 2026. 3.
22） 三浦 佳祐．第 3 章飛込 3-4 飛込のトレーニング．日本水泳連盟（編），公認水泳コーチ用 水泳コーチ教本 第 4 版，大修館書店，168-174, 2026. 3.
23） 元永 恵子．第 2 部実践編－競技特性にあわせた食事計画―12. ブラインドサッカー．川野 因，田中 茂穂，目加田 優子，柳沢 香絵（編），スポーツ栄養の食事計画：理論と競技特性にあわせた実践，建帛社，159-165, 2025. 9.
24） 山口 達也．スポーツとメンタルヘルス．髙澤 祐治，小松 孝行（編），スポーツ運動医学，文光堂，279-287, 2025. 12.
25） 山田 悦子．第 1 部第 6 章国際開発・国際協力におけるスポーツの意義．遠藤 利明（監），日本スポーツ政策推進機構（編），スポーツの可能性を問う，ベースボール・マガジン社，130-145, 2025. 12.
26） 横澤 俊治．8.2 ランニングサイクルの成り立ち，8.4 ランニングにおける関節運動，8.7 筋収縮の様式．ランニング学会（編），ランニング学事典，朝倉書店，256-257, 260-261, 266-267, 2025. 10.
27） 吉田 拓矢，図子 あまね．第 1 部：実践的予測スキル⑦プライオメトリックトレーニングの評価と実践～予測を伴う先取り動作やプレセットの重要性～．小野　誠司，木塚 朝博（編），運動技能につながる予測スキル，杏林書院，60-69, 2026. 2.

4. 報告書

1） 稲川 祥史，宮﨑 大地，山本 悠介，三浦 智和．映像サポートの基礎．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 映像・情報技術分野，1, 2025.
2） 大坪 香菜子，柄木田 健太，近藤 みどり，齊藤 千波，立谷 泰久，髙橋 由衣，冨永 哲志，本郷 由貴．アスリートのためのメンタルトレーニング（基礎編）トピック①「経験を言葉にして整理する」．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野，2025.
3） 大坪 香菜子，柄木田 健太，近藤 みどり，齊藤 千波，立谷 泰久，髙橋 由衣，冨永 哲志，本郷 由貴．アスリートのためのメンタルトレーニング（基礎編）トピック②「自分の特徴を客観的に理解する」．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野，2025.
4） 大坪 香菜子，柄木田 健太，近藤 みどり，齊藤 千波，立谷 泰久，髙橋 由衣，冨永 哲志，本郷 由貴．アスリートのためのメンタルトレーニング（基礎編）トピック③「身体を通して心を整える」．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野，2025.
5） 大坪 香菜子，柄木田 健太，近藤 みどり，齊藤 千波，立谷 泰久，髙橋 由衣，冨永 哲志，本郷 由貴．アスリートのためのメンタルトレーニング（共通部分）トピック⓪「メンタルトレーニングとは」．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野，2025.
6） 大坪 香菜子，柄木田 健太，近藤 みどり，齊藤 千波，立谷 泰久，髙橋 由衣，冨永 哲志，本郷 由貴．チームビルディング．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野，2025.
7） 加藤 英人，屋良慣汰，田村 尚之．ストレングス＆コンディショニングに必要な情報の整理と活用．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ S&C 分野，1-121, 2025.
8） 加藤 英人，屋良慣汰，田村 尚之．トレーニングの基礎．HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ S&C 分野，1-106, 2025.
9） 木村 裕也．アカデミー事業：エリートアスリート強化部門，コーチ養成部門．令和 6 年度 スピードスケート科学・情報事業報告書，6: 48-51, 2025.
10） 木村 裕也．チームパシュート競技隊列滑走のダイナミックな空力解析．令和 6 年度 スピードスケート科学・情報事業報告書，6: 55-60, 2025.
11） 木村 裕也．情報事業 報告：成果発表．令和 6 年度 スピードスケート科学・情報事業報告書，6: 37-37, 2025.
12） 半谷 美夏，武田 秀樹，友利 杏奈，小松 孝行，佐藤 正裕，庄子 理絵，三ツ山 晃弘．医務関係，本部関係報告．第 33 回オリンピック競技大会（2024 / パリ）TEAM JAPAN 報告書，376-395, 2025.

5. 講演・特別講演・シンポジウム等

1） Goto Kazumi. SAFE the meniscus: Suture-first, anatomic, failure-aware, evidence-based. The Meniscus Asian Summit 2025, 2025. 12.
2） Hoshikawa Masako, Iwata Risa. Heat and time-zone adaptation strategies: The JISS approach toward LA2028. ASPC

XIV International Forum on Elite Sport 2025, 2025. 10.
3) Ishige Yusuke. Support and research for winter sports at the Japan Institute of Sports Sciences. Asian Conference on Sport Science 2025, 2025. 11.
4) Kato Satoshi, Aihara Shimpei. Stone simulation for tactical analysis in curling. Asian Conference on Sport Science 2025, 2025. 11.
5) Kukidome Takeshi, Cook Natalie OAM, Sakakibara Saya. Building a golden legacy: unlocking the benefits of major sporting events. World Expo 2025 – Osaka, Panel speaker event – 23 April 2025, 2025. 4.
6) Kukidome Takeshi, Chun-Wei Su, Rosemond Emily. From high performance to life performance: Advancing through innovation, research, and collaboration case studies: Australia, Singapore and Japan's initiatives. Virtual Sports Forum Plus, 2026. 3.
7) Nakao Gakuto, Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Watanabe Kota, Ohsaki Yuki, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Applied ultrasound shear wave elastography for skeletal muscle mechanical stress assessment and clinical applications. The 20th Congress of World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology 2025, 2025. 6.
8) Nishida Yusuke. Symposium: What are the key topics in knee ultrasound? - Ultrasound diagnosis and treatment for adult anterior knee pain. JSOA2025, 2025. 9.
9) Ozaki Hiroki. Beyond quantity: Value-driven data strategy for elite athlete empowerment. 15th International Symposium on Computer Science in Sport, 2025. 9.
10) Tachiya Yasuhisa. Psychological support and research on "Resilience" at the host Olympic Games in Japan. International Society of Sport Psychology 16th World Congress, 2025. 12.

1) 相原 伸平. スポーツ情報学の転換点：IPSJ スポーツ情報学研究会が拓く未来. 第 11 回日本スポーツパフォーマンス学会大会, 2025. 7
2) 相原 伸平. データと AI で拓くカーリング競技支援. 日本学術会議 公開シンポジウム, 2025. 6.
3) 相原 伸平. 競技現場を支えるスポーツ AI の現在地―映像トラッキングと戦術解析による実践的支援―. 東京体育学会第 17 回学会大会, 2026. 3.
4) 安藤 良介. 競技スポーツにおける医科学サポートの最前線. 日本アプライドスポーツ科学会第 5 回大会, 2026. 1.
5) 飯塚 太郎, 窪 康之, 尾崎 宏樹. HPSC によるスポーツ医･科学サポートの方向性 ―中央競技団体(NF)が策定する選手発掘･育成・強化の中長期戦略を軸として―. ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
6) 稲葉 優希. シンポジウム「四肢の協調動作メカニズム」. 第 31 回日本バイオメカニクス学会大会, 2025. 12.
7) 桶谷 敏之, 竹澤 美郁, 中村 宏美, 堀田 裕二, 平塚 卓也. スポーツ団体ガバナンス強化に関する施策の評価の在り方. 日本体育・スポーツ政策学会第 35 回大会, 2025. 12.
8) 尾崎 宏樹. オリンピック本番直前のコンディショニング JSC サポート拠点の取り組みについて. 2025 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー, 2025. 7.
9) 柏木 由美子. JISS メディカルチェック時の面談～女性アスリートの課題とサポート～. ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
10) 亀井 明子. ハイパフォーマンススポーツセンター内栄養評価システムにおける事例. 第 72 回日本栄養改善学会学術総会, 2025. 9.
11) 亀井 明子. 国際総合大会でのスポーツ栄養士活動と栄養士間の連携―パリ 2024 大会より―. 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会, 2025. 8.
12) 衣笠 泰介.「HPSC × Science Tokyo」ハイパフォーマンスの知からライフパフォーマンスの実装へ. 東京科学大学 VI シンポジウム「心身を育む未来型スポーツ環境の整備」, 2026. 2.
13) 衣笠 泰介. スポーツ埼玉の未来を考える会 シンポジウム「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ～スポーツで人生をもっと豊かに～」. スポーツ埼玉の未来を考える会, 2026. 1.
14) 衣笠 泰介. 日本における長期育成モデルの現在地. 第 1 回全日本柔道連盟･学術団体連携「柔道を考える. 柔道から考える」カンファレンス, 2026. 2.
15) 衣笠 泰介, 徳武 岳. ハイパフォーマンスディレクターのための HPSC リカバリー機能見学ツアー. ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
16) 久木留 毅. 国内外におけるスポーツ・インテグリティをめぐる今日的課題. 身体運動文化学会 創立 30 周年記念大会, 2025. 12.
17) 久木留 毅, 永友 洋司, 山崎 一彦. 世界で勝つために必要なトータルコンディショニング ～ハイパフォーマンスディレクター対談～. Japan Sports Week 2025, 2025. 6.
18) 久木留 毅, 加隈 基嗣, 静間 佳代子, 坂本 麻美, 藪内 あゆみ, 池田 瑞紀, 小清水 孝子. ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）が取り組む 地域タレント発掘・育成プログラムの課題と可能性について. 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会, 2025. 8.
19) 久木留 毅, 菊 幸一, 室伏 由佳, 出雲 輝彦, 田原 陽介.「国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現」ハイパフォーマンススポーツセンターの役割と機能 日本の国際競技力向上. 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会, 2025. 8.
20) 久木留 毅, 杉田 正明, 平松 竜司. トータルコンディショニングの知見を如何にして展開していくか―ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ―. SPORTEC 2025, 2025. 8.
21) 久木留 毅, 大杉 住子, 来田 享子, 齋藤 健司. スポーツ政策における政策形成過程のあり方―スポーツ政策の合理性とは. 日本体育・スポーツ政策学会第 35 回大会, 2025. 12.
22) 久木留 毅, 大杉 住子, 和気 秀文, 髙橋 英幸, 伊坂 忠夫, 家光 素行.「ハイパフォーマンスアスリートの国際競技力向上に向けた研究と実践」ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）が 大学と連携する意義. 第 79 回日本体力医学会大会, 2025. 9.
23) 久木留 毅, 津下 一代, 中村 宇一, 鈴川 仁人, 工藤 和俊, 島田 信男. ライフパフォーマンスを高めるスポーツ医学（Ⅰ）ライフパフォーマンスとはなにか？. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.
24) 清水 和弘. アスリートにおけるトータルコンディショニング. 第 50 回日本運動療法学会学術集会, 2025. 7.
25) 清水 和弘. アスリートにおけるトータルコンディショニング. 第 79 回日本体力医学会大会, 2025. 9.
26) 清水 和弘. ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る. 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会, 2025. 8.
27) 高井 恵理. 事例から考えるスポーツ栄養マネジメントの実際と工夫～無月経からの回復を目的とした事例～. 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会, 2025. 8.

28）田中 彩乃 . 「ラグビー選手の外傷予防に向けての視点と対応―外傷発生機転に基づいたスポーツ動作、機能の捉え方―」女子ラグビー選手における動作特性を考慮した外傷予防 . 日本スポーツ整形外科学会 2025, 2025. 9.
29）田中 喜晃 . 実験室環境下におけるヒトを対象とした 時間栄養学的評価方法 . 第 12 回日本時間栄養学会学術大会 , 2025. 9.
30）谷村 祐子 . アスリートのトータルコンディショニングを支えるハイパフォーマンススポーツ研究：腸内細菌叢を用いたコンディショニング研究 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
31）冨永 哲志 , 大坪 香菜子 , 奥野 真由 , 千葉 陽子 . HPSC とスポーツ心理学会との連携・協働の在り方を考える―Psychological Support Specialist 会議に向けて―. 日本スポーツ心理学会第 52 回大会 , 2025. 9.
32）中村 宏美 . 会員企画セッション：スポーツ団体ガバナンス強化に関する施策の評価の在り方「報告③ 自己説明・公表の有効性をどのように検証するか -JISS 研究の紹介」. 日本体育・スポーツ政策学会第 35 回大会 , 2025. 12.
33）西田 雄亮 . 体外衝撃波治療 Extracorporeal Shock Wave Therapy: ESWT（シンポジウム「整形外科の積極的保存治療」）. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
34）能瀬 さやか . スポーツに参加する女性の健康課題とその治療 ～月経困難症の治療から無月経の対応まで～ . 第 249 回熊本産科婦人科学会総会・学術集会 , 2025. 7.
35）能瀬 さやか . スポーツに取り組む子供たちの今と未来の健康を守るために . 第 69 回滋賀県学校保健・安全研究大会 , 2025. 10.
36）能瀬 さやか . スポーツに励む女子児童生徒の健康課題とその解決に向けて . 日本学校保健会文部科学省補助事業研修会 , 2025. 7.
37）能瀬 さやか . スポーツに励む女子児童生徒の健康課題とその対応 . 第 72 回福井県養護教諭研究協議会 , 2025. 6.
38）能瀬 さやか . 若年の「痩せすぎ」「運動不足」と将来の不健康リスク . 第 15 回運動器抗加齢医学研究会 , 2025. 12.
39）能瀬 さやか . 若年期の痩せがもたらす健康への影響 . 第 15 回運動器抗加齢医学研究会 , 2025. 12.
40）能瀬 さやか . 女性アスリート ～ TOKYO2020 以降何が変わったのか？～ . 日本女性医学学会女性のヘルスケア研修会 , 2026. 3.
41）能瀬 さやか . 女性アスリートが抱える医学的課題と支援状況 . 第 43 回日本受精着床学会総会・学術集会 , 2025. 8.
42）能瀬 さやか . 女性アスリートにおける健康課題とその対策 . 石川県スポーツドクター協議会記念講演会 , 2025. 6.
43）能瀬 さやか . 女性アスリート支援に関する情報提供 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
44）能瀬 さやか . 女性のヘルスケアとスポーツ . 第 11 回新潟女性医学研究会 , 2025. 4.
45）能瀬 さやか . 妊娠期・産後のスポーツ実施に向けた支援・研究の現状 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
46）能瀬 さやか . 婦人科・スポーツの視点からみた相対的エネルギー不足と健康への影響 . 第 44 回日本臨床運動療法学会学術集会 , 2025. 9.
47）浜野 純 . アスリートの食事と口腔疾患の予防 . 日本スポーツ歯科医学会第 36 回総会・学術大会 , 2025. 12.
48）半谷 美夏 . アスリートにおける胸腰椎移行部の障害の特徴と対応 . 日本スポーツ整形外科学会 2025, 2025. 9.
49）半谷 美夏 . トップアスリートの分離症 . 第 2 回日本脊椎スポーツ研究会 , 2025. 11.
50）半谷 美夏 . 学術委員会 競技スポーツ部会 大会医療小員会企画「国内大会における医療救護体制 について」. 国内最高峰レベルの大会における医療救護体制アンケートの概要 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
51）半谷 美夏 . 国立スポーツ科学センター（JISS）医学研究部門 スポーツ医学のさまざまな最前線フィールドの「今」～病院だけじゃない、サポート現場との連携 . 2025 筑波スポーツ医学セミナー（SMIT）, 2025. 8.
52）廣松 千愛 . 持久性競技者の糖質摂取および運動のタイミングが血糖値に及ぼす影響 . 第 12 回日本時間栄養学会学術大会 , 2025. 9.
53）星川 雅子 . アスリートの睡眠と時差調整 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
54）星川 雅子 , 三ツ山 晃弘 . 国立スポーツ科学センターにおける睡眠研究と歯科におけるナイトガード作製数 . 第 24 回日本睡眠歯科学会 総会・学術集会 , 2025. 10.
55）三ツ山 晃弘 . 若手研究者の集い . 日本スポーツ歯科医学会第 36 回総会・学術大会 , 2025. 12.
56）妙圓園 香苗 . オリンピック選手のサポートについて ～ JISS 総合型サポート・バドミントン～ . 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会 , 2025. 8.
57）元永 恵子 . ハイパフォーマンススポーツセンター栄養グループの取り組み . 第 73 回宮崎県スポーツ学会 , 2025. 10.
58）元永 恵子 . パラアスリートと多職種連携：日本スポーツ栄養学会合同シンポジウム 多職種連携から見た新たなアスリートサポート . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
59）山岸 卓樹 . パフォーマンス最適化のためのトレーニング負荷管理 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
60）山岸 卓樹 . 高強度インターバルトレーニングにおける最小量の探求 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス：特別セミナー 2026「ハイパフォーマンススポーツにおけるトレーニング負荷・適応・意思決定」, 2026. 2.
61）山岸 卓樹 . 高強度インターバルトレーニングの最新知見 ～トレーニング効果を生みだす最小量について～ . 第 22 回乳酸研究会 , 2026. 2.
62）山岸 卓樹 . 高強度インターバルトレーニングの理論と実践 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
63）Yamashita Shuhei. The current landscape of talent identification and development for para athletes in Japan. 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第 30 回大会 , 2025. 12.
64）山下 修平 , 安井 博志 , 魚住 稿 . ハイパフォーマンスディレクターと考えるアスリート育成パスウェイの構築・活用 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
65）山下 大地 . フォースプレートを用いた コンディション評価と応用 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.

6. 学会発表

1） Akiyama Kei, Okunuki Takumi, Kumai Tsukasa, Hirose Norikazu. Clinical case study: Elite female soccer player with medial tibial stress syndrome. 2025 American College of Sports Medicine Annual Meeting, 2025. 5.
2） Aoyagi Masashi, Komatsu Takayuki, Someya Yuki, Nagao Masashi, Kubota Atsushi, Tanigawa Aoi, Iriguchi Kai, Kishimoto Kohei, Nagato Shunsuke, Nakamura Akira, Nakayama Kazunaga, Sakaguchi Masanori, Takazawa Yuji. Recent trends in bone stress injuries in long-distance runners. 2025 ASICS SMA Conference, 2025. 10.
3） Chen Guanyu, Aihara Shimpei, Takegawa Yoshinari. Real-time curling trajectory prediction via attention-enhanced sequential modeling and multi-dimensional feature fusion. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
4） Chiba Rintaro, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Input encoding and data construction strategies for accurate expected score distribution prediction in digital curling. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.

5) Fukushima Kazutaka, Nakayama Haruo, Tomori Anna, Hangai Mika, Nakajima Kohei, Sasadai Junpei, Otomo Mana, Sasai Hiroyuki, Kiyohara Kosuke, Nakata Yoshio. Descriptive epidemiology of sports-related concussion amoung adolescents in Japan, 2012-2020: A retrospective analysis of insurance registry data. Aspetar World Conference 2025, 2025. 10.
6) Garcia Johan, Slawinski Jean, Précar Camille, Doro Victor, Yamashita Daichi, Brocherie Franck. Effect of deceleration intensity during repeated sprints on muscle stiffness and damage kinetics. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
7) Hara Riku, Aihara Shimpei, Ito Takeshi. Monocular camera-based system for estimating sweep positions and orientation to enhance curling strategy. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
8) Hatano Kei, Goto Haruhiko, Koizumi Jun, Matsubayashi Takeo. Assessment of oxygen uptake kinetics measured using the mixing chamber method during incremental exercise. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
9) Hayashida Takumi, Kawamura Akihiro, Aihara Shimpei, Kurazume Ryo. Experimental validation of bolt type force sensor in speed climbing. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
10) Hikawa Kohei, Takahashi Saeko, Shimizu Reia, Higashihara Ayako, Nakajima Kohei. Sex differences in physical characteristics of previous MT-5 elite soccer player. 8th AFC Medical Conference, 2025. 7.
11) Iriguchi Kai, Shojiro Nozu, Togashi Ishin, Aoyagi Masashi, Uchino Sayuri, Takazawa Yuji. Relationship between medial longitudinal arch and ground reaction forces in long-distance runners during running. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
12) Iwata Risa, Nakamura Mariko, Tamai Shinsuke, Kodesho Taiki, Takahashi Saeko, Sasadai Jumpei, Shimizu Reia, Shoji Rie, Fukami Kazuya, Nakajima Kohei. Exploring a novel passive heat acclimation method using CO_2 water baths. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
13) Kawabe Rika, Ogura-Nose Sayaka, Nakamura Mariko, Tanaka Ayano, Soejima Yori, Takai Eri, Kondo Midori, Shirai Katsuyoshi. Female athlete support project in Japan High Performance Sport Center; Reflecting on achievements from after Tokyo 2020 to Paris 2024 Olympic and Paralympic Games. The 2025 Female Athlete Conference, 2025. 6.
14) Kawamura Akihiro, Aihara Shimpei, Kurazume Ryo. Comparison of advanced and intermediate climbers on dyno technique using force measurement system. The 7th International Rock Climbing Research Association Congress, 2025. 8.
15) Kawamura Akihiro, Morinaga Wataru, Nakamichi Tomoro, Aihara Shimpei, Kurazume Ryo. Improvement of accuracy of human pose estimation using RGBD images with ICP algorithm in sport climbing. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
16) Kimura Keita, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Automatic climbing move detection from fixed-camera bouldering videos using pose and image features. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
17) Kondo Midori, Kinugasa Taisuke, Onishi Takeru, Wylleman Paul. A consensus-based conceptual model of "performance health" in high performance sport. International Society of Sport Psychology 16th World Congress, 2025. 12.
18) Kondo Midori, Shirai Katsuyoshi. Psychological assessment report of elite female athletes in the postpartum return process: Initiatives of the Japan High Performance Sports Center. The 2025 Female Athlete Conference, 2025. 6.
19) Kurata Itsuki, Kanaeda Tomomichi, Aihara Shimpei, Ito Takeshi. Development of a digital curling AI using deep reinforcement learning and SHOT search. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
20) Makino Mizuki, Nakahara Takanori, Nagakubo Kentaro, Ando Yuka, Tauchi Kenji. Kinetic characteristics of the orientation and rear legs in volleyball spike jump. The XXX Congress of the International Society of Biomechanics, 2025. 7.
21) Makio Shiori, Uchino Sayuri, Komatsu Takayuki, Someya Yuki, Aoyagi Masashi, Naraoka Yuna, Kawase Asaki, Tanigawa Aoi, Matsui Norie, Takazawa Yuji. A survey on lifestyle habits, gynecological visits, and medication use in female university student athletes with dysmenorrhea. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
22) Mitsuyama Akihiro, Tomori Anna, Hangai Mika, Nakajima Kohei. Dental trauma and mouth guard usages of Japanese athletes of 2024 Paris Olympic Games. Aspetar World Conference 2025, 2025. 10.
23) Momma Reiko, Tanimura Yuko, Yamagishi Takaki, Goto Haruhiko, Kageyuki Takafumi, Hakamada Noriko, Matsubayashi Takeo. Self-conditioning in a para-athlete with spinal cord injury: Monitoring menstrual cycle related fluctuations. Women in Sport Congress 2026, 2026. 3.
24) Myoenzono Kanae, Koizumi Jun, Yamagishi Takaki, Ando Ryosuke. Dehydration is related to the number of intermittent activities during a basketball match in competitive players. International Sport & Exercise Nutrition Conference 2025, 2025. 12.
25) Nakamura Mariko, Nose-Ogura Sayaka, Kawabe Rika, Shirai Katsuyoshi. Changes in the prevalence of dysmenorrhea among Japanese elite athletes competing in the past eight Olympic Games. The 2025 Female Athlete Conference, 2025. 6.
26) Nakamura Mariko, Shimizu Jun, Takebayashi Yoshitake. Longitudinal monitoring of internal load in an elite athlete: A single-case study towards the Paris Olympic Games. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
27) Nakashima Hirotaka, Ando Ryosuke, Kameda Mai, Tamai Shinsuke, Iizuka Taro, Hoshikawa Yoshihiro, Nakamura Mariko. Knee extension strength is an important factor for badminton-specific agility even among elite players. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
28) Nose-Ogura Sayaka, Kawabe Rika, Nakamura Mariko, Shirai Katsuyoshi. Trends in the use of hormonal

preparations in female athletes who participated in the past five Summer Olympic Games. The 2025 Female Athlete Conference, 2025. 6.
29) Ochiai Yuta, Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Iwata Hiroyasu. Research on selective auditory processing in blind football players - effects of noise on sound localization -. IEEE International Conference on Systems,Man,and Cybernetics 2025, 2025. 10.
30) Ochiai Yuta, Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Iwata Hiroyasu. Virtual reality assessment of auditory spatial perception and navigation in blind football players. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
31) Onishi Takeru, Yabunaka Yuki, Shimokawa Masayoshi, Hirakawa Takehito. Characteristics of handball players excelling in one-on-one breakthrough. International Society of Sport Psychology 16th World Congress, 2025. 12.
32) Ozaki Hiroki, Nakashima Hirotaka, Lee Marcus, Goh Wan Xiu, Hong Sungchan, Kurosaki Erina, Asai Takeshi. Aerodynamic characteristics of synthetic shuttlecocks in badminton. The XXX Congress of the International Society of Biomechanics, 2025. 7.
33) Sampath Gondesi, Reddy Kumar, Masui Fumito, Aihara Shimpei, Ptaszynski Michal. Rotational dynamics and trajectory prediction of curling stones using machine learning techniques. IEEE International Workshop on Sport,Technology and Research 2025, 2025. 10.
34) Sasabe Koki, Moteki Tatsuya, Akiyama Kei, Hirose Norikazu. Hip extension range of motion is associated with impulse during the late concentric phase of vertical jumping. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
35) Shintani Takumi, Kawamura Akihiro, Aihara Shimpei, Kurazume Ryo. Instrumented climbing hold for force measurement in speed climbing. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
36) Guro S Solli, Yamashita Daichi, Mujika Iñigo. The science of champions: Case study insights into world-class athletes' training and physiology. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
37) Tachiya Yasuhisa. Psychological support for the Japanese men's national handball team from 2019 to 2024. 2025 World Congress on Kinesiology & Sport Science, 2025. 10.
38) Takahashi Saeko, Hikawa Kohei, Nakajima Kohei. Stress fractures in adolescent football players. 8th AFC Medical Conference, 2025. 7.
39) Togashi Ishin, Aoyagi Masashi, Shiota Yuki, Uchino Sayuri, Someya Yuki, Sekiya Yuta, Junzong Hu, Nagao Masashi, Sugibayashi Takanori, Yamazaki Kazuhiko, Takazawa Yuji. Comprehensive assessment of recovery from hamstring strain injuries. 2025 ASICS SMA Conference, 2025. 10.
40) Tominaga Satoshi, Hongo Yuki, Onishi Takeru, Tachiya Yasuhisa, Karakida Kenta. A qualitative research on top athletes' use of social media during the 2024 Paris Olympics and Paralympics Games. International Society of Sport Psychology 16th World Congress, 2025. 12.
41) Tsubaki Yurina, Kuno-Mizumura Mayumi. Investigation of classical ballet rotational movement skills with pointe shoes -Quantitative and qualitative analysis-. World Physiotherapy Congress 2025, 2025. 5.
42) Tsubaki Yurina, Kuno-Mizumura Mayumi. Determinants of pirouette performance identified through a questionnaire and biomechanical analysis. IADMS 35th conference, 2025. 9.
43) Tsubaki Yurina, Ozaki Hiroki, Yokozawa Toshiharu. Investigation of judging point on snowboard big air based on questionnaire and biomechanical analysis. The XXX Congress of the International Society of Biomechanics, 2025. 7.
44) Yamagishi Takaki, Hagiwara Masahiro, Ando Ryosuke, Shiraki Shunsuke, Henderson Frederick, Yamashita Daichi. The frequency of repeated-sprint training in hypoxia does not impact overall physiological and performance adaptations in male university basketball players. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.
45) Yamazaki Kazuya, Tanaka Shuji, Nishikawa Naoto, Akimoto Moeko, Hosaki Kanae, Furukawa Miyuki, Henderson J Frederick., Takashima Naomi, Suzuki Akira, Hotta Yasushi, Takahashi Saeko, Tanaka Ayano, Shoji Rie, Sakamitsu Tetsuhiko, Nishida Yusuke, Nakajima Kohei, Yamashita Daichi. Phase-specific force-time characteristics of countermovement jump in Japanese elite female athletes following ACL reconstruction. Aspetar World Conference 2025, 2025. 10.
46) Yoshida Yudai, Aihara Shimpei. Explainable AI-based approach for the evaluation of throwing motion skills. The 30th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2025. 7.

1) 相原 伸平 , 加藤 聡志 , 小笠原 歩 , 柳 等 , 桝井 文人 . モバイル端末を用いたリアルタイム映像解析に基づくカーリング競技者支援ツールの開発 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 8.
2) 相原 伸平 , 加藤 聡志 , 小笠原 歩 , 柳 等 , 桝井 文人 . 競技空間をリアルタイムに計測する可搬型カーリングストーン挙動解析システム . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
3) 赤井 崚真 , 昆陽 雅司 , 相原 伸平 . 振動体感に基づくカーリングのスイープ動作技能の比較 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
4) 赤澤 暢彦 , 中村 真理子 , 谷村 祐子 . 学生アスリートにおける身体コンディションと胃腸症状の関係 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
5) 秋山 圭 , 寺本 香 , 菅井 映里 , 細川 由梨 , 谷所 慶 . 日本ラクロス協会による女性ラクロス競技の支援に向けた実態調査 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
6) 秋山 圭 , 広瀬 統一 . 脛骨内側ストレス症候群を有した選手における足底パッド装着の影響 . 第 14 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 , 2025. 9.
7) 浅野 憲一 , 永江 亜紗 , 本郷 由貴 , 川崎 直樹 , 寺島 瞳 . うつ病と不安症に対するコンパッション・フォーカスト・セラピーのパイロットランダム化比較試験 . 日本心理学会第 89 回大会 , 2025. 9.
8) 浅野 憲一 , 永江 亜紗 , 本郷 由貴 , 寺島 瞳 . コンパッション・フォーカスト・セラピーを勧められたうつ病や不安症の人たちはどんな心理的特徴を有しているのか？―小児逆境体験と心理的変数との関連の検討―. 第 24 回日本トラウマティック・

ストレス学会学術総会, 2025. 8.

9) 足立 梨紗, 小出所 大樹, 中尾 学人, 奈良 銀二, 石山 輝希, 小澤 和祥, 関口 慶大, 谷口 圭吾. 大腿四頭筋の粘弾性と爆発的な運動パフォーマンスとの関係―超音波せん断波エラストグラフィによる検討―. 第76回北海道理学療法士学術大会, 2025. 12.

10) 足立 梨紗, 小出所 大樹, 中尾 学人, 奈良 銀二, 石山 輝希, 関口 慶大, 氣田 寿華, 澤野 純平, 平山 翔太, 谷口 圭吾. 腓腹筋内側頭およびアキレス腱の力学特性と足底屈トルク発揮率の関係. 第12回日本スポーツ理学療法士学術大会, 2025. 11.

11) 足立 梨紗, 小出所 大樹, 中尾 学人, 奈良 銀仁, 石山 輝希, 小澤 和祥, 関口 慶大, 谷口 圭吾. せん断波イメージングで評価した外側広筋の弾性・粘性と膝伸展トルク発揮率との関係. 第79回日本体力医学会大会, 2025. 9.

12) 足立 梨紗, 谷口 圭吾, 小出所 大樹, 中尾 学人, 奈良 銀二, 石山 輝希, 小澤 和祥, 関口 慶大, 金谷 耕平. トルク発揮率の違いが筋の力学特性と爆発的な運動パフォーマンスの関係に与える影響. 第36回日本整形外科超音波学会, 2025. 7.

13) 足立 梨紗, 谷口 圭吾, 小出所 大樹, 中尾 学人, 奈良 銀二, 片寄 正樹. 安静時の外側広筋弾性とカウンタームーブメントジャンプにおける力発揮特性との関係. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

14) 安藤 良介, 小泉 潤, 山岸 卓樹, 緒方 博紀, 白木 駿佑, 山下 大地. バスケットボールのシミュレーションゲームを用いた高強度活動量のポジション比較. 第79回日本体力医学会大会, 2025. 9.

15) 池田 昌史, 古橋 侑季, 吉田 拓矢, 菅野 航平, 木梨 嘉紀, 谷川 聡, 前村公彦. 提示する映像の違いがドロップジャンプパフォーマンスに及ぼす影響. 日本コーチング学会第37回学会大会, 2026. 3.

16) 石井 美子, 高井 恵理, 能瀬 さやか, 亀井 明子. 無月経トップアスリートに対する 栄養外来後の月経回復有無による血中ホルモン値の比較. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

17) 井上 拓海, 青柳 壮志, 倉坪 亮太, 折本 昂生, 佐伯 悠里香, 金子 雅志, 服部 佑太朗, 佐久間 航平, 太田 裕一郎, 浅田 涼花, 髙澤 祐治. 腱板断裂を有する還暦野球競技者における肩峰骨頭間距離と肩関節可動域および筋力の特徴. 第12回日本スポーツ理学療法学会学術大会, 2025. 12.

18) 井上 拓海, 青柳 壮志, 倉坪 亮太, 塩田 有規, 長尾 雅史, 染谷 由希, 窪田 敦之, 小松 孝行, 中村 絵美, 岸本 康平, 佐伯 悠里香, 折本 昂生, 髙澤 祐治. 還暦野球競技者における腱板断裂の有病率と関連因子. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

19) 入口 海, 岸本 康平, 染谷 由希, 青柳 壮志, 小松 孝行, 窪田 敦之, 谷川 あおい, 仲村 明, 長門 俊介, 中山 和長, 阪口 正律, 長尾 雅史, 髙澤 祐治. 男女大学陸上長距離選手における大腿骨 Bone Stress Injury に関する実態調査. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

20) 岩崎 圭祐, 豊島 由佳子, 氷見 健太, 三ツ山 晃弘, 林 成晃, 萩原 芳幸, 太田 武雄, 林 光俊, 大友 克之. メディカルチェックにおけるバレーボールナショナルチームの口腔内状況の変化について. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

21) 岩崎 裕介, 染谷 由希, 長尾 雅史, 塩田 有規, 青柳 壮志, 河瀬 麻希, 高澤 祐治. ラグビー競技における Contact Load と非接触型外傷・障害リスクとの関係. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

22) 宇土 昌志, 立谷 泰久, 村上 貴聡, 平木 貴子, 荒井 弘和. トップアスリートに必要な心理的能力を向上させる方略の検討―アスリートへのインタビュー調査を通して―. 日本スポーツ心理学会第52回大会, 2025. 9.

23) 大坪 香菜子, 水野 寛太, 立谷泰久. パリ2024オリンピック競技大会における国際競技成績と心理的競技力の関連性. 九州スポーツ心理学会第39回大会, 2026. 3.

24) 小口 貴久, 江田 香織, 谷村 祐子, 沼津 直樹, 大越 光介, 友利 杏奈. JOC エリートアカデミー事業が競技力に及ぼす影響. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会, 2025. 8.

25) 桶谷 敏之, 石堂 典秀. スポーツ試合の不正操作防止に関する国際連携の動向について. 日本スポーツ法学会第33回学会大会, 2025. 12.

26) 落合 祐太, 辻 歩, 相原 伸平, 岩田 浩康. ブラインドサッカー競技者の選択的聴取能力の研究―動的雑音が音源定位へ与える影響の分析―. ロボティクス・メカトロニクス講演会 2025, 2025. 6.

27) 落合 祐太, 辻 歩, 相原 伸平, 岩田 浩康. ブラインドサッカー競技における移動を伴う自己位置の相対的定位能力に関する研究. Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.

28) 落合 祐太, 辻 歩, 相原 伸平, 岩田 浩康. ブラインドサッカー競技者の空間認知能力に関する研究. 第26回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 2025. 12.

29) 翁長 舞, 加藤 聡志, 大橋 智志, 相原 伸平. テニスサーブにおける単眼映像上のラケット挙動推定―深層学習と用具構造の統合的手法―. 日本体育測定評価学会第25回大会, 2026. 2.

30) 翁長 舞, 加藤 聡志, 大橋 智志, 相原 伸平. 単眼映像におけるテニスラケット挙動の推定 ―深層学習と用具構造の統合的手法―. 日本体育測定評価学会第25回大会, 2026. 2.

31) 小野寺 峻一. スピードスケート競技におけるブレード研磨の実態と課題―ROC 形状に着目して―. 日本氷上スポーツ学会第7回研究大会, 2025. 6.

32) 小野寺 峻一, 友利 杏奈, 萩原 正大, 山口 真未, 山下 修平, 原村 未来, 白井 克佳. スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会, 2025. 8.

33) 小野寺 峻一, 友利 杏奈, 山口 真未, 山下 修平. スポーツタレント発掘・育成事業の育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究―オーストラリアのタレント発掘・育成事業関係者へのインタビュー調査―. 日本コーチング学会第37回学会大会, 2026. 3.

34) 折本 昂生, 中村 絵美, 染谷 由希, 塩田 有規, 岸本 康平, 青柳 壮志, 井上 拓海, 髙澤 祐治. 上腕骨内側上顆の形状変化が肘関節動的安定性に与える影響. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

35) 柏木 由美子. 当センターにおける女性アスリートトータルサポート実施状況と、子宮頸がんワクチン接種率の現状. 第36回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.

36) 片桐 諒祐, 曽根 忠瑛, 河村 隆, 相原 伸平. デジタルカーリングサーバの公開に向けての通信プロトコルの検討と実装. Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.

37) 加藤 聡志, 相原 伸平. 機械学習によるカーリングストーンの軌道および衝突挙動の予測. Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 8.

38) 加藤 聡志, 相原 伸平. 機械学習と物理モデルの統合によるカーリングストーンの軌道および衝突挙動の予測. 第4回スポー

ツ情報学研究発表会 , 2026. 3.
39）加藤 聡志 , 相原 伸平 . 機械学習と物理モデルの統合によるカーリングストーン挙動のシミュレーション . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
40）金枝 誠迪 , 相原 伸平 , 伊藤 毅志 . PUCT を用いたカーリング AI の開発 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
41）柄木田 健太 , 冨永 哲志 , 大西 壮流 , 立谷 泰久 , 本郷 由貴 . パリ 2024 大会における村外サポート拠点での心理サポート利用に関する調査 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
42）河邉 裕也 , 桝井 文人 , 柳 等 , 相原 伸平 , プタシンスキ ミハウ . 実対戦データを用いたカーリング AI への CNN・DNN 導入の検討 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
43）木村 渓太 , 千葉 麟太郎 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 加藤 聡志 , 來海 郁 , 山下 大地 , 翁長 舞 , 山本 雅人 . クライミング動作におけるマーカレスモーションキャプチャを用いた筋活動推定モデルの構築 . 第 4 回スポーツ情報学研究発表会 , 2026. 3.
44）木村 裕也 . 国際競技会スピードスケートチームパシュートレースにおける先頭交代回数の推移 . 日本コーチング学会第 37 回学会大会 , 2026. 3.
45）木村 裕也 . 国際競技会スピードスケート女子チームパシュートレースにおけるプッシュ戦術採用と選手間距離の調査 . 東京体育学会第 17 回学会大会 , 2026. 3.
46）倉田 樹 , 相原 伸平 , 伊藤 毅志 . 深層強化学習と SHOT 探索を用いたデジタルカーリング AI の開発 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
47）倉坪 亮太 , 渡邊 裕之 , 嘉治 一樹 , 平岡 龍大 , 長尾 雅史 , 井上 拓海 , 安達 陽平 , 槙尾 栞 , 青柳 壮志 , 髙澤 祐治 . 男子大学競泳選手における肩峰骨頭間距離および肩関節筋力の短期的変化の検討 . 第 12 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 12.
48）小泉 潤 , 波多野 慶 , 中村 真理子 , 松林 武生 . 国内トップレベルのローイング選手における酸素摂取動態と運動パフォーマンスとの関連 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
49）小泉 潤 , 山岸 卓樹 , 白木 駿佑 , 緒方 博紀 , ヘンダーソン フレデリック , 山下 大地 , 安藤 良介 . 慣性センサーを用いたバスケットボール試合中における外的負荷の評価と体力特性の関連 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
50）小出所 大樹 , 中尾 学人 , 足立 梨紗 , 石山 輝希 , 小澤 和祥 , 安藤 良介 , 谷口 圭吾 . せん断波イメージングで定量した筋粘弾性と他動運動時の力－角速度関係との関連性 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
51）小出所 大樹 , 山形 一真 , 中尾 学人 , 片寄 正樹 , 谷口 圭吾 . 大腿直筋の等尺性収縮時の弾性率に筋内部位差は存在するか？ - 超音波せん断波エラストグラフィによる検討 -. 第 12 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 11.
52）後藤 和海 . JISS クリニックにおける冬季競技選手の受診状況について . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
53）後藤 和海 . 冬季競技ハイレベルアスリートでの脳振盪既往歴に関する調査 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
54）後藤 晴彦 , 亀田 麻依 , 飯塚 哲司 , 袴田 智子 , 松林 武生 , 半谷 美夏 . 座位パラアスリートの身体組成における測定原理間の誤差の検討 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
55）Gondesi Reddy Kumar Sampath, Masui Fumito, Aihara Shimpei, Ptaszynski Michal. High-precision prediction of curling stone trajectories using LightGBM with physics-informed features. 第 3 回スポーツ情報学研究発表会 , 2025. 11.
56）今野 雄太 , 千葉 麟太郎 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 山本 雅人 . 試合状況を考慮した期待特典予測モデルによるカーリングにおける Leverage Index の考察 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
57）齋藤 良輝 , 相原 伸平 , 吉田 雄大 , 大田 穂 , 渡邉 拓貴 , 竹川 佳成 . 投球動作の個別指導支援システムに向けた骨格時系列解析と LLM を用いたフィードバック生成手法の提案 . 日本体育測定評価学会第 25 回大会 , 2026. 2.
58）塩澤 淳 , 青柳 壮志 , 富樫 維親 , 塩田 有規 , 金子 晴香 , 石島 旨章 , 髙澤 祐治 . 成人女子陸上競技選手における新鮮腰椎分離症の発症関連因子の検討 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
59）清水 潤 . Oura Ring を用いた運動時心拍数測定精度の検証 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 8.
60）清水 潤 , 山肩 洋子 . 採点系競技のパフォーマンス改善支援のための大規模言語モデルを用いた評価観点生成 . メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会 (MVE), 2026. 3.
61）清水 知恵 , 井上 拓海 , 青柳 壮志 , 倉坪 亮太 , 佐伯 悠里香 , 折本 昂生 , 入口 海 , 臼井 勇輔 , 服部 佑太朗 , 佐久間 航平 , 浅田 涼花 , 髙澤 祐治 . 還暦野球競技者におけるロコモティブシンドロームの改善・増悪に関連する因子の検討 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
62）白井 克佳 , 山下 修平 , 小野寺 峻一 , 友利 杏奈 , 原村 未来 , 山口 真未 , 萩原 正大 . 小中学生期を対象とするタレント発掘・育成事業における育成プログラムと支援体制の構築に関する質的研究（アスリート育成パスウェイ）. 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
63）白木 駿佑 , 木村 裕也 , 窪 康之 . エリート競泳競技者におけるストレングストレーニングによるスタートパフォーマンスの改善 . 日本コーチング学会第 37 回学会大会 , 2026. 3.
64）新谷 拓海 , 河村 晃宏 , 相原 伸平 , 倉爪 亮 . スポーツクライミングのスピード種目におけるセンサ内蔵型ホールド負荷計測システム . 第 26 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 , 2025. 12.
65）杉山 諒 , 宮森 隆行 , 池田 浩 , 青柳 壮志 , 岩木 峻平 , 坂本 季実子 , 吉村 雅文 . 大学サッカー選手の大腿直筋に対する容量性・抵抗性 高周波療法の筋組織弾性および局所血流動態への影響 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
66）鈴村 圭 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 山本 雅人 . カーリング公式記録集向け自動データベース化システムの開発 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
67）先崎 陽子 , 能瀬 さやか , 宮本 由記 , 小島 佑基 , 柏木 由美子 , 石川 麻子 , 細金 未来 , 中嶋 耕平 . 女性アスリートの子宮頸部細胞診異常についての実態調査 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
68）曽根 忠瑛 , 片桐 諒祐 , 河村 隆 , 相原 伸平 . カーリング技能と氷面状態を評価可能なスマートシューズの開発 : スライダ内蔵センサによる滑走時の氷面の基礎計測 . 第 3 回スポーツ情報学研究発表会 , 2025. 11.
69）髙橋 佐江子 , 西田 雄亮 , 松林 武生 , 飯塚 哲司 , 後藤 晴彦 , 田中 彩乃 , 堀田 泰史 , 中嶋 耕平 . 膝前十字靭帯再建術後アスリートの大腿四頭筋横断面積の変化 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
70）髙橋 由衣 , 高井 秀明 . 個人の気質と熟考との関連に対する認知的柔軟性の媒介効果 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
71）髙橋 由衣 , 高井 秀明 . 防衛的悲観主義を利用するアスリートのパフォーマンス発揮のメカニズムに関する予備的検討 . 日

本スポーツ心理学会第 52 回大会 , 2025. 9.
72）竹内 幸弥 , 千徳 風真 , 佐藤 誠洋 , 福岡 秀哉 , 千葉 至 , 小松崎 美帆 , 寒川 美奈 . 寒冷環境での warm-up 後にブリザードジャケットの着用が筋温とジャンプパフォーマンスへ与える効果 . 第 12 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 11.
73）田所 優一 , 相原 伸平 , 桝井 文人 , 山本 雅人 . カーリングミックスダブルスにおける戦術分析―得点差に基づく先攻第一投の位置が得点に与える影響―. Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
74）田所 優一 , 桝井 文人 , 相原 伸平 , 柳 等 , プタシンスキ ミハウ . デジタルスコアブックにおけるミスショットの要因分析支援機能の設計 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
75）田中 聡子 , 成田 崇矢 , 大塚 ひとみ , 池津 真大 , 合阪 幸三 , 能瀬 さやか . 産後の Head up、Draw in 運動が腹直筋間距離に与える影響 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
76）田中 聡子 , 成田 崇矢 , 佐藤 圭 , 大塚 ひとみ , 池津 真大 , 石塚 怜王 , 合阪 幸三 , 能瀬 さやか . 妊娠・産後における腹直筋離開の縦断的変化 : 初回妊娠と 2 回目妊娠の比較 . 第 11 回日本ウィメンズヘルス・メンズヘルス理学療法学会学術大会 , 2025. 12.
77）田中 聡子 , 成田 崇矢 , 佐藤 圭 , 大塚 ひとみ , 池津 真大 , 吉原 潔 , 石塚 怜王 , 合阪 幸三 , 能瀬 さやか . 妊娠後期から産後における腹直筋離開の有症率の変化と腰部骨盤帯痛との関係 . 第 33 回日本腰痛学会 , 2025. 10.
78）田中 毅 , 相原 伸平 , 合田 徳夫 . 移動エントロピーを用いた身体連携ネットワークの定量評価手法 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
79）谷川 あおい , 岸本 康平 , 青柳 壮志 , 染谷 由希 , 小松 孝行 , 入口 海 , 長門 俊介 , 中山 和長 , 阪口 正律 , 長尾 雅史 , 髙澤 祐治 . 大学男子陸上長距離選手における外傷・障害調査 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
80）千葉 麟太郎 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 山本 雅人 . 勝率テーブルを用いたデジタルカーリングにおける期待得点分布予測の高精度化 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
81）千葉 麟太郎 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 山本 雅人 . デジタルカーリングにおける期待得点分布推定モデルのシミュレーションによる精度評価 . 第 4 回スポーツ情報学研究発表会 , 2026. 3.
82）千葉 麟太郎 , 田村 康将 , 相原 伸平 , 山本 雅人 . デジタルカーリングにおける期待得点分布予測のための入力表現手法の改善 . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
83）陳 冠宇 , 相原 伸平 , 竹川 佳成 . カーリング軌道予測のための多次元特徴量と拡張可能モデルの統合 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
84）陳 冠宇 , 相原 伸平 , 竹川 佳成 . Stop-aware transformer-based trajectory prediction for real-time curling applications. カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
85）富樫 維親 , 青柳 壮志 , 塩田 有規 , 内野 小百合 , 染谷 由希 , 関屋 裕太 , 胡 峻綜 , 小松 孝行 , 長尾 雅史 , 宮本 直和 , 青木 和浩 , 杉林 孝法 , 山﨑 一彦 , 髙澤 祐治 . ハムストリング肉ばなれからの回復における包括的評価 . 第 12 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 12.
86）豊島 由佳子 , 岩崎 圭祐 , 三ツ山 晃弘 , 髙垣 智博 . CAMBRA を用いたジュニアアスリートのカリエス評価について ～第 2 報 CAMBRA123 への移行型とその経過～ . 第 162 回日本歯科保存学会 2025 年度春季学術集会 , 2025. 6.
87）豊島 由佳子 , 岩崎 圭祐 , 三ツ山 晃弘 , 髙垣 智博 . アスリートのためのう蝕予防プログラム策定の現状（ジュニアアスリートへの予防プログラム）. 日本スポーツ歯科医学会第 36 回総会・学術大会 , 2025. 12.
88）長尾 秀行 , 小畑 直之 , 山下 大地 , 窪 康之 . 高い競技力を有するウエイトリフティング選手のスプリットジャークの特徴 . NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2025, 2026. 2.
89）長島 理 , 笹代 純平 , 半谷 美夏 . 車いすバドミントン選手における非ラケット側肩関節痛の一例 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
90）中野 啓太郎 , 宮森 隆行 , 青柳 壮志 , 鈴木 孝典 , 坂本 季実子 , 池田 浩 , 吉村 雅文 . 足関節捻挫既往足における足部筋持久力と姿勢制御の関連 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
91）仲道 智郎 , 河村 晃宏 , 相原 伸平 , 倉爪 亮 . スポーツクライミングの動作・力情報可視化システム ClimbViS 開発 . 第 26 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 , 2025. 12.
92）中村 拓夢 , 原 流空 , 相原 伸平 , 伊藤 毅志 . 単眼映像を用いたカーリングストーンの回転推定手法の開発 . 第 3 回スポーツ情報学研究発表会 , 2025. 11.
93）中村 隼人 , 谷村 祐子 , 山下 大地 , 沼津 直樹 , 松林 武生 . 日本人エリートユース男子選手におけるリバウンドジャンプの発達特性 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
94）中村 隼人 , 谷村 祐子 , 山下 大地 , 沼津 直樹 , 松林 武生 . 日本人成長期エリート男子選手におけるリバウンドジャンプ能力の発達特性 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
95）中村 寛江 , 木下 紗林子 , 市川 麻美子 , 小清水 孝子 , 能瀬 さやか , 合阪 幸三 . 当院女性アスリート外来における、月経随伴症状に対するホルモン製剤使用状況に関する調査 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
96）中村 有紀 , 中村 真理子 , 門馬 怜子 , 松田 知華 , 相澤 勝治 , 鈴木 なつ未 . 女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析 女性アスリート育成パスウェイ構築のために . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
97）中村 有紀 , 花岡 裕吉 , 清水 和弘 , 衣笠 泰介 , 谷村 祐子 , 田中 喜晃 , 白井 克佳 , 久木留 毅 . パリ 2024 大会に向けて実践したコンディショニングに関する調査―日本代表選手団選手を対象として―. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
98）西田 雄亮 , 橋本 拓 , 水石 裕 , 岩橋 秀樹 , 川副 陽子 , 五十嵐 貴宏 , 福田 直子 , 今給黎 直明 , 林 光俊 , 大友 克之 . 中学生高身長バレーボール選手の膝蓋腱エコー検診 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
99）沼津 直樹 , 谷村 祐子 , 山下 大地 , 小口 貴久 , 松林 武生 . 同一競技における国内一流選手の体力からみた JOC エリートアカデミー選手の体力の比較 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
100）沼津 直樹 , 平嶋 裕輔 , 松倉 啓太 . FIFA ワールドカップ 2022 におけるシュート着弾点とゴールキーパーの失点リスク―ゴール前中央エリアおよびポスト帯に着目したゲーム分析―. 日本フットボール学会 23rd Congress, 2026. 1.
101）野澤 巧 , 後藤 晴彦 , 沼津 直樹 , 松林 武生 . 国立スポーツ科学センターにおけるフィットネスチェックの活用実態に関する検証 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
102）能瀬 さやか . 妊娠を希望する女性アスリートの懸念と競技団体規程に関する調査 ～日本パラリンピック委員会（JPC）女性スポーツ委員会調査結果より～ . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
103）萩原 正大 , 山口 真未 , 小野寺 峻一 , 原村 未来 , 山下 修平 , 友利 杏奈 , 白井 克佳 . スポーツタレント発掘育成事業からトッ

プアスリートに到達した者の特徴（アスリート育成パスウェイ）. 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
104) 波多野 慶 , 松林 武生 , 柚木 孝敬 . 間欠的な低酸素曝露が足関節底屈力に及ぼす影響 . 第 33 回日本運動生理学会 , 2025. 7.
105) 波多野 慶 , 松林 武生 , 柚木 孝敬 . 間欠的な高二酸化炭素曝露が足関節底屈力に及ぼす影響 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
106) 花井 菜々子 , 藤枝 砂月 , 本郷 由貴 , 浅野 憲一 . デルファイ法を用いた有効な自助･親切方略の検討 . 第 25 回日本認知療法･認知行動療法学会 , 2025. 11.
107) 花岡 祐吉 , 中村 有紀 , 清水 和弘 , 衣笠 泰介 , 田中 喜晃 , 白井 克佳 , 久木留 毅 . トータルコンディショニングに関する実態調査～パリ 2024 大会に出場した中央競技団体（NF）へのアンケート調査より～ . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
108) 浜野 純 , 田畑 泉 . 女性高校生陸上長距離選手における拾骨折の危険因子 - トレーニングの量と強度の観点から . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
109) 林田 拓実 , 河村 晃宏 , 相原 伸平 , 倉爪 亮 . 歪みゲージを用いたボルト型力覚センサの開発―キャリブレーション手法と配線方式の改良―. ロボティクス・メカトロニクス講演会 2025, 2025. 6.
110) 原 流空 , 相原 伸平 , 伊藤 毅志 . カーリング戦略の高度化に向けた単眼カメラベースのスウィープ位置推定システム . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
111) 原 流空 , 相原 伸平 , 伊藤 毅志 . 単眼映像解析によるスウィープ動作推定システム . カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
112) 東中 友哉 , 波多野 慶 , 小泉 潤 , 沼津 直樹 , 星川 雅子 , 横澤 俊治 , 山下 大地 , 松林 武生 . 走幅跳選手と短距離選手の筋発達の特徴 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
113) 東中 友哉 , 波多野 慶 , 小泉 潤 , 沼津 直樹 , 星川 雅子 , 横澤 俊治 , 山下 大地 , 松林 武生 . 走幅跳選手と短距離選手の大腿部および体幹部の筋発達の特徴 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 2025. 11.
114) 樋川 幸平 , 大山 貴裕 , 田中 彩乃 , 小田 桂吾 , 大石 徹 , 米村 仁洋 , 川道 幸司 , 梶尾 安正 , 田中 哲平 , 中嶋 耕平 . レスリング選手における意識消失を伴う脳振盪の実態―横断的アンケート調査―. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
115) 樋川 幸平 , 高橋 佐江子 , 半谷 美夏 , 金子 知広 , 東原 綾子 , 清水 怜有 , 中嶋 耕平 . エリート女性アスリートにおける競技特性と内反膝アライメントの関連性～メディカルチェックデータを用いた競技間比較～ . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
116) 廣松 千愛 , 海老 久美子 , 後藤 一成 . 試合期における大学生女子一流陸上長距離選手の夜間の間質液中グルコース濃度と糖質摂取量および利用可能エネルギーとの関連 . 日本スポーツ栄養学会第 11 回大会 , 2025. 8.
117) 廣松 千愛 , 水野 凛 , 後藤 一成 . 大学生女子陸上長距離選手における 4 週間にわたる糖質摂取量の増加が夜間の間質液中グルコース濃度に及ぼす影響 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
118) 福岡 秀哉 , 越野 裕太 , 小松崎 美帆 , 石田 知也 , 遠山 晴一 , 寒川 美奈 . 特異的ウォームアップの実施が筋温および筋収縮特性に与える経時的効果 . 第 12 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 11.
119) 福嶋 一剛 , 中嶋 耕平 , 中田 由夫 . 運動部活動中の中高生における脳振盪の月別発生数の変化 : 災害共済給付データによる分析 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
120) 藤本 大地 , 桝井 文人 , 相原 伸平 , 柳 等 , プタシンスキ ミハウ . カーリングストーンの個体差が挙動に及ぼす影響の定量的分析 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 7.
121) 古川 萌乃 , 曽根 忠瑛 , 相原 伸平 , 桝井 文人 , 河村 隆 . カーリングのスウィープ動作とブラシパッドの評価に関する研究 . 第 26 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 , 2025. 12.
122) 古橋 侑季 , 上岡 優二郎 , 村冨 浩太朗 , 吉田 拓矢 , 谷川 聡 , 前村 公彦 . 大学生ラグビー選手におけるリバウンドジャンプパフォーマンスに注意方略が及ぼす影響～ポジションの違いに着目して～ . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
123) 古屍 蓮 , 秋山 圭 , 黒澤 舞水 . 大学女子サッカーにおけるスポーツ外傷・障害および疾病調査 ～期分けごとの発生に着目して～ . 第 14 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 , 2025. 9.
124) 本郷 由貴 , 冨永 哲志 , 大西 壮流 , 立谷 泰久 , 柄木田 健太 . パリ 2024 大会におけるアスリートの精神的健康と SNS 上の誹謗中傷との関連の検討 . 日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会 , 2025. 8.
125) 本郷 由貴 , 高井 秀明 . 自己批判はアスリートの足かせか，それとも推進力か？―メンタルヘルスと主観的パフォーマンスに着目して―. 日本スポーツ心理学会第 52 回大会 , 2025. 9.
126) 本郷 由貴 , 高井 秀明 , 中嶋 耕平 , 浅野 憲一 . 大学生アスリートのメンタルヘルス―うつ・不安の性差を可視化する―. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
127) 本間 洋樹 , 山岸 卓樹 , 白木 駿佑 , 山下 大地 , 安藤 良介 . 反復スプリントトレーニングがバドミントン選手の体力および試合中の累積加速度負荷に及ぼす影響 . NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2025, 2026. 2.
128) 前田 亮真 , 相澤 清晴 , 白井 圭佑 , 亀甲 博貴 , 森 信介 , 品川 明穂 , 元永 恵子 , 亀井 明子 , 山肩 洋子 . 栄養士の補助を前提とした食事画像からの食材推定を介した栄養推定モデルの開発 . 映像情報メディア学会 ヒューマンインフォメーション研究会 , 2025. 6.
129) 槙尾 栞 , 染谷 由希 , 内野 小百合 , 青柳 壮志 , 奈良岡 佑南 , 小松 孝行 , 高澤 祐治 . 女子大学生アスリートにおける月経周期異常および月経随伴症状の実態 . 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2025. 11.
130) 松井 駿斗 , 植松 倫理 , 景行 崇文 , 木越 清信 . 棒高跳びにおける跳躍を成立させる技術的要因―成功試技と失敗試技の比較から―. 日本陸上競技学会第 24 回学会大会 , 2025. 11.
131) 松田 知華 , 土橋 康平 , 中村 真理子 , 能瀬 さやか , 亀本 佳世子 , 後藤 一成 , 須永 美歌子 . 月経周期が運動誘発性低血糖に及ぼす影響 . 第 79 回日本体力医学会大会 , 2025. 9.
132) 三浦 智和 , 永尾 雄一 . 一流競技者のスキージャンプ技術改善時におけるビデオフィードバックシステムの貢献度評価 . Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 8.
133) 三ツ山 晃弘 , 田邊 元 , 上野 俊明 . 2025 トリノ冬季 FISU ゲームズ日本代表選手の歯科外傷既往とマウスガード使用状況 . 第 15 回日本外傷歯学会東日本地方会総会・学術大会 , 2025. 5.
134) 三ツ山 晃弘 , 豊島 由佳子 , 須坂 美咲 , 松葉 千鶴 , 上野 俊明 . 第 15 回東京オリンピック記念体力測定における歯科メディカルチェックについて . 日本スポーツ歯科医学会第 36 回総会・学術大会 , 2025. 12.

135) 村上 貴聡, 阿部 成雄, 立谷 泰久. 審判員における非言語的コミュニケーションスキルの検討. 日本スポーツ心理学会第52回大会, 2025. 9.
136) 森 遥菜, 陳 冠宇, 齊藤 良輝, 相原 伸平, 桝井 文人, 竹川 佳成. icHandle: タブレットストーンおよび可動式ハンドルデバイスを統合したカーリングストーン挙動情報提示システム. 第3回スポーツ情報学研究発表会, 2025. 11.
137) 山口 真未, 小野寺 峻一, 萩原 正大, 原村 未来, 山下 修平, 友利 杏奈, 白井 克佳. 福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会, 2025. 8.
138) 山口 真未, 小野寺 峻一, 山下 修平. 地域タレント発掘育成事業出身の五輪メダリストに対するインタビュー調査: アスリート育成パスウェイに着目して. 日本コーチング学会第37回学会大会, 2026. 3.
139) 山﨑 和也, 田中 修二, 西川 直人, 寶崎 加那絵, 古川 美幸, 高橋 佐江子, 山下 大地. 膝前十字靭帯再建術後選手における膝関節等速性筋力とカウンタームーブメントジャンプ指標の関係. 第14回日本アスレティックトレーニング学会学術大会, 2025. 9.
140) 山下 修平, 萩原 正大, 小野寺 峻一, 山口 真未, 友利 杏奈, 白井 克佳. 中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究. 日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会, 2025. 8.
141) 山元 康平, 白木 駿佑, 梶谷 亮輔, 村冨 浩太朗. Wattbike Pro を用いた陸上競技400m走競技者の無酸素性能力の評価. NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2025, 2026. 2.
142) 山本 雅人, 田村 康将, 相原 伸平. The Grand Slam of Curling におけるルール変更の影響. カーリング科学シンポジウム 2026, 2026. 3.
143) 山本 悠介, 清水 潤, 岩田 理沙, 尾崎 宏樹. スノーボードビッグエア競技を対象としたリモートでの競技パフォーマンスおよびコンディションの評価のためのシステム構築と実装. Sports Informatics and Technology 2025, 2025. 8.
144) 柚木 孝敬, 古内 まりな, 波多野 慶, 松浦 亮太. 呼気終末 CO2 分圧の増加が低強度サイクリング中のケイデンスに及ぼす影響. 第79回日本体力医学会大会, 2025. 9.
145) 吉田 拓矢, 古橋 侑季, 田井 楓, 図子 あまね, 前村 公彦, 谷川 聡. 見本映像と自己観察映像フィードバックを組み合わせたプライオメトリックトレーニングがドロップジャンプのパフォーマンスに与える即時効果と学習効果. 日本コーチング学会第37回学会大会, 2026. 3.
146) 吉田 颯平, 飯坂 千尋, 潟沼 美紀, 相馬 そのみ, 高橋 玄, 田久保 祐生, 中西 瞳俐, 村松 良祐, 森田 理央, 山中 将治, 片山 大輝, 齊藤 良輝, 森 遥菜, 陳 冠宇, 片桐 諒祐, 千葉 麟太郎, 曽根 忠瑛, 相原 伸平, 姜 南圭, 竹川 佳成. ミライノカーリング：ストーンの投擲とブラシによるスウィープでプレイするカーリング体験システム. 第3回スポーツ情報学研究発表会, 2025. 11.
147) 米津 貴久, 神庭 睦実, 原村 未来, 袴田 智子, 尾崎 宏樹. アスリートを対象とした体脂肪率の特徴―BIA と DXA の測定誤差に関するメタ解析―. 第38回日本トレーニング科学会大会, 2025. 11.
148) 米津 貴久, 原村 未来, 神庭 睦実, 袴田 智子, 尾崎 宏樹. アスリートの体脂肪率評価における DXA 法を基準とした BIA 法の誤差特性. スポーツ医・科学サポート研究会 第4回研究会, 2026. 3.

7. 講習会・研修会

1) Matsubayashi Takeo. Enhancing para athlete performance through sports science. 2025 7th International Para Sports Science Seminar, 2025. 11.

1) 秋山 圭. ラクロスにおけるパフォーマンスの向上 - 自己効力感を高めてあげよう -. 日本ラクロス協会医科学委員会 第2回医科学セミナー, 2025. 7.
2) 飯塚 太郎. 強化戦略プランを軸としたスポーツ医・科学等サポートの充実. JISS-NF 栄養会議, 2025. 11.
3) 石毛 勇介. アスリートの体力評価. 令和7年度日本スポーツ協会公認スポーツドクター養成講習会, 2026. 2.
4) 稲川 祥史. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 10. 東京.
5) 稲川 祥史. 強化現場における映像・情報技術の活用のための第一歩「HPSC の映像・情報技術に関する取組み・NF 支援」. 令和7年度 JPC ハイパフォーマンス研修会 第4回勉強会, 2026. 1.
6) 稲川 祥史, 宮﨑 大地. HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 4. 栃木.
7) 稲川 祥史, 宮﨑 大地. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 10. 栃木.
8) 稲川 祥史, 宮﨑 大地. HPSC パッケージ「JISS Air」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 11. 東京.
9) 稲川 祥史, 宮﨑 大地. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2026. 1. 宮崎.
10) 稲川 祥史, 宮﨑 大地. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2026. 1. 高知.
11) 稲川 祥史, 宮﨑 大地, 山本 悠介. HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 4. 新潟.
12) 稲川 祥史, 宮﨑 大地, 山本 悠介. HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 9. 京都.
13) 稲川 祥史, 宮﨑 大地, 山本 悠介. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 10. 京都.
14) 稲川 祥史, 山本 悠介. HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 5. 栃木.
15) 稲川 祥史, 山本 悠介. HPSC パッケージ「映像サポートの基礎」「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ, 2025. 9. 山口.
16) 江夏 直子. アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ

栄養分野 , 2025. 5. 東京 .
17）江夏 直子 . アスリートのための遠征時の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 5. 東京 .
18）江夏 直子 , 近藤 知佳 . アスリートのための食事の基本 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 10. 東京 .
19）江夏 直子 , 松田 侑未子 . アスリートのための遠征時の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 10. 東京 .
20）江夏 直子 , 松田 侑未子 . アスリートのための遠征時の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2026. 3. 東京 .
21）大坪 香菜子 . キックオフミーティング「スポーツにおけるチームと自分の役割」. 埼玉ライオンズ 講習会 , 2025. 5.
22）大坪 香菜子 . 秋田県タレント発掘事業 わか杉っ子プロジェクト 共通プログラム②（小学生）. 秋田県タレント発掘事業（秋田県スポーツ科学センター）, 2025. 6.
23）大坪 香菜子 . 秋田県タレント発掘事業 わか杉っ子プロジェクト 共通プログラム②（中高生）. 秋田県タレント発掘事業（秋田県スポーツ科学センター）, 2025. 6.
24) 大坪 香菜子 . キックオフミーティング②「チーム内のコミュニケーションとキャプテンの在り方」. 埼玉ライオンズ 講習会 , 2025. 7.
25）大坪 香菜子 . アスリートのためのメンタルトレーニング「目標設定」. 日本パラフェンシング協会心理講習会 , 2025. 8.
26）大坪 香菜子 . 心理プログラム①「自己分析から目標設定、モチベーションへつなげる」. 埼玉ライオンズ 講習会 , 2025. 9.
27）大坪 香菜子 . 心理プログラム②「いつもと違う環境での実力発揮と集中力」. 埼玉ライオンズ 講習会 , 2025. 12.
28）大坪 香菜子 . 心理プログラム③「緊張のコントロールとリラクセーション」. 埼玉ライオンズ 講習会 , 2026. 1.
29）大坪 香菜子 , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 冨永 哲志 . HPSC パッケージ「アスリートのためのメンタルトレーニング応用編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 6. 東京 .
30）大坪 香菜子 , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 冨永 哲志 . HPSC パッケージ「アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 6. 東京 .
31）大坪 香菜子 , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 冨永 哲志 . HPSC パッケージ「アスリートのためのメンタルトレーニング応用編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 11. 東京 .
32）大坪 香菜子 , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 冨永 哲志 . HPSC パッケージ「アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 11. 東京 .
33）大坪 香菜子 , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 冨永 哲志 , 水野 寛太 . HPSC パッケージ「チームビルディング」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2026. 2. 東京 .
34）小野寺 峻一 . スポーツ競技団体におけるアスリート育成に関する課題 . いわき FC スポーツサイエンスラボオンラインセミナー講演 , 2025. 11.
35）勝田 隆 , 和久 貴洋 , 山下 修平 . 共通科目Ⅳ講習会（第 1 会場）. 令和 7 年度日本スポーツ協会公認コーチ 4・上級教師養成講習会 , 2025. 9.
36）加藤 英人 , 屋良 慣汰 . HPSC パッケージ「トレーニングの基礎編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 11. 和歌山 .
37）加藤 英人 , 屋良 慣汰 . HPSC パッケージ「トレーニングの基礎編」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 12. 栃木 .
38）加藤 英人 , 屋良慣汰 . HPSC パッケージ「S&C の情報の整理と活用」、「トレーニングの基礎」. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ S&C 分野 , 2026. 3. 大阪 .
39）加藤 英人 , 屋良慣汰 . HPSC パッケージ「S&C の情報の整理と活用」、「トレーニングの基礎」. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ S&C 分野 , 2026. 3. 京都 .
40）上東 悦子 . アンチ・ドーピングについて . 令和 7 年度日本スポーツ協会 公認日本スポーツ栄養士養成講習会 , 2025. 10.
41）上東 悦子 . 禁止表と TUE 申請の考え方 . 令和 7 年度女性アスリート診療・サポートのための講習会（スポーツドクター向け）, 2025. 11.
42）上東 悦子 . アンチ・ドーピングのルールの基本（禁止表 と TUE を中心に）. 令和 7 年度女性アスリート診療・サポートのための講習会（産婦人科医向け）, 2026. 2.
43）亀井 明子 . スポーツ現場における食環境整備 . 令和 6 年度日本スポーツ協会 公認スポーツ栄養士養成講習会 専門科目＜中期＞講習会 , 2025. 6.
44）亀井 明子 .「運動と栄養・食事・飲料」. 第 50 回スポーツ医学研修会 , 2025. 9.
45）衣笠 泰介 . LTAD: 長期的視点を持ってハイパフォーマンスまでの / からのパスウェイを考える . 日本バスケットボール協会 2025 年度 S 級コーチ養成講習会 , 2025. 6.
46）衣笠 泰介 . アスリート育成パスウェイの理論と実践 . 令和 7 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー , 2025. 7.
47）衣笠 泰介 . 競技パフォーマンス構造モデル～基礎編 . 2025 年度 JWTA 公認コーチ資格講習会（A 級）, 2026. 1.
48）衣笠 泰介 . 競技パフォーマンス構造モデル～応用編 . 2025 年度 JWTA 公認コーチ資格講習会（A 級）, 2026. 3.
49）衣笠 泰介 , 笹代 純平 . パラアスリートにおけるトータルコンディショニング . 第 14 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 , 2025. 9.
50）衣笠 泰介 , 野口 順子 . 日本におけるアスリート・ウェルビーイングの実態と支援状況 . 西が丘フォーラム「ハイパフォーマンス×メンタルヘルス支援の最前線」, 2025. 6.
51）木村 裕也 . スポーツ科学 : スポーツバイオメカニクスⅡ . 2025 年度 日本スケート連盟スピードスケートエリートアカデミー講義 , 2025. 9.
52）木村 裕也 . スポーツ科学 : 測定評価演習Ⅱ . 2025 年度 日本スケート連盟スピードスケートエリートアカデミー講義 , 2025. 9.
53）木村 裕也 . 情報処理演習 : コーチングスキル①（資料作成 :Excel）. 2025 年度 日本スケート連盟スピードスケートコーチライセンスカリキュラム , 2025. 11.
54）金原 聖 , 稲川 祥史 , 宮崎 大地 . 映像サポート入門 Ⅱ ～実技から学ぶ撮影テクニック～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 BASIC 春 , 2025. 5.
55）久木留 毅 . 2025 高度競技マネジメント―目標を達成するために必要なこと―. 群馬県令和 7 年度スポーツセミナー事業 ,

2025. 12.
56）久木留 毅, 和久 貴洋, 山下 修平. 共通科目Ⅳ講習会（第 2 会場）. 令和 7 年度日本スポーツ協会公認コーチ 4・上級教師養成講習会, 2025. 10.
57）久保田 潤. e スポーツの現状について. 第 36 回 JTA カンファレンス 2026, 2026. 3.
58）近藤 知佳. アスリートのための食事の基本. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 5. 東京.
59）近藤 知佳. アスリートのための貧血予防. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 5. 東京.
60）近藤 知佳. アスリートのための水分摂取・脱水対策. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 5. 東京.
61）近藤 知佳, 江夏 直子. アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 10. 東京.
62）近藤 知佳, 江夏 直子. アスリートのための水分摂取・脱水対策. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 10. 東京.
63）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための貧血予防. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2025. 10. 東京.
64）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための食事の基本. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 2. 東京.
65）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 2. 東京.
66）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための貧血予防. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 2. 東京.
67）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための水分摂取・脱水対策. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 2. 東京.
68）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのためのウエイトコントロール. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 2. 東京.
69）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための食事の基本. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 3. 東京.
70）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 3. 東京.
71）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための貧血予防. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 3. 東京.
72）近藤 知佳, 松田 侑未子. アスリートのための水分摂取・脱水対策. HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野, 2026. 3. 東京.
73）清水 和弘. スポーツと免疫. SFS3.0, 2025. 4.
74）清水 和弘. コンディショニングの活用. 第 98 回日本産業衛生学会, 2025. 5.
75）清水 和弘. 運動と免疫. 健康運動指導士更新必修講座, 2025. 7.
76）清水 和弘. 運動と免疫. 健康運動指導士更新必修講座, 2025. 9.
77）清水 和弘. コンディショニングの活用. コンディショニングフォーラム 2025, 2025. 10.
78）清水 和弘. 運動と免疫. 健康運動指導士更新必修講座, 2025. 10.
79）清水 和弘. アスリートにおけるトータルコンディショニング. 2025 年度公認スポーツ栄養士更新研修, 2025. 11.
80）清水 和弘. トータルコンディショニングの考え方と アスリートが備えるべき セルフコンディショニングの力について. コンディショニング会議 in 青森, 2025. 12.
81）清水 和弘. トータルコンディショニングについて. ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
82）清水 和弘. 課題に応じたコンディショニング―免疫機能の重要性―. NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2025 ―プレカンファレンス―, 2026. 2.
83）清水 和弘. コンディショニングの考え方. コンディショニングサポーター第 4 回 Working Group, 2026. 3.
84）清水 和弘. アスリートにおけるトータルコンディショニングの概念とセルフコンディショニングについて. 令和 7 年度 JSPO サイエンスカフェ, 2026. 3.
85）清水 潤, 山本 悠介, 稲川 祥史, 宮﨑 大地, 田丸 博朗. ゼロから学ぶ Python プログラミング入門. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 プログラミング BASIC, 2025. 11.
86）清水 潤, 山本 悠介, 稲川 祥史, 宮﨑 大地, 田丸 博朗. 実践で学ぶ Web スクレイピング. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 プログラミング ADVANCE, 2025. 11.
87）白井 克佳. パリ 2024 の振返りとロス 2028 以降に向けた動き. 令和 7 年度九州各県競技スポーツ連絡協議会, 2025. 7.
88）白井 克佳. 中央競技団体の強化および地方の競技力向上. 熊本県令和 7 年度 競技力向上対策研修会, 2025. 11.
89）白井 克佳. トータルコンディショニングと インテリジェント・アスリート. 長崎県令和 7 年度インテリジェント・アスリート育成事業, 2025. 11.
90）高井 恵理. 女性アスリートの栄養指導～実践と課題～. 令和 7 年度女性アスリート診療・サポートのための講習会（スポーツドクター向け）, 2025. 11.
91）高井 恵理. 女性アスリートの栄養指導～実践と課題～. 令和 7 年度女性アスリート診療・サポートのための講習会（産婦人科医向け）, 2026. 2.
92）立谷 泰久. スポーツ相談の実際. 令和（2025）7 年度公認スポーツプログラマー養成講習会, 2026. 1.
93）冨永 哲志. アスリートのためのメンタルトレーニング「メンタルトレーニングとは」「いつもと違う環境で実力を発揮するために」. スポーツ医・科学支援事業・講習会 (ウェイトリフティング・高校・大学生), 2026. 1.
94）永尾 雄一. ゲーム分析講座 ～ゲーム分析の計画からフィードバックまで～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 ADVANCE 春, 2025. 5.
95）永尾 雄一. モチベーションビデオ作成講座 ～編集技術の実践活用～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 ADVANCE 春, 2025. 5.
96）永尾 雄一. ゲーム分析 ～スマホアプリを使った簡易ゲーム分析～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカ

デミー DiTS2025 BASIC 春, 2025. 5.
97) 永尾 雄一. 医・科学サポート論ー情報戦略 情報戦略活動の環境づくり. 令和 7 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー, 2025. 9.
98) 永尾 雄一. スポーツ映像編集講座 ～編集基礎技術の習得～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 ADVANCE 冬, 2025. 12.
99) 永尾 雄一. モチベーションビデオ作成講座 ～編集技術の実践活用～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 ADVANCE 冬, 2025. 12.
100) 永尾 雄一. ゲーム分析 ～スマホアプリを使った簡易ゲーム分析～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 BASIC 冬, 2025. 12.
101) 永尾 雄一. オリンピック・パラリンピック論. 日本大学文理学部体育学科講義, 2025. 12.
102) 永尾 雄一, 稲川 祥史, 宮﨑 大地. 映像サポート入門 Ⅱ ～実技から学ぶ撮影テクニック～. ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2025 BASIC 冬, 2025. 12.
103) 中村 真理子. 月経周期とコンディショニング. 令和 7 年度女性アスリート診療のための講習会（産婦人科医向け）, 2026. 2.
104) 中村 有紀.『思春期』における医科学サポート. 千葉県アスレティックトレーナー協議会 AT カンファレンス 2025, 2025. 4.
105) 能瀬 さやか. 女性アスリートの健康課題と WHP の紹介. 島根トップコーチ育成事業ブラッシュアップセミナー, 2025. 5.
106) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング（ラグビー選手の傾向を踏まえて）. YOKOHAMA TKM 講習会, 2025. 6.
107) 能瀬 さやか. 女性とスポーツ. パラスポーツコーチ養成講習会, 2025. 6.
108) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング. 新潟経営大学女子大学生アスリート講習会, 2025. 6.
109) 能瀬 さやか. 女性アスリート特有の健康課題とその対応. 東京都教育委員会部活動指導者実技講習会, 2025. 6.
110) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング. 日本トップリーグ連携機構研修（バレーボール SV リーグ）, 2025. 6.
111) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング. ひろしまスポーツアカデミー, 2025. 7.
112) 能瀬 さやか. 思春期女子とスポーツ. 日本家族計画協会思春期保健セミナー, 2025. 7.
113) 能瀬 さやか. 女性アスリートの健康課題と対策. WOMEN'S CONDITIONING SUMMIT, 2025. 8.
114) 能瀬 さやか. 思春期女性とスポーツ. 第 93 回思春期保健セミナー, 2025. 8.
115) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニングについて. JKA 新人研修会, 2025. 9.
116) 能瀬 さやか. 女性アスリートの身体を正しく知る（医学）. スポーツを止めるな 1252 プロジェクト, 2025. 9.
117) 能瀬 さやか. 骨密度検診の有用性. 第 34 回プラスウェルネスセミナー, 2025. 10.
118) 能瀬 さやか. 女性スポーツ医学. 日本スポーツ協会女性スポーツサポート研修会, 2025. 10.
119) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング. 日本デフバドミントン協会, 2025. 10.
120) 能瀬 さやか. 競技団体における女性アスリート支援の現状. 日本パラリンピック委員会ハイパフォーマンス研修会 第 4 回勉強会 × 女性スポーツ委員会連携セミナー, 2025. 10.
121) 能瀬 さやか. スポーツに参加する女性の健康課題とその対策. 日本医師会認定健康スポーツ医再研修会, 2025. 10.
122) 能瀬 さやか. 女性アスリートの婦人科疾患に対する治療と最新トピックス. 女性アスリート健康支援委員会女性アスリート診療・サポートのための講習会, 2025. 11.
123) 能瀬 さやか. 女性アスリート支援に役立つ情報提供. 女性アスリート健康支援委員会女性アスリート診療・サポートのための講習会, 2025. 11.
124) 能瀬 さやか. Radiofrequency Echographic Multi-Spectrometry（REMS）法を用いた骨密度評価と今後の応用. 第 36 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2025. 11.
125) 能瀬 さやか. Women's Health Project for Japanese Swimmers（WHP）～生涯、健康にスポーツを行うために～. 日本水泳連盟, 2025. 11.
126) 能瀬 さやか. 女性スポーツ医学. 日本水泳連盟水泳コーチ研修会 3, 2025. 11.
127) 能瀬 さやか. 女性特有の問題. 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー養成講習会, 2025. 12.
128) 能瀬 さやか. 女性とスポーツ. 日本パラスポーツ協会公認上級パラスポーツ指導員養成講習会, 2025. 12.
129) 能瀬 さやか. アンチ・ドーピングの基礎知識. 日本女子プロゴルフ協会 新人セミナー, 2025. 12.
130) 能瀬 さやか. コンディショニングのための月経対策. 日本女子プロゴルフ協会新人セミナー, 2025. 12.
131) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニングを支える. encounter 女性アスリートケアサポート, 2026. 1.
132) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディショニング ～産婦人科の課題と指導現場での対応～. 第 33 回三重県スポーツ医・科学セミナー兼三重県スポーツ指導者研修会, 2026. 1.
133) 能瀬 さやか. 女子テニス選手のコンディショニング ～産婦人科医の視点から～. 第 57 回テニスメディカルセミナー, 2026. 1.
134) 能瀬 さやか. 女性アスリートのコンディションを支える～婦人科医の立場から～. SAPIENS/ Why Body 医学×現場×パフォーマンスで考える女性アスリートの今, 2026. 2.
135) 能瀬 さやか. 女性アスリートの婦人科疾患に対する治療と最新トピックス. 女性アスリート健康支援委員会女性アスリート診療・サポートのための講習会, 2026. 2.
136) 能瀬 さやか. 女子サッカー選手のコンディショニングとサポートの実際. 日本サッカー協会第 78 回サッカードクターセミナー, 2026. 2.
137) 能瀬 さやか. 20 代の無月経について. 三井住友海上 からだにいいことセミナー for アスリート, 2026. 3.
138) 能瀬 さやか. 各団体における女性アスリート支援の現状. 日本オリンピック委員会国際女性デー記念, 2026. 3.
139) 能瀬 さやか. 女性スポーツ医学. 日本スポーツ協会女性スポーツサポート研修会, 2026. 3.
140) 能瀬さやか. Women's Health Project for Japanese Swimmers（WHP）～生涯、健康にスポーツを行うために～. 東京都水泳協会 第三回指導者資格更新研修会, 2026. 3.
141) 半谷 美夏. 選手団本部医務の役割 ～ Chief Team Doctor / 整形外科医の立場より～. 第 15 回順天堂スポーツフォーラム, 2025. 5.
142) 半谷 美夏. トレーニングと外傷・障害予防 / 復帰（外科）. 第 57 回公認トレーニング指導士養成講習会, 2025. 6.
143) 半谷 美夏. 運動のためのメディカルチェック―整形外科系. 第 52 回スポーツ医学研修会, 2025. 9.

144) 半谷 美夏 . スポーツ医学基礎（整形外科）. 2025 年度スポーツ栄養ベーシック＜オンライン＞講習会 , 2025. 12.
145) 半谷 美夏 . アスリートをサポートする上で注意すべきあれこれ . 第 33 回秋田県スポーツ医学研究会 , 2026. 2.
146) 星川 雅子 . 睡眠とスポーツ . 東京都体育協会 令和 7 年度 トップアスリート発掘・育成事業 , 2025. 6.
147) 星川 雅子 . コンディショニング―主に睡眠の視点から―. 令和 7 年度公認パラスポーツトレーナー養成講習会 , 2025. 8.
148) 松田 侑未子 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 5. 東京 .
149) 松田 侑未子 . アスリートのためのウエイトコントロール . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 5. 東京 .
150) 松田 侑未子 , 江夏 直子 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 10. 東京 .
151) 松田 侑未子 , 近藤 知佳 . アスリートのためのウエイトコントロール . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2025. 10. 東京 .
152) 松田 侑未子 , 近藤 知佳 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2026. 2. 東京 .
153) 松田 侑未子 , 近藤 知佳 . アスリートのための遠征時の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2026. 2. 東京 .
154) 松田 侑未子 , 近藤 知佳 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2026. 3. 東京 .
155) 松田 侑未子 , 近藤 知佳 . アスリートのためのウエイトコントロール . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ 栄養分野 , 2026. 3. 東京 .
156) 松林 武生 . スポーツ映像解析を支える技術開発 : 国立スポーツ科学センター発のカメラキャリブレーション手法 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2025, 2025. 12.
157) 三浦 佳祐 . フォースプレートを活用した神経 - 筋系の評価と S&C 介入の実際 - トップアスリートを対象とした事例 -. NSCA ジャパン 南関東地域ディレクターセミナー , 2025. 5.
158) 三浦 佳祐 . メディカルコンディショニング（トレーナーの知識）飛込 . 2025 年度 公認水泳コーチ 4 養成専門科目講習会 , 2025. 11.
159) 三浦 智和 . トップアスリート支援における医療情報の管理と活用 . NOBORI PHR ユーザ会（第 2 回）, 2025. 7.
160) 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 . HPSC パッケージ「JISS Air」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 4. 東京 .
161) 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 . HPSC パッケージ「JISS Air」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2026. 1. 長野 .
162) 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 . HPSC パッケージ「JISS Air」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2026. 2. 東京 .
163) 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 , 山本 悠介 . HPSC パッケージ「JISS Air」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 10. 東京 .
164) 宮﨑 大地 , 山本 悠介 . HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 10. 大阪 .
165) 宮﨑 大地 , 山本 悠介 . HPSC パッケージ「JISS Air」「JISS strobo」研修プログラム . HPSC ネットワークの展開事業 HPSC パッケージ , 2025. 10. 和歌山 .
166) 元永 恵子 . スポーツ医学 障がい者スポーツ . 令和 7 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会専門科目＜後期＞講習会 , 2025. 10.
167) 元永 恵子 . 車いすアスリートの栄養と食事 ～パラアスリートを支える現場から～ . とちぎスポーツ医科学センター主催トレーニング講習会 2025, 2025. 11.
168) 山口 達也 . アスリートのメンタルヘルス . 令和 7 年度日本スポーツ協会スポーツドクター研修会 , 2025. 7.
169) 山口 達也 . メンタルヘルスと運動 . 令和 7 年度日本スポーツ協会公認スポーツドクター養成講習会 , 2025. 10.
170) 山下 大地 . 医・科学サポート論 トレーニング . JOC ナショナルコーチアカデミー , 2025. 9.
171) 山本 悠介 . スポーツ情報処理 II. 日本スケート連盟スピードスケートエリートアカデミー講義 , 2025. 8.

8. 受賞

1) Nakaichi Naoto, Sugimoto Dai, Numa Daisuke, Kotani Ryosuke, Nakamura Hayato, Akiyama Kei, Hirose Norikazu. 2026 Sports Health T. David Sick Award. Sports Health, Associations of sport participation and training volume with overuse injuries in Japanese male youth soccer players: Implications for early sport specialization , 2026. 3.
2) Uchizawa Akiko, Kondo Emi, Enomoto Yasushi, Yajima Katsuhiko, Tamai Shinsuke, Watanabe Koichi, Ito Ai, Kosugi Miki, Higaki Yasuki, Sagayama Hiroyuki. First Prize, Best Poster Award at RACMEM 2025. Recent Advances & Controversies in the Measurement of Energy Metabolism（RACMEM）, Resting and sleeping metabolic rate are suppressed with increased running distance, independent of menstrual status, 2025. 10.

1) 相原 伸平 . SIT2025 優秀講演賞 . Sports Informatics and Technology 2025, モバイル端末を用いたリアルタイム映像解析に基づくカーリング競技者支援ツールの開発 , 2025. 8.
2) 落合 祐太 , 辻 歩 , 相原 伸平 , 岩田 浩康 . SIT2025 データスタジアム賞 . Sports Informatics and Technology 2025, ブラインドサッカー競技における移動を伴う自己位置の相対的定位能力に関する研究 , 2025. 8.
3) 翁長 舞 , 加藤 聡志 , 大橋 智志 , 相原 伸平 . 優秀発表 . 日本体育測定評価学会 , テニスサーブにおける単眼映像上のラケット挙動推定―深層学習と用具構造の統合的手法―, 2026. 2.
4) 小泉 潤 , 山岸 卓樹 , 白木 駿佑 , 緒方 博紀 , ヘンダーソン フレデリック , 山下 大地 , 安藤 良介 . 若手研究奨励賞 . 第 38 回日本トレーニング科学会大会 , 慣性センサーを用いたバスケットボール試合中における外的負荷の評価と体力特性の関連 , 2025. 11.
5) 小出所 大樹 , 山形 一真 , 中尾 学人 , 片寄 正樹 , 谷口 圭吾 . 2024 年度日本スポーツ理学療法学会奨励賞 . 日本スポーツ

理学療法学会, Effect of tasks on intramuscular regional differences in rectus femoris elasticity during isometric contraction: An ultrasound shear wave elastography study, 2025. 11.

6） 後藤 和海. Outstanding Young Investigator Award. 日本スポーツ整形外科学会, 2025. 9.

7） 齋藤 良輝, 相原 伸平, 吉田 雄大, 大田 穂, 渡邉 拓貴, 竹川 佳成. 優秀発表. 日本体育測定評価学会, 投球動作の個別指導支援システムに向けた骨格時系列解析と LLM を用いたフィードバック生成手法の提案, 2026. 2.

8） 佐々木 陽一朗, 吉田 拓矢, 小野 響也, 有田 祐二, 鍋山 隆弘, 谷川 聡. 奨励賞. 日本コーチング学会, 大学剣道選手の跳躍能力と面打ちにおける打突時間との関係性について, 2026. 3.

9） 白木 駿佑, 木村 裕也, 窪 康之. 優秀発表賞. 日本コーチング学会, エリート競泳競技者におけるストレングストレーニングによるスタートパフォーマンスの改善, 2026. 3.

10）曽根 忠瑛, 片桐 諒祐, 河村 隆, 相原 伸平. 第 3 回スポーツ情報学研究発表会 優秀発表賞. 情報処理学会, カーリング技能と氷面状態を評価可能なスマートシューズの開発 : スライダ内蔵センサによる滑走時の基礎計測, 2025. 11.

11）仲道 智郎, 河村 晃宏, 相原 伸平, 倉爪 亮. SI2025 優秀講演賞. 計測自動制御学会, スポーツクライミングの動作・力情報可視化システム ClimbViS 開発, 2025. 12.

12）林 陵平, 吉田 拓矢, 苅山 靖. 学会賞. 日本陸上競技学会, 第 24 回日本陸上競技学会大会, 2025. 11.

13）本郷 由貴. 第 52 回学会大会優秀発表賞. 日本スポーツ心理学会, 自己批判はアスリートの足かせか，それとも推進力か？―メンタルヘルスと主観的パフォーマンスに着目して―, 2025. 10.

14）松井 駿斗, 植松 倫理, 景行 崇文, 木越 清信. 日本陸上競技学会第 24 回大会 最優秀発表賞（ポスター発表の部）. 日本陸上競技学会, 棒高跳びにおける跳躍を成立させる技術的要因―成功試技と失敗試技の比較から―, 2025. 11.

独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター年報 2026

2026年7月発行

編集発行　独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター
〒115-0056　東京都北区西が丘3丁目15番1号
TEL.03-5963-0200　FAX.03-5963-0244
URL https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/

印　刷　株式会社丸産
〒174-0053　東京都板橋区清水町88-6
TEL.03-3962-6510(代)　FAX.03-3962-3864

※掲載内容についてのお問い合わせは、上記ハイパフォーマンススポーツセンターホームページの「よくあるご質問」を先に御覧ください。
※本誌は、国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律（グリーン購入法）に基づく基本方針の判断の基準を満たす紙を使用しています。

ハイパフォーマンスレポート年報 2023

HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER

JAPAN SPORT COUNCIL